

昭和 63 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1993 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

昭和 63 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1993 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



長岡京の木簡（長岡京左京一条三坊・戊亥遺跡S D 50出土）



伏見城の金箔瓦（伏見城跡3土壙130出土）

序

財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当する地域には平安京全体と長岡京の一部が含まれていて、この都市遺跡には、古代から近世に至る文化層序があると共に先史時代の遺跡も含まれている。その京外においても同様な文化層序を認めることは当然のことである。加えて発掘する面積は、京外では比較的多くの場合は広いが、京内では極めて狭い。狭いといっても層序は複雑に重なっている。

そのような対象物を調査して、約十五年を経過して、おのずから、地域の特色を捉えることができ、対象の地を捉えて、遺跡と遺物、性格、量とを弁別し判定できるようになり、ひいては調査担当者の配備に万全を期することができるようになった。

そのような中で、昭和63年度において、際立った特徴のある成果があるものを挙げるなら、この報告書の最初にカラー図版でかかげた木簡の出土した遺跡、すなわち長岡京の左京一条三坊・戌亥遺跡であろう。他は、金箔瓦を多数に出土した伏見城跡3であるだろう。

長岡の木簡は、「樽」とあることである。樽とは木材の形態の一種で、その形のままで、樽縁という縁の張り方もある。木材を川に下ろして筏に組む場合に丸太材であるのが普通で、樽で筏に組み流されて来たことが特異である。また、桃山の金箔瓦も、これほどの箔の押された瓦が、用途別には多様であることが珍しい。よく金箔瓦を見かけるが、多くの場合軒丸瓦や軒平瓦に留まる。この写真でも示すように棟、箱棟を形成するような材にもあることに注目すべきであろう。

ところで、右京八条三坊七町で発見した遺構は稀なものである。この遺構では、その邸の西にある馬代小路東側溝の一部の底面を掘り込んで礫を敷き、東側に井戸様の枠を設け、礫を通して湧き水をつくり、樋を使って水場まで水を引く施設であり、その水を使うことを考えた施設で、汲み上げた量は常に補給することをねらったものである。

上述の遺跡を始めとする調査・立会調査を実施し、ようやく調査概要を発行するに至ったが、その陰には数多くの協力者があったことを思い、その方々に感謝の意を込め、ご挨拶申し上げます。

平成5年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和 63 年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第 1 章）、試掘・立会調査（第 2 章）、資料整理（第 3 章）、普及啓発事業等報告（第 4 章）とした。
- 2 調査継続のため前年度に報告を終了したものについては表 6 に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系Ⅶによった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市の承認を得て京都市計画局発行の都市計画基本図（2,500 分の 1、10,000 分の 1、30,000 分の 1）を修正し使用した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
- 6 遺構表示のうち、表記記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点である。
- 8 図版 1・2 の調査地点番号のⅠは発掘調査、Ⅱ試掘・立会調査を表す。表 5・6 の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。
- 9 昭和 63 年度発掘調査のうち、文化庁公庫補助事業による調査は、昭和 63 年 4 月から 12 月実施分は昭和 63 年度の各発掘調査概報に、平成元年 1 月から 3 月実施分は平成元年度の各発掘調査概報に報告している。
- 10 本年度の調査並びに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。また、本年度の調査のうち、平安京調査会の協力によって実施した調査については表 6 に示した。
- 11 写真は、遺物写真及び一部を除く発掘調査の遺構写真は牛嶋茂・村井伸也が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、永田信一、峰 巍の指導のもとに編集と調整は原山充志、西川恵美子、角村幹雄が行った。

目 次

第1章 発掘調査

I 昭和63年度の発掘調査概要…1

II 平安宮・京跡

- 1 平安宮内裏跡……………5
- 2 平安宮豊樂院跡……………6
- 3 平安宮消暑堂跡……………7
- 4 平安宮太政官跡1……………8
- 5 平安宮太政官跡2……………9
- 6 平安宮内匠寮跡……………10
- 7 平安京左京北辺三坊……………11
- 8 平安京左京二条二坊・
高陽院跡1……………13
- 9 平安京左京二条二坊・
高陽院跡2……………16
- 10 平安京左京三条三坊……………17
- 11 平安京左京三条四坊……………20
- 12 平安京左京四条三坊・南蛮寺跡…24
- 13 平安京左京四条三坊……………26
- 14 平安京左京五条一坊……………28
- 15 平安京左京七条三坊……………31
- 16 平安京左京九条一坊・
東寺旧境内1……………34
- 17 平安京左京九条一坊・
東寺旧境内2……………39
- 18 平安京右京二条三坊・
西ノ京遺跡……………40
- 19 平安京右京三条三坊……………42

- 20 平安京右京四条二坊……………46
- 21 平安京右京五条三坊……………50
- 22 平安京右京六条二坊1……………53
- 23 平安京右京六条二坊2……………57
- 24 平安京右京七条二坊……………59
- 25 平安京右京八条三坊……………61
- 26 平安京右京九条一坊1……………64
- 27 平安京右京九条一坊2……………68

III 白川街区

- 28 白河街区・岡崎遺跡1……………70
- 29 白河街区・岡崎遺跡2……………73

IV 鳥羽離宮跡

- 30 鳥羽離宮跡第126次調査……………76
- 31 鳥羽離宮跡第127次調査……………78
- 32 鳥羽離宮跡第128次調査……………82
- 33 鳥羽離宮跡第129次調査……………83
- 34 鳥羽離宮跡第130次調査……………84
- 35 鳥羽離宮跡第131次調査……………85

V 中臣遺跡

- 36 中臣遺跡第70-1次調査……………86

VI 長岡京跡

- 37 長岡京左京一条三坊・
戌亥遺跡……………88
- 38 長岡京左京南一条四坊……………94
- 39 長岡京左京四条三・四坊、
羽東師志水町遺跡……………95

VII その他の遺跡

40	仁和寺院家跡……………	99	5	最勝寺院・岡崎遺跡……………	144
41	上ノ段町遺跡……………	103	6	鳥羽離宮跡……………	145
42	史跡名勝嵐山……………	106	7	下鳥羽遺跡……………	147
43	西野町遺跡……………	109	8	長岡京左京南一条四坊・ 東土川遺跡……………	148
44	特別史跡特別名勝 鹿苑寺庭園……………	112	9	長岡京左京二条三坊・ 三条三坊・四条二坊……………	149
45	北野麩寺……………	115	10	仁和寺院家跡……………	150
46	幡枝古墳群・ 南ノ庄田瓦窯跡……………	117	11	常盤東ノ町古墳群・仁和寺 院家跡・広隆寺旧境内……………	152
47	史跡天皇の杜古墳……………	118	12	上ノ段町遺跡……………	155
48	南春日町遺跡……………	120	13	広隆寺旧境内・常盤仲之町遺跡・ 西野町遺跡……………	156
49	中久世遺跡……………	124	14	西野町遺跡・千代ノ道古墳……………	158
50	大藪遺跡……………	125	15	六波羅政庁跡、法住寺殿跡……………	160
51	法性寺跡……………	126	16	法性寺跡・正覚寺跡・ 月輪古墳・願成古墳……………	161
52	伏見城跡 1……………	128			
53	伏見城跡 2……………	129			
54	伏見城跡 3……………	133			
第2章 試掘・立会調査					
I 昭和63年度の試掘・					
	立会調査概要……………	137	第3章 資料整理		
II 平安京跡					
1	平安京右京一条二坊……………	139	1	遺跡測量……………	164
2	平安京右京三条四坊……………	140	2	コンピュータ……………	165
3	平安京右京七条二坊……………	142	3	保存科学……………	166
III その他の遺跡					
4	尊勝寺跡・岡崎遺跡……………	143	第4章 普及啓発事業等報告		
			1	普及啓発及び 技術者養成事業……………	168
			2	京都市考古資料館状況……………	169
			3	役職員名簿……………	172

図 版 目 次

図版 1	調査地点位置図 1	平安京跡、白河街区、中臣遺跡、太秦・洛北・南春日・洛東地区調査位置図
図版 2	調査地点位置図 2	1 洛北地区調査位置図 2 中臣遺跡・伏見醍醐地区調査位置図 3 鳥羽離宮・長岡京・伏見城跡、南春日地区調査位置図
図版 3	平安京左京北辺三坊	1 1 トレンチ全景 (北から) 2 2 トレンチ全景 (北から) 3 S D 85 内瓦積み (北から)
図版 4	平安京左京二条二坊・高陽院跡 1	1 第 1 面全景 (北から) 2 第 2 面全景 (北から) 3 第 3 面全景 (北から)
図版 5	平安京左京二条二坊・高陽院跡 1	1 第 5 面全景 (北東から) 2 第 3 面池地業出土の鑄造関係遺物
図版 6	平安京左京三条三坊	1 プラン 2 全景 (南から) 2 溝 1・2 (西から)
図版 7	平安京左京三条四坊	1 調査地近景 (西から) 2 No. 12 全景 (西から) 3 No. 14 全景 (東から) 4 No. 16 全景 (西から)
図版 8	平安京左京四条三坊・南蛮寺跡	1 江戸時代全景 (北から) 2 桃山時代以前全景 (北から)
図版 9	平安京左京五条一坊	1 全景 (北東から) 2 井戸 9 (北から)
図版 10	平安京左京七条三坊	1 調査区全景 (北から) 2 井戸 251 (新) (北から) 3 井戸 69 烏帽子出土状況 (西から)

図版 11	平安京左京九条一坊・東寺旧境内 1	第 1 面東部建物（西から）
図版 12	平安京左京九条一坊・東寺旧境内 1	1 第 2 面西部（東から） 2 第 2 面礎石据付け状況（東から）
図版 13	平安京左京九条一坊・東寺旧境内 2	1 第 2 面全景（東から） 2 第 3 面全景（東から）
図版 14	平安京右京二条三坊・西ノ京遺跡	1 南西部遺構群（北東から） 2 溝 1・2、柱列（東から）
図版 15	平安京右京三条三坊	全景（東から）
図版 16	平安京右京四条二坊	1 全景（東から） 2 川 50(北から) 3 建物群・溝 61（北西から）
図版 17	平安京右京五条三坊	1 東半部（西から） 2 S D 1 第 2 層遺物出土状況（西から）
図版 18	平安京右京五条三坊	S D 1 出土の墨書土器
図版 19	平安京右京六条二坊 1	1 第 1 調査区第 3 面全景（北から） 2 第 2 調査区全景（北から）
図版 20	平安京右京六条二坊 2	1 全景（北から） 2 道祖大路東築地（北から） 3 道祖大路東側溝（北から）
図版 21	平安京右京七条二坊	1 全景（東から） 2 建物（南から） 3 道祖川（東から）
図版 22	平安京右京八条三坊	1 全景（東から） 2 暗渠・建物（西から） 3 馬代小路東側溝・石敷施設（北から）
図版 23	平安京右京九条一坊 1	1 全景（北から） 2 建物 1・2(西から) 3 建物 3(西から)
図版 24	平安京右京九条一坊 2	1 全景（東から）

- | | | |
|--------------------------------|---|-----------------------|
| | 2 | S E 219(北から) |
| | 3 | S K 87 B (東から) |
| 図版 25 白河街区・岡崎遺跡 1 | 1 | 第1遺構面全景(北東から) |
| | 2 | 第3遺構面(北から) |
| 図版 26 白河街区・岡崎遺跡 2 | 1 | 室町時代全景(東から) |
| | 2 | S G 1(東から) |
| | 3 | S G 1瓦積施設(南西から) |
| 図版 27 鳥羽離宮跡 127 次調査 | 1 | 全景(北から) |
| | 2 | 北西部柱穴群(北から) |
| 図版 28 中臣遺跡第 70- 1 次調査 | 1 | I、II - a 区全景(東から) |
| | 2 | II - b 区全景(東から) |
| | 3 | IV区全景(東から) |
| | 4 | V区全景(西から) |
| 図版 29 長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡 | 1 | 長岡京期全景(北西から) |
| | 2 | 弥生・古墳時代全景(北西から) |
| 図版 30 長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡 | 1 | S B 341(北から) |
| | 2 | S D 50(北西から) |
| | 3 | 南西部遺構群(北東から) |
| 図版 31 長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡 | | S D 50 出土木簡 |
| 図版 32 長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡 | | S D 50 出土木簡 |
| 図版 33 長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡 | 1 | S D 50 出土木製品 |
| | 2 | S D 430・450・500 出土木製品 |
| 図版 34 長岡京左京四条三・四坊、
羽束師志水町遺跡 | 1 | W区长岡京期全景(北から) |
| | 2 | W区奈良時代水田(東から) |
| | 3 | W区古墳時代水田(北東から) |
| 図版 35 長岡京左京四条三・四坊、 | 1 | X - 5 区全景(西から) |
| | 2 | Y - 5 区全景(東から) |
| 図版 36 仁和寺院家跡
羽束師志水町遺跡 | 1 | 礎石建物(南から) |
| | 2 | 古墳石室(南から) |
| | 3 | 石室・羨道部排水施設(南から) |

図版 37	仁和寺院家跡出土遺物	1 古墳出土遺物 2 古墳出土須恵器
図版 38	仁和寺院家跡出土遺物	1 遺物包含層出土軒瓦 2 遺物包含層出土輸入陶磁器
図版 39	上ノ段町遺跡	1 全景（西から） 2 堅穴住居 S X 120(北から) 3 建物 S B 137(東北から)
図版 40	上ノ段町遺跡出土土器	1 S D 2・50、S K 58、遺物包含層出土須恵器 2 S K 58・120 遺物包含層出土土師器
図版 41	史跡名勝嵐山	1 全景（南西から） 2 園池洲浜（北から）
図版 42	西野町遺跡	1 1区全景（南から） 2 2区全景（西から） 3 拡張区建物 S B 83(北から)
図版 43	西野町遺跡出土遺物	1 S K 61 出土土師器 2 S K 22 出土壁土片
図版 44	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	1 B区全景（北東から） 2 C区全景（東から）
図版 45	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	1 D区全景（北東から） 2 D区建物3細部（東から）
図版 46	北野麩寺	1 第2面（北から） 2 S X 64 断面（西から）
図版 47	幡枝古墳群・南ノ庄田瓦窯跡	幡枝2号墳全景（南から）
図版 48	南春日町遺跡	1 第15次調査全景（北から） 2 第16次調査全景（北から）
図版 49	中久世遺跡	1 全景（北から） 2 流路護岸（北東から） 3 流路出土遺物
図版 50	法性寺跡	1 全景（北から）

図版 51 伏見城跡 2	2 S D 120 遺物出土状況 (北東から)
	3 S D 120、P it127・136(東から)
	1 西グリッド全景 (東から)
	2 東グリッド江戸時代前期全景(北から)
図版 52 伏見城跡 2	1 東グリッド桃山時代全景 (南から)
	2 東グリッド旧京町通 (北から)
	3 東グリッド水琴窟 (北から)
図版 53 伏見城跡 3	1 桃山時代全景 (東から)
	2 西部方形周溝墓群 (北東から)
図版 54 平安京右京一条二坊・三条四坊	1 右京一条二坊 3トレンチ(東から)
	2 右京一条二坊 4トレンチ(東から)
	3 右京三条四坊 2トレンチ(北から)
	4 右京三条四坊 4トレンチ(北から)
図版 55 尊勝寺跡・岡崎遺跡、 最勝寺跡・岡崎遺跡	1 尊勝寺跡・岡崎遺跡第1区(北から)
	2 尊勝寺跡・岡崎遺跡3・4区(北から)
	3 最勝寺跡・岡崎遺跡2区(東から)
	4 最勝寺跡・岡崎遺跡8区(北から)

表 目 次

表 1 建物一覧表 (平安京右京四條二坊) ……………	48
2 平安時代の出土遺物 (平安京右京四條二坊) ……………	49
3 S D 1 第2層出土墨書土器 (平安京右京五條三坊) ……………	52
4 調査地点一覧表 (法性寺跡・正覚寺跡・月輪古墳・願成古墳) ……………	162
5 昭和 63 年度月別観覧者一覧表 ……………	172
6 昭和 63 年度発掘調査一覧表 ……………	174
7 昭和 63 年度試掘・立会調査一覧表 ……………	177

目 次

図 1	平安宮内裏跡 調査位置図	5
2	〃 軒瓦拓影	5
3	平安宮豊樂院跡 調査位置図	6
4	平安宮清暑院跡 調査位置図	7
5	〃 基壇断面	7
6	平安宮太政官跡 1 調査位置図	8
7	平安宮太政官跡 2 調査位置図	9
8	平安宮内匠寮 調査位置図	10
9	平安左京北辺三坊 調査位置図	11
10	〃 遺構平面図	12
11	平安京左京二条二坊・高陽院跡 1 調査位置図	13
12	〃 遺構平面図	14
13	〃 第3面整地層出土遺物実測図	15
14	〃 州浜断面	15
15	平安京左京二条二坊・高陽院跡 2 調査位置図	16
16	平安京左京三条三坊 調査位置図	17
17	〃 遺構平面図	18
18	平安京左京三条四坊 調査位置図	20
19	〃 遺構平面図	21
20	平安京左京四条三坊・南蛮寺跡 調査位置図	24
21	〃 土層断面図	24
22	〃 遺構平面図	25
23	平安京左京四条三坊 調査位置図	26
24	〃 遺構平面図	27
25	平安京左京五条一坊 調査位置図	28
26	〃 遺構平面図	29
27	平安京左京七条三坊 調査位置図	31

28	平安京左京七条三坊	遺構平面図	32
29	平安京左京七条三坊	井戸 251 出土白磁魚形水注	33
30	平安京左京九条一坊	・東寺旧境内 1 調査位置図	34
31	〃	第 1 面東部実測図	35
32	〃	軒丸瓦実測図	37
33	〃	軒平瓦実測図	38
34	平安京左京九条一坊	・東寺旧境内 2 調査位置図	39
35	平安京右京二条三坊	・西ノ京遺跡 調査位置図	40
36	〃	溝 32 出土石鏃	40
37	〃	遺構平面図	41
38	平安京右京三条三坊	調査位置図	42
39	〃	遺構平面図	43
40	〃	軒瓦拓影	44
41	〃	五町遺構配置図	45
42	平安京右京四条二坊	調査位置図	46
43	〃	遺構平面図	47
44	〃	土壙 63 実測図	48
45	平安京右京五条三坊	調査位置図	50
46	〃	遺構平面図	50
47	〃	S D 1 第 2 層出土土器実測図	51
48	〃	S D 1 第 2 層出土土器実測図	52
49	平安京右京六条二坊 1	調査位置図	53
50	〃	遺構平面図	53
51	〃	S E 31 出土軒瓦拓影	54
52	〃	出土土器実測図	55
53	〃	右京六条二坊遺構配置図	56
54	平安京右京六条二坊 2	調査位置図	57
55	〃	遺構平面図	57
56	平安京右京七条二坊	調査位置図	59
57	〃	遺構平面図	60

58	平安京右京八条三坊	調査位置図	61
59	平安京右京八条三坊	遺構配置図	62
60	平安京右京九条一坊 1	調査位置図	64
61	〃	遺構平面図	65
62	〃	軒瓦実測図	66
63	〃	遺構配置図	67
64	平安京右京九条一坊 2	調査位置図	68
65	〃	遺構平面図	69
66	白河街区・岡崎遺跡 1	調査位置図	70
67	〃	断面図	70
68	〃	遺構平面図	71
69	白河街区・岡崎遺跡 2	調査位置図	73
70	〃	遺構平面図	74
71	鳥羽離宮跡第 126 次調査	調査位置図	76
72	〃	調査区配置図	77
73	鳥羽離宮跡第 127 次調査	調査位置図	78
74	〃	遺構平面図	78
75	〃	溝 190・244 出土土器実測図	80
76	〃	軒瓦実測図	81
77	鳥羽離宮跡第 128 次調査	調査位置図	82
78	鳥羽離宮跡第 129 次調査	調査位置図	83
79	鳥羽離宮跡第 130 次調査	調査位置図	84
80	鳥羽離宮跡第 131 次調査	調査位置図	85
81	中臣遺跡第 70 - 1 次調査	調査位置図	86
82	〃	遺構配置図	87
83	長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡	調査位置図	88
84	〃	遺構平面図	89
85	〃	S D 50 出土墨書土器	90
86	〃	S D 50 出土軒瓦実測図	91
87	〃	調査地周辺遺構配置図	92

118	〃	16次調査遺構配置図	122
119		南春日町遺跡 井戸2	123
120		中久世遺跡 調査位置図	124
121	〃	流路出土遺物実測図	124
122		大藪遺跡 調査位置図	125
123		法性寺跡 調査位置図	126
124	〃	Pit136出土軒平瓦拓影	126
125	〃	遺構平面図	127
126		伏見城跡1 調査位置図	128
127		伏見城跡2 調査位置図	129
128	〃	遺構平面図	130
129		伏見城跡3 調査位置図	133
130	〃	遺構平面図	134
131		平安京右京一条二坊 調査位置図	139
132		平安京右京三条四坊 調査位置図	140
133	〃	遺構実測図	141
134		平安京右京七条二坊 調査位置図	142
135	〃	土層断面図	142
136		尊勝寺跡・岡崎遺跡 調査位置図	143
137	〃	軒平瓦実測図	143
138		最勝寺跡・岡崎遺跡 調査位置図	144
139		鳥羽離宮跡 鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡調査位置図	146
140		長岡京左京南一条四坊・東土川遺跡 調査位置図	148
141		長岡京左京二条三坊・三条三坊・四条二坊 調査位置図	149
142		仁和寺院家跡 調査位置図	150
143		常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内 調査位置図	152
144	〃	土壙墓出土土器実測図	153
145	〃	土壙墓出土土器	154
146		上ノ段町遺跡 調査位置図	155
147		広隆寺旧境内・常盤仲之町遺跡・西野町遺跡 調査位置図	156

148	〃	出土須恵器実測図……………	157
149	西野町遺跡・千代ノ道古墳	調査位置図……………	158
150	〃	軒平瓦実測図……………	159
151	六波羅政庁跡・法住寺殿跡	調査位置図……………	160
152	法性寺跡・正覚寺跡・月輪古墳・願成古墳	調査位置図……………	161
153	〃	出土遺物実測図……………	163
154	遺跡測量	写真測量の流れ……………	164
155	コンピューター	システムの概要図……………	165
156	保存科学	穴あきフィルムの作製……………	166
157	〃	穴あきフィルムに木製品を入れる……………	166
158	〃	含浸槽に浸漬……………	167
159	〃	取り出し……………	167
160	〃	乾燥風景……………	167

第1章 発掘調査

I 昭和63年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査は56件と、昭和61年度の40件、昭和62年度の48件から増加の一途をたどっている。また、1件あたりの調査面積も規模が増大する傾向がみられ、長期にわたる継続調査も増加している。主な調査件数は、平安宮・京関係27件、白河街区2件、鳥羽離宮跡6件、中臣遺跡1件、長岡京関係3件、その他の遺跡として太秦地区4件、洛北地区3件、南春日地区4件がある。

平安宮・京跡 平安宮は、主として国庫補助による発掘調査として実施、内裏跡（1）では平安時代中期の焼亡を示す遺構を発見、豊楽院跡（2）・太政官跡（3・4）・内匠寮跡（6）などで、宮の復原に手掛かりとなる築地関係の遺構を検出、また豊楽院清暑堂跡では豊楽殿正殿と同様の礎石根固め痕跡をもつ基壇を発見している。

平安京跡では、左京域で11件の調査を行っているが、主に邸宅内の調査が多く、街路・条坊関係の調査は少ない。昭和56年度に園池を発見して以降、数次にわたり調査を行っている左京二条二坊・高陽院跡では、本年度も2件の調査を行っている。九町（8）では、藤原頼通の高陽院に先立つ9世紀後半以降の賀陽親王の邸宅に関する園池を初めて発見し、高陽院庭園遺構との関連が明らかとなった。また、十六町（9）ではこれまでに調査した高陽院西半部の池とは異なる園池を発見している。

左京三条二坊十六町（10）では平安時代の遺構は後期の井戸1基で、小二条殿・藤原頼朝邸の遺構は確認できなかったが、高級陶磁器類が出土するなど今後の調査に期待が持たれる。また、室町時代以降、近世に至るまで継続的に都市化する状態を調査している。左京七条三坊九町・六条院跡（15）では平安時代後期以降の建物、井戸などを検出すると共に輸入陶磁器白磁魚形水注、黒漆塗立烏帽子などの希少な遺物も出土し、園池「海橋立」の位置を想定する資料も得ている。

東寺旧境内の調査は2件行い、左京九条一坊十二町（16）では、建久八年文覚修造以降の鎮守八幡宮及び東寺南限築地の変遷を明らかにしている。また、十五町（19）では、平安時代の大衆院に伴う整地層を確認し、宝積院の創建年代が中世に遡る手掛かりを得ている。右京の調査は、10件を行ない条坊・邸宅に関する大きな成果を得ている。右京二条二

坊三町（18）では、町割りの区画の施設と考えられる溝・柱穴列、右京三条三坊五町（19）では平安時代前期の同町の中心的建物及び溝・柵列などを確認し、一町を占有する宅地跡と推定するに至っている。

四条から七条にかけての二坊の宅地及び道祖大路・道祖川を右京四条二坊十六町（20）・六条二坊十六町（23）・七条二坊十五町（24）の3地点で調査している。道祖川は道祖大路東半を南流し、築地比定地を越えて宅地内に浸食する部分もみられるなど、水量の多い河川であることを物語っている。右京四条二坊十六町では9世紀から12世紀の建物12棟以上・区画溝などを検出し、宅地利用の変遷を平安時代後期まで継続的に追うことのできる数少ない右京域の調査となった。七条二坊十五町では、道祖大路関係の遺構と共に七条坊門小路の北側溝・築地を合わせて検出し、9世紀後半代の建物跡・井戸などから、同町の宅地割りを理解する資料を得ている。

この外にも、右京五条三坊2町（21）の綾小路南築地内溝、六条三坊2町（22）の西鞠負小路東側溝・築地・内溝・建物、八条三坊7町（25）の馬代小路・建物・水利施設など、条坊と邸宅敷地の利用・変遷を示す多くの資料を得ている。

右京九条一坊・西寺跡では、十町（26）と十五町（26）の2箇所を調査を行い、平安時代前期の西寺子院に関連する建物跡などの遺構を明らかにしている。

平安時代以前の遺跡としては、右京の西ノ京遺跡（18）で弥生時代から古墳時代の流路、唐橋遺跡（27）では縄文時代中・晩期、弥生時代中期から古墳時代後期の遺物が流路などから出土している。また、左京三条四坊（11）の下層で弥生時代から古墳時代の遺物を包含する自然地形の落込を検出し、烏丸御池遺跡の一部を確認している。

中世から近世の遺構も、各所で検出調査しているが、中でも左京北辺三坊四町（7）の「構」は、堀・柱穴列（塀）を伴い、後に瓦積みの土塁・塀を加えた修築を施すなど、戦国期から桃山時代の洛中における防御施設の遺構をよく残している。左京三条四坊（11）の炭・灰が厚く堆積し、多様な埴塼を伴う遺構群は、鑄造関係の枠に留まらず、近世京都における手工業生産の一端を示す遺構として今後の検討課題の一つとなろう。

白河街区 岡崎遺跡を含む白河街区では法勝寺の寺域に隣接する2箇所を調査を行っている。南側隣接地（28）では、中世の整地層や、平安時代後期から鎌倉時代の遺構より軒瓦400点余を含む瓦類と共に窯体片も多量に出土し、瓦窯・工房跡などの遺構は明らかにできなかったが、六勝寺に関連する瓦屋の存在が窺われる。また、北側隣接地（29）では平安時代後期の地割り溝や、鎌倉時代後半から室町時代前半に至る寺院の一部と考えられ

る遺構群を検出し、その変遷・修築の過程を明らかにしている。

鳥羽離宮跡 本年度は、鳥羽離宮跡 126～131 次調査の 6 箇所調査を行っている。このうち、北殿、離宮周辺部、天皇陵関係の調査が各 2 件である。

北殿の調査は、128・131 次調査として行い、島を伴う園池及び池北側で北殿に関連する遺構を調査し、島の規模・構築法の全容が明らかになった。離宮周辺部の調査では中世竹田村を 127 次調査で行い、平安時代末期から鎌倉時代の重複する建物や柵列、屋敷地の区画溝を検出している。この溝より、完形に近い土器類が出土し、瓦器を中心に良好な一括資料となった。東殿北辺の 130 次調査でも、平安時代後期から室町時代の遺構が良好に遺存し、邸宅の敷地区画及び内部施設の一部を明らかにしている。

鳥羽天皇陵南辺の 126 次調査では天皇陵に関係する遺構はなく、園池の一部と考えられる礫敷・溝を検出したに留まるが、近衛天皇陵南部の 129 次調査では、天皇陵南限の溝の東端を確認し、先の調査成果と合わせて東西幅を明らかにすることができた。

中臣遺跡 本年度の調査は、中臣第 70 - 1 次調査 (36) の 1 件である。調査は、5 区に分けて行っているが、遺構の遺存状態が全体に悪く、西部の 2 地区で平安時代中期の建物、鎌倉時代から室町時代の遺構を検出したにとどまる。

長岡京跡 長岡京関係の調査は 3 件実施しているが、下層の遺跡と重複しているため調査地点ごとにまとめて置く。

左京一条三坊・戌亥遺跡 (37) は、大藪遺跡から南流する弥生時代から平安時代にかけての流路と、流路右岸の陸部に形成された、対応する各時代の遺構の調査で、流路と居住の関連を示す良好な資料である。特に、奈良時代末期の木簡やケズリカケには「樽」や加工製品の作成・運搬の様子が示され、長岡京造営時の物資を集積・加工・運搬した「津」の様相を窺い知ることができる。

左京南一条四坊 (38) は、南一条大路推定地に建物・柵列・溝などが遺存し道路遺構の痕跡が認められないことから、長岡京の条坊復原に検討課題を加える調査の一つとなった。左京南四条三・四坊・羽東師遺跡 (39) は 1980 年以来継続して行っている外環状線関係の調査のうち長岡京域での最後の調査になっている。本年度は、7 箇所調査を行い四条三坊 (W 区) では古墳時代と奈良時代の水田遺構の差異を明らかにし、四条四坊 (X 区) では西羽東師川旧流路の北岸に長岡京期を含む奈良時代の遺構を確認、京外の Y 区では平安時代から鎌倉時代の邸宅や室町時代の火葬墓、条里坪境と考えられる南北溝などを検出している。

その他の遺跡 京都市域の他遺跡の調査は、15件を数える。太秦地区の仁和寺院家跡(40)では平安時代後期から鎌倉時代の礎石建物に加えて横穴式石室を持つ円墳の調査を行い、上ノ段町遺跡(41)は、堅穴住居3戸・掘立柱建物4棟、西野町遺跡(43)は古墳時代後期の堅穴住居3戸と奈良時代から平安時代前期の建物などを検出し、遺跡の広がり
と内容の理解に厚みを増すことになった。また、史跡名勝嵐山(42)では平安時代前期の山荘か別業に伴う園池を検出し、平安時代前期の嵯峨野における新たな知見を得ている。

洛北地区では特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園の調査(44)を開始、金閣と柱筋のそろう建物などを確認、足利義満によって造営された北山殿の遺構が遺存することを明らかにしている。また、北野廃寺では12次調査で検出した東西溝の延長部を検出している。

岩倉の幡枝2号墳(46)は、市内で初めての木棺直葬墳の調査となり、2基の木棺が並列して埋葬されていることが明らかとなった。

南春日地区では、史跡天皇の杜古墳の整備事業に伴う調査(47)で同古墳が周濠を伴わないことが明らかになり、造営年代も従来の古墳時代中期から前期末葉に遡って位置付けることができた。南春日町遺跡(48)では平安時代から室町時代の柱穴・溝・井戸などを検出し、大原野神社及び同社家に関連する遺構で、復原できた建物は15次調査3棟、16次調査1棟と少ないが、建物としてまとめられなかった柱穴は夥しい量にのぼる。

他にも、中久世遺跡(49)で弥生時代・長岡京期から平安時代の流路、大藪遺跡(50)では上述の流路と右岸に立地した中・近世の集落などを調査している。

洛東地区では東福寺寺域内に調査区を設けた、法性寺跡(51)の調査では、平安時代前期の溝、同中期の建物など法性寺跡推定地で初めての明確な遺構の発見は、法性寺伽藍及び前身を考える端緒となるものであろう。

伏見地区では旧伊達街道及びこれに面する大名屋敷を検出した伏見城跡1(52)、京町通と町屋跡を含めて伏見城城下町の計画的な都市造成の実体を窺わせる伏見城跡2(53)に加え、伏見地区で初めて弥生時代の方形周溝墓を発見した伏見城跡3(54)などの調査を行っている。(54)では奈良時代・平安時代後期以降を含む重複した遺跡であることも判明し、桃山時代の大規模な土採取壙から出土した金箔瓦は従来の出土品に比べても金箔の遺存状態の最も良い資料である。
(原山充志)

II 平安宮・京跡

1 平安宮内裏跡 (図版1)

経過 調査地は、内裏跡西面築地推定地のすぐ西側に位置している。建設工事に先立って実施した試掘調査で、平安時代の遺物包含層が良好に遺存していることが明らかになり、本発掘調査を行った。

遺構 基本層位は、厚さ20cmの現代層があり、その下層は平安時代の遺物を含む整地層になる。

平安時代の遺構は、江戸時代の遺構と重複していたため残存状況はよくなかった。しかしながら、調査区の南側では比較的よく残っているところが一部見受けられた。調査の結果、平安時代や江戸時代の土壌や整地層などを検出した。特に、土壌2・3からは、焼けただれた土器や瓦などが多量に出土している。この他にも、平安時代の瓦や土器の出土する土壌を発見している。

遺物 平安時代の遺物には、土器類、瓦類、金属製品を始め壁土や葺き土なども見受けられる。最も顕著に認められたのは瓦類である。出土した軒瓦の中には、先の都から運び込まれたもの、平安宮修復のために、山城以外の国で生産した瓦なども認められた。

なお、図示した軒平瓦(2)は『平安宮跡発掘調査概報 昭和63年度』で「丹波国」産と報告したが、後日の調査で高知県の佐古亀山窯から同范品が出土しており、「土佐国」産に訂正する。また、軒丸瓦(1)も佐古亀山窯から出土している。

小結 今回の調査では、内裏の焼亡を知る遺構、遺物を得ることができた。例えば、土壌2・3からは火災を受けた壁土や葺き土などが多量に出土した。壁土はいわゆる白壁で、上塗りの仕上げも丁寧に行われている。共伴した土器から、火災は10世紀中頃のものとして推定できる。(鈴木久男)

『平安宮跡発掘調査概報』昭和63年度 1988年報告

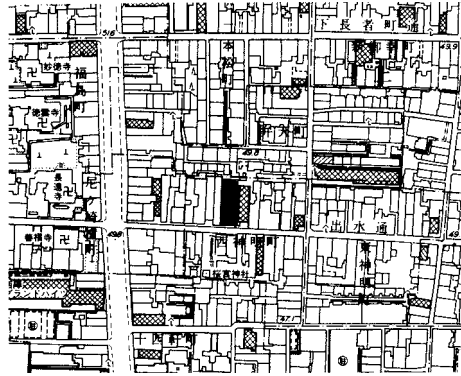


図1 調査位置図 (1:5000)

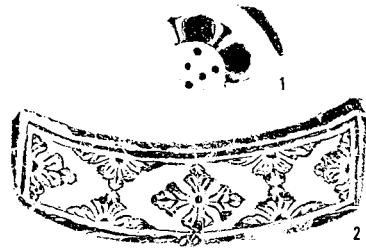


図2 軒瓦拓影 (1:6)

2 平安宮豊楽院跡 (図版1)

経過 調査地は、中京区聚楽廻中町 53 - 11 に位置する。当該地は、平安宮豊楽院の東限付近に推定される場所である。当地に建物新築工事が計画されたため、事前調査を実施した。調査の結果、地表下 0.4 m において平安時代の瓦を多量に含む南北方向の溝状遺構を検出した。この溝状遺構は、豊楽院の東面築地に伴う遺構の可能性があるため 1988 年 11 月 1 日から 18 日まで調査を行った。



図3 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 調査地の基本層序は、盛土及び近世の整地層が 0.3 ~ 0.4 m あり、以下は褐色砂礫層（一部は黄褐色泥砂層）の地山となる。この褐色砂礫層を掘り込んで近世の瓦溜、土取穴、溝、井戸などがある。この同一面で平安時代の南北溝（SD1）を調査区西側で検出した。SD1 は幅 2.6 m、深さ 0.5 m を測る。形状は U 字形を呈し、南に向かって緩やかに下がっている。溝内の堆積土層は 3 層に分かれる。第 1 層には多量の瓦を含むが、細かく砕けた瓦が主であった。第 2 層から第 3 層上面の東肩部には、建造物から落下後、そのまま埋没した状況を窺わせる完形品の丸瓦、平瓦が出土した。

遺物は整理箱に 51 箱が出土した。そのほとんどが瓦類で、大半は SD1 からのものである。SD1 から出土した遺物には土師器杯、須恵器鉢と軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦などがある。平安時代中期に比定される。

小結 検出した遺構の中で、平安時代に属したのは SD1 だけである。九条家本や陽明文庫の豊楽院図から、豊楽院の東西幅（築地心心距離）は 56 丈余の数値が得られる。SD1 を豊楽院の東面築地に伴う遺構とした場合、1987 年の豊楽殿跡の調査^註で発見した豊楽院の中心軸と比較すると築地内溝に推定され、豊楽院の東西幅は 57 丈となる。しかし、築地に関連した遺構は溝だけで他に明確な遺構が検出されておらず、今後の調査に期待する。

(小松武彦・本弥八郎)

註 「平安宮豊楽院 (1)」

『平安京跡発掘調査概報』昭和 63 年度 京都市文化観光局

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 63 年度 1989 年報告

3 平安宮清暑堂跡（図版1）

経過 調査地は、豊楽殿跡の北側約20mに位置し、豊楽院清暑堂跡に相当する場所である。調査前に実施した試掘調査によって、敷地の北半部は近・現代の開発によって遺構が破壊されていることが確かめられている。このため、調査区を敷地の南側に設定した。なお、掘り下げ中の残土は場外へ搬出した。

遺構・遺物 近・現代の遺物を含む土層を除去すると、清暑堂基壇構築土の一部が検出

できた。基壇は、黄褐色粘質土（地山）の上に褐色粘質土を版築によって叩き締めていた。版築土は、厚さ20cmほど遺存していた。基壇土の一部に、褐色の細かな砂礫が約2mの範囲にわたってみられた箇所があった。このような砂礫は、豊楽殿の礎石根固め部分にも認められた。この他に、中世の柱穴、江戸時代の井戸、土取り穴、瓦溜などの遺構を検出した。また、下層からは、古墳時代の土壙を検出している。

遺物は、ほとんどが瓦溜から出土した瓦類である。軒瓦はいずれも平安時代で、軒丸瓦1点、軒平瓦4点が出土している。

小結 今回の調査によって、豊楽院清暑堂の基壇を一部ではあるが確かめることができた。

また、基壇版築土の中で発見した砂礫の位置は、豊楽殿身舎の西端から東へ2間目の柱筋の北側延長線上にあたり、豊楽殿跡で検出したのと同様な礎石の根固めの痕跡と考える。

（鈴木久男）

『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度 1989年報告

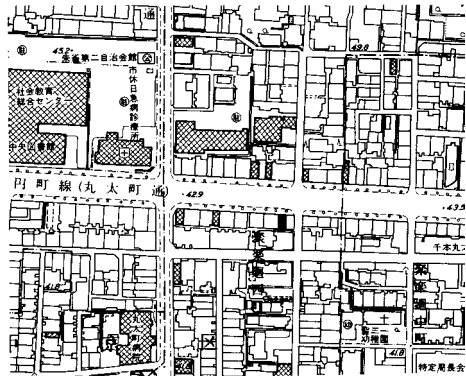


図4 調査位置図 (1:5000)



図5 基壇断面

4 平安宮太政官跡 1 (図版1)

経過 調査地は平安宮太政官の西北部に該当する。太政官跡の調査は、当研究所が昭和53年に今回の調査地の西約50mで実施し、同官の西面築地などを検出している。本調査は、まず試掘調査を行い、遺構が遺存することを確認した上で実施した。

遺構 平安時代の遺構面までの基本層序は、上より近・現代の盛土が2層、整地層が2層、平安時代の遺物包含層が1層の順である。遺構面の標高は約41m、遺構の基盤となる層は黄橙色粘土層である。検出した遺構

の主なものには溝4条、築地2条、土壙4基、柱穴6基があり、包括的に述べるなら、2条の築地とそれに伴う溝や柱穴である。築地はいずれも東西方向で、調査区南端に1条と、それより北約12mの位置に1条検出した。北側築地の検出長は8mで、幅は基底部で2.5m、上端で2.2mあり、高さ0.5mが残存する。築地は粘土を主体に版築されており、後に、北側に1m幅で粘土を積み足して補修している。築地に伴う溝は二時期あり、北側では重複して2条、南側では平行して2条ある。

南側築地は、検出長6.5m、高さ約0.4mあり、南北幅は調査区外に延びるため不明である。築地の北側裾部とそれに伴う幅50cmの溝は調査区西端で南に折れる。築地上にはこれに伴うと考えられる柱穴が4基並び、間隔は南北が1.5m、東西が3mである。

遺物 出土遺物は整理箱にして180箱で、その大半が瓦類である。瓦類のうち軒瓦が82点で、平安時代前期及び中期のものが多く、他に平城宮型式の搬入瓦が13点、鬼瓦が2点ある。土器類には土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器などがあり、平安時代前期と中期に分けられる。

小結 今回発見の北側築地は、春日小路南築地の宮内延長線の南約12丈に位置することが判明した。太政官に附属する各官衙の配置は、宮内古図などで各種の形態をみるが、その実態は不明である。しかし、各図を総合すると、今回の築地は太政官の西北隅を占める勘解由使ないしはその東の御曹司の南築地に考えられる。 (本 弥八郎)

『平安京発掘調査概報』昭和63年度 1989年報告



図6 調査位置図 (1:5000)

5 平安宮太政官跡 2 (図版1)

経過 調査地は平安宮太政官の北辺部に推定される場所であり、周辺地は、過去の調査で平安時代の遺構が比較的良好に遺存していることが確認されている。今回は、まず遺構の有無を確認するための試掘調査を実施し、その後に本調査を行った。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、上から現代盛土 20cm、暗褐色泥砂層 26cm、黄褐色泥砂層 16cm の順に堆積し、以下が平

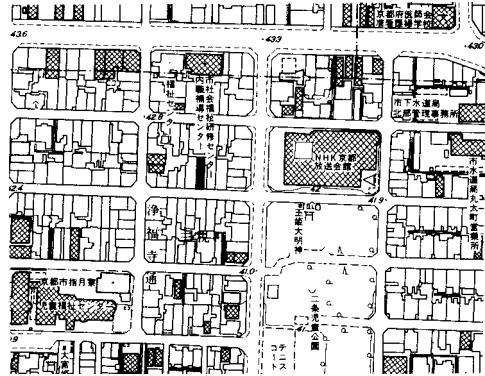


図7 調査位置図 (1:5000)

安時代の遺構面となる。検出遺構としては、築地とそれに伴う側溝、路面、柱穴などがある。

太政官の北面築地と同側溝と考えられる遺構は調査区の南端で検出した。検出長は東西 1.8 m である。築地部分に 2 基の柱穴があり、側溝は幅 90cm、深さ 27cm で、溝北肩部に杭列の跡が認められた。溝からの出土遺物には、平安時代前期の土師器、須恵器、瓦がある。

側溝の北に続く路面は、東西 2.2 m、南北 5.7 m の範囲で残存する。路面は 2 面あり、径が 2～5 cm の小石が固く敷き詰められ、南と北に向けて緩やかに傾斜する。下部の路面には、化粧砂である白砂が認められた。路面の基盤層からは 9 世紀初頭の土師器杯が出土している。

調査区の北端では東西方向の溝を検出した。検出長は 2 m で、北肩は調査区外になり幅は不明である。深さは 45cm あり、底部は平坦である。溝からの出土遺物は比較的多く、9 世紀初頭の特徴を示す土師器、須恵器などが出土している。なお、本調査で出土した遺物の総量は整理箱で 9 箱である。

小結 今回の調査では、太政官の北面築地と側溝、太政官と陰陽寮間の宮内道路を確認した。太政官の四至に関しては、昭和 53 年の調査で西面築地を確認しており、今回の成果と合わせその位置が更に明確となった。また、今回の築地位置は、京域の春日小路南築地ラインの延長上にあることが測量結果から明らかとなった。ただし、調査区内に比定される陰陽寮の南築地については不明確であり、北端で検出した東西溝が築地の内溝か否かで路幅が変わることになる。隣接地での調査を待ちたい。

(本 弥八郎)

『平安京跡発掘調査概報』昭和 63 年度 1989 年報告

6 平安宮内匠寮跡 (図版1)

経過 この調査は、中京区西ノ京左馬寮町に所在する診療所新築工事に伴って実施した。調査地は、平安宮西方官衙の一つ内匠寮東南端に推定されることからこれらに関連する遺構・遺物の確認が予想された。まず遺跡の存在の有無を確認するため試掘調査を実施した所、内匠寮の東限を画する南北溝や土壙などを確認したため、発掘調査に移行する運びとなった。調査は、敷地内で既存建物による攪乱を受けていない北東部を対象に東西 18 m、南北 10 m の

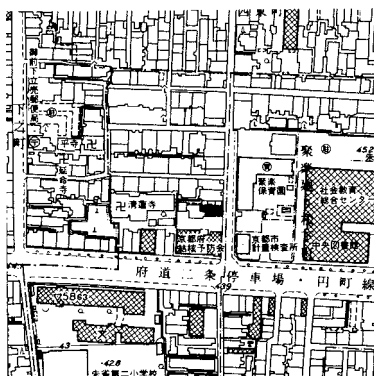


図7 調査位置図 (1:5000)

調査区を設定した。その結果、古墳時代後期から室町時代に至る遺構群を検出することができた。

遺構・遺物 調査区西半では江戸時代の大規模な土取穴によりそれ以前の遺跡については検出できなかったが、東半では平安時代の南北溝、溝状遺構、柱穴、土壙、土器埋納穴などを確認した。

調査区東端で検出した南北溝は、幅 1.4 m 以上、深さ 50cm を測り、内匠寮の東限を画するものと考えられる。溝は、平安時代後期の初めには埋められ、埋土上面に塀の施設と考えられる河原石の礎石列が 1 条認められた。その西方には幅 1.2 ~ 3.4 m、深さ 50 ~ 85cm を測る南北の溝状遺構がある。形状は直線ではなく南北に土壙が連結した状態を呈し、その結合部の底は著しく浅い。遺構の下層からは古墳時代後期から奈良時代にかけての土器が出土するが、上層では平安時代前期のものが認められる。この両遺構の間に柱穴や、径 20cm、深さ 15cm を測る円形のピットに土師器を 2 個立てかけるように据えた土器埋納穴が認められた。室町時代の遺構には、幅 0.65 ~ 1.1 m、深さ 0.25 ~ 1 m を測る南北溝、土壙、柱穴がある。遺物は、平安時代前期の土器と共に製塩土器、風字硯、越州窯系青磁などが、溝内などから少量出土した。

小結 内匠寮の東限を画する施設の一部を確認したにすぎないが、その脇にはそれ以前に遡る遺構が存在していることも判明した。 (堀内明博)

『平安京発掘調査概報』昭和 63 年度 1989 年報告

7 平安京左京北辺三坊 (図版1・3)

経過 調査は、上京中学校改築工事に先立って実施した。調査地は推定左京北辺三坊四町の北東部で、一条大路の南に接する。調査区は、敷地中央のグランド内に2箇所、校舎北側に1箇所設定した。

遺構 検出した遺構は、平安時代から鎌倉時代と、室町時代後期から桃山時代に属するものがある。本稿では後者について概説する。

各トレンチとも地表下約1.7mで桃山時代の遺構面となる。1トレンチでは室町時代後期

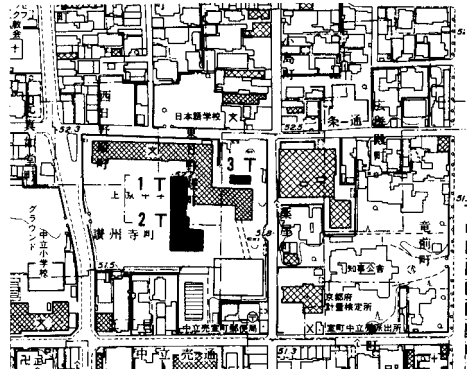


図9 調査位置図 (1:5000)

の遺構を4基検出した。S D 70は東西溝で、検出長は4.5m、幅1.5m、深さ0.5mで、断面はU字状を呈する。S D 188は東西溝で、トレンチ西壁から東に3.5m延びて北に曲がり、更に東に3.5m延びる。溝幅は西で2m、東側で2.8mとなる。深さは1mで礫層が堆積する。S D 7cは堀状を呈する。検出長は5.2m、幅が2.5m、深さは1mで、下部に黒褐色泥土層が堆積する。南北溝S D 42は検出長が1.2m、幅6.6m、深さが1.3mである。溝内には東・西肩口から底に向け段を構築し、段上に各々5個の礎石を一列に据える。2トレンチのS A 113は東西方向の柱穴列で、3間分確認した。柱間隔は1.9m、柱穴の径は約60cmで、礎石として径40cm大の割石を据える。

桃山時代の堀S D 7bは、S D 7cの南に位置する。検出長は南北が2.4m、東西では5.2m、深さは70cmである。底部に東西2列の礎石列があり、間隔は共に1m等間で5個据える。底部に泥土層が堆積する。2トレンチのS D 85は、東西検出長が5.7m、幅は西端で5.5m、東端で7.7m、深さは3.4mを測る。底部は平坦で、堀内には南北に瓦積み of 土塁を構築する。瓦積みは東面し、積み方は、瓦間に粘土を詰めながら西に傾斜させて粗く積む。残存高は約2m。瓦積みの裏込めにも土と多量の瓦を使用している。出土した瓦類の軒瓦・飾瓦のほとんどが金箔瓦である。1トレンチのS K 8は、検出長が東西3.2m、南北3.3mで、掘形は円形を呈する。深さは80cmで、底部は平坦である。この土壌からも金箔瓦が出土している。2トレンチのS K 99は径1.4mの円形で、深さ90cmを測る。底部からは、金箔を施した武具の一部(小札)が出土している。S A 60a・60bは、1・2トレンチにまたがる南北柱穴列でS D 85の南肩部より南へ延長21.3mを検出した。構

築法は、40～60cm幅の溝を掘り、底部に径25～40cmの川原石を1m等間に据える。

遺物 整理箱にして172箱出土した。大半が室町時代後期から桃山時代にかけての遺物で、土器、瓦、金属器、木器類がある。瓦類は主にSD85、SK7・8から出土している。軒瓦、飾瓦のほとんどが金箔瓦で、総数300点ある。瓦当文様は、軒丸瓦が37種、軒平瓦が53種ある。軒丸瓦には巴文、桐文、菊文があり、軒平瓦は唐草文で、中心飾に桐葉文、宝珠文、三葉文など配している。鬼瓦には桐文や中心に「上」字を飾るものがある。

小結 主な調査結果は、室町時代後期（戦国時代）に構築された「構」の一端が解明されたことである。SD85の構築時期は、最下層の出土遺物から考えて、中世末である。その時期には堀に伴うSA113が存在する。その後桃山時代に堀の一部を埋め、土塁を築き通路とする。土塁南のSA60a・bはその通路に付随する塀と考えられ、西側にも同様のものが想定できる。SD188、SD42、SD7bなども一連の遺構であろう。

金箔瓦については、明確な建物跡がなく、当地の建物に使用したものか、他から運ばれたものかは不明である。今後、周辺地の調査に期待したい。（本 弥八郎）

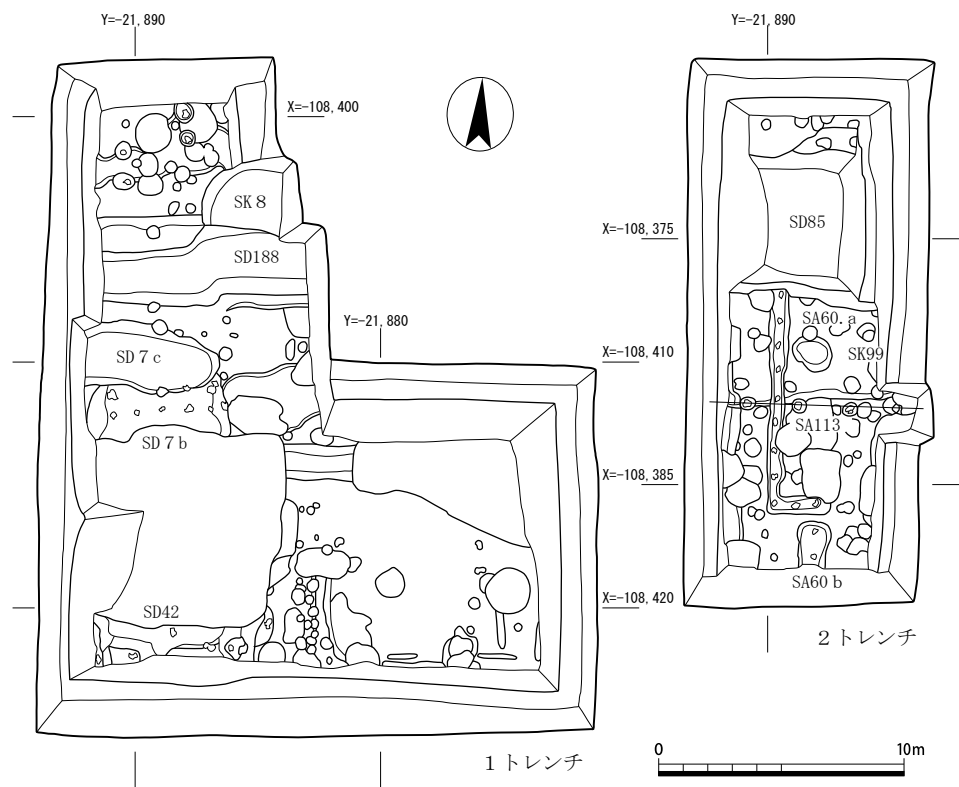


図10 遺構平面図 (1:300)

8 平安京左京二条二坊・高陽院跡 1 (図版1・4・5)

経過 調査地は堀川丸太町の交差点の北東隅に位置し、高陽院推定地にあたる。調査は南北21m、東西16mの調査区を設定したが、調査の終盤には残土置場の一部を拡張している。調査の結果、平安時代の池や溝、鎌倉時代の土壌などを発見した。

遺構 調査面は6面ほど確認した。次に、主な遺構面についてその状況を試みよう。第1面は、表土下60～80cmで検出し、築

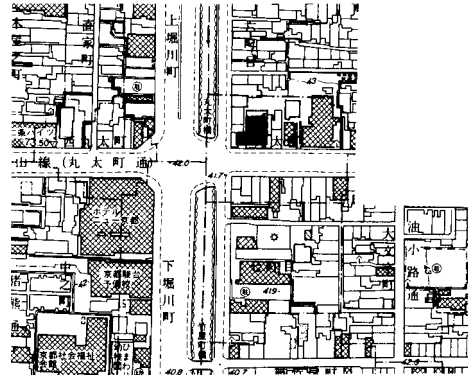


図11 調査位置図(1:5000)

山状の盛り上がりを発見した。平安時代後期から鎌倉時代の土器が伴出している。

第2面では、東西方向の素掘りの溝と、南北方向の石組溝とを発見している。2本の溝は、調査区の南西部で合流していた。この溝は、更に西側へ延びているようであった。

第3面は、拳大から人頭大の川原石を敷き詰めた南北方向の洲浜と、池の一部を検出した。池の汀線付近は、幅2mほどを溝状に掘り窪めて粘土を置き、玉石を貼って州浜を造っている。また、池の底部にも粘土を貼っていた。調査区の南東においては、ほぼ2m四方の石敷を認めたが、性格は明らかでない。池底や洲浜からは、10世紀の遺物が出土している。

第5面は、緩やかな曲線を描く池の西岸と洲浜の一部を確認した。洲浜の残存状況は良くなかったが、拳大の玉石を貼って仕上げていた。洲浜上からは9世紀前半から中頃の土器類が出土した。

第6面では、幅7mと2.5mの2条の流路を検出した。いずれも、北東から南西の方向に流れている。

遺物 遺物は、池の地業である粘土層からの出土が多く、そのほとんどが土器類であった。ここでは、平安時代の遺物についてその概要を述べる。

9世紀の遺物は、第5面の洲浜上から多く出土した。そのほとんどは土師器、須恵器が占めており、緑釉陶器は少数である。また、土馬・ミニチュア竈などの破片も数点出土した。洲浜上層からは、9世紀後半の土器類と共に木簡片が出土している。ただし、形状や

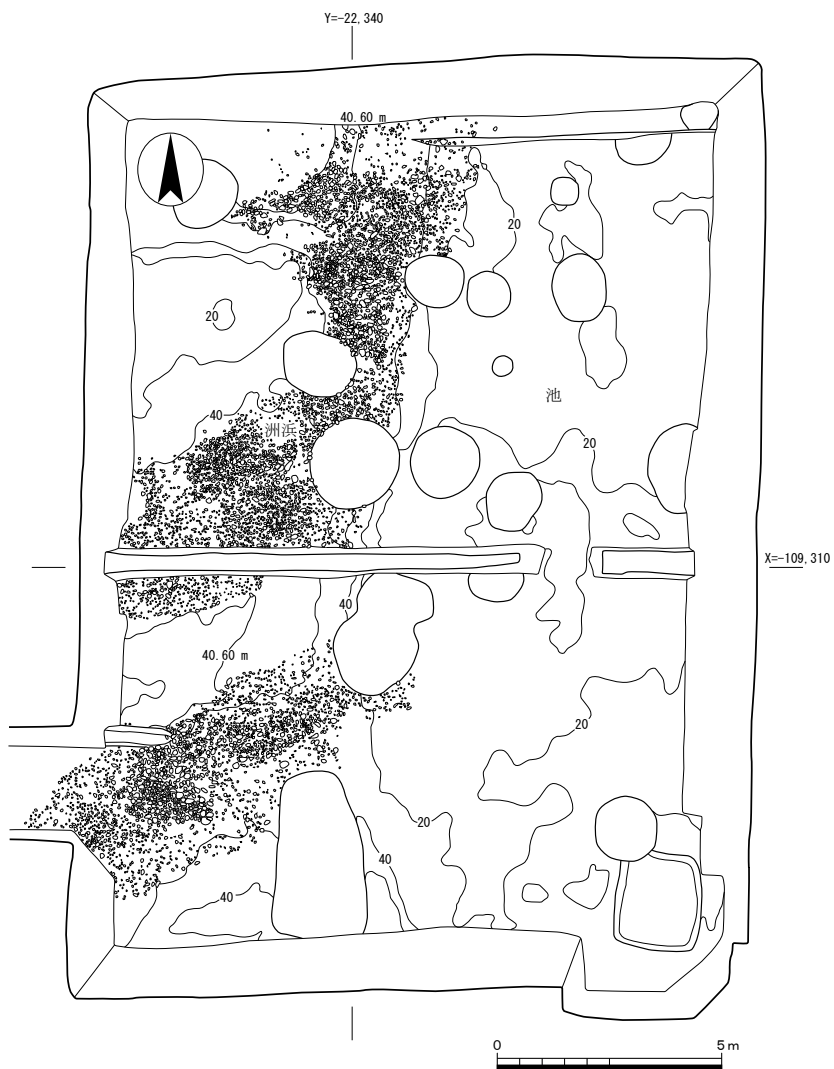


図12 遺構平面図 (1:150)

文字の内容は不明である。

10世紀の遺物は、第3・4面の池から出土した。土器と共に、鋳型・埴埴・吹子羽口などの鋳造関係の遺物が数多く出土し、また、帯金具（巡方）なども発見している。

11世紀の遺物は、極めて少なく、土師器片が見受けられる程度で、注目される現象である。12世紀の遺物は第1面で検出した土壌から土師器が多く出土している。この他にも、縄文土器や弥生土器が出土しているが、遺構には伴わない。

小結 今回実施した調査において注目される成果の一つに、賀陽親王の邸宅に係わると

考えられる園池を発見した
ことである。昭和56年度に行っ
た調査以来、藤原頼通が造営
した高陽院の園池やその後の
庭園遺構は調査しているが、
それ以前の庭園遺構の検出は
初めてである。第5面の苑池
は賀陽親王の頃と考えている。
第3面は、延喜5年(905)の
焼亡以降に再建された高陽院
の庭園遺構ではないかと思わ
れる。

また、今回の調査区内で藤
原頼通が造営した頃の園池が

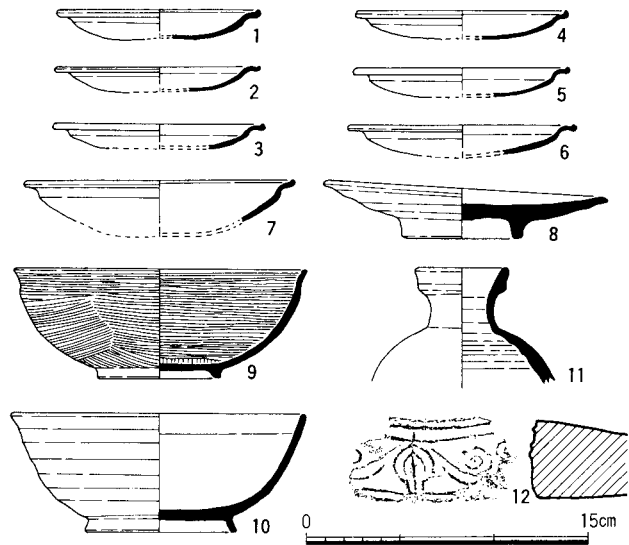


図13 第3面整地層出土遺物実測図(1:4)

確認されなかったことも大きな成果の一つである。藤原頼通が造営した高陽院の池の西限を限定できるようになった。一方、10世紀前半の池の地業内から、鋳型・埴塼・吹子などの鋳造関係の遺物が数多く出土しており注目される。(網 伸也・内田好昭・高 正龍)



図14 州浜断面

9 平安京左京二条二坊・高陽院跡 2 (図版1)

経過 調査地は、左京二条二坊九・十・十五・十六町の4町を占める高陽院の中央やや東寄りの十六町内にあたる。調査は当初、立会調査として開始したが、庭園遺構と思われる石敷を発見したため、急遽、発掘調査に切り替えた。発掘調査は立会調査で発見した石敷遺構(第1遺構面)を調査し、更に下層に存在した平安時代中期から後期の庭園遺構(第2遺構面)を調査した。

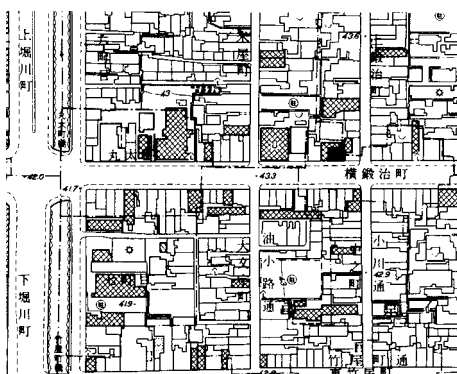


図15 調査位置図(1:5000)

遺構 第2遺構面の庭園遺構は、園池、景石などからなる。景石の掘形を直接覆う化粧敷の粗砂層出土の土器型式から、藤原頼通の邸宅で、たびたび里内裏として使用された高陽院庭園の一部である。建物は検出していない。

園池は、調査区の北西部で検出した。洲浜は一部を除いて崩落が激しいが、礫の分布から2mから4mの幅で存在したものとする。池底と汀の標高は、九町や十町で検出されている池より60cmから1m高く、これらと一連のものではない。

調査区南部の陸部に景石を5基検出したが、そのうちの1基は江戸時代に動かされた痕跡があり、他の1基は石が抜き取られて掘形内に痕跡のみが残る。築園当初の姿を残すもの3基については、景石の据付工法を明らかにすることができた。

遺物 平安京造営以前の土器としては、畿内第V様式から庄内式に併行する土器片と初期須恵器の細片が平安時代以降の地層から出土した。平安時代の土器は10世紀以降のものを主として、陸部の整地層と園池の埋土から出土したが少量で小片が多い。瓦の出土量も少ない。また、宝相華文を陰刻した金銅製の飾り金具が出土した。

小結 今回の調査で検出した園池は、高陽院推定範囲の西半で検出されている大規模な園池と水面の標高が異なる別の池であり、高陽院の復原研究に重要なデータを加えることになった。

(内田 好昭)

『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度 1989年報告

10 平安京左京三条三坊（図版1・6）

経過 調査対象地は平安京左京三条三坊十六町の北西部に位置し、北部に二条大路南築地推定ラインも含む。当町には平安時代前半に小二条殿、平安時代後期には藤原顕頼邸が存在していたと文献資料にある。先に行った試掘調査によって、二条大路的南側溝の推定位置で溝とみられる遺構が確認された。調査対象地の平面形が変則的ではあるが、宅地内の調査に加えて側溝の検出も意図し、北側へ張り出した形で調査区を設定した。



図16 調査位置図(1:5000)

遺構 井戸4は方形木枠縦板横棧組の平安時代後期の井戸である。木枠井筒の内径は東西1.1m、南北1mを測る。深さは検出面から約2.2mで、木枠は底部から0.8m程度残存していた。掘形は一辺約3mでほぼ方形を呈する。この井戸が、検出した最も古い時期の遺構で、他には同期に並存した可能性のある遺構の残欠を検出した。

鎌倉時代から室町時代前期の遺構も東壁際で掘込69を1基検出したに留まる。地方色のある土師器が出土しているが、性格などは今度の課題である。

室町時代後期に入ると遺構数が増加する。調査区北端部において東西方向の溝を2条検出した。南側に位置する溝1は幅2.1m、深さ1.1mを測る。1m程度北側に並走する溝2は幅0.6m、深さ0.35m程を測る比較的小規模な溝である。どちらも室町時代後期に機能していた溝とみられる。しかし層位関係から、溝1は溝2が埋没した後に掘られた新しい時期の溝といえる。両溝の位置は二条大路南側溝推定ラインにほぼ重なり、室町時代後期の二条通南側溝の可能性が大きい。この溝1は地下鉄烏丸線のNo.19トレンチの調査で西側延長部が検出されている。その他の遺構は調査区全域に展開しており、ピットには柱穴と思われるものもある。側溝も整備され、当町でも人々の活動が活発化している様相を示している。

桃山時代にはいと、整地層が積まれ、掘込やピットなどの遺構検出数は更に増加する。掘込1とした遺構は、南北が約4m、東西は検出部分で4m強、深さは検出面から1.5m程を測る規模の大きな遺構である。この遺構の西壁は横板をあてて杭で留められていた。堆積土やその状況、横板・杭が肩部の簡単な崩れ止めとみられることなどから水溜施設の

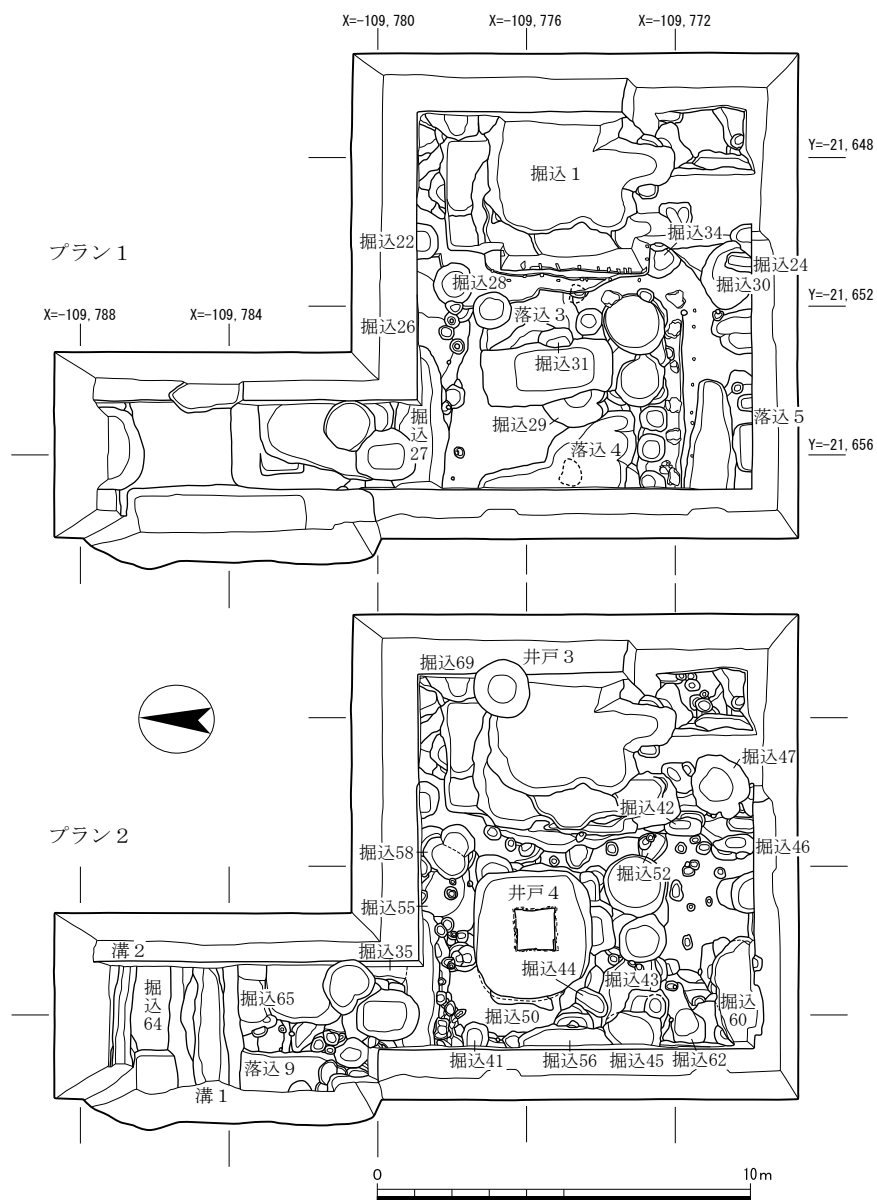


図 17 遺構平面図 (1 : 200)

な池状の遺構と考えている。後にゴミ捨て穴に転用され、江戸時代初頭には埋没する。

江戸時代には比較的早い段階から礎石建物が建ち、幾度かの建て替えが行われ、井戸も穿たれている。建物に並置された杭列やゴミ処理穴などとみられる掘込なども数多く、遺構密度が非常に高くなる。このように当地は近世には稠密な町屋地と化している。

遺物 遺構はほとんど検出していないが、平安時代前期から中期、鎌倉時代から室町時代前半に比定できる遺物が、新しい時期の遺構、土層へ混入して出土している。遺構の残存状況からのみ遺跡の様相を確認してしまうことへの警鐘と理解して置く。しかし遺物の出土量は、遺構数が多い時期がやはり豊富である。これらの資料は京域内の同時代の出土遺物に通有の内容を示すものが主であるが、特色ある内容を持つものも散見される。それらの内では掘込1から出土した多量の遺物を中心とする桃山時代から江戸時代初頭の遺物が、最も多様性があり注目すべきものも多い。

掘込1からは土器・陶磁器類、瓦類など考古資料としては普遍的な遺物に加えて、木製品、金属製品、自然遺物など各種の遺物が出土した。土器・陶磁器類では土師器焙烙、塩壺、国産の施釉陶器椀・皿・壺・茶碗・向付、焼締陶器播鉢・甕・壺、中国明代末の染付椀・皿など近世初頭の洛中の遺跡から一般的によく出土する日常雑器、茶碗類の他に赤織部の沓茶碗や京焼系の軟質施釉陶器椀など現時点ではまだ比較的例の少ない資料も出土しており注目される。その他の遺物中にも木簡、塗櫛、和鋏、すっぽんの甲羅など興味ある各種の資料が含まれている。これらの遺物は当地の遺跡の理解にとって必要であるということに留まらず同期の日常生活や文化の理解を進める上で重要な資料となろう。

なお、混入品としてはあるが、平安時代後期に比定できる中国定窯産の白磁鉢（又は椀）片が出土している。この資料も京域内でもまだ出土例のごく少ないものである。

小結 平安時代に比定しうる明確な遺構は後期の井戸が1基出土したに留まる。邸宅の様相については同町内での今後の調査に託さざるをえない。しかし遺構未検出の平安時代前期から中期については、混入品としてはあるが中国越州窯産の青磁や緑釉陶器、灰釉陶器類など当時的高级品を含む遺物が出土している。また、平安時代後期の遺物にも同様の性格を持つ輸入陶磁器が散見でき、中国定窯産の白磁片なども出土している。これらの混入品のほとんどが当町内の遺跡に関連するとみるのが妥当であろう。当町には平安時代を通じて上層階級の人々が生活していたことを示す資料といえるだろう。

平安時代の二条大路関連の遺構は検出していないが、室町時代後期の二条通南側溝とみられる東西溝を2条検出した。この2条の溝は二条大路南側溝の推定ラインにほぼ位置しており平安京の街路を踏襲したものだだろう。この調査結果をみる限り、平安時代の側溝などについては、この付近では後代の削平による消滅も考慮して置かなければならない。

(小森俊寛・長戸満男)

11 平安京左京三条四坊 (図版1・7)

経過 地下鉄東西線は平安京跡を東西に横断する形で建設され、一期工事は、JR二条駅から東方の山科までが建設予定されている。施工方法は工区によってトンネル式のシールド工法と、地表から直接掘り下げるオープンカット工法が使い分けられる。オープンカット工法の工事区は押小路通の二条駅から堀川通間、御池通の烏丸通から鴨川間であるが、御幸町通以東は、市役所前から河原町通間が市街地再開発の地下街構想と関連するため今回は調査対象地から外れた。

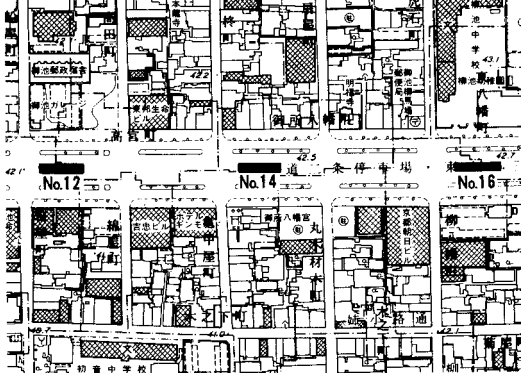


図18 調査位置図 (1:5000)

当初オープンカット工法の子定路線内は、すべて調査対象地として発掘調査計画を立てた。関係機関の協議の結果、御池通の烏丸通と河原町通間は、本工事に先立ち発掘調査を独立して実施することとなり、逆により厳しい条件付きの発掘調査となった。対象道路は幅広いが交通量の多いメインストリートであり、交差する各南北道路も商業車の交通量が非常に多い。このため安全でスムーズな交通の確保が第1条件となり、調査地点や各調査区の規模も極めて限定されたものとなった。このような諸条件を踏まえて、東洞院通と御幸町通の間に7箇所のトレンチ調査区を設定した。トレンチは、道路中央ラインを軸とした南北5m×東西30mを基本としている。今年度は、これの内No.12・14・16調査区の3箇所を「調査その1」とし先行して実施した。

各調査区は、調査掘削深度が深くなることが予想されたため、H鋼と横矢板の設置で作業の安全を確保し、交通に対しては調査区の周りにバリケードを構築して道路上に安全地帯を設置することとなった。また、安全対策の工法上から掘削安全深度が表土下3mに限定され、更に調査期間の厳しい制限も加わったため調査方法や調査手順に大きな制限を受けた。中近世の遺跡は断面調査を主としたものとなり、各時代の深い遺構や古代以前の遺跡は表土下3m以上での調査を実施することができなかった。

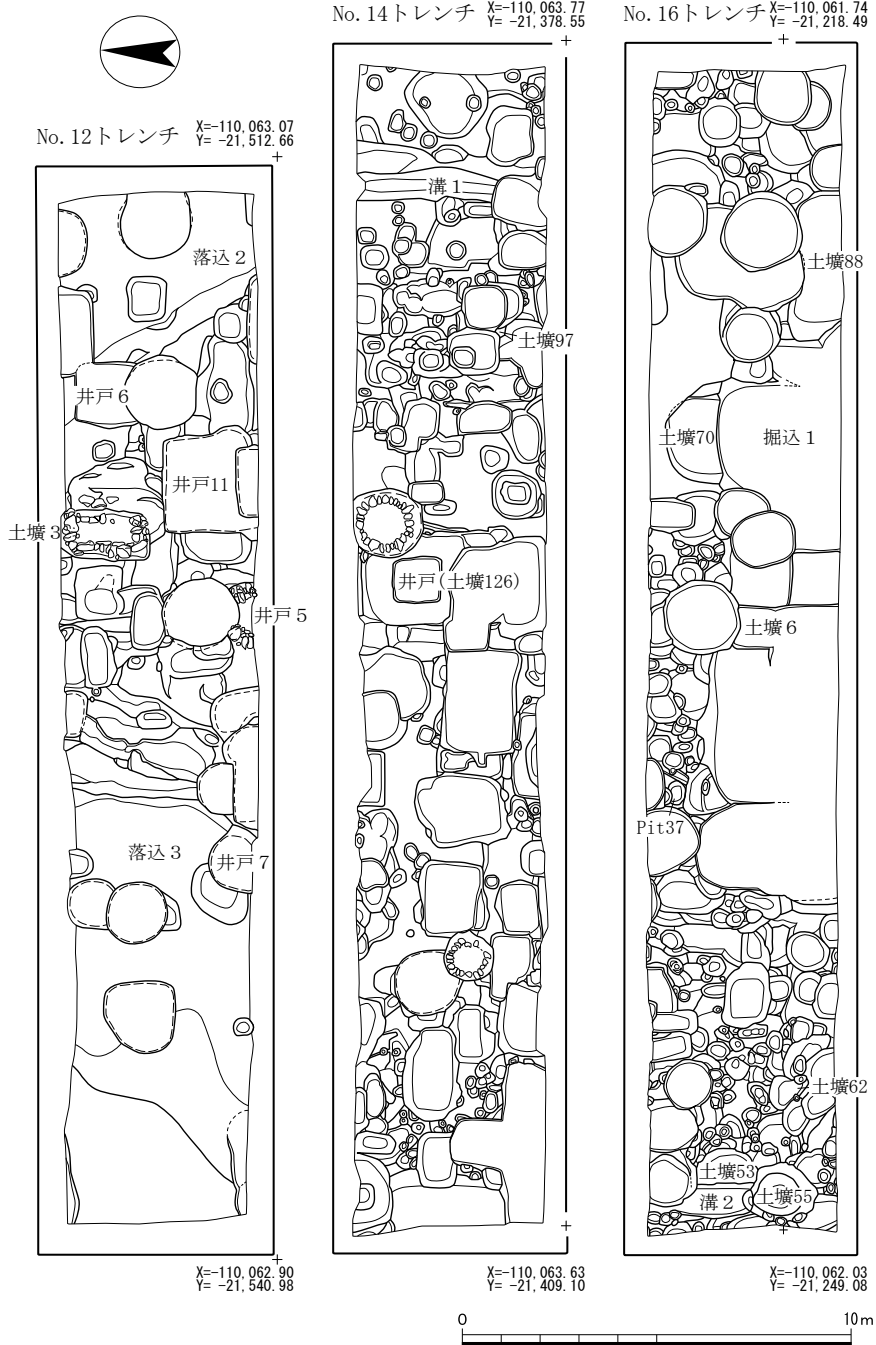


図19 遺構平面図

遺構 弥生時代の明確な遺構は検出していないが、No. 14、16 の自然堆積層（地山）の最上層である砂礫層から良好な遺存状態の土器が出土している。また、古墳時代の遺構は、形状などが不明瞭で、自然地形の小窪地の可能性が大きい。遺跡の近隣を調査した印象が強く、周辺に調査に遺構の検出が期待される。

平安時代の遺構は、中期前半以前のものの検出数が限られているが、遺物の混入状態をみると、邸宅関係の遺構が後の時代の遺構に破壊されて遺存状態が良くないと考えられる。

平安時代中期後半以降は、遺構数が増加し密度が高い市街地化が進んだ様相が窺える。しかし、その様相も鎌倉時代後半から室町時代前半までは続かないように見える。記録の上では室町幕府関係の武家屋敷がこの界限に点在していたことが知られているが、調査結果からはそのような様相は窺えない。

室町時代後半（戦国時代）以降は、遺構数も徐々に増加し、桃山時代後半から江戸時代初頭には商工業者を中心とする町屋が建ち並んで活況を呈した町域となっている。No. 16 地点では鑄造関係品が多数出土し、半地下式に造られた鑄造工房跡とみられる遺構も検出した。また各調査区とも当時的高级食器や茶陶類がまとめて出土する遺構も数多く、この地域の当時の繁栄を物語っている。以降、江戸時代を通じて都市的繁栄は続き現在に至っている。江戸時代中・後期から近代の遺構も多数検出している。

遺物 弥生時代、古墳時代の遺物は出土量が少なかったが、遺存状態の良好なものも含まれている。弥生時代の遺物は、検出状態からみて流れ堆積の遺物と思われるが、投棄された地点から大きく隔たっていないとみられる。

平安時代前期から中期の遺物はまとめて出土したものは多くはないが、以後の時代の遺構にはかならずと言っていいほど混入して出土している。一括出土遺物の中にはNo. 14 土壙 126 として取り上げた一群のように良好な資料も含まれている。土壙 126 の出土遺物は 10 世紀末から 11 世紀初頭頃と推定される。この時期の資料は京内の既調査でもまだ検出例が少なく、注目される土器群である。No. 14 土壙 97、No. 16 土壙 70・88 などの一括資料も型的的にまとまった良好な資料である。

平安時代後期から鎌倉時代前半の遺物は出土量もそれ以前の時代に比べて増加し好資料も多い。遺物の内容は京域内においては一般的なものであるが、資料の増加から新しい研究成果が得られよう。

鎌倉時代後半から室町時代前半の遺物はそのほとんどが新しい時期の遺構への混入遺物として出土する。遺構の遺存状態は良くないが、遺物からみる限り同時期の遺構も多数存

在していたことは明らかだろう。

室町時代後期以降は、遺構の増加に比例して遺物の出土量も増え、桃山時代末以降になると、土器、陶磁器類に、金属製品、木製品他、生産関係の遺物が加わり、総量が増加する。土器、陶磁器類では唐津産、瀬戸美濃産、京焼、中国からの輸入品など的高级食器や茶碗が陶磁器の中で占める割合が高くなり、日常雑器のレベルでも陶磁器類が食器の中心となっている。近世の遺物は、中世に比べて出土量が増えるという量の変化に留まらず質的發展を遂げていることを示している。その状況も特定地点の現象ではなく、今回の調査地では3箇所とも同様の変化をとげているといえる。次回の調査による資料の増加や他地域との比較研究を待つべきであるが、当町全体が階層を越えて経済的にも文化的にも新興地域として急激な發展をとげた結果として評価できる。

生産関係の遺物はNo.16 調査地で多数出土した鑄造関係の遺物が注目される。鑄型、鑄型の原形とみられる木型、大小各種の埴塼、銅製杓、吹子の羽口、銅滓、鉄滓、製品の一部とみられる金属片などが多数出土した。また、No.14 調査地区でも鉄滓が多く出土している。これらの遺物は、文献資料では知られていない洛中における鑄造業の展開を解明する資料として重要であるに留まらず、近世都市京都の發展を支えた工業生産者の実体を明らかにし、發展する町の構造を知る上で貴重な資料となろう。

江戸時代中期以降にも各種多数の遺物が出土しているが、これらの遺物は前期の發展を受け継ぎ、安定した豊かな町が継続して現在に至ったことを示している。

小結 浅い窪み状の遺構や地山砂礫の最上層から弥生土器片や古墳時代の土器片を一定数採取している。北側近接地域の同期の遺跡を理解する上で貴重な資料となろう。平安時代の遺構、遺物の検出は、周辺地で調査例がまだ少ないだけに左京東半部を解明する上で必要な資料となろう。また、近世初頭の遺構、遺物がそれ以前に比べて非常に濃密となることが判明したが、個々を取り上げても興味深いものが多い。

各調査において弥生時代、古墳時代を始め、平安時代以降の各時期の遺構、遺物を数多く検出した。厳しい条件付きの調査ではあったが一定の調査目的は達したものとする。しかし、検出した個々の遺構をみると、不十分なものも多い。例えば、平安時代の井戸などは表土下2.2 m以上を測る遺構面で成立しているために、安全対策上底部の調査をあきらめざるを得なかった。これは、近世などの深い遺構についても同様の制約となった。これらの積み残した課題は、調査区外の工事対象範囲と共に、本工事における立会調査によって明らかにして行く必要がある。

(小森俊寛・長門満男・原山充志)

12 平安京左京四条三坊・南蛮寺跡 (図版1・8)

経過 調査地は平安京左京四条三坊七町にあたり、桃山時代の南蛮寺跡でもある。南蛮寺の調査は過去に二度行われているが、今回の調査地の西隣で1973年に実施された同志社大学の調査では南門のものと思われる礎石が検出されている。調査は既存の建物の地下室を避け、そして礎石の延長部にあたる敷地の奥北側に調査区を設けた。

遺構 地山は北半が砂礫層、南半は黄褐色の泥土である。検出した遺構の大半は室町時代から江戸時代の土壌・井戸で複雑に重なりあっており、各時期の遺構面をはっきり押さえることはできず、平安時代の遺構面もほとんど残っていなかった。江戸時代の遺構はほぼ全域に分布し、埋土が焼土・炭・灰の互層になったものが多い。また、土壌中に、板で長方形に囲った中に拳大の礫を詰めた排水施設とみられるものがある。桃山時代から江戸時代初期の遺構のほとんどが黄褐色の泥土

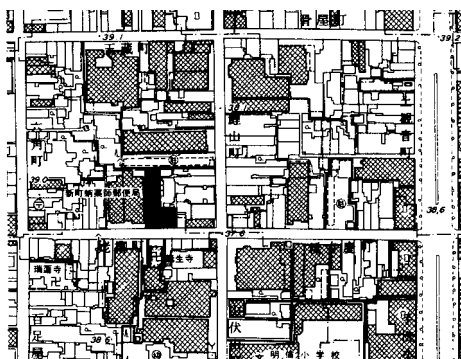
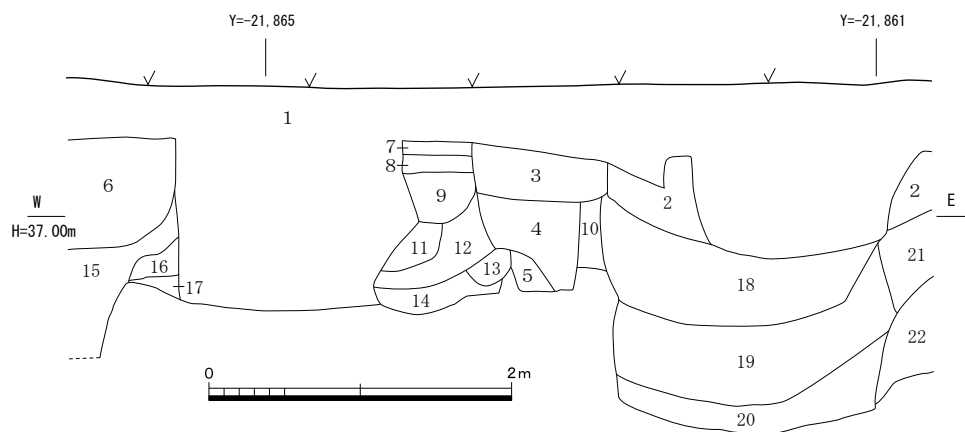


図20 調査位置図 (1:5000)



- | | | |
|-------------------|--------------------|--------------------|
| 1 現代層 | 9 10YR2/3黒褐色砂泥 | 17 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 10YR3/2黒褐色砂泥 | 10 7.5YR4/3褐色砂泥 | 18 7.5YR2/2黒褐色砂泥 |
| 3 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫 | 11 7.5YR4/3褐色砂泥 | 19 10YR3/2黒褐色泥土 |
| 4 10YR2/3黒褐色砂泥 | 12 10YR3/4にぶい黄褐色砂泥 | 20 7.5YR3/3暗褐色砂泥 |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 13 7.5YR4/3褐色砂泥 | 21 10YR2/3暗褐色砂泥 |
| 6 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫 | 14 10YR4/2灰黄褐色砂泥 | 22 7.5YR3/2黒褐色砂泥 |
| 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 15 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | |
| 8 10YR3/2黒褐色砂泥 | 16 10YR3/3暗褐色砂泥 | |

図21 土層断面図 (1:50)

を採取した跡を埋めた土壌で南半に集中する。鎌倉時代から室町時代の遺構は土壌が主で北半の残りが良い。これらの土壌と土壌の間に残された鳥状の地山面から弥生時代の遺構を検出したが、形状・規模とも不明である。

遺物 遺物は整理箱で138箱出土した。遺物の大半が各土壌から出土した土器類で瓦は少ない。各時代の遺物には、江戸時代の土師器、唐津・志野などの茶陶を含む陶磁器、寛永通寶、金属製品、室町時代の土師器、備前・丹波の大形の甕、自然遺物（鳥魚獣骨）、平安時代からの鎌倉時代の土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、焼締陶器（常滑）、輸入陶磁器、瓦器、銭貨、小刀、弥生時代中期の甕と把手付きの水差しなどがある。

小結 今回の調査では、南蛮寺関連の遺構は確認できなかったが、調査区南半で検出した土取り穴とみられる土壌に桃山時代から江戸時代初期の遺物が包含されている事が判った。これは、この時期に当地が空閑地であったことを意味し、南蛮寺の廃絶

(木下保明)

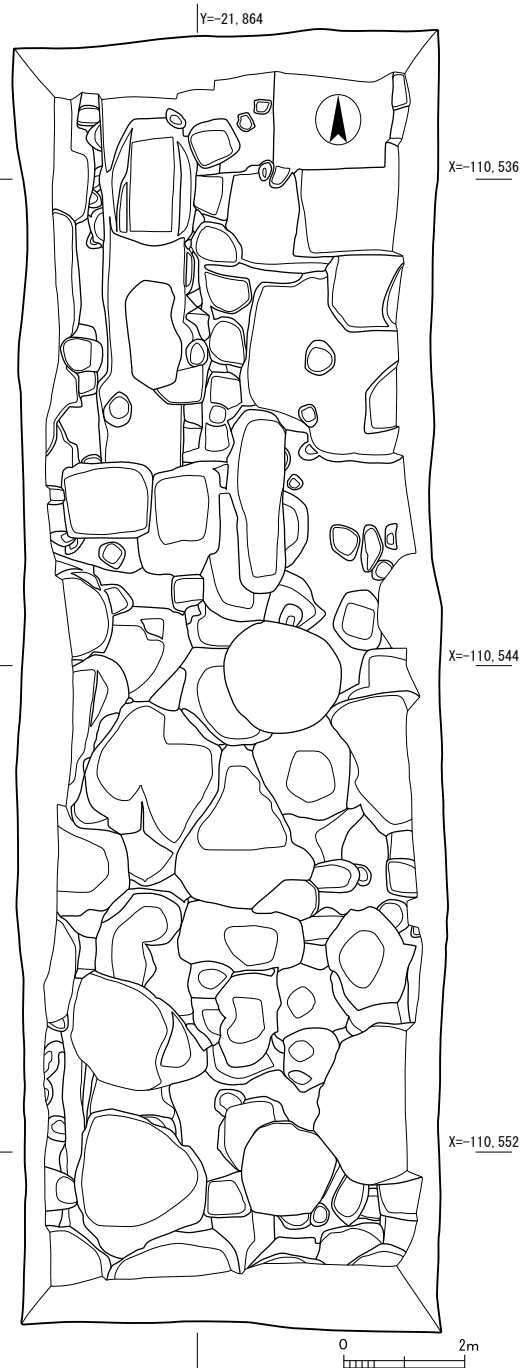


図 22 遺構平面図 (1:150)

13 平安京左京四条三坊 (図版1)

経過 調査対象地は平安京左京四条三坊九町の北西角付近に位置し、三条大路南築地と室町小路東築地のコーナー部推定位置を含む。同九町では昨年度の調査で、藤原実能邸と目される建物と庭園の一角を検出しており、平安時代後期には寝殿造りの邸宅が存在していたとみられる。このため狭小な対象地であるが、発掘調査を実施することとなった。

本調査に際しては、できる限り調査区を広くしようと考えたが、敷地が狭く安全対策や残土処理などの問題もあり東西7m×南北10.5m程度の規模の調査区しか設定し得なかった。また、遺構面が予想以上に深く、上層の堆積土の土質が軟弱であったため、結果的に調査できた面積はごく狭いものとなった。

層・遺構 現表土下2m程の深さで検出した遺構面は地山砂礫層上面であり、検出遺構は井戸、土塋が主で室町時代後期に比定できるものが最も古い遺構であった。調査時には室町時代後期の遺構面として扱ったが、遺構の検出状況を見ると土塋、井戸とも上部が削平されたとみられ、成立面から全形が遺存しているとは言いがたい。周辺の既調査資料からみると、この地域で確認されている室町時代後期の遺構面に比較して当調査で検出した遺構面は非常に深く、遺構面のベース土層も異質である。この地域では砂礫層の上に黄褐色系の泥砂あるいはシルト層の土層が自然堆積して地山を形成している場合が通例であるが、この調査地点ではこの土層は存在していなかった。また、遺構面直上から上の堆積層は、すべて近世かそれ以後の焼土層を中心とする土層であった。これらのことから、検出した室町時代後期の遺構面は遺構成立面や生活面ではなく、近世に入って削平された結果造り出された任意的な面と判断している。室町時代後期より古い時代の遺構及び遺構面も、すべて削平されており、新しい時期の土層や遺構への混入遺物はそれらの消滅した遺構の残影であろう。

地山上面に達する近世以降の堆積層は、主に焼土層や焼土と炭が混入した土層及び砂礫層によって構成されている。これらの土層の下層部は土取りと瓦礫処理を兼ねた大規模な掘込(土塋)内の埋土の可能性も大きい。この埋土の上面も一時期の生活面を形成してい

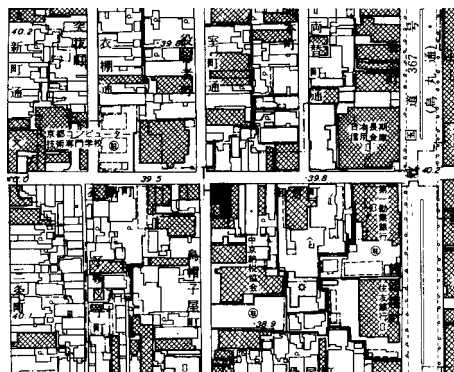


図23 調査位置図 (1:5000)

たとえられるが、それより上層部も生活面を形成したとみられる薄い粘質土層と比較的厚い焼土層あるいは砂礫層が交互に堆積している。江戸時代を通じて大火と洪水、その後の生活面の造り直しが何度か繰り返された様相と理解している。これらの土層の上に近代の整地層とみられる土層が更に積み上げられている。この結果、現代面は江戸時代前期の面と比べると1.5 m以上高くなっている。

遺物 室町時代前期より古い時期に比定できる遺物はすべて新しい時期の層、遺構へ混入して出土したものである。室町時代後期以後の遺物には遺構内からまとまって出土したものが多く、良好な一括資料も含まれている。井戸1～4からは多くはないがそれぞれ土器類を主とする一括遺物が出土している。井戸1～4はそれぞれが切り合った関係で成立しており前後関係が明らかである。室町時代から江戸時代の遺物の変遷を明らかにできる好資料となるだろう。

小結 今回の発掘調査では、街路関係の遺構は全く残存していなかった。この状況については、地山砂礫層にまで深く達した近世の掘削により、古い時代の遺構がほとんど削平された結果であり、検出した室町時代の土壌や井戸も上部を削平された遺構の残欠とみられる。なお近世の街路は、近世の早い段階に現在の街路にほぼ重なる位置で再形成され、当調査区は宅地内に入るものとみられる。

当地域の近世町屋は、地層の堆積状況からみると江戸時代を通じて火災と洪水を繰り返し受けている。しかし、この町はそのつど災害痕を整理して地層を積み上げ新しい生活面を形成し、立ち直って活動を再開し、発展を継続させてきたものと理解できる。現在の生活面はそれらの積み上がった地層の上に更に整地層を積み上げて形成されている。

(小森俊寛・上村憲章)

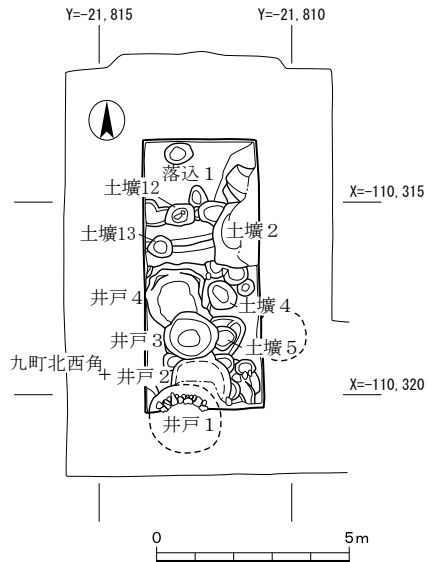


図 24 遺構平面図

14 平安京左京五条一坊 (図版1・9)

経過 調査対象地は、平安京においては左京五条一坊十町の西半中央付近に位置する。同町は、壬生大路、櫛笥小路、綾小路、五条坊門小路に四方に画されている。

文献資料からは平安時代を通じて当十町には著名な邸宅の存在は認められない。平安時代前期から中期には周辺の町も同様であり、この地域の様相は、大邸宅が建ち並び早くから都市的景観を呈していた左京の北部域とは

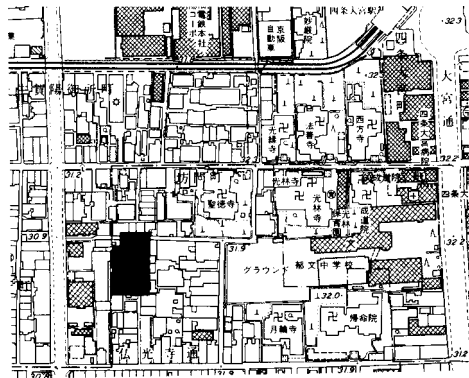


図 25 調査位置図 (1:5000)

大きく異なるようだ。しかし平安時代後期になると、隣接町には神社や地藏堂また藤原氏や源氏関係の邸宅が建ち並び、時代を反映したにぎわいのある地域となる。中世から近世にかけては不鮮明な部分も多いが、中世の早い段階で都市域からはずれて壬生村の一角となり、都市に隣接する農村地帯として田畑に利用されていたとみられる。

遺構 平安時代後期から室町時代前半代まで各時期の井戸、土壙、柱穴などを含むピット群をそれぞれ少量ずつではあるが検出した。これらの遺構はそのほとんどを調査区の北東ブロックで検出しているが、この北東ブロックは唯一地山（自然堆積層）上面の遺構面が遺存していた地域である。他の北西・南東・南西の3ブロックは近世以降の土取り穴群によって地上上層の黄褐色系の泥砂、シルト土層がほとんど掘り取られてしまっており、遺構面そのものがほとんど残存せず、深く掘り込まれた遺構以外は古い時代の遺構も残っていなかった。このため3ブロックの中世以前の様相については、若干の残存遺構と土取り穴などの埋土への混入遺物から推定せざるをえない。

平安時代前期から中期については調査区のほぼ全域において同期に比定できる遺物が混入品として少量ずつ出土するものの遺構は全く検出できなかった。このような状況からみて当調査区内は居住区として利用されていなかった可能性が強い。しかし平安時代後期には同期の検出遺構の構成からみて確実に宅地化していたといえる。宅地利用の密度については不鮮明だが、この様相が鎌倉時代更に室町時代前半代まで継続していることは、遺構の遺存状況からみて明らかである。

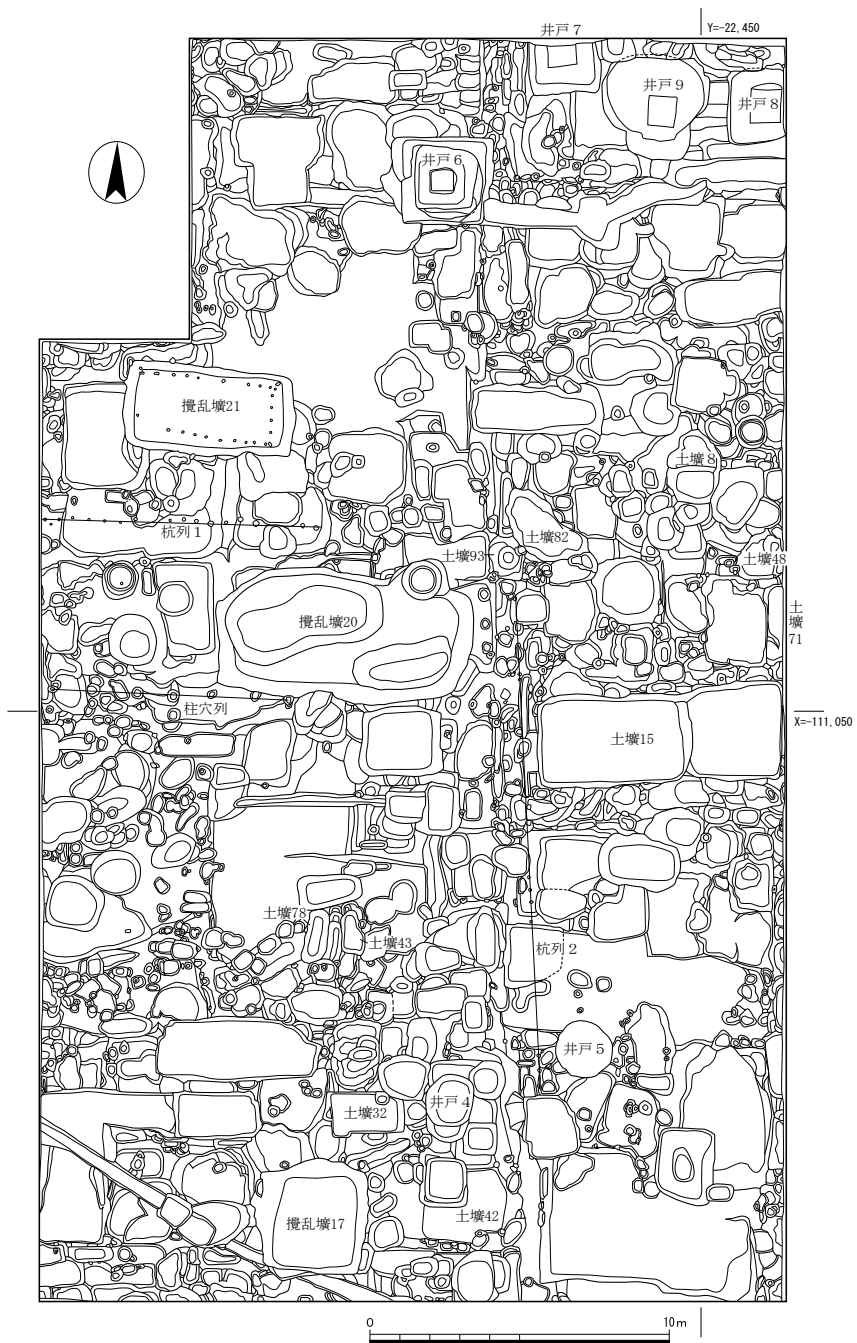


図 26 遺構平面図 (1:200)

室町時代後期に比定できる遺構は、調査区内では全く検出していない。また近世遺構への同期の混入遺物もごく少ない。層位の状態からみてこの時期にはほぼ全域が畑地化していたようである。江戸時代に下っても主に田畑の状態が続くようだ。土壙 15 に 3 基並ぶ大桶などは雨水か肥料などを溜める施設であろう。しかし、柱穴列や井戸など人々の居住に直接関連するとみられる遺構を検出している部分もある。江戸時代には田畑地に隣接して宅地が点在する地域となるようである。現在のように当地域が稠密な町屋地となるのは近代に入ってからであろう。

遺物 平安時代前期から中期に比定できる遺物は、出土量も少なくすべて新しい時期の遺構埋土への混入品として出土したもので、当町の遺跡と直接結び付けて考えることは今のところ難しいと判断できる。

平安時代後期から室町時代前半代の遺物は、遺構から一括出土している資料も多い。これらの出土資料は左京と中世京都の中心地域から出土する資料とほぼ共通する内容を示している。都市域内で出土する通有の組成と特徴を持つ資料といえる。

室町時代後期から桃山時代の遺物についてはみるべきものがほとんどないが、江戸時代の遺物には興味のあるものが多い。土器、陶磁器類にも良好な資料は多いが、中でも土壙 8 から 100 個体以上が一括出土した漆器椀類が注目される。近世村落によくみられる村落内での寄り合いや祭りなどに共同利用されていた数物の汁椀などであろうか。

小結 調査区内の広い範囲が近世の土取り穴とみられる遺構群によって地山砂礫層まで削平されており、中世以前の生活面や遺構の残存状況は決して良いとは言えない状態であった。しかし平安時代後期から室町時代前半代の遺構面及び遺構を、比較的限定された地域ではあったが一定数検出することができた。この結果、文献資料では各時代を通じて空白地域であった当町も、平安時代後期には隣接町同様に宅地化しており、実体的にも都市域を形成する町となっていたことが明らかとなった。この都市の様相は遺構からみる限り室町時代前半までは継続していたと理解できる。

様相の変化は室町時代前半中に進むとみられ、室町時代後期には当時はほぼ耕作地となっている。江戸時代には若干の宅地が存在していたようであるが、農村的景観を脱することはない。

(小森俊寛・原山充志)

15 平安京左京七条三坊 (図版1・10)

経過 京都市下京区烏丸通六条下ル北町185 他でビルが建設されることになり、事前に試掘調査を実施した。その結果、平安時代の整地層や池状の堆積層を検出したことから、発掘調査に切り替えて調査を進めることになった。

調査地点は、平安京左京七条三坊九町の北東隅に該当する。九町は方一町の規模を有する大中臣輔親の邸宅である六条院跡に比定されている。この邸宅内には、丹後の天橋立を模した中島を伴う園池「海橋立」があったとされ、12世紀に入ると一時、白河法皇も滞在している。

調査区は、L字形を呈する調査対象地の西部に東西約10m、南北約24mの範囲に設定した。調査を進めるにしたがって多くの遺構を検出することができ、一部の遺構は調査区外に及んだため調査区東端に沿って北部に東西約2m、南北約4.5m南部に東西約5m、南北約9mの拡張区を設定した。この南部の拡張区は更に東に延長したが、全面にわたって江戸時代末期の焼け瓦を廃棄した土壌が集中しており前述の規模に縮小している。

なお、調査対象地の北端には六条大路南築地心が想定でき、調査の主目的の一つとしていたが、調査前に該当域に基礎工事が行われていたため調査は実施できなかった。

遺構 調査区の基本的な層序は、現地表から25cmの厚さで現代積土層があり、積土層下には江戸時代の土層が60～100cm、室町時代の整地層が20～40cm、鎌倉時代の整地層が約40cm堆積する。この土層を除去したのち平安時代の建物や井戸跡を検出した。この遺構面下には厚さ60～100cmの流路状の堆積があり、流路下は無遺物層の明褐色・極暗赤褐色砂礫層となる。

古墳時代に属するものには上記の流路状砂礫の流れ堆積がある。砂、砂礫などの堆積層から古墳時代後期の土師器、須恵器が出土した。

平安時代後期に属するものには、建物305、井戸251がある。建物305は調査区北東部で検出した南北方向の石列で、長径23～34cmのやや偏平な川原石を使用している。石

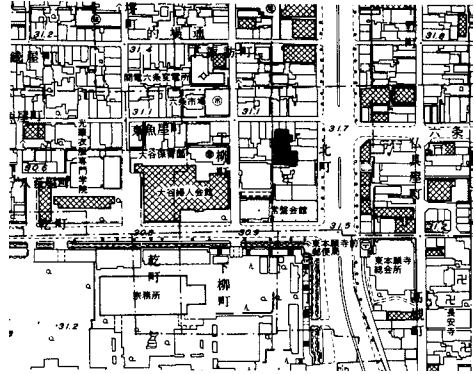


図27 調査位置図 (1:5000)

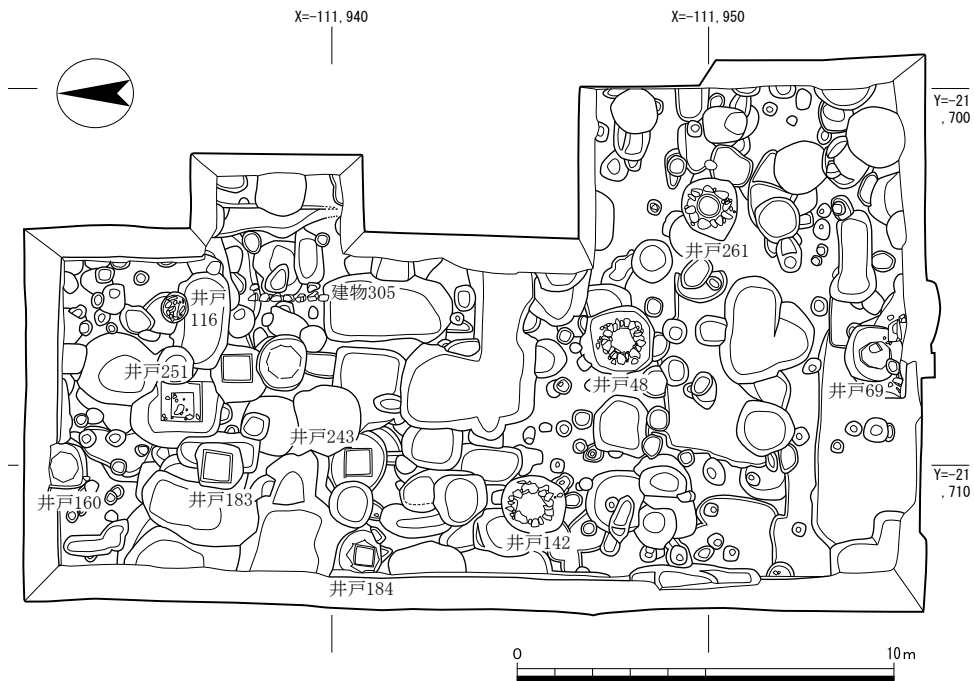


図 28 遺構平面図 (1:200)

列の上面及び西端は面を揃える。この石列は建物の外装施設の一部と考えている。

井戸 251 は建物 305 の西側で検出した。掘形の平面形は方形を呈し、中央に方形縦板組の井戸側を有する。井戸側の木質部は腐植が進み、大半は痕跡を検出したに過ぎない。検出面の規模は掘形が一辺約 250cm、深さ 96cm、井戸側は一辺約 120cm のものと、100 ~ 110cm のものがある。井戸底部には鉄釘で固定した横板組みの組物を据え、組物と井戸側間には径 13cm 前後の栗石を詰める。平安時代後期の遺物と共に白磁魚形水注が出土した。底部の海拔高は 28.90 m である。

鎌倉時代から室町時代のもものでは、井戸、土壇、柱穴、溝、土器溜、柱列、溝などがある。井戸側の形態には、方形縦板組のもの、円形石組で下半に桶を設置するもの、円形石組で下半を方形板組にするもの、八角形縦板組のもの、九角形縦板組のもの、桶組のもの、九角形縦板組で下半を方形板組にするものなどがある。井戸底面の海拔高は 28.3 ~ 28.6 m ある。土壇は多数検出した。中には大型の甕を据え銭貨を埋納するもの、完形の土器を埋納するもの、集石を伴うものなどがあり、これらの土壇は墓の可能性があり、柱穴は素掘りのものと根石を伴うものがあり、柱列は 2 箇所検出した。柱間は約 1.2 m ある。

遺物 遺物は165箱出土した。遺物内容は、古墳時代後期では土師器、須恵器、平安時代では土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、銭貨、金属製品など、鎌倉時代から室町時代では土師器、陶器、瓦器、輸入陶磁器、銭貨、金属製品、瓦、石製品、烏帽子など、江戸時代では土師器、瓦器、陶磁器、銭貨、金属製品などがある。

特記すべき遺物としては、平安時代後期の輸入陶磁器白磁魚形水指がある。井戸 251 及び後世の遺構から出土した。胴部は型起こしで、やや膨らむ魚形を呈し、内面には型に粘土を押し込んだ指圧痕が明瞭に残る。胴下部には偏平な台座を、背面には把手を貼り付けている。烏帽子は室町時代後期の井戸 69 から出土した。和紙で素地を成形し黒漆で塗り固めた立烏帽子で、丸い峯から縁まで遺存する完形品である。高さ 30cm、幅 26cm、縁幅 4cm ある。

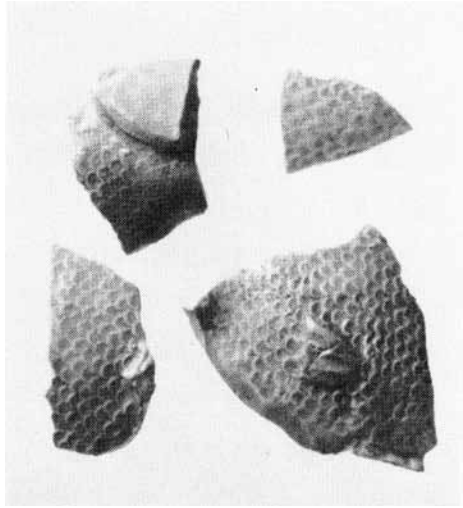


図 29 井戸 251 出土白磁魚形水指

土を押し込んだ指圧痕が明瞭に残る。胴下部には偏平な台座を、背面には把手を貼り付けている。烏帽子は室町時代後期の井戸 69 から出土した。和紙で素地を成形し黒漆で塗り固めた立烏帽子で、丸い峯から縁まで遺存する完形品である。高さ 30cm、幅 26cm、縁幅 4cm ある。

小結 九町の発掘調査は、今回が初例である。この九町は平安時代中期には大中臣輔親(1038 没)、平安時代後期には藤原顕季の邸宅であったことが文献から知られ、当該期の遺構を検出することが今回の調査の主目的であった。当該地は鎌倉時代以降も比較的活発な土地利用がなされ、池は未検出であったものの、建物、井戸などを検出するなど一定の成果を挙げることができた。井戸からは輸入白磁魚形水指が出土した。これについては亀井明德氏に実見して頂き、中国広東省の西村窯か潮州筆架山窯の製品であろうとの御教示を得た。遺構と共に六条院を彷彿とさせる資料として重要である。

一方、今回の調査では、試掘調査で検出した池状の堆積土層は検出できなかったが、調査区南部でわずかに 11 世紀の遺物を包含する砂礫層を検出しており、試掘調査成果を合わせると池は調査区南端部から南西方向に広がると想定できる。

なお、調査区南半では土壙墓を複数検出しているが、これらは東本願寺前古墓群が当該地にまで及ぶ可能性を示す資料として記して置く。

(辻 裕司・高 正龍)

16 平安京左京九条一坊・東寺旧境内 1 (図版1・11・12)

経過 調査地は東寺寺城南西部に当たり、鎮守八幡宮の推定地である。調査目的は八幡宮の位置・規模の確認、及び関連遺構の検出である。建物は保存されるため、調査区東半部はトレンチ調査、西半部と南部のみ下層遺構の調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、上から
1. 近現代盛土(厚さ15～40cm)、2.

淡茶褐色砂泥層(中世包含層厚さ15～50cm)、3. 茶褐色砂泥層(鎌倉時代整地層厚さ35cm)、4. 茶灰色砂泥層(平安時代包含層厚さ10cm)、5. 褐灰色砂泥層(無遺物層)である。各層の上面で遺構を検出した。以下、各面ごとに主要遺構を略述する。

1面:東半部で建物1棟を検出した。身舎は桁行3間(2.0m、2.3m、2.0m)・梁間2間(1.4m、1.3m)の総柱で、廻縁(東側1.3m、他は1m)が巡り、東側に向拝(1.2m出)が付く。身舎部分のみ亀腹(高さ0.15m)にする。身舎の礎石は中心に大型、周りに小型の石を配し、土居桁を据えたと推定できる。回縁東礎石は方形柱座を造り出し、向拝の礎石と共に掘形を持つ。建物の北側と西側(1.1m・0.8m出)に雨落溝(幅0.45m・深さ0.25m、両側を塼で護岸)がある。亀腹上に焼土面がみられる。西半部では土壌を検出し、建物に関連する遺構はない。南部では平坦面を確認し、雨落溝はない。

2面:東半部で茶灰色粘土(礫含む)を固めた亀腹(高さ0.3m)を検出した。亀腹上面は焼土層で全面覆われる。西端は1面建物の西回縁の位置にあたり、東端は調査区東辺まで達する。西半部では、全域で瓦溜(一辺1～3m)、中央で礎石(1.6×1.4m、厚さ0.8m、上面に柱座あり)、西側で瓦を組み合わせた方形枳形・暗渠状の遺構を検出した。礎石は掘形に根石を入れ据え付けるが、1箇所のみで性格は不明である。瓦溜からは平安時代から鎌倉時代の瓦・土器などが出土した。南部では東西溝(幅0.4m、深さ0.1m、南辺自然石護岸)を検出した。溝南側は焼土面が確認できる。位置は現存築地軒先にあたり、南面築地北側雨落溝と推定できる。

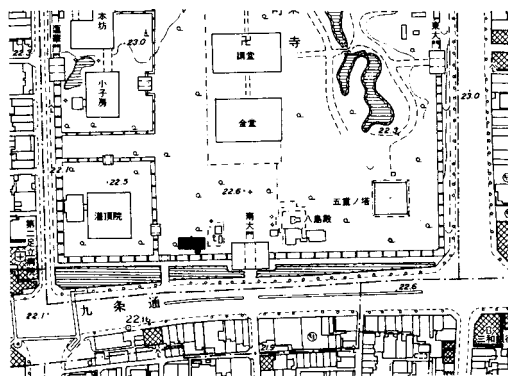


図30 調査位置図(1:5000)

3面：東半部は平坦面で顕著な遺構はない。西半部は2面と同様の瓦溜と土壌を検出し、瓦溜からは平安時代後期から鎌倉時代の瓦が大量に出土した。南部は整地層を確認した。

4面：東半部は平坦面で顕著な遺構はない。西半部では、全域で土壌（一辺4 m以上）、中央で東西方向・南北方向の溝（幅0.4 m・深さ0.2 m）、北側で柱穴数基を検出した。溝・

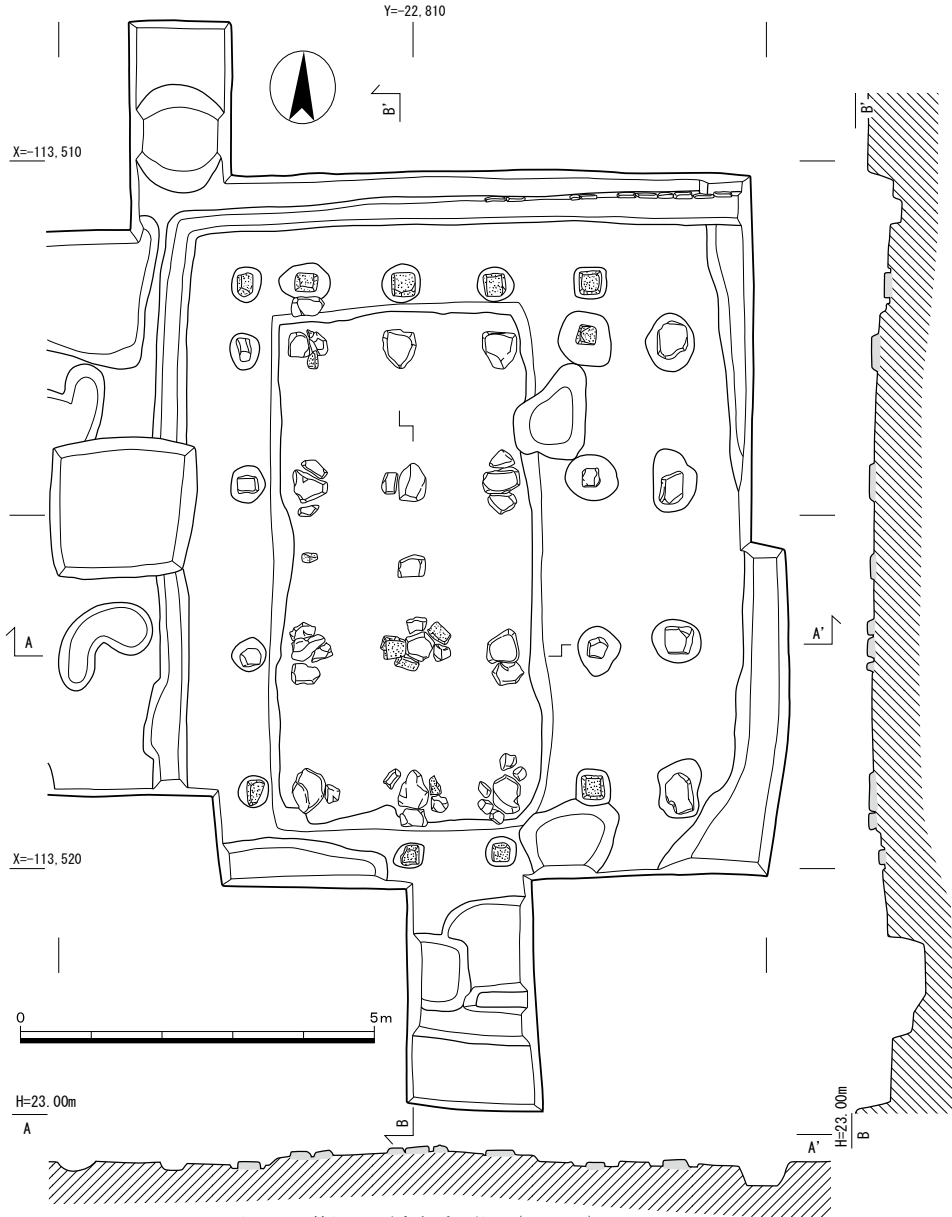


図31 第図1面東部実測図（1：100）

土壙からは10～11世紀の土師器が出土した。南部では4面上を黄褐色砂泥層で積み固めた高まりを検出し、築地基底部と推定した。北辺は現存築地北辺より北約1mである。北辺より北1.5mで落込を検出したが、検出範囲が狭く雨落溝かどうかは不明である。

遺物 遺物は整理箱447箱で、瓦類・土器類・木製品・石製品などがあり、大半は瓦類である。瓦類には軒丸瓦47類148点・軒平瓦88類161点・鬼瓦・文字瓦・丸瓦・平瓦がある。平安時代前期・中期のものは少なく、後期から鎌倉時代が大半を占める。

軒丸瓦では文覚修造期のNM註63が9点・NM64が6点・NM66が4点と多く、他はNM12が5点、13・16類が各4点、NM21・52・54、3類が2点、NM03・06・28・74、1・2・4～15・17・18類が各1点と少ない。軒平瓦では文覚修造期のNH60が12点と最も多く、他はNH06-Aが11点、NH49が10点、NH48が6点、HN63、35類が5点、NH25・26が各4点、21類が3点、NH11-B・21、29～31類が各2点、NH24・28・52・59、19・20・22～28・32～34・36・37類が各1点である。文字瓦は平瓦凹面「左寺」陽刻が3点・「工」陽刻が1点、丸瓦凹面「左寺」陰刻が1点出土した。

小結 以下、鎮守八幡宮及び寺域南限築地などの変遷を述べる。鎮守八幡宮は江戸時代の伽藍図などから、南大門と灌頂院の中間地で南面築地の北側に位置すると推定されていた。

調査地東半部3・4面は平坦面で、明確な遺構は未検出なため、弘仁元(810)年創建時社殿の位置は不明である。3面上を整地した上に亀腹(2面)を営む。亀腹は1面より大きく、身舎だけでなく社殿全体に及ぶ。焼土層に覆われ、建久8(1197)年文覚修造・文明18(1486)年焼失の社殿に比定できる。これを整地した上に社殿(1面)を営む。この建物は、亀腹内遺物や焼土面から、文明19(1487)年造営・明治元年焼失の社殿と考えた。社殿の型式は三間社流造で、当型式の社殿の成立時点は未確認である。寺域内の位置は別として、型式と方向は平城京大安寺・薬師寺のそれと一致する。

調査区南部4面で検出した築地基底部は、層位的に平安時代と考えられる。基底部幅・雨落溝は未確認で、創建時の築地位置は不明である。これを整地した上に石組みの雨落溝を造る(2面)。溝の位置は現築地軒先に対応し、この時点以降現在の位置に築地が営まれたと推定できる。時期は層位、焼土面から、鎌倉時代(文覚修造時)と考えられる。この後周辺を含め整地を行う。1面では雨落溝はない。(上村和直)

註 軒瓦分類番号(NM・NH)は杉山信三他『教王護国寺防災施設教王護国寺 1981年による。』

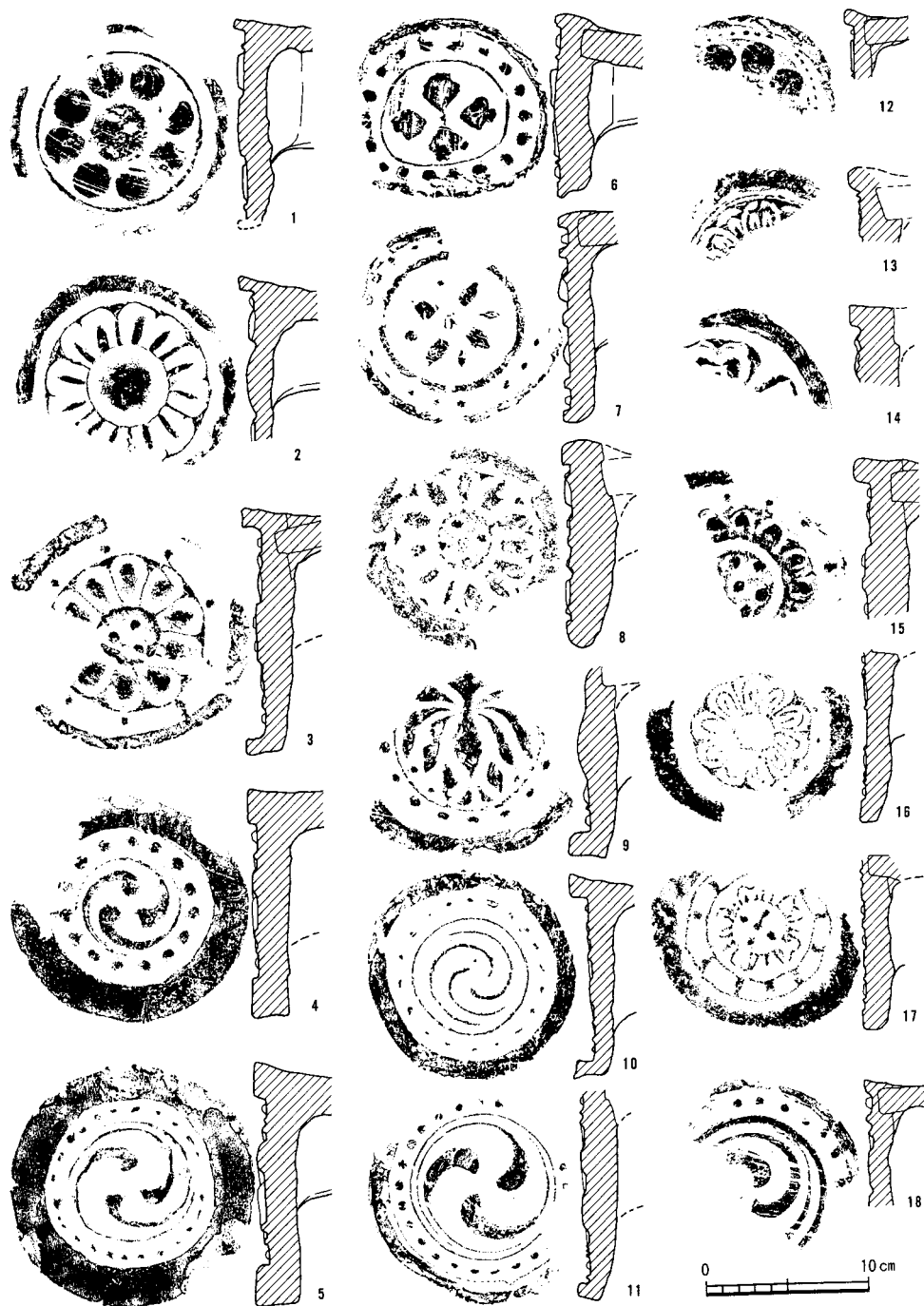


图32 軒丸瓦実測図 (1:4)

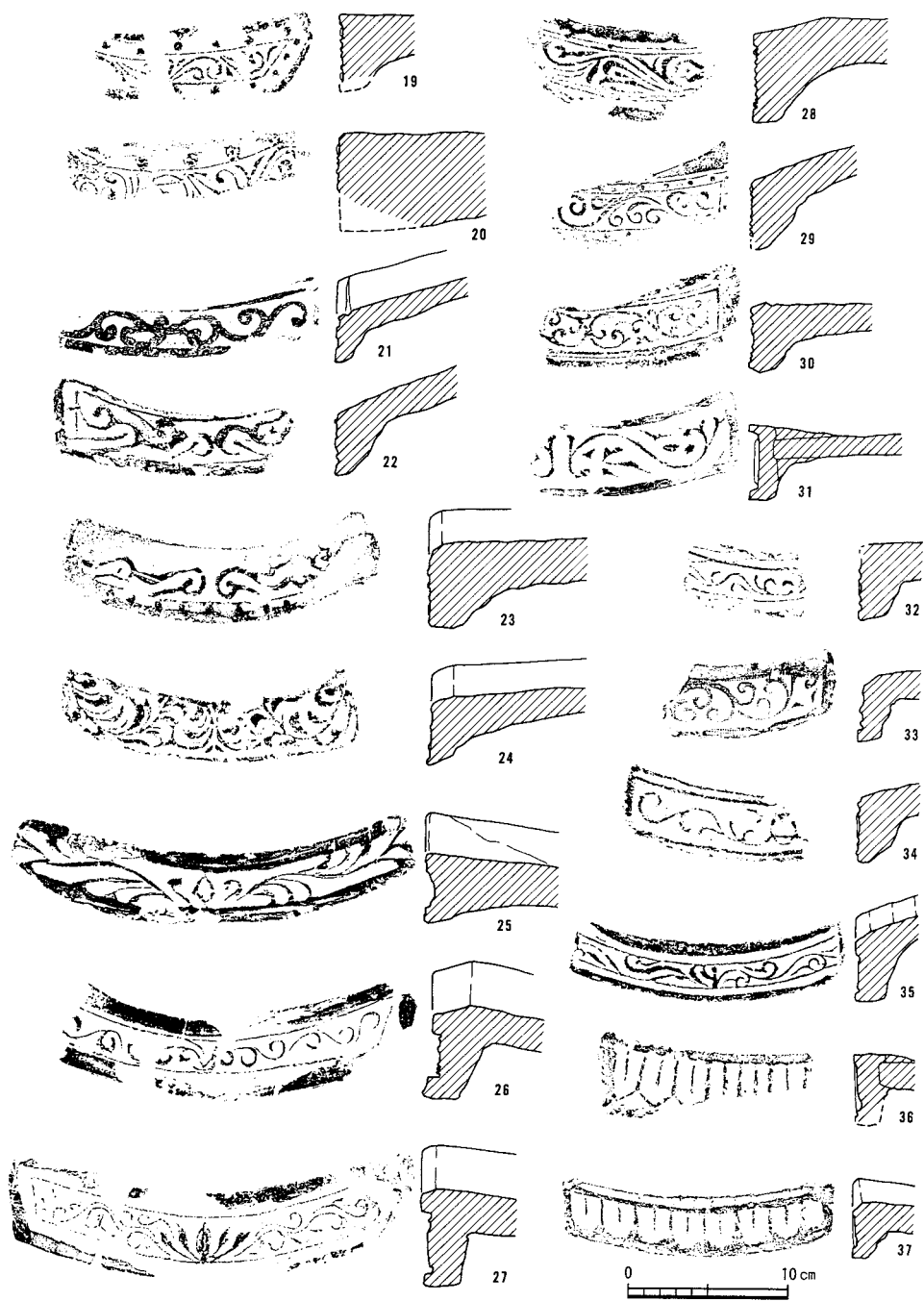


图 33 軒平瓦实测图 (1:4)

17 平安京左京九条一坊・東寺旧境内2 (図版1・13)

経過 調査地は東寺寺域北東部にあたり、大衆院（平安時代）・宝積院（江戸時代）の推定地である。発掘調査は南北9m、東西20mの調査区を設定して行った。調査目的は当該期の遺構の検出である。

遺構・遺物 調査区の層序は上から第1層現代盛土層、第2層黒褐色砂泥層（近世包含層）、第3層茶褐色砂泥層（中世包含層）、第4層黒褐色粘土層（平安時代の整地層）、第5層灰色砂礫層（無遺物層）

である。第3層上面（1面）で近世、第4層上面（2面）で鎌倉時代から室町時代、第5層上面（3面、標高22.6m）で平安時代の遺構を検出した。整地層（第4層）は平安時代前期から中期の遺物を含んだ層で調査区北部に部分的に残存する。

1面では、全域で柱穴・溝・土壇・井戸などを検出した。柱穴は建物にまともらない。2面では、柱穴・土壇・溝などを検出した。調査区南東部の柱穴は東西に並び、柱間寸法は2.5m等間である。柱穴掘形は円形（径0.6m）で、庭に根石（一辺0.4m）を据える。土壇（一辺1～2m）は楕円形・不定形で、埋土中に土器片・瓦片・炭などを含む。3面では、調査区東部で南北溝（幅0.8m、深さ0.4m）を検出した。埋土中には、瓦片・土器片を若干含む。

遺物は、整理箱20箱で、瓦類・土器類があり大半は瓦類である。瓦類は2面土壇、3層から出土し、丸瓦・平瓦のみである。土器類は2面土壇などから出土し、平安時代から室町時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、白磁、青磁、陶器などがある。

小結 従来の研究では、東寺伽藍北側4町域には賤院・倉垣院などが設けられたことが知られ、調査地周辺は大衆院が推定されている。調査の結果、これらの施設の遺構は検出できなかったが、北部で検出した平安時代の整地層はこれに関連するものと推定できよう。また、調査地は「洛中絵図」（寛永19年）に載る宝積院にあたる。宝積院は他の子院と共に創建は中世に遡るようであり、2面で検出した建物、土壇などがこれに関係するものと推定できる。

（上村和直）

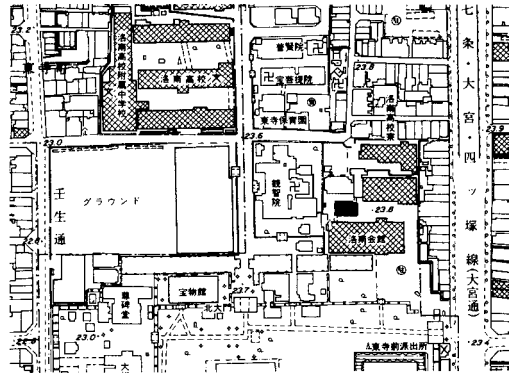


図34 調査位置図 (1:5000)

18 平安京右京二条三坊・西ノ京遺跡 (図版1・14)

経過 京都市中京区西ノ京北坪井町67番地に所在する財団法人京都工場保健会の敷地内での事前に試掘調査を行い、古墳時代から平安時代の遺構・遺物を検出したため、発掘調査に切り替えて調査を進めることとなった。

調査地点は、平安京右京二条三坊三町の南東部に位置する。また、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡として周知されている西ノ京遺跡にも含まれている。

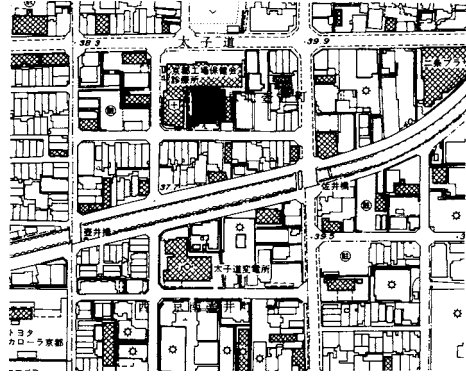


図35 調査位置図(1:5000)

遺構 調査区内の現況は、耕作に伴う削平がほぼ全面に及び、削平を免れた調査区北端と高低差約40cmの段差が生じる。段上の基本層序は、近・現代層が7～18cm、暗褐色砂泥層が約20cm、黒褐色砂泥層が6～16cmの厚さで堆積し、以下は無遺物層の黄褐色泥土層となる。このうち黒褐色砂泥層には平安時代の遺物を包含する。

検出した遺構には、弥生時代から古墳時代の後期に属する溝、平安時代中期に属する溝と柱穴列、室町時代後期に属する溝約40条などがある。

溝32は、調査区西半で検出した南北方向のやや蛇行する溝で、南半で2条に分かれる。検出面での規模は北端で幅約2m、深さ約40cmあり、底面には砂ないし砂礫層が堆積する。弥生土器片及び完形の石鎌が2点出土した。分岐点以南では、古墳時代後期に属すると考えられる土師器・須恵器が出土した。溝36は、調査区北端の段上で検出した南北方向の溝で、東二行のほぼ中央に位置する。検出面での規模は、幅57cm、深さ25cmある。

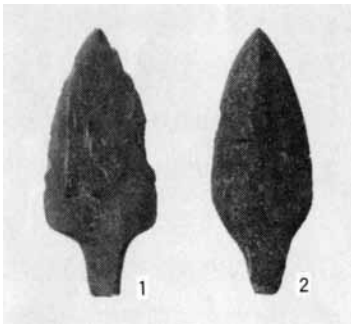


図36 溝32出土石鎌

平安時代中期の土器が出土した。溝1・2は調査区南西部で検出した東西方向の溝で、東肩口は調査区内で途切れる。溝底面には凹凸がある。検出面での規模は、溝1が幅60～100cm、深さ9～30cm、溝2が幅50～100cm以上、深さ7～26cmある。溝1・2とも平安時代中期の遺物が出土した。柱列は、溝1・2間で検出した。各柱穴の平面形は、方形ないし多角形を呈する。検出面での規模は、長軸35～45cm、深さ10～18cm

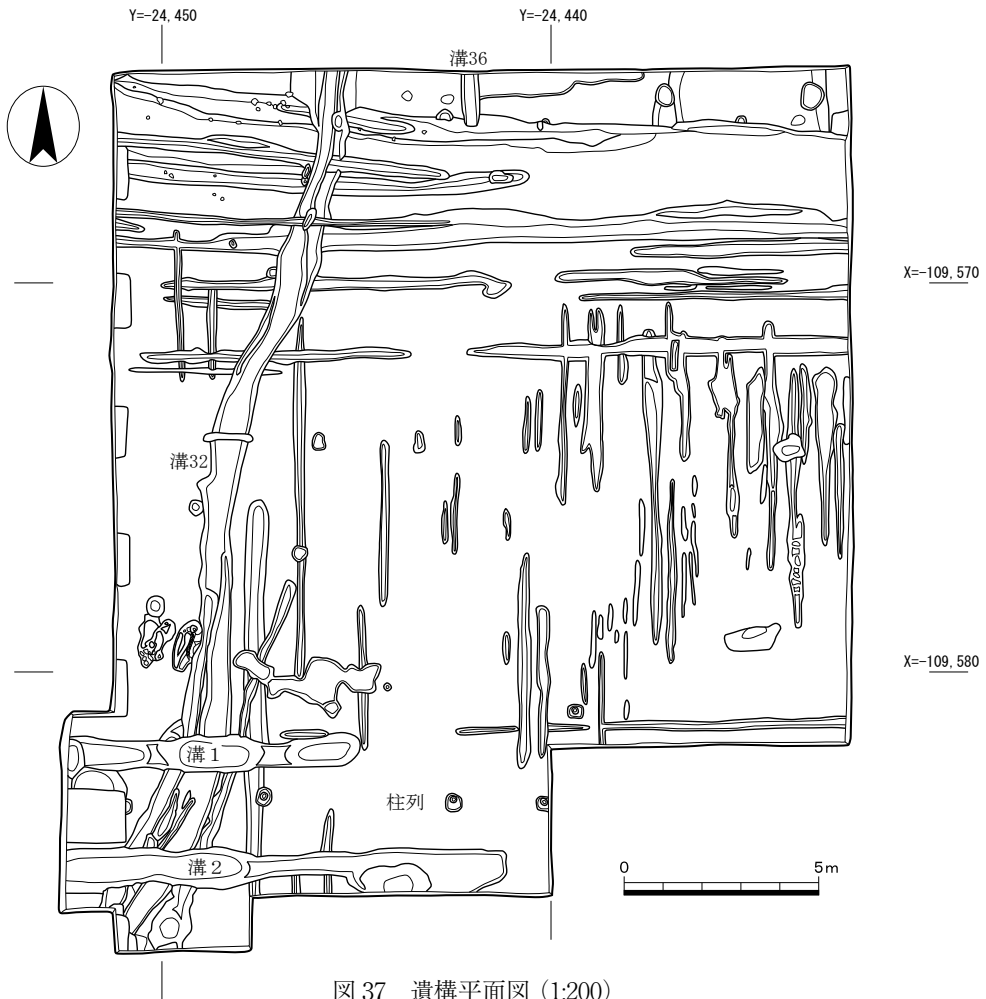


図37 遺構平面図 (1:200)

あり、柱当りは径20cm前後ある。柱間は東端のものから西へ約2.4m、4.8m、3.6mある。

遺物 遺物は遺物整理箱で7箱出土した。遺物内容は、弥生時代の石鏃及び弥生時代土器と考えられる土器細片、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代中期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・無釉陶器・輸入陶磁器・丸瓦・平瓦、室町時代後期の土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器などがある。磨製石鏃は、ほぼ完形で2点出土した。有茎で、柳葉形を呈する。1は、長さ6cm、幅2.55cm。2は、長さ5.95cm、幅1.30cmある。

小結 検出した溝1・2及び柱列は区画施設と考えられ、おおよそ北六・七門の境に南接した位置に該当する。一方、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物は、検出例の少ない西ノ京遺跡における新たな考古資料として評価できよう。(辻 裕司)

19 平安京右京三条三坊 (図版1・15)

経過 右京三条三坊ではこれまでに5件の発掘調査、34件の試掘、立会調査を実施している。五町に関しては発掘調査^{註1} 11件及び立会調査1件があるが、このうち五町北東部に該当する地域で実施した発掘調査(5次調査)によって平安時代前期の掘立柱建物、溝、柵、などを検出している。今回の調査地はその南西に位置し、西寄りに五町東西中央の推定線が含まれる。西二行、北六門を中

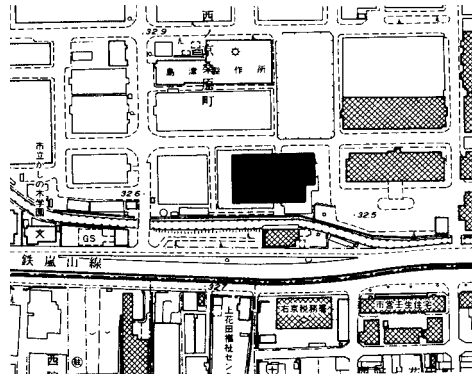


図38 調査位置図(1:5000)

心とする区域である。調査区は5次調査の結果から東端付近に旧天満川の流路(S D 28)がかかると予想されたため、当初流路以西に限ったが、一部試掘の結果、遺構が川の東側にも検出されたため、最終的に東西約55m、南北30mに設定した。遺構面は5次調査に較べやや深く、現表土下約2.2~2.4mで検出し、その面を覆う遺物包含層(厚さ5~10cm)、更にその上部に旧耕土層と旧天神川から流出した砂礫層が交互に堆積している。この遺構面は暗渠と思われる多数の小溝群や一部で浄化槽の掘形によって破壊されていたが、全体的にはよく遺存しており、平安時代前期の掘立柱建物、溝、柵などすべての遺構をこの面で検出した。

遺構 掘立柱建物は2棟あり、西側のS B 55は東西2間×南北5間で東に庇、南北それぞれに縁が付く南北棟。柱間寸法は東西2.4m(8尺)、南北3m(10尺)で、庇の出は3m(10尺)、北の縁の出は2.7m(9尺)、後に3.3m(11尺)に造り替えられている。南の縁の出は2.4m(8尺)で身舎に対応して三つの柱穴が並ぶが、庇の延長上の柱穴は3mの位置にあり、他とそろわない。柱掘形は身舎が一辺約1.2m、庇が0.8m、縁が0.4~0.5m前後の方形。柱抜き取り穴に拳大の礫が入った柱穴が多い。東側の東西棟S B 56は東西7間×南北2間で、南に庇が付く。柱間寸法は東西3m(10尺)、南北2.4m(8尺)で、庇の出3.6m(12尺)。柱掘形はS B 55同様身舎が一辺約1.2m、庇が0.8m前後の方形。2棟の建物は身舎北側の柱筋を揃えて配置されている。柱穴には柱根や礎板が残っていたものもあるが、抜き取りの痕跡が認められるものが多く、柱抜き取り穴から石

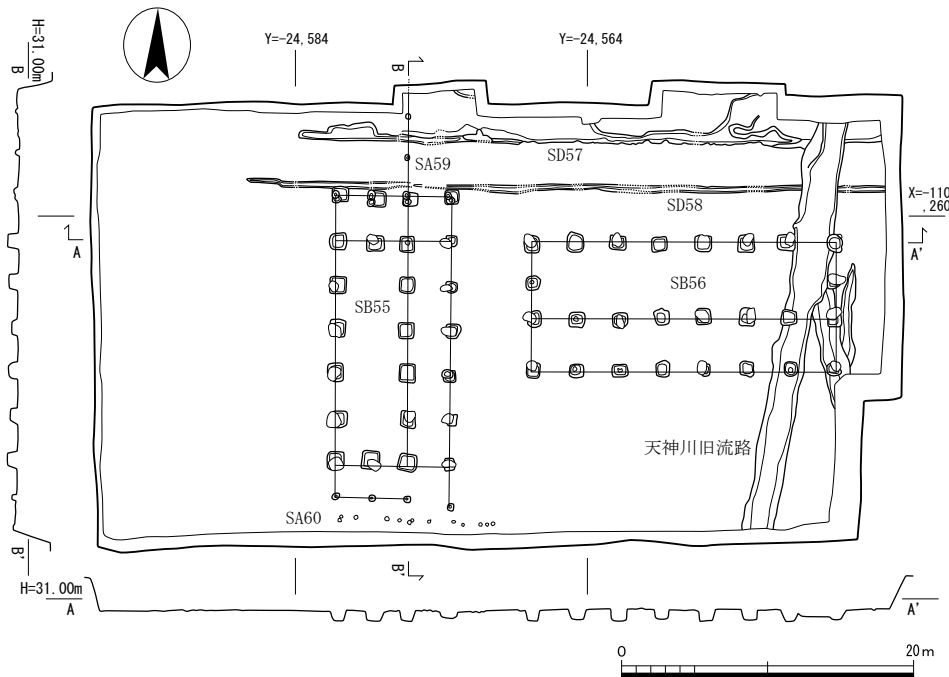


図37 遺構実測図(1:500)

や瓦が多量に出土した。SD57は建物北側に位置する東西方向の溝で、西端は五町東西中央付近にあたる。幅0.5～1m、深さ0.1～0.2m、約30m東で北肩が広がり、幅3.5m、深さ0.4m程になる。南肩は明瞭だが、北方の一部は不明瞭で、浅く北方に広がっているところもある。土器類のほとんどがこの溝から出土した。SD58はSB56とSD57のほぼ中央に位置する東西溝である。幅0.3～0.4m、深さ0.1m前後で、西はSB55の北縁の柱列をかすめ、SD57同様五町東西中央付近で終わっている。SA59はSB55の身舎東柱筋の北延長上に並ぶ柱穴列、柱間2.7m(9尺)で、柱穴2基を検出した。SA60はSB55の南に並ぶ東西の小柱穴列で、すべての柱穴は同一線上に並ばず、複数の時期に分けるべきかも知れない。

遺物 遺物は整理箱にして39箱(木製品を除く)出土した。内容は土器類21箱、瓦類18箱である。土器類は主にSD57から出土しており、他の遺構から出土したものはわずかである。SD57の土器類は総破片数5702片で、種類別の比率は土師器87.2%、黒色土器1.6%、須恵器9.4%、緑釉陶器1.1%、灰釉陶器0.6%である。機能別にみると、供膳形態80.9%、貯蔵形態1.8%、煮沸形態8.7%と多くが椀、杯、皿などの小型の食器類

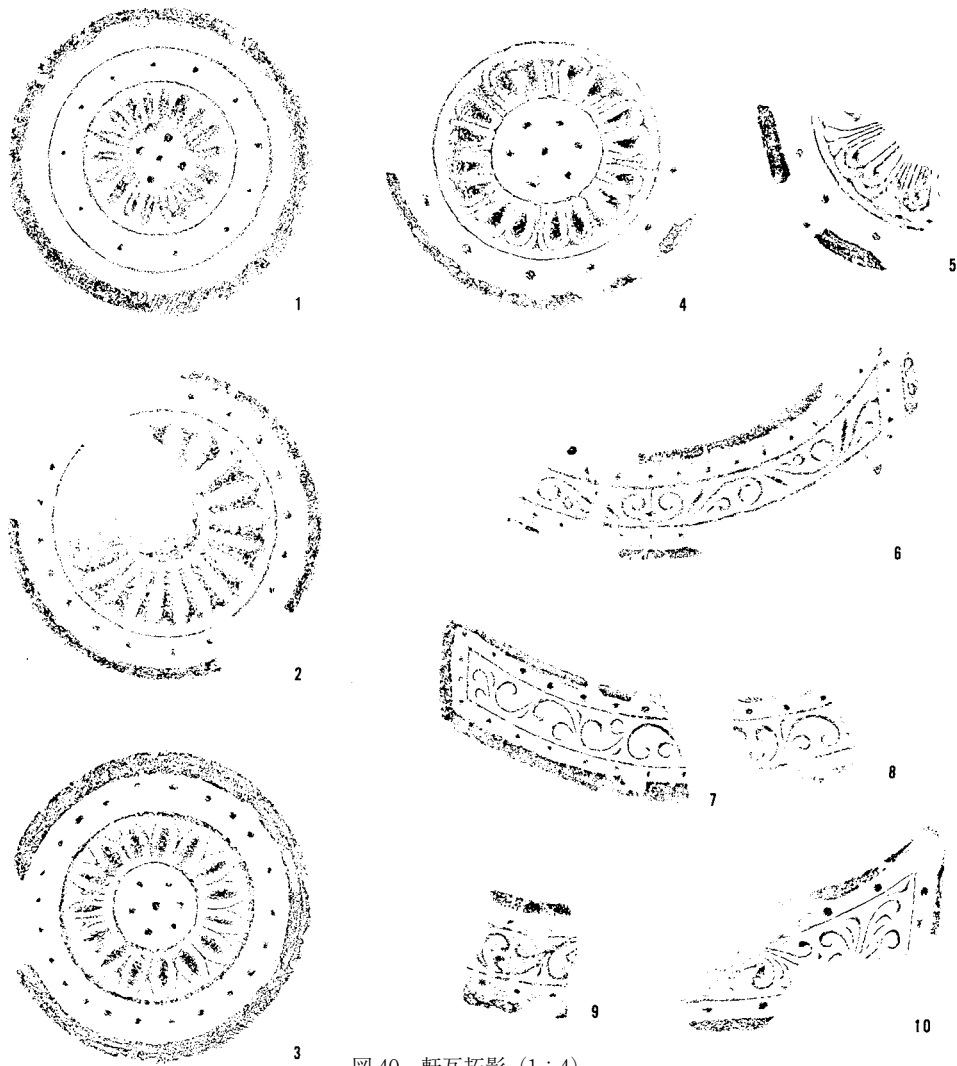


図40 軒瓦拓影(1:4)

で、土師器を除く食器類の種別比率を示せば、黒色土器 17.7%、須恵器 62.4%、緑釉陶器 12.9%、灰釉陶器 6.9%となっている。型式は平安京Ⅰ期新^{註2}に位置付けられる。この土器群は5次調査で出土したSD 19の土器群を型式も一致しており、諸様相が類似するが、特に緑釉陶器や黒色土器には共通する特徴を持つものが多い。

瓦類は建物、特にSB 56の柱抜き取り穴から出土した。大半が丸・平瓦だが、軒丸瓦10点、軒平瓦が15点あり、これまでの周辺の調査に較べて多く出土している。

軒瓦には平城宮、長岡宮などの平安京以前の宮都や乙訓寺跡、檜原廃寺、北白川廃寺な

どの寺院跡に類例・同範例のある奈良時代後期の1～3・6～8と、西賀茂瓦窯で生産され平安宮・京に類例の認められる平安時代前期の4・5・9・10とがある。奈良時代後期のものは平安京遷都の段階で搬入されたものであろう。これらの瓦類は出土状態からみて、SB 56などの建物の棟に使用されたものを、棄却時に柱抜き取り穴に投棄したものとみられる。

この他木製品としてはSB 55、56の礎板や柱根がある。

小結 文頭にも触れたように右京三条三坊ではこれまでに5件の発掘調査を行っており、平安時代の遺構を多数検出している。今回の調査でも建物、溝などを検出したが、これらも過去の調査で検出した遺構群同様、平安時代前期に属するもので、この地域が少なくとも10世紀までには衰退していたという、これまでの調査結果から得られた知見に添うものである。前回の5次調査は今回の調査地と同じ五町域で実施したものであるが、出土遺物からみてこの2回の調査で検出した遺構群はほぼ同時期に存在し、廃絶したことが推測できる。建物SB 55とSB 56は北側の柱筋を揃えているが、これは五町の北五・六門界に一致している。一方、5次調査で検出した柵SA 25は北三門の南北中央に位置し、五町の北限と、この建物SB 55、SB 56北側柱筋のちょうど中央にあたることになる。更にSD 57はSA 25の南約30m（10丈）に位置するなど、遺構の配置にも関連性が見いだせる。また5次調査のSD 19から出土した土器類の中に、これまで類例の少ない特徴的な緑釉陶器や黒色土器があるが、SD 57の土器群中にも同様の特徴を持つものがある。こうした遺構の位置関係や遺物の特徴から、これら五町域の遺構群は一連のものと考えられ、建物の規模からSB 55、56が五町域1町を占有した邸宅の中心的な建物と思われる。またSD 57は四町で検出したSD 12（3次調査SD 102）の延長上にあることから、四町との関連も考慮に入れて置く必要があるだろう。（平尾政幸）

註1・2 平尾政幸他『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告書10冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1990

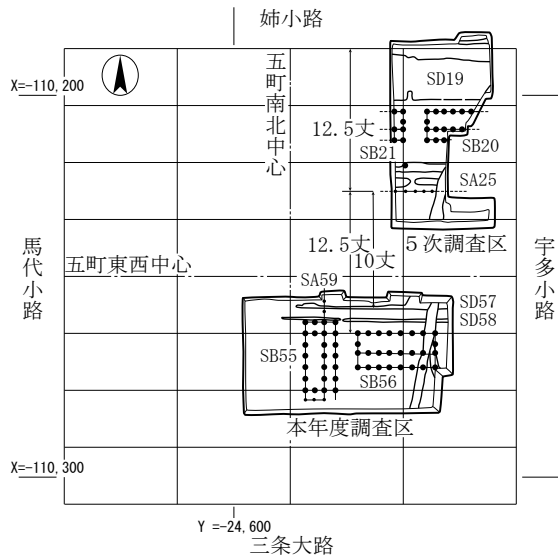


図41 遺構平面図（1：2000）

20 平安京右京四条二坊 (図版1・16)

経過 京都市右京区西院西今田町10に所在する染色工場跡地にマンションが建設されることになり、事前に試掘調査を行い川跡及び柱穴を検出したことから、発掘調査に切り替え調査を実施することになった。

調査地点は、道祖大路東半から四条二坊十六町の西半に該当するため、宅地内の状況及び道祖大路(道祖川)の構造・規模・開削時期などを明らかにすることを主目的として調査を進めた。調査区は、東西約44m、南北



図42 調査位置図(1:5000)

北11～18mの範囲としたが、一部道祖川の規模を確認する目的から西北端に拡張区を設定した。調査区内南半部は工場基礎による攪乱を受けるが、概して遺構の遺存状態は良好である。

遺構 調査区内の基本的な層序は、現地表面から染色工場の積土層が厚さ約40cm、旧耕作土層(オリーブ褐色砂泥層など)が厚さ約20cm堆積し、無遺物層(明黄褐色粘土層など)となる。無遺物層上面で各時期の遺構を検出した。

遺構には、平安時代前期から後期の道祖川・道祖大路東築地内溝・区画溝・建物・井戸・祭祀遺構・石組遺構・石敷遺構・土塋、室町時代の道祖川・耕作溝・土塋などがある。道祖川(川50)は調査区西端で検出した。東肩口は道祖大路東築地想定線にまで及ぶ。西肩口は未検出である。川底面と東肩口は、洪水によると考えられている浸食で凹凸が激しい。検出面での規模は、幅9m以上、深さ約1.8mある。大別して2層の砂礫層が厚く堆積し、それぞれ10世紀と12世紀の遺物を包含する。10世紀代の砂礫層は宅地内にも及ぶ。土器・瓦類・木製品が出土した。石組遺構は道祖川が10世紀代に中位まで埋没したのち盛土と石組みで構築した遺構で、東肩口から直交して川の中央へ約3m突出する。突出部に沿って10～40cm大の礫が一部組んだ状態で集中していた。12世紀前半の遺物が出土した。なお、川の上層は室町時代後期の遺物を包含しており、調査区内で検出している多くの耕作に伴う溝と同時期であることからこの時期まで上層は機能していた可能性がある。

築地内溝(溝61)は、築地想定線東側で検出した。検出面での規模は、幅6～9m、深さ約30cmある。遺物は9世紀前半のものが少量出土し、中には緑釉陶器甗の口縁片がある。

区画溝には溝47・溝55・溝119がある。溝47は調査区東半部、東三・四門境想定位置で検出した南北方向の溝で、検出面での規模は最大幅3.6m、深さ約30cmある。建物5と接する位置で西肩口の幅が狭まる。10世紀中頃に属する遺物が出土した。後述する建物11の柱穴は溝の底面で、建物4の柱穴はこの溝の上面で検出した。溝55は調査区中央で検出した南北方向に延長する溝で検出面での規模は幅約40cm、深さ約15cmある。12世紀に属する遺物が出土した。溝119は溝55の西に位置する溝で、南北方向に延長し、建物3を取り囲むように直角に西折する。検出面での規模は幅約30cm、深さ約10cmある。

井戸75は調査区中央で検出した。一辺1.5～1.8mの掘形に一辺約65cmの方形縦板枠を組み、底部に径約50cmの曲物を据える。縦板組の主軸方向は座標北に対しやや東に振れる。西辺の縦板と横棧に挟まれた箇所から刀子形が1点出土した。11世紀後半から12世紀前半の遺物が出土し、墨絵を描いた方形容器の側板や草履か草鞋と考えられる履物がある。

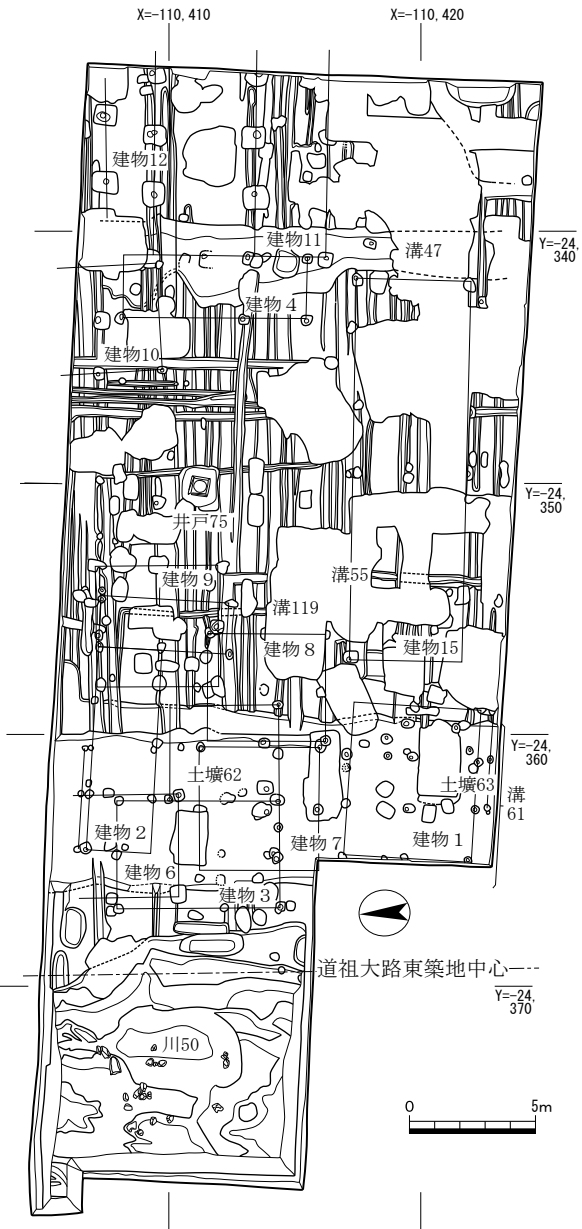


図43 遺構平面図

石敷遺構は調査区南西部で検出した。大半は既存の基礎で攪乱を受けている。検出面での規模は南北長約1.6m、深さ18cmある。底面に径10cm前後の川原石を敷き詰めている。祭祀遺構は、築地内溝の上面で2基(土壙62・63)検出した。土壙62は検出状態で

表1 建物一覧表

建物	規模	東西柱間	南北柱間	備考
建物1	2×3間 東西棟	2.0 m	2.6 m	柱痕遺存、建物2と同一の振れ・12世紀前
建物2	5×1間 東西棟	2.0 m	2.5 m	南東角1×1間張出し・12世紀前
建物3	2×3間 南北棟	2.1 m	2.1 m	東南角2×2間張出し、柱痕遺存・11世紀後?
建物4	1×3間 南北棟	2.4 m	2.4 m	10世紀後
建物5	7×2間 東西棟	2.5 m	2.2 m	10世紀前?
建物6	2×1間以上	2.1 m	2.7 m	9世紀後?
建物7	2×2間	2.4 m	2.4 m	9世紀後?
建物8	2×2間	2.1 m	2.3 m	9世紀後?
建物9	2×2間	2.4 m	2.4 m	南西隅の柱穴から土師器盤出土・9世紀後
建物10	2×1間以上	2.1 m	2.4 m	9世紀後
建物11	2×3間以上 東西棟	2.4 m	2.1 m	南面廂 (2.7 m)・9世紀?
建物12	1間以上	2.5 m		1間分を検出・9世紀?

取り上げて保存した。掘形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は径約33cmあり、壙底に土師器甕を正置し土師器高杯を倒立させ蓋とする。高杯の杯部口縁は打ち欠く。土壙63も掘形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は径約40cm、深さ19cmある。壙底を約6cm埋め戻して炭(現存厚さ0.2~2cm)を敷き詰めた後に土師器甕を正置し、土師器高杯を倒立させ蓋とする。土壙62・63とも蓋に転用された高杯の脚部下半は遺存していない。土壙62・63の土師器甕内には鎮め物として皇朝十二銭の承和昌寶や長年大寶を約70枚と薄板などを埋納する。銭貨塊表面には布の痕跡が遺存していた箇所もあり、穀と思われる痕跡も確認している。

建物は12棟以上検出しており、配置及び区画施設などから、調査区内での宅地としての最小占有区域は、大別して10世紀以前は東三・四行分を、11世紀以後は主として東四行の西半を占有していたことが判る。南北方向にはいずれの時期も北六・七門を占有している。まず建物9・10・12は東西方向の柱筋が通り、この時期には築地内溝がある。建物7・8・11も東西方向の柱筋が通ることから計画的な建物配置が窺われる。建物7・8は重複状況にあり建物8が新しい。建物5は溝47との状況から同一時期と考えられる。柱間については11世紀以降の建物には2mを越

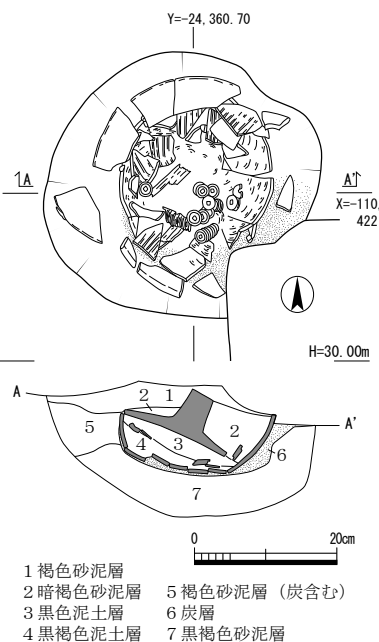


図44 土壙図63実測図(1:10)

表2 平安時代の出土遺物表

土師器	皿・杯・椀・甕・高杯・盤・甕
須恵器	皿・杯・蓋・壺・甕・瓶・鉢・平瓶・円面硯・風字硯・二面硯
黒色土器	椀・甕・盤
緑釉陶器	皿・椀・壺・香炉・甌
灰釉陶器	皿・椀・壺・瓶
白色土器	皿・椀
輸入陶磁器	(青磁・白磁・褐釉) 皿・椀・合子・托・壺・他
瓦器	椀
墨書・刻字土器	「善」カ・「右」・「田中」他数点
ヘラ記号土器	数点
瓦	丸瓦・平瓦・軒丸瓦(重圈文・蓮華文など)・軒平瓦(唐草文など)
土製品	土馬・土錘
石製品	砥石
鉄製品	鉄釘
銭貨	承和昌寶・長年大寶・貞觀永寶・天禧通寶
木製品	刀子柄・鑿?柄・篋状・櫛・下駄・草履(草鞋)・漆器椀(赤漆で双葉文)・曲物・方形容器(墨描繪)・漆板・箸・ヘラ・物指・木球・中型人形・刀子形・斎串状・数珠玉状・棒・板・柱根
獣骨	馬頸骨・馬歯

えない柱間が採用される。なお、柱穴からは細片の遺物がわずかに出土するのみで、建物の時期については不確定である。

遺物 遺物は、古墳時代後期から室町時代にかけてのものが遺物コンテナで66箱出土したが、平安時代のものが主体である。古墳時代後期のものでは須恵器の杯蓋・がある。鎌倉・室町時代のものでは土師器・瓦器・輸入陶磁器・石製品などがある。平安時代のものは表にまとめて置くが、10世紀に属するものが多い。特記すべき遺物には土器では緑釉陶器の甌がある。口縁の破片である。口縁端部は内側に肥厚する。胎土は軟陶で黄灰色を呈し、外面に薄い釉をかける。木製品では川50(12世紀前半)から物指が1点出土している。7寸目の目盛りで折損する。幅1cm、厚さ0.7cmの棒の片面に目盛りを刻線で刻む。1寸の実長は最短が3.25m、最長が3.65cmあり、7寸の平均は3.3714cmある。

小結 今回の調査対象区域は四行八門の宅地割りでは十六町の東三・四行、北六・七門の範囲に該当する。このほぼ全域で平安時代の遺構を検出することができた。

道祖大路は、検出した川幅や大路東築地想定線との位置から少なくとも大路の東半に路を通す空間は存在せず、路は西半に想定できる。道祖川の規模は、これまでに、平安京跡内で検出された川ないし、側溝例としては最大規模を有する。同様に、築地内溝も極めて幅が広く、方一町規模の邸宅跡である右京一条三坊九町の検出例註に匹敵する規模を有する。なお、土壙62・63は森郁夫氏に実見して頂き、宅に対する鎮めが想定できるであろうとの御教示を得た。銭貨を約70枚埋納する例は紀伊国分寺跡にある。(辻 裕司)

註 平良 泰久他「平安京跡(右京一条三坊九・十町)昭和55年度発掘調査概要」

『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会 1981 他

21 平安京右京五条三坊 (図版1・17・18)

経過 調査地は平安京右京五条三坊二町にあたり、北を綾小路に面する位置にある。マンション新築工事に伴い事前の試掘調査を実施したところ、平安時代前期の遺物を多量に包含する東西方向の溝を確認した。

発掘調査は、土器を多量に含む溝を中心に約110m²の調査区を設定して実施した。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、約1.2mの盛土・耕作土下に、平安時代前期から

中期の遺物を包含する黒褐色泥砂層が10～30cmほど堆積する。以下黄褐色砂泥層の無遺物層となり、平安時代の遺構はこの上面で確認した。主な遺構としては、東西方向の溝SD1及び柱穴列などがある。SD1の規模は幅1.3～2.4mで、深さは0.5mほどあり、2層に分層できる。

出土遺物は整理箱に30箱ほどあり、溝2層出土の土器類が大半をしめる。溝第2層出土の土器類には、土師器碗(1～6)・皿A(7～13)・皿B(14)・杯A(15～18)・49)・蓋(19)・杯B(20・21)・甕(22～24)・高杯・鉢、黑色土器A類杯(25)・鉄鉢・甕、

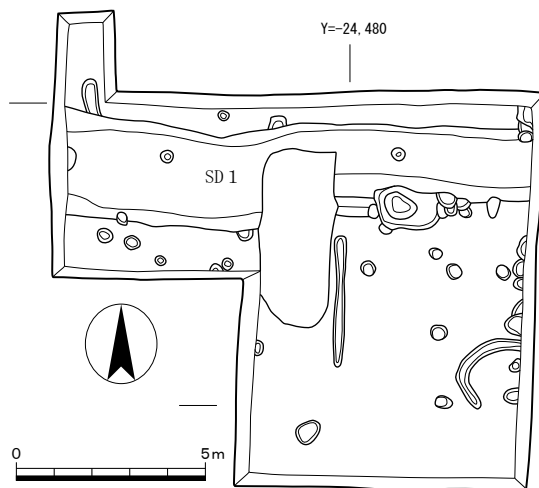


図46 遺構平面図 (1:200)

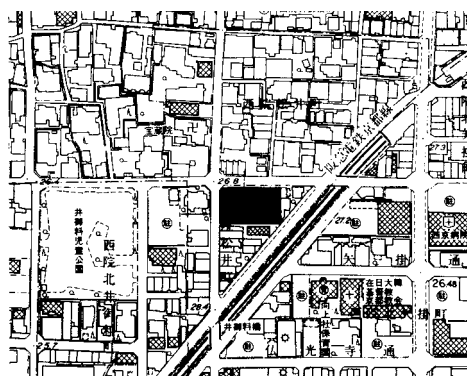


図45 調査位置図 (1:5000)

須恵器蓋(26～30)・皿(31)・杯A(32～36)・杯B(37)・40)・42)～44)・鉢(45)・瓶子(46)・壺・甕、越州窯系青磁(47)、二彩陶器托(48)がある。この他土馬、石帯、万年通寶が出土した。

小結 調査で確認した溝

SD1は、綾小路南築地推定ラインより南1.8mに位置することから、右京五条三坊2

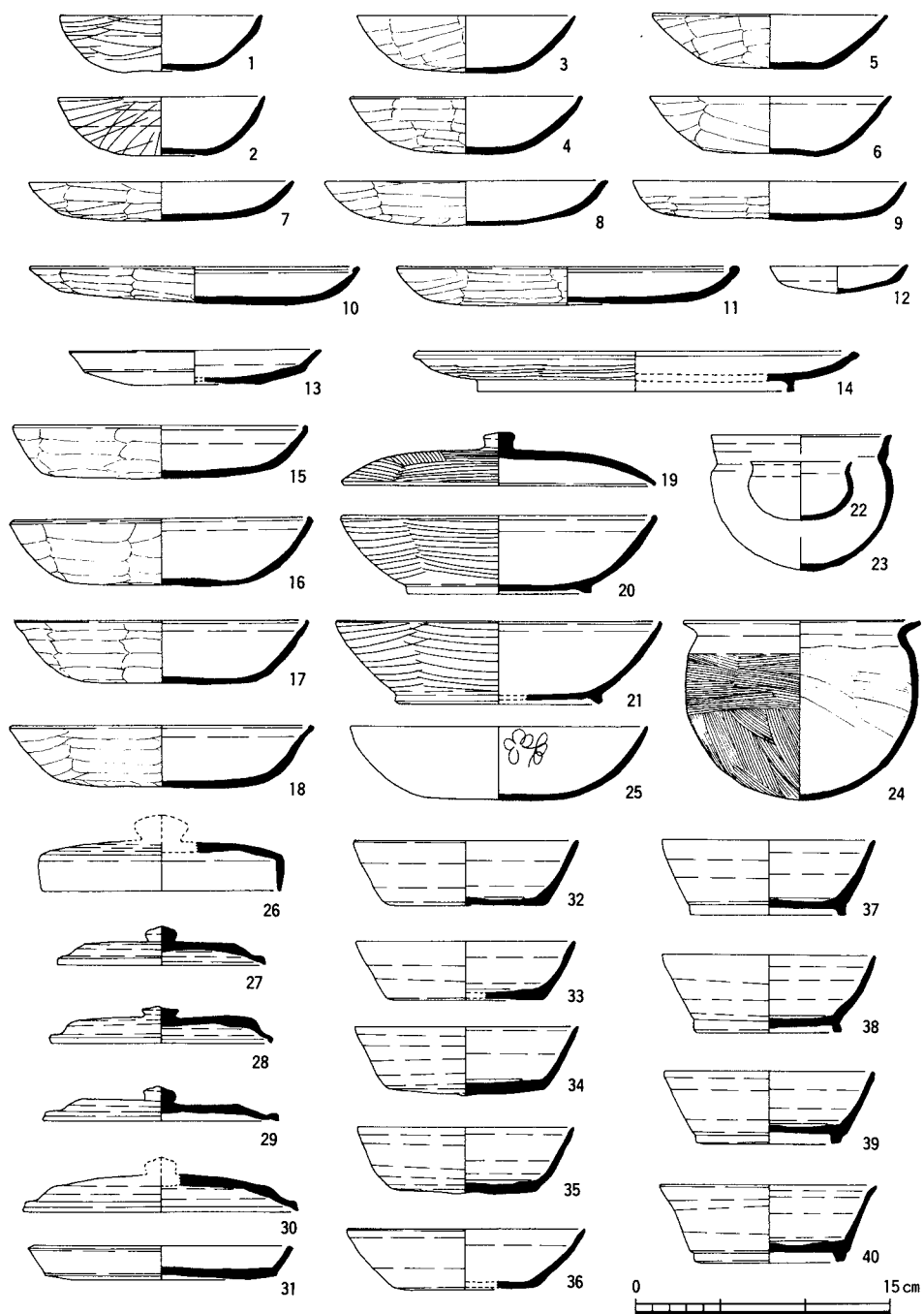


図47 S D図1 第図2 層出土土器実測図 (1:4)

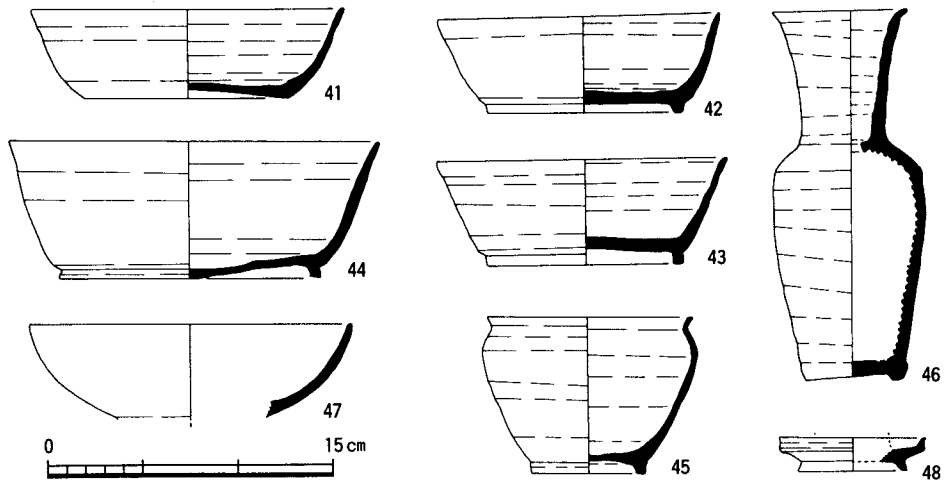


図 48 出土土器実測図 (1:4)

町の北面築地内溝と考えられる。溝 S D 1 第 2 層より、墨書土器も 70 点以上を含む 9 世紀初頭に比定できる良好な一括土器群が出土した。これらの遺物は溝の一部から集中して出土しており、一括捨棄されたものであろう。(伊藤 潔)

表 3 S D 1 第 2 層出土墨書土器

土器No.	文字	器種	器形	記載位置	土器No.	文字	器種	器形	記載位置
1	「大」	土師器	椀	底部外面	33	「角」	須恵器	杯 A	底部外面
6	「福」	土師器	椀	底部外面	34	「大」	須恵器	杯 A	底部外面
8	「大」	土師器	皿	底部外面	35	「大」	須恵器	杯 A	底部外面
15	「大」	土師器	杯 A	底部外面	37	「田」	須恵器	杯 B	底部内面
16	「角」	土師器	杯 A	底部外面	38	「田」	須恵器	杯 B	底部内面
20	「十」	土師器	杯 A	底部外面	39	「富」	須恵器	杯 B	底部内面
28	「西」	須恵器	蓋	天井部内面	40	「富」	須恵器	杯 B	底部内面
29	「西」「一」	須恵器	蓋	天井部内面	42	「万得」	須恵器	杯 B	底部外面
30	「木」	須恵器	蓋	天井部外面	49	「右京」	土師器	杯 A	底部外面
32	「角」	須恵器	杯 A	底部外面	22	人面	土師器	甕	外部外面

22 平安京右京六条二坊1 (図版1・19)

経過 本調査は、京都市立病院の新病棟建設に先立って実施したもので、調査地は平安京右京六条二坊2町に相当する。調査区を東西2箇所に設定しており、西の調査区を第1調査区、東の調査区を第2調査区とした。今回の調査では、第1調査区で西鞠負小路東築地跡の検出が期待され、第2調査区では町内中央域の宅地利用状況の確認が主目的となった。発掘調査はまず第1調査区より行い、終了後に第2調査区の調査へと移った。

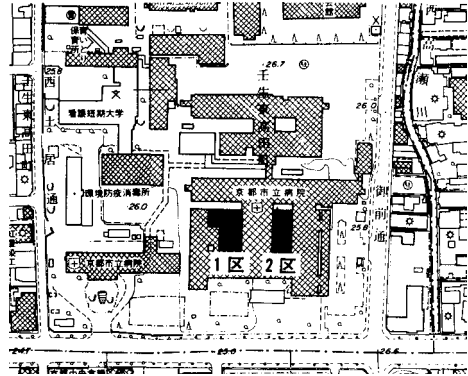


図49 調査位置図 (1:5000)

遺構 調査区の基本層序は、現代表土が0.6～0.7 m、近世以降の水田床土が0.15 mの厚さで堆積しており、その下が遺構検出面である褐色泥砂層となる。

遺構は平安時代のもものが中心である。第1調査区では掘立柱建物SB1・2と南北溝S

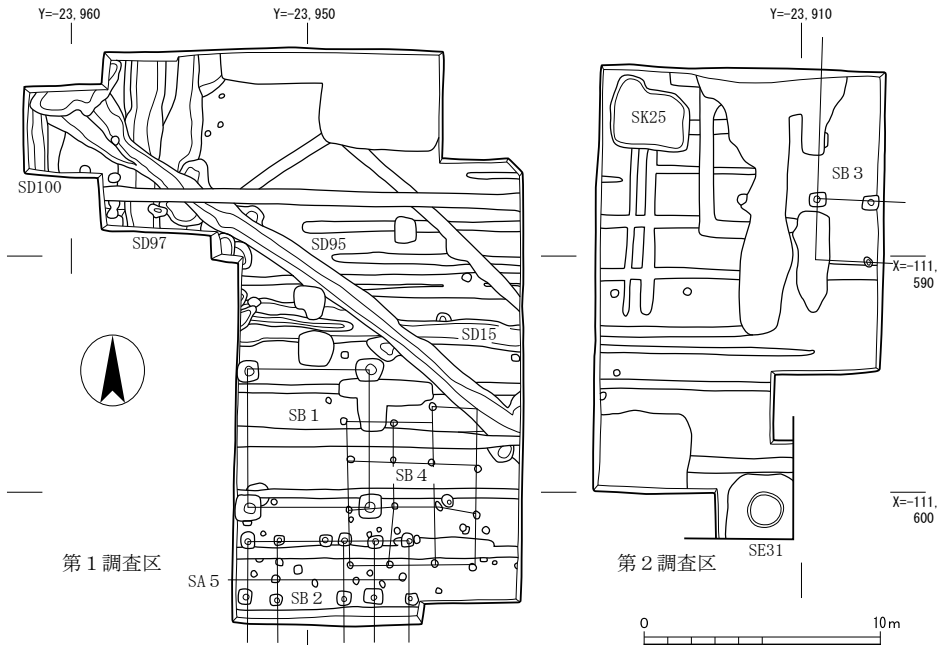


図50 遺構平面図 (1:300)

D 97・100を検出した。S B 1は1間（柱間6 m）×1間（柱間5.1 m）の特殊な構造を持つ建物で、柱の直径は0.4 mである。S B 2はS B 1の南で検出した2棟分の掘立柱群で、1棟はS B 1と柱筋を揃えていると考えられる。S D 100は幅1 m以上、深さ0.3 m程の南北溝である。S D 97はS D 100の東に平行して流れる南北溝で、初めは幅1.5 m、深さ0.4 m程であったが後に幅3.5 m程に広がって浅くなっている。

第2調査区では、掘立柱建物S B 3・土壙S K 25・井戸S E 31を検出している。S B 3は建物の南西隅を検出したに過ぎないが、1間以上（柱間2.4 m）×3間以上（柱間2.4 mか）の身舎に南庇を伴った東西棟と考えられる。S K 25は不定形の浅い土壙で、平安時代前期の土師器が多く出土した。S E 31は、幅10 cm厚さ5 cm程の細長い縦板をほぞ穴で丸く組んだ井戸である。直径1.2 m、深さは2.3 mで、掘形は3 m四方の隅丸方形を呈する。なお、S E 31の南で同じ構造の井戸を確認した。S E 31の掘形によって壊されており明らかに時期は先行するが、旧病棟の下となるため十分な調査ができず詳細は不明である。

この他、第1調査区で弥生時代後期から古墳時代初期のV字溝S D 95を検出しており、上層では中世の建物S B 4やそれに伴う柵列S A 5、東西溝S D 15を検出している。特に中世ピット群がS D 15より北には広がらないことは興味深い事実である。

遺物 今回の調査では、土師器を中心に須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、弥生土器などが整理箱にして31箱分出土している。弥生時代の遺物はS D 95から後期の近江系の土器片が出土しており、結晶片岩の直線刃半月形石包丁も周辺から出土している。平安時代の遺物は出土遺物の中心となるが、S D 97、S K 25、S E 31からまとめて土器類が出土している。特に、S D 97から埴塙が、S K 25から鉄滓が出土しており、宅地内における小鍛冶工房の存在を示唆

している。S E 31からは土師器、緑釉陶器などと共に胡麻が詰まった須恵器小壺が出土しており、曲物、櫛など日常生活に関係する木製品も多くみられる。また、瓦類の中には長岡京域から搬入されたと考えられる軒



図51 S E 31 出土軒瓦拓影 (1:4)

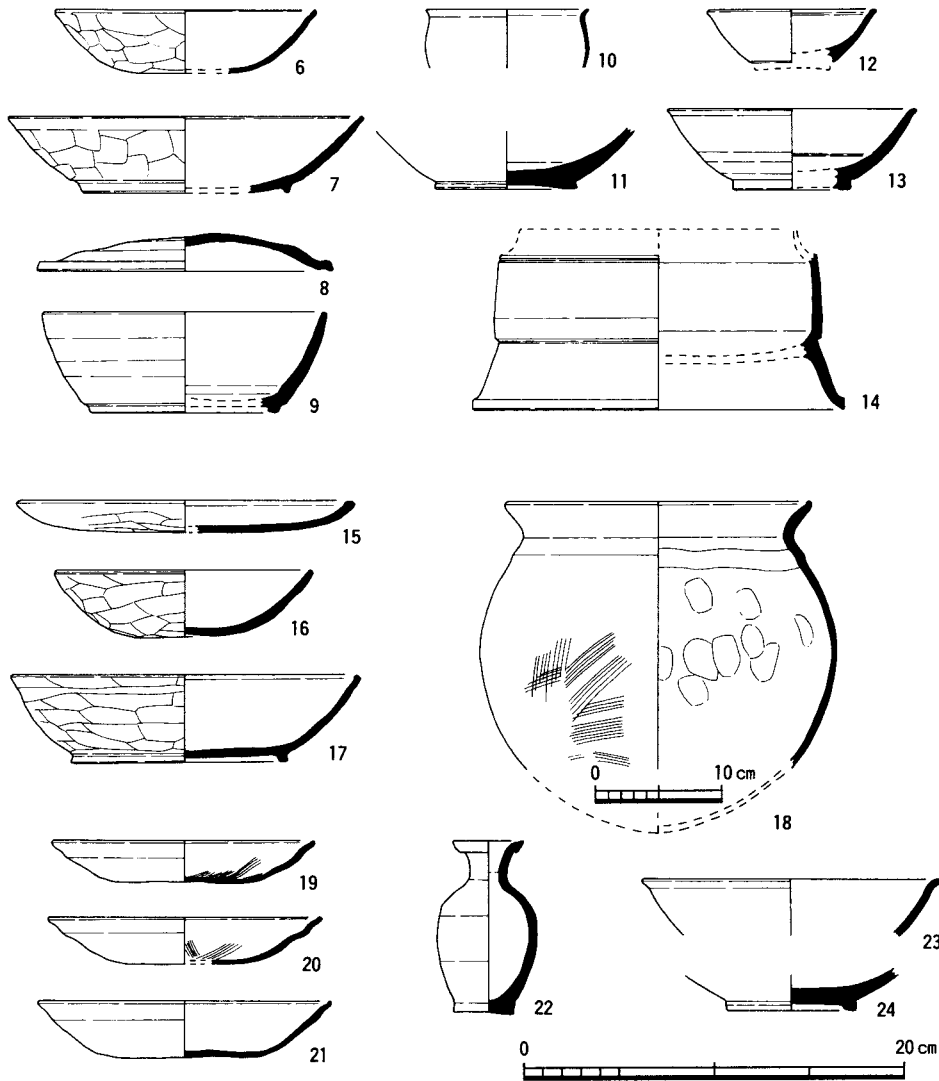


図52 出土土器実測図(1:4)

瓦が若干出土している。これら平安時代の遺構の時期はすべて前期で、S D 97、S K 25の出土遺物は9世紀中頃、S E 31の出土遺物は9世紀後半から10世紀初めのものと考えられる。

小結 今回の調査で、平安京右京六条二坊二町域の宅地の状況を一部明らかにできたことは大きな成果である。まず二町域の西限であるが、第1調査区でS D 97・100を検出している。これら2条の南北溝は溝肩間で3m程しか離れておらず、出土遺物でみる限り時

期的な差は認められない。この両溝間の中心やや東寄りに西靱負小路東築地の推定ラインが走る。また、SD 100を北に延長すれば、昭和51年度及び昭和54年度の発掘調査時に検出された西靱負小路東側溝と合致する。これらのことから、両溝が西靱負小路東築地の外溝と内溝になる可能性は高い。

次にSD 97が築地内溝であるならば、SB 1・SB 2の性格が問題となる。これらの建物は内溝に沿って南北に軒を連ねたことになり、特にSB 1は柱間5.1×6m、直径0.4m強の大きな四本柱で

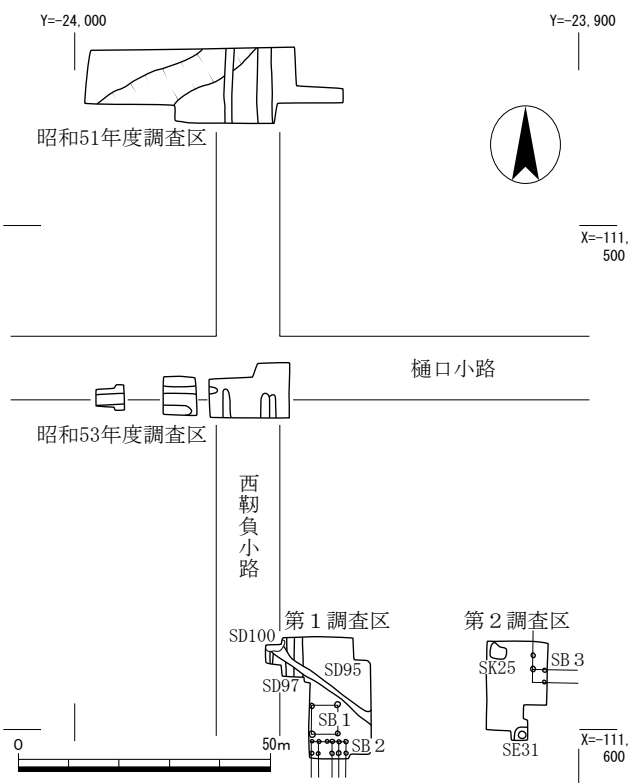


図53 右京六条二坊遺構配置図(1:1500)

構成される特殊な建物である。建物が町域の西端に位置することやその特殊な構造から、望楼のような建物も想定できるが、柱の深さが現存で0.4m弱と浅く問題が残る。類似構造を持つ掘立柱建物の検出例の増加を待って検討を加えることとしたい。

第2調査区で検出されたSB 3とSE 31は、町域のほぼ中央部に位置し宅地の利用状況の一端を知ることができる。SB 3は西妻と南庇が検出されており、大型建物と考えるならば町の中心やや北寄りに位置することになる。SE 31はSB 3の南西10m程の近距離に掘られており、位置的にSB 3と密接な関係にあるといえる。第1調査区で検出したSB 1・2と同一宅地内と考えるならば、右京六条二坊二町では宅地は一町近く占地することも予測される。そして、SB 3を生活空間としての建物とし、正殿などの中心建物をSE 31の南方に考えることも可能であろう。(網 伸也)

23 平安京右京六条二坊2 (図版1・20)

経過 この調査は工場建設に伴うものである。当該地は平安京右京六条二坊十五町及び道祖大路に推定されるところであり、工事に先立って遺構の有無を確認する試掘調査を実施した。その結果、敷地の大半が旧建物の基礎などで壊されていたものの、南西部で大路の路面部を流れる河川の一部を検出したため発掘調査を実施する運びとなった。調査は試掘の結果を受けて、遺構の残存状況の良好な敷地の南西部に調査区を設けて開始し、主に道祖大路関係の遺構を検出した。

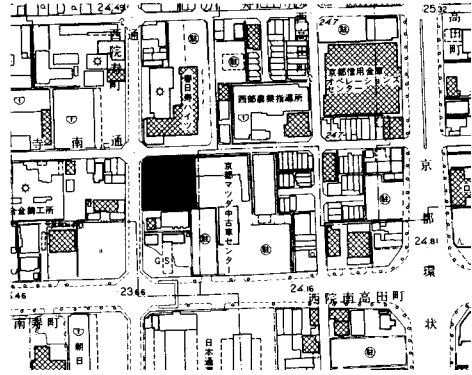


図54 調査位置図 (1:5000)

遺構 調査区の基本層序は、上から盛土約60cm、耕作土・床土約30cm、灰褐色砂泥層約5cm、オリーブ灰色砂泥層（地山）と続く。灰褐色砂泥層の上面で中世（鎌倉時代から室町時代）の遺構を、オリーブ灰色砂泥層の上面で平安時代の遺構をそれぞれ検出した。

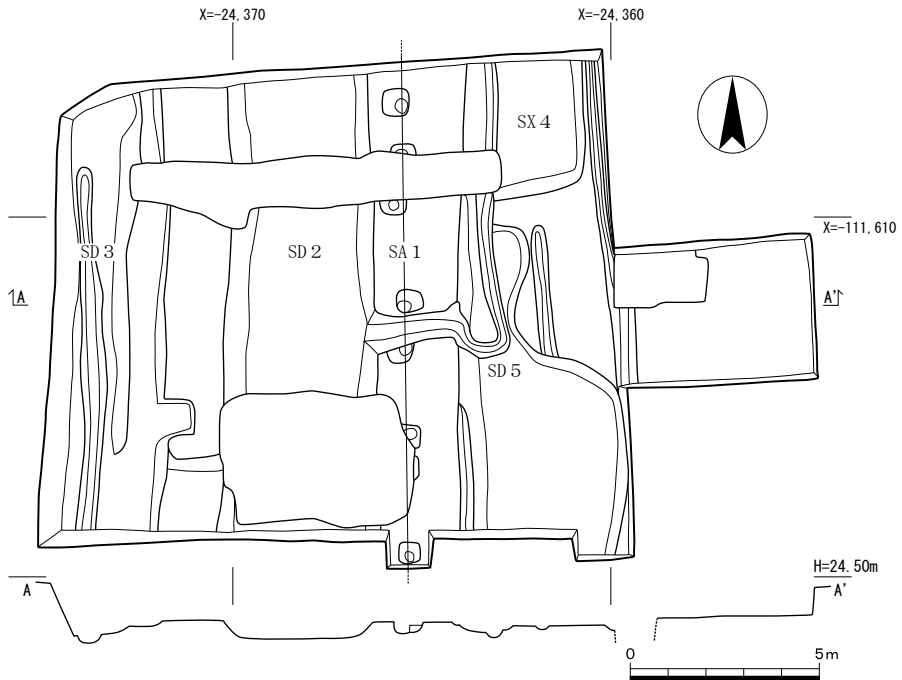


図55 遺構平面図 (1:200)

平安時代の遺構としては、調査区の中央部に道祖大路東築地の基礎と考えられる柱穴列（S A 1）を検出した。柱穴はいずれも一辺 60cm 程度の隅丸方形であるが、柱筋が微妙にずれることや柱間が 0.9～2.7 m と不揃いであることから、あるいは二時期存在した可能性もある。築地の西側には幅約 4 m、深さ 0.5 m の素掘り溝（S D 2）を確認しており、大路の東側溝と考えられる。また、大路の路面にあたる部分では路面が認められず、変わって南北方向の河川（S D 3）を検出した。今回の調査では東岸部の確認に留まり、対岸は調査区外になるため、その規模は不明である。一方、築地の東側では水を集めるためと考えられる窪み（S X 4）と、築地の下を抜けて大路側溝へ排水する溝（S D 5）を検出した。

中世の遺構は耕作に関すると考えられる南北方向の小溝群を検出しており、その大半は幅 30cm、深さ 10cm 程度である。また、河川（S D 3）の一部は中世まで存続しているらしく、平安時代の堆積層に重複して中世の遺物を包含した層が認められる。

遺物 調査では、平安時代と中世の遺物が出土している。平安時代の遺物は主に側溝や河川から出土しており、大半が土器類で瓦類がわずかにある。土器類には土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器などがあり、器形も豊富である。その他に石帯の丸軋、土馬なども出土している。中世の遺物は土師器、陶器などの土器類が河川の堆積層や小溝群から出土しているが、いずれも小片で量も少ない。

小結 今回の調査の成果は、ほぼ推定通りの位置で道祖大路の東築地とその側溝を確認できたことである。築地は上面を削平されており、基礎の柱穴列を確認できたのみであったが、宅地側からの排水施設など興味深い発見もあった。しかし、側溝については幅が 4 m にも及び、規模が大きいかことや、築地に接近しすぎていて犬走りに相当する部分がないことなど新たな問題点も生じている。

一方、大路の路面部分を通る河川については、側溝や築地が存在していること、河川の堆積層の遺物が平安時代中期を遡らないことなどから、平安時代中期以降に路面を開削して新たに造られたと考えられる。なお、側溝や築地内側の溝はこの時期にはほぼ埋没している。一般に平安京の右京域は平安時代の中頃には衰退を始めていたとされており、当地でもこの時期道路としての機能を失ったと考えられよう。

また、この河川はこれまでの調査によって、北は二条大路から南は七条坊門小路付近まで延長 2 km 以上にわたって確認しており、それぞれ平安時代から中・近世の堆積層を認めている。更に、大正 12 年発行の地形図にもその痕跡を窺えることから、一部は近年まで存在していたものであろう。

（吉崎 伸）

24 平安京右京七条二坊 (図版1・21)

経過 食品工場建設に先立つ発掘調査である。調査地は右京七条二坊十五町にあたり、七条坊門小路の北、道祖大路の東に位置する。調査区は工場建築範囲に限られ、東西25m、南北35mを設定した。また、道祖大路との関係を調査する目的で幅4m、東西14.5mのトレンチを設定し拡張区の調査を実施した。

遺構・遺物 調査地には、いわゆる包含層はなく、現代整地層及び部分的に残る旧耕土

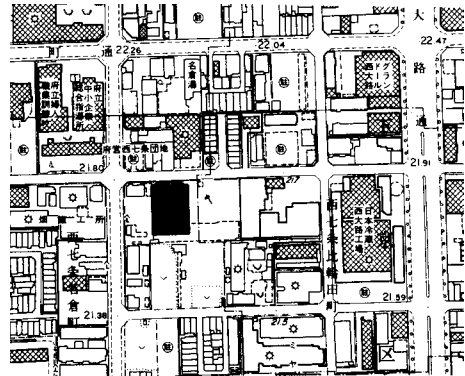


図56 調査位置図 (1:5000)

層、床土を除去すると全面にわたって遺構面となる。調査区の北西部は黄褐色砂泥層、南西部は砂礫層、東部は黄褐色微砂層がベースとなって遺構が成立している。

発見した遺構は中世以降の耕作に伴う溝、平安時代の掘立柱建物・溝・土墾・井戸などと、古墳時代の流路がある。以下主な遺構について概略を記す。

溝 S D 32 は調査区の南で検出した東西溝。検出面で幅1.5～2m、深さ0.5～0.8mを測る。柵列 S A 238 は、S D 32の北に併行して検出した。東西25m分を確認している。柱穴掘形は径30cm程で柱間は1.5～1.8mと一定していない。溝 S D 32、柵列 S A 238 ともに出土遺物が少ない。なお、七条坊門小路北築地心推定位置から、南約2.1mの位置に柵列がある。

掘立柱建物は6棟に検出している。建物 S B 244 は調査区東側で検出したが、他の5棟は調査区西側道祖大路に面して検出している。掘立柱建物の柱穴掘形はすべて直径30～60cmの円形掘形で、根石・礎板などは施されていない。建物 S B 244 は柱穴掘形出土遺物から鎌倉時代以降と考えられるが、他の5棟は9世紀後半代に比定できる。

井戸 S E 23 は調査区中央部で検出した、一辺3.5mの不整形を呈した掘形の井戸である。井筒は上段が一辺120cmの方形縦板組、下段は直径120cm円形縦板組による。上段方形井筒の四隅の柱下部には根石・礎板を用いて補強しており、礎板は木製鋤を転用している。下部円形井筒は幅9～15cm、厚さ約3cm、長さ170cmの板で組む。これらの板を円形に組むため板材は断面台形を呈し、上・下端も台形に加工している。

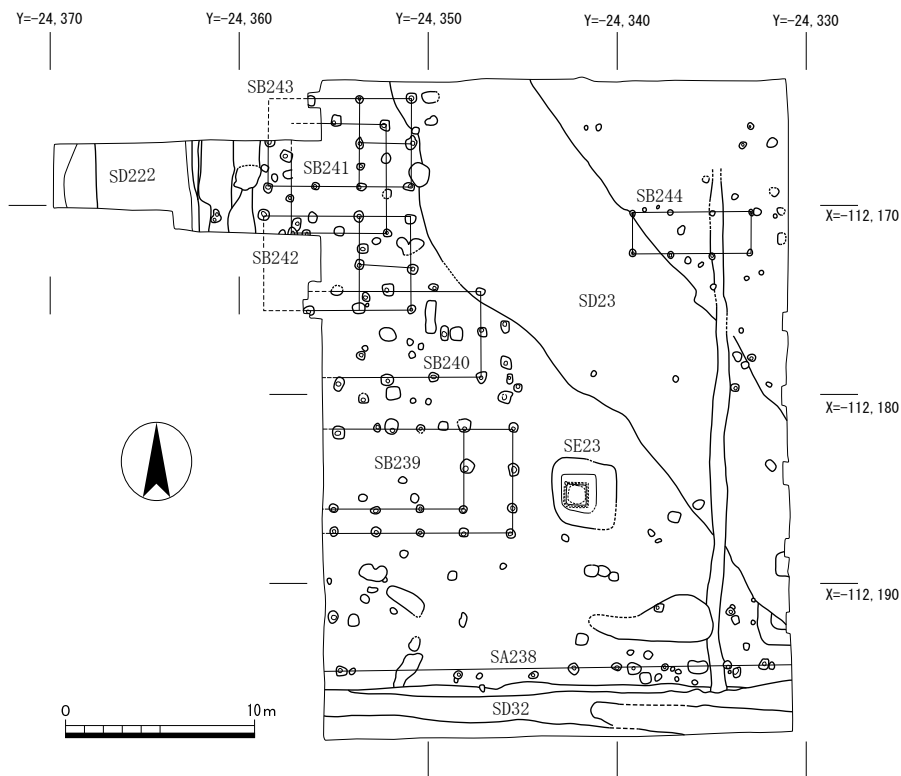


図 57 遺構平面図 (1:400)

河川を2条検出した。SD 222は西拡張区で検出したもので、いわゆる道祖川である。SD 23は調査区の西北から東南に向かって流れる河川である。最上層は湿地状を呈し平安時代前期の遺物が出土するが、下層からは古墳時代後期の遺物が出土する。

出土した遺物には、古墳時代の土師器高杯・甕、須恵器杯・壺・甕、平安時代の土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・椀・皿・瓶子・壺・甕、黒色土器杯・甕、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器杯・椀・皿・壺、石製品石帯、銭貨「富寿神寶」、木製品鋤・櫛などがある。SE 23からは、底部外面に「精進坏」と墨書された灰釉陶器椀が出土している。

小結 確認した遺構のうち溝SD 32、柵列SA 238は七条坊門小路北側溝及び北側築地に関係する遺構と考えられる。また、流路SD 222は道祖大路に伴う道祖川と考えられ、条坊に係わる良好な資料を得ることができた。これらの条坊遺構と建物・井戸は建物SB 244を除きすべて9世紀後半に比定できる。一町内における宅地割りを考える上で貴重な資料となるであろう。

(菅田 薫)

25 平安京右京八条三坊 (図版1・22)

経過 今回の調査は、下京区七条御所ノ内西町に所在する宅地の病院新築に先立ち事前に実施したものである。調査地は、右京八条三坊七町に属し、東に宇多小路、西に馬代小路、南に八条坊門小路、北に塩小路に面した一町のほぼ中央付近に位置する。

調査区周辺では1980年と1982年に西大路小学校校内の調査例がある。前者では、平安時代の矩形を呈する木組暗渠施設が、

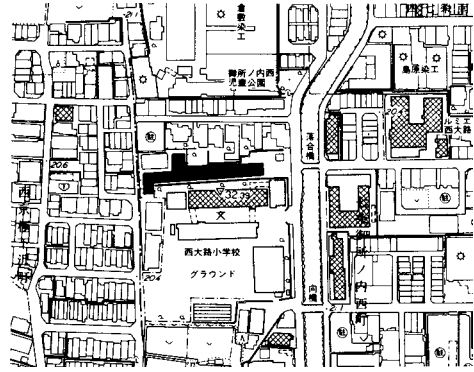


図58 調査位置図 (1:5000)

後者では平安時代前期の堀立柱建物・柵・井戸・東西溝、平安時代後期の東西溝・土壌が検出されており、今調査区が両調査地の北に接することからこれらに関連する遺構の存在が予想された。また、敷地西端では馬代小路が推定されることから、小路に関連する遺構の存在も考えられた。

まず遺跡の有無を確認するため、敷地内に試掘トレンチを2箇所設置し調査を実施したところ、平安時代の木組暗渠施設を確認したことから、本調査の運びとなった。調査は敷地全体を対象としたが、土置場などの関係から東西に2分割し、近・現代の整地層を機械力で排土した後、各々発掘調査を行った。その結果馬代小路の側溝、木組暗渠、礎石建物、流路、土壌などを検出し、当該地における宅地の実体を明らかにすることができた。

遺構・遺物 検出した遺構群は、古墳時代後期から室町時代に至るが、奈良時代以前、平安時代、室町時代と三時期に分れる。平安時代以前のもはこの付近に存在する集落に、平安時代のもは平安京の宅地に、室町時代のもは耕作に各々関連するもので、平安時代のもが最も顕著なものである。

調査地の基本層位は、現地表面下には0.9～1.6mの現代盛土、20cmの旧耕作土層、5～10cmの暗褐色砂泥層の中世整地層、それより以下は暗褐色砂礫層の地山となる。この面から平安時代を含めてそれ以前の遺構群が検出された。

平安時代以前の遺構は調査区西方で主に認められ、溝や土壌がある。溝は、幅90cm、深さ15cmを測り浅い。土壌は調査区中央北隅で一部を確認しただけであるが、幅4m以

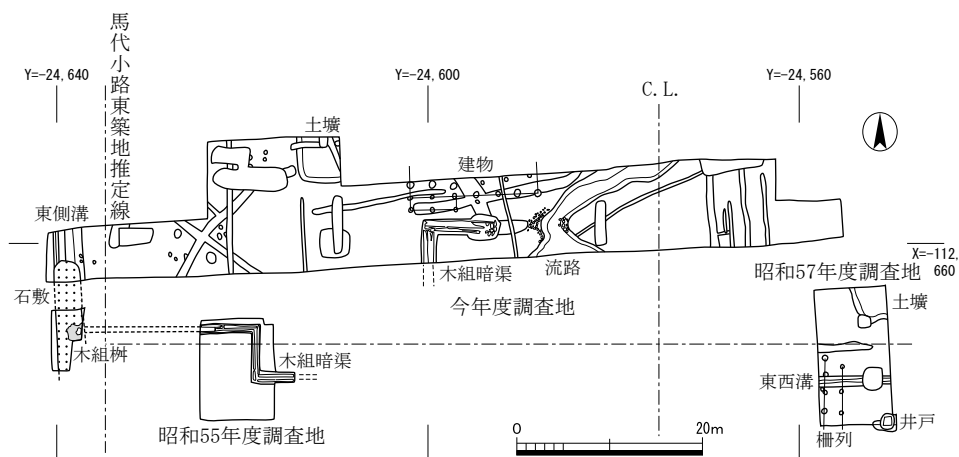


図 59 遺構配置図 (1 : 800)

上の不定形を呈する。埋土中から奈良時代の遺物が小片で点在して出土した。

平安時代前期の遺構には、馬代小路路面、同東側溝 S D 31、柱穴などがある。S D 31 は調査区西端で検出したもので平安時代後期の南北溝 S D 28 に西肩が切られる。確認した規模は、幅 80cm 以上、深さ 50cm を測り、断面逆台形を呈する。遺物のごくわずか小片で出土するに過ぎない。

平安時代後期の遺構には、馬代小路路面、同東側溝 S D 28、木組暗渠、礎石建物、流路、土壙、溝などがあり、検出された遺構群中最も顕著なものである。S D 28 は調査区西端で、15 m にわたって検出した南北溝で、規模は幅 3.5 m、深さ 50cm 以上を測る。底は中央部が窪み土壙状を呈している。しかも調査区北端から 3 m 南に下がったところより南では、幅 3 m、長さ 12 m 以上の長方形を呈する範囲内を、深さ 30cm 程度一段深く掘り窪めている。その中には人頭大から拳大の河原石を 2～3 段敷き詰めていた。また石敷北端から南に 7.5 m の東端部に一辺 1.2 m の木枠組施設も確認した。木枠組は北・南・西の三方だけをやや内傾させて横板を組み合わせたものと考えられる。横板はいずれも石敷きの上に置かれ、南北両脇に細かい河原石を積み、西側の板の脇は人頭大の河原石を 5～6 個ずつ二段に積んで板を固定している。この木枠組のある位置は 1980 年度調査で検出された矩形に折れ曲がる木組暗渠を西に延長したところに相当する。

木組暗渠は調査区中央で矩形を呈した状態で認められた。東西部は幅 90cm で、長さ 8 m にわたり、西端で南に折れ曲がる。南北部は長さ 4.5 m 以上で、幅 70cm と東西に比べ幅が狭くなっている。木組暗渠の掘形は幅 1.5 m、深さ 90cm の逆台形を呈し、底に木組

が設置されていた。木組は、天井板2枚と両側板で構成され、深さは25cmで底板はなく砂利敷だけで、底の勾配はほとんどない。東西部の南側板が径20cm前後の河原石を一列並べた上に据えているのに対し、それ以外のものは両端とその間に適当な間隔で径20cm前後の河原石を置いた上に据えられている。また、側板の上端には適当な間隔で横棧を置き天井板を支えている。

東西部東端より1mの範囲は天井板がなく、その東には底から偏平な河原石を南北に2個ずつ並べ2段階状に据えている。しかも両側板の東端隅内側に南北1箇所ずつ10cm角の杭の痕跡が認められた。

礎石建物は、木組暗渠東西部のすぐ北側で東西6間が認められ、南北は調査区外に広がるため規模は不明である。柱間間隔は、西側4間が2.4mであるが東側2間は2.1mと狭い。西端から2間分には1.5mの庇が取り付く。礎石は、いずれも径25～35cmの偏平な河原石である。木組暗渠と礎石建物の東方には、北東から南西に緩やかに蛇行して向かう幅2.5mの遺水状の流路が認められた。木組暗渠の延長部が交差する付近から南側は、両肩部に特に顕著な小さな河原石が敷き詰められていた。

今回出土した遺物は整理箱で22箱と少なく、時期は古墳時代から室町時代と多岐にわたるが、いずれも小破片で、まとまったものも認められなかった。

小結 今回の調査により、右京八条三坊七町に平安時代後期に属する遺構群が存在することが判明した。そのうち調査区西端で検出した馬代小路東側溝を拡張した石敷施設と木組暗渠は、水利施設の一部と考えられる。特に木組暗渠は、1980年度の調査で検出した木組暗渠と位置・構造などから極めて類似した特徴を持つものであることから、これらが一連のもので連結した可能性が高い。それらは石敷施設の底と標高がほぼ同一であることから、一方から他方へ流れる勾配を想定した施設とは考えられない。しかもそれらが相互に連結しているならば、石敷施設内に溜まった水は取り入れ口と考えられる木枠組から調査区の木組暗渠の東端まで通じていたことになり、東端の木組に天井板がなく階段状の施設を持つことから、その汲み出し口として想定できる。そして石組施設が水位を保持・調整する役割を備えているならば、東端で汲み出す水量を一定程度確保することも可能であろう。このような施設は現在土木工学史では導水管施設の一部であるとの意見もある。

いずれにしてもこのような水利施設を備え、礎石建物に流路が伴うような遺構の配置は、平安京内でも類例がなく、極めて特異な遺跡であり、古代の水利事業を考える上でも貴重な資料といえる。

(堀内明博)

26 平安京右京九条一坊1 (図版1・23)

経過 京都市立八条中学校屋内体育館改築工事に伴う発掘調査である。調査地は平安京右京九条一坊十町にあたり、西寺子院に想定される。また、下層の唐橋遺跡にもあたり、弥生・古墳時代の遺構・遺物の検出も期待できるところである。

調査は、東西 24 m、南北 35 m の調査区を設定したが、掘立柱建物の柱穴検出に伴い一部拡張し、最終的に 865m² を調査した。

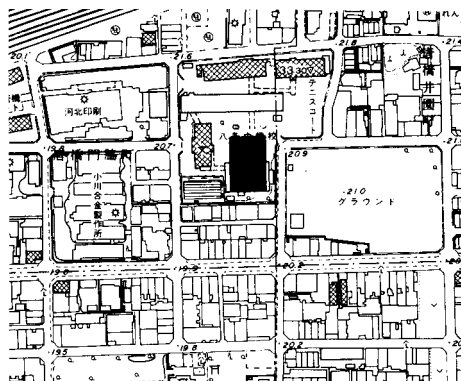


図 60 調査位置図 (1:5000)

遺構 現代整地層を除去すると、全面にわたって平安時代までの遺構が検出できる。これらの遺構のベースとなる層は、調査区中央部で無遺物層の 10YR7/5 黄褐色砂泥層であるが、北側は 7.5YR4/3 褐色砂泥層が堆積する。また、南側には弥生時代から古墳時代の遺物が出土する。流路の堆積が認められた。この内、北部に堆積する褐色砂泥層は、弥生時代から古墳時代初期の遺物を包含する。

検出した遺構には、鎌倉時代以降の畑作に伴う溝多数と、鎌倉時代の石組井戸 1 基、平安時代前期の建物 5 棟や溝、土壌などがある。その他、飛鳥時代の土壌、古墳時代の流路、焼土痕跡、弥生時代の流路、溝がある。

検出した建物は規模の判る建物が 3 棟あり、その他、調査区外に展開すると考えられる柱穴の並びを 2 棟分確認している。

建物 S B 1 は調査区北側で検出した東西 5 間、南北 2 間の四面庇建物である。この建物の南側に接して、同一の柱筋・方向・柱間を持った東西 7 間、南北 2 間の建物 S B 2 がある。S B 1 は一辺約 80cm の方形の掘形を持つが、S B 2 は径 30cm 程の円形の掘形を呈す。S B 1 の南柱筋と S B 2 の北柱筋との距離は、柱穴心々で 2.55 m を測る。

建物 S B 3 は調査区南西で検出した 3 × 3 間の総柱礎石建物 (S B 3 A) である。根固めは、大半が削平または除去されている。掘形は、90 ~ 120cm の円形または方形を呈す。柱穴の断ち割りを行った結果、当初掘立柱建物 (S B 3 B) であったが、根腐れしたために礎石建物に造り替えたことが判明した。S B 2 の南柱筋と S B 3 の北柱筋は、柱穴心々

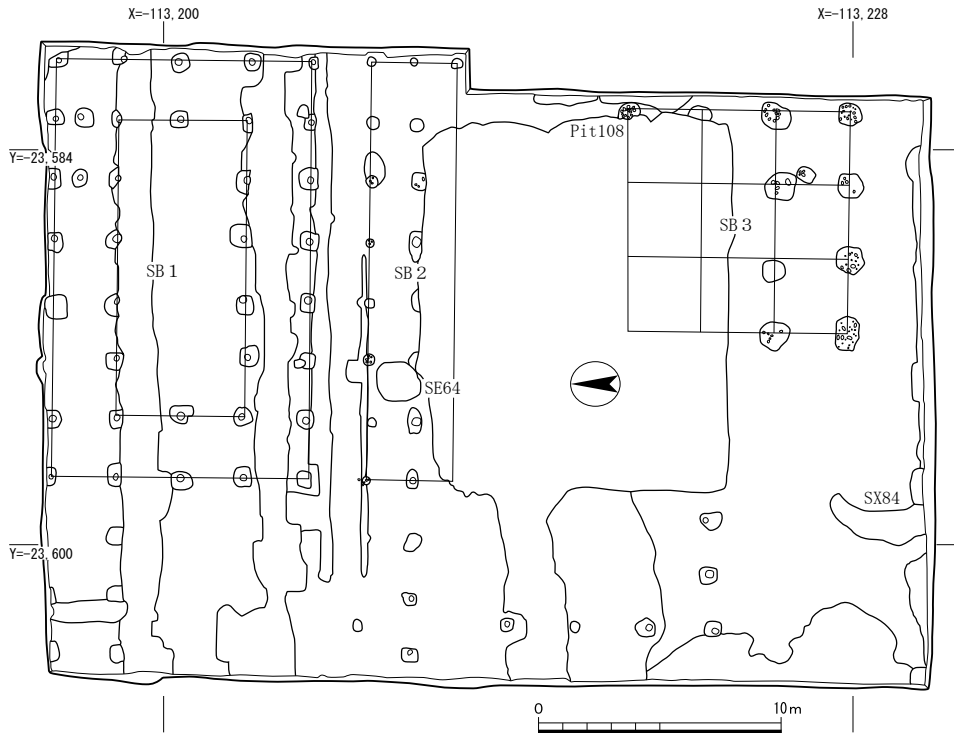


図 61 遺構平面図 (1:300)

で7mを測る。

これら検出した建物の時期は柱穴掘形出土遺物などから、9世紀中頃から終わりまでの幅に入ると考えられる。

土壌 S X 84 は、調査区南部で検出した不定形な土壌で、検出幅 150cm、深さ 35 ～ 50cm を測る。埋土中より、多量の土器が出土した。

井戸 S E 64 は、調査区中央で検出した。不定形な景石風の石を組んで井戸としている。埋土中より多量の西寺所用瓦が出土するが、井戸の構築年代は、鎌倉時代に比定できる。

平安時代以前の遺構は、古墳時代後期の土壌、古墳時代前期と考えられる焼土跡 2 箇所、流路、弥生時代の溝 2 条などがある。

遺物 出土遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石器、銭貨などがある。縄文土器は遺構・層に混入して少量出土している。中期後半北白川 C 式の甕、晚期舟橋式の深鉢がある。また石剣と思われる磨製石器が 1 点出土しているが、縄文時代晩期に属するものと考えられる。

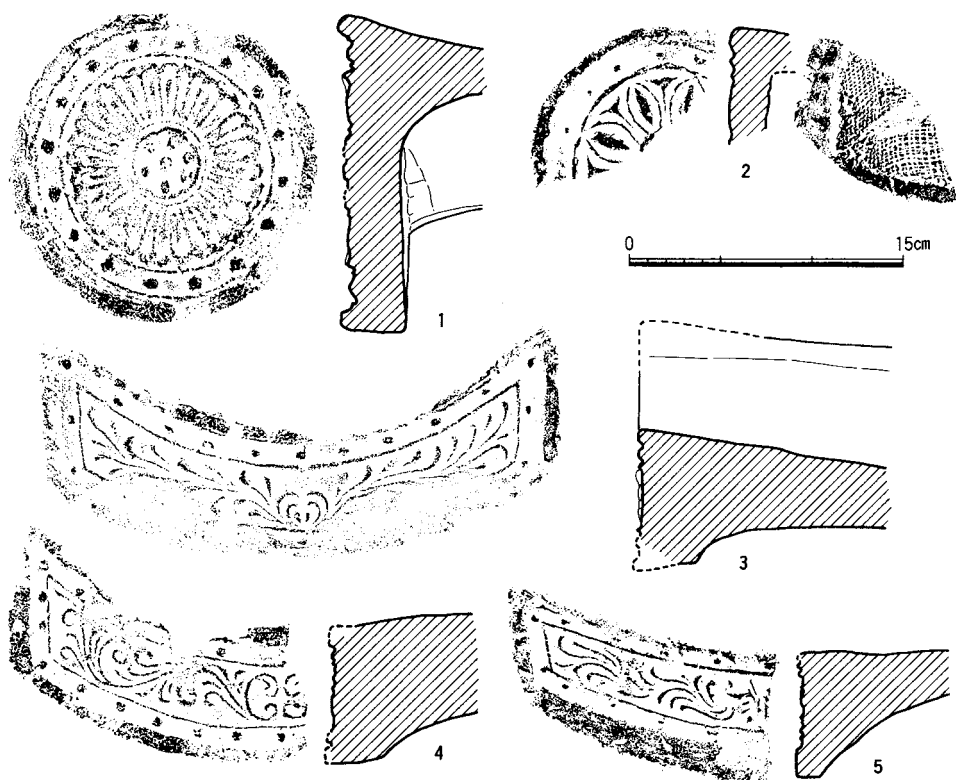


図 62 軒瓦実測図 (1:4)

弥生土器は流路、溝、層などから出土している。畿内第Ⅱ様式が比較的多く出土し、その他第Ⅴ様式までの土器が少量出土する。第Ⅱ様式の土器では壺・甕が、その他の様式の土器には壺、長頸壺、高杯がある。石器では石剣・石斧が出土している。

古墳時代の土器は、流路、褐色泥砂層などから庄内式併行期、布留式併行期、後期の土師器・須恵器が出土する。土師器高杯・椀・甕、須恵器杯身・蓋・壺・甕などがある。また、飛鳥時代に比定できる須恵器杯・壺・土師器椀が土壌から出土している。

平安時代の遺物は各遺構を中心に出土し、出土遺物の大半を占める。この中でも平安時代前期から中期初頭に比定できる遺物が多い。土師器杯・皿・鉢・壺・高杯・甕、須恵器杯・皿・椀・蓋・瓶子・壺・甕・転用硯、黒色土器椀・壺・甕、緑釉陶器椀・皿・耳杯・唾壺、灰釉陶器杯・皿・椀・耳皿・水滴・円面硯や石帯、瓦類などある。

瓦類では軒丸瓦、軒平瓦共に、既往の西寺跡の調査により出土する軒瓦と通有の特長を持つが、図示した軒瓦は建物S B 3 (Pit108) の根固め中より混入して出土したものである。2は、先の尖った花卉と撥形の弁間文を配し、瓦当裏面には粗い布目痕を残す。胎土は砂

粒を含み、硬質の焼成である。

5は、瓦当中央に「修」の裏字を配する均整唐草文とみられる軒平瓦の左半の破片である。胎土には少量の砂粒を含み、焼成はやや軟質である。この軒平瓦と同範例は「今熊野池田瓦窯^註」から出土している。

小結 本年度調査では掘立柱建物、礎石建物、溝、土塋、井戸などを検出した。それら諸遺構、出土遺物の年代は、弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式）・後期、古墳時代前期（庄内式・布留式併行期）・後期、飛鳥時代、平安時代前期から中期初、鎌倉時代に当たる。検出した建物の時期は掘形出土遺物などから9世紀中頃から後半に比定でき、9

世紀末には廃絶したものと考えられるが、出土遺物の詳細な検討を実施していない段階のため、定かではない。本調査による建物群は『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』、『興福寺資材帳』にみる奈良時代寺院の「大衆院」内に存在する「政屋」の建物と規模などが共通することなど、西寺の寺務を司る『政所院』に推定することができるのではないだろうか。したがって、東寺における左京九条一坊十町の地は「大衆院」に推定され、九町に「賤院」と共に「政所院」が置かれているが、西寺においては右京九条一坊十町の地に「政所院」が推定できる。

昭和53年度に今回調査を実施した北側の校舎において発掘調査を実施している。南北3間、東西15間以上の東西建物を検出しており、同じ十町内に位置することから、本年度調査の建物群との関連など、他の子院の復原とも合わせて今後の検討課題として残った。

（菅田 薫）

註 杉山信三・木村捷三郎他『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』

大谷高等学校校寺殿跡遺跡調査会 1984

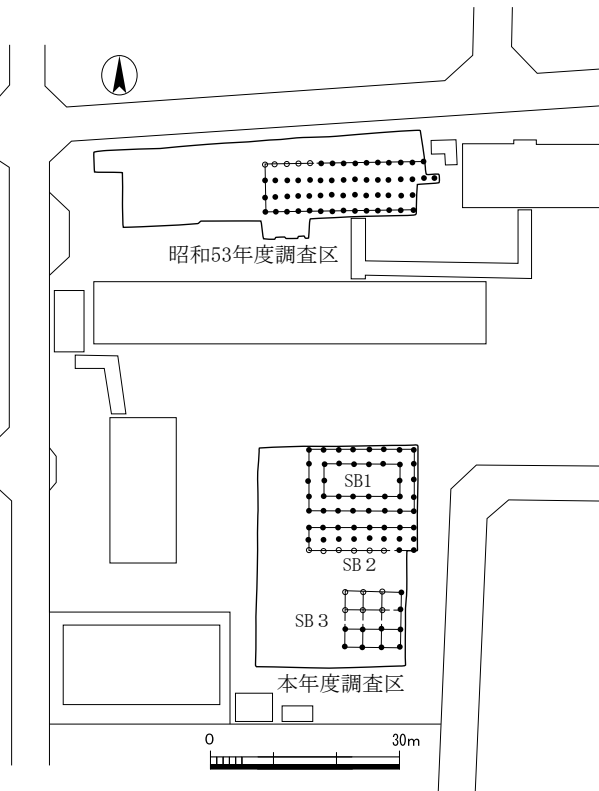


図63 遺構配置図 (1:1200)

27 平安京右京九条一坊 2 (図版1・24)

経過 京都市南区唐橋門脇町に所在するマンション及び工場建設に先立つ発掘調査である。調査地は、前項右京九条一坊十町（八条中学校）調査地点の西にあたり、十五町に位置する。当該地も西寺子院に属し、下層は唐橋遺跡に含まれる。

調査区は稼働中の工場を避けて設定し、約300㎡を調査した。



図 64 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 整地層下に褐灰色泥砂層が薄く堆積する。この層は鎌倉時代以降の遺物を包含する。褐灰色泥砂層を掘り込む少数の柱穴を検出するが、建物としての並びは確認できなかった。褐灰色泥砂層を除去すると東で礫層、西で暗褐色泥砂層となり、両層を掘り込む平安時代の遺構を検出する。発見した遺構には柱穴、溝、土壙、井戸などがある。

土壙 S X 64 は、調査区東で検出した。遺構の東端は攪乱を受ける。南北 4 m、東西は 3 m 以上、深さ約 40 cm を測る。土壙底部中央部分はやや盛り上がり、全体形状は馬蹄形を呈する。埋土には焼土・灰・炭を多量に含み、鉄滓・鞆が多く出土した。他の出土遺物から平安時代前期と考えられる。

土壙 S X 87 B は東西 145 cm、南北 70 cm、深さ 20 cm を測り、隅丸方形を呈する土壙である。埋土は、暗赤褐色泥砂層が堆積する。埋土中からの遺物は少なく、少量の土師器小破片が出土している。土壙底面には破損した平瓦を敷き詰めている。平安時代前期の遺構と考えられる。井戸 S E 219 は、掘形 5 m 弱を測る。井戸枠は、底部の方形枠組と南側の縦板を残すだけである。底部の方形木枠は、丸太材を加工せずに使用している。出土遺物は少ないが、底部から土馬が 1 体出土している。平安時代前期の井戸である。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、鞆、鉄滓、土馬などがある。弥生土器は、後期の壺・甕片が遺構のベースとなる砂礫層から少量であるが出土する。古墳時代の土器は、庄内式併行期の土師器が弥生土器と混在して砂礫層から少量出土する。

平安時代の遺物は、各遺構から出土した。土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器碗・皿・壺・瓶子・甕、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器杯・碗・皿・壺、瓦類（軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦）などがあるが、出土量の大半は瓦類が占める。これら出土遺物のほとんどは、平安京内で出土する土器類と通有の器種・器形であり、瓦類も従前の西寺関連遺跡の調査で出土する瓦類に通有のものである。

小結 土壌 S X 87 B から多くの鉄屑・鞆が出土した。また埋土には焼土・灰・炭が混在し、近くに工房跡の存在を考察することができる。このようなことから、今回の調査地は僅少な調査面積のため確定できないが、当該地周辺を西寺子院の中の「修理所」に推定することができる。前項、右京九条一坊十町（八条中学校）の調査成果と合わせて、西寺子院群の復原を進める上で貴重な成果を得ることができた。

（菅田 薫）

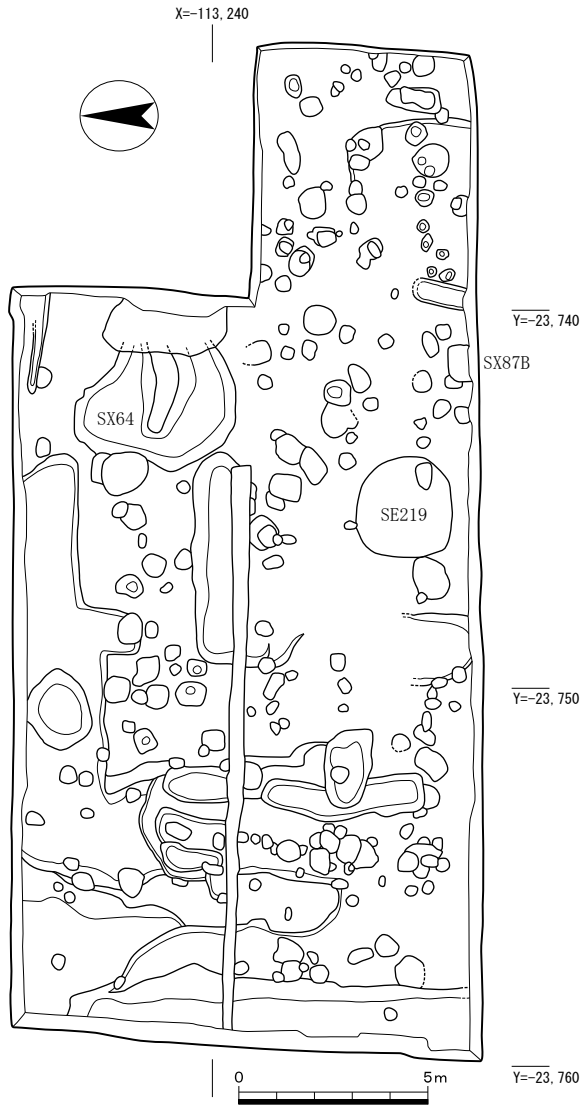


図 65 遺構平面図 (1:200)

Ⅲ 白河街区

28 白河街区・岡崎遺跡1 (図版1・25)

経過 調査地は、京都市動物園内とその北側一帯に範囲が推定される法勝寺の寺域外南側にあたる。試掘調査の結果、平安時代から江戸時代にかけての土器類の他に、多量の瓦と窯体片が出土し、法勝寺を始めとする白河街区の一連の寺院などに瓦を供給した窯及び工房跡が存在している可能性が示唆された。

試掘調査の結果を考慮し、まず敷地の西半に調査区を設定して、遺構の検出状況に応じて随時調査区を拡張することにした。結果的に北東部を一部拡張したに留まった。

遺構 白河扇状地を形成する第8層黄褐色細粒砂～砂礫層が遺跡の基底である。調査区の北部では、基底の砂礫層上に鎌倉時代から江戸時代にかけて連続する整地層が約1m堆積する。調査区の中央部から南部にかけては整地層を認めず、基底の砂礫層上に直接明治時代以降の耕作土が覆る。したがって、整地部分の南端は、高さ約60cmの段になっている。

北部の整地層は、おおまかに第1層から第7層に区分できる。調査は、第3層上面(第

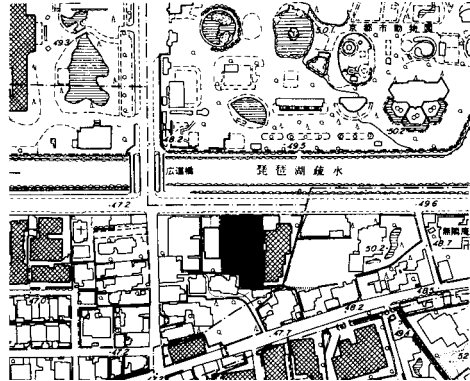
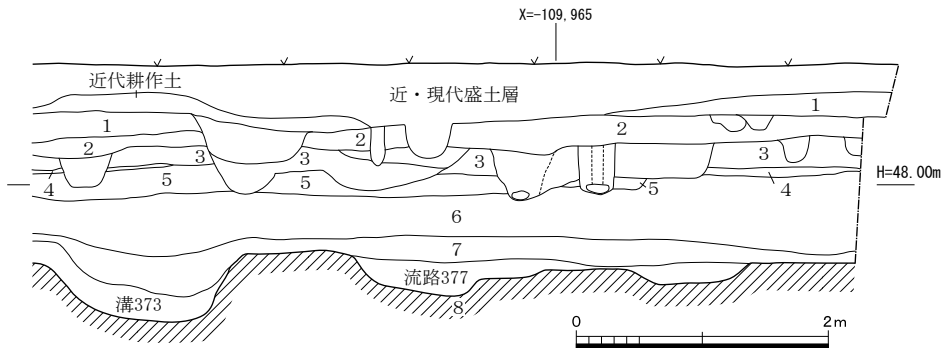


図66 調査位置図(1:5000)



- | | | |
|-------------|--------------------|--------------|
| 1 黒褐色泥砂層 | 4 上部：にぶい黄色粘質砂泥・焼土層 | 6 暗灰黄色泥砂層 |
| 2 暗褐色小礫混泥砂層 | 下部：黒褐色泥砂・焼灰層 | 7 オリーブ黒色砂泥層 |
| 3 褐色泥砂層 | 5 黄褐色泥砂層 | 8 黄褐色細粒砂～砂礫層 |

図67 遺構平面図(1:60)

1 遺構面・室町時代後半)、第4・5層上面(第2遺構面・鎌倉時代から室町時代後半)、第8層上面(第3遺構面・平安時代後期から鎌倉時代)で重点的に行ったが、第3層と第4層の時間差が短く、むしろ第4層と第5層の間に時期的な断絶があることなど、遺構面の把握が不十分なために遺構の理解が不鮮明なままに終わったことは遺憾であった。

北部の整地層である第5層より上位では、柱穴・土壇・溝などを検出し、室町時代後半以降、江戸時代にかけて宅地が連続して営まれていたことを明らかにした。第5層より下位からは鎌倉時代から室町時代前半の土器がわずかながら出土するが、明確な遺構は検出できず、層離面は単に整地の単位を示すものと思われた。

建物の平面形をある程度認識できたのは、第1遺構面の建物跡1のみである。規模は東西方向が5.5mで3間、南北方向は2間分検出したが、北面する部分を検出できず、全体の規模は不明である。建物の方位は、北で東に10度から12度振れる。柱穴が2基以上切り合う部分を認め、建て替えもしくは補修の跡が窺える。また第2遺構面上では、建物1

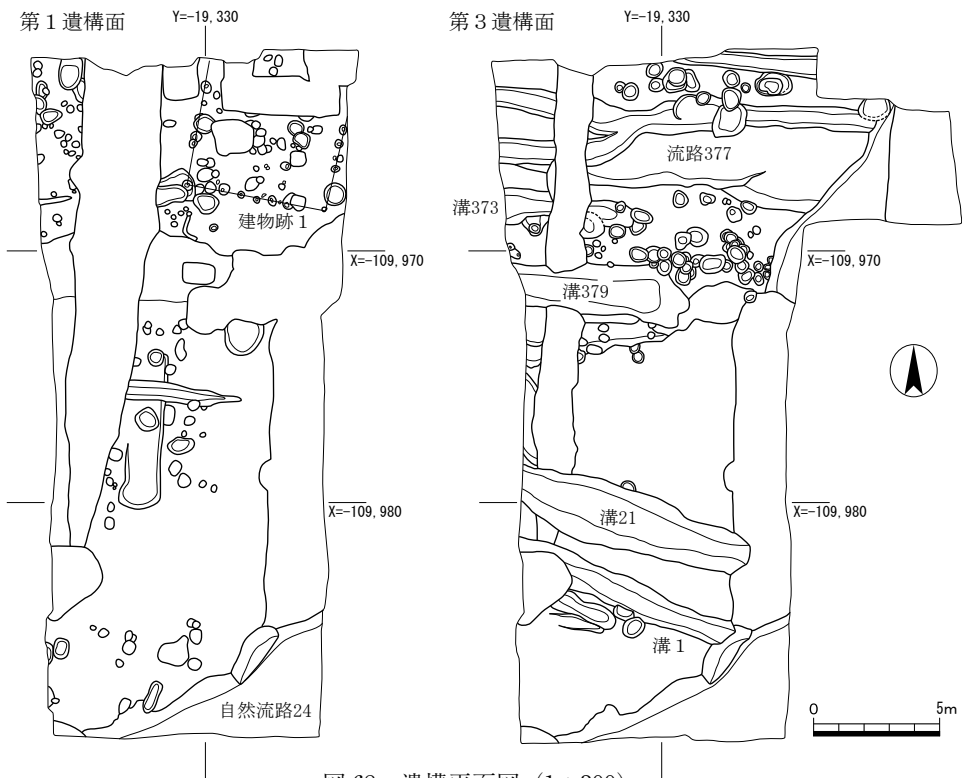


図68 遺構平面図(1:300)

と重なる範囲が赤褐色に焼き締まり、周辺には焼灰の堆積を認めた。このことから、建物1に先行する建物が存在し、焼亡したものと思われた。これら一連の遺構は、室町時代後半のものである。この他に、調査区の南東隅に、北東から南西方向に流れる自然流路24を検出した。琵琶湖疏水敷設以前の白川旧流路とほぼ重なり、白川の旧河道もしくは氾濫原の跡と考える。埋土から室町時代の土師器皿などが出土した。

第3遺構面で検出した遺構は、土壌、溝、流路などである。流路377は東西方向の河道であるが、自然の流路が人工的なものかは不明である。溝373と溝379は東西方向、溝1と溝21は北西から南東方向で、遺構の性格は不明だが、どの溝も多量の瓦を包含する。これらの遺構は平安時代末期から鎌倉時代のものである。なお、期待された瓦窯もしくは工房跡は検出していない。

遺物 遺物の9割以上は瓦類である。瓦類が特に集中して出土したのは、中世の整地層と第3遺構面の溝、土壌などである。軒瓦は、約400点出土している。軒丸瓦のうち約半数は巴文、軒平瓦の約半数が剣頭文で、六勝寺関連の調査で出土する瓦類の中では全体的に新しい様相を示す。また、窯体片が多量に出土した他、焼成不良の瓦と考える粘土塊が出土し、遺構としては検出されなかったものの、近くに平安時代末期から鎌倉時代にかけての瓦窯が存在したと思われる。しかしながら、出土した瓦の中に焼き損じの製品は極めて少なく、出土した大量の瓦と瓦窯との関係については、今後の整理作業を待ちたい。なお、出土した窯体片はロストル窯の牀の部分にあたるものが多い。

また、遺構は検出できなかったが、岡崎遺跡に関わる遺物として、古墳時代前期の土師器高杯脚部と古墳時代後期の須恵器杯が、平安時代から鎌倉時代の遺構堆積土から出土している。第8層以下の堆積層からは、人工的な遺物は出土していない。

小結 調査の結果、発見が期待されていた瓦窯及び工房跡は検出されなかったが、遺物の様相から近隣に瓦窯が存在した可能性は高く、今後周辺の調査の際には瓦窯及び工房跡の存在に留意する必要がある。また、六勝寺の造営以後、当地に街区が形成されていたこと、白川の流路跡と考える遺構を検出したことなど、中世以降の白河街区の景観を知る上で重要な知見を得ることができた。

(内田好昭)

29 白河街区・岡崎遺跡跡2 (図版1・26)

経過 本調査は、左京岡崎天王町に所在する住宅新築工事に伴って事前に実施したものである。調査地は、六勝寺の中でも最も代表的な法勝寺の北、白河街区の北東隅に位置し、周辺には平安時代中期に創建された東光寺や、鎌倉時代末期創建の元応寺などの存在が知られる。現在も周辺には岡崎神社や南禅寺、黒谷の金戒光明寺などの神社仏閣が点在する。また、弥生時代から古墳時代の集落で

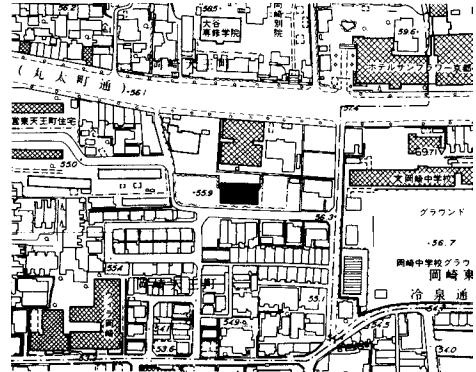


図 69 調査位置図 (1:5000)

ある岡崎遺跡にも相当することから、これらに関連する遺構遺物の存在が予想された。まず、試掘調査を行った結果、平安時代から室町時代に至る遺構群が確認されたため、本調査の運びとなった。調査は、敷地内に東西 26.5 m、南北 15 m の調査区を設置した。その結果、古墳時代から江戸時代に至る遺構群が確認された。

遺構 調査地の基本層序は、地表下より近・現代整地層 (0.9 ~ 1 m)、江戸時代のオリーブ褐色泥砂層 (30cm)、同暗オリーブ褐色泥砂層 (25cm)、鎌倉時代の黒褐色砂泥層 (10cm)、時期不明の褐色泥土層、地山の黄灰色泥砂層となる。江戸時代の遺構群は暗オリーブ褐色泥砂層、室町時代の遺構群は黒褐色砂泥層、平安時代から鎌倉時代の遺構群は黒褐色泥土層の各層上面で検出した。

検出した遺構群は、古墳時代から江戸時代に及び、遺構総数は 134 基を数える。それらは古墳時代、平安時代、鎌倉時代から室町時代、江戸時代の四時期に大別できる。中でも、鎌倉時代から室町時代の遺構群が主要なもので、以下、寺院に関連するものの概略を記す。

平安時代後期の遺構は、調査区中央西寄りでも南北溝 1 条を確認したに過ぎない。溝 S D 123 は幅 2.2 m、深さ 70cm を測り、断面逆台形を呈す規模の大きなものである。埋土中からは灰、炭と共におびただしい量の遺物が出土した。

鎌倉時代の遺構は、調査区全面に確認され、池状落込、南北溝、柱穴、土壇などがある。池状落込は、調査区西南部で一部分だけを確認したもので、東西・南北 8 m 以上を測る大規模なものである。遺構中から出土する遺物は 13 世紀後半のものが主体で、短期間に廃

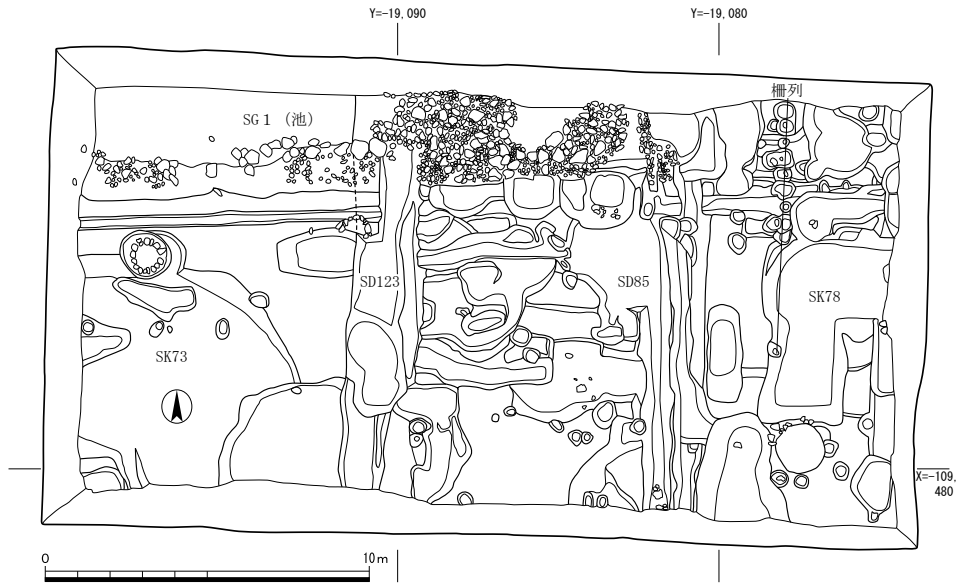


図70 遺構平面図 (1:200)

絶したものであろう。南北溝は調査区東半で1条確認し、幅1m、深さ35cmを測る。落込と溝間で、10数基の土壌を確認したが、いずれも形が不定形でしかも規模も様々あり、底部も凸凹で性格不明のものである。

室町時代の遺構も調査区全面で確認される。方形池の一部、柱列、瓦積施設、南北溝、土壌などがあり、遺構に重複関係がみられることから、これらは更に二時期以上に細分できる。池SG1は、調査区北端で一部だけを確認した東西16m以上を測る大規模なもので、確認した南肩と東南隅には石組施設が認められる。石組はまず底に人頭大以上の河原石を据えるが、上段に行くに従い石の規模は小さくなり、肩部は拳大の河原石や瓦片を敷き詰めている。なお東南隅の施設は、当初瓦積みであったが、後に石組に造り替えられ、更に修復されていることが判明した。柱列は調査区東北部で南北に1列確認され、二時期以上の建て替えが認められる。南北溝SD85は、鎌倉時代の南北溝に西接し、柱列にほぼ並行する素掘りの溝である。土壌の内、主要なものには調査区東端で確認したSK78がある。この土壌は、矩形を呈し、底部は平坦で泥土層がやや厚く堆積する。この層からは、木製品が出土した。土壌と柱列は切り合い関係があり、柱列が一時期新しいことが判明した。

江戸時代の遺構は、石組溝、瓦製排水施設、礎石、水溜施設、東西・南北溝、柵列、カマド跡、方形土壌、石組井戸、土壌などがある。東西溝は調査区北寄りで確認されたもの

で、幅 35～60cm、深さ 20cm を測る断面 U 字形を呈する浅いものである。調査区東端から 3 m では石組となり、調査区東端の南北溝に接続する。この石組のすぐ北に瓦製排水施設が一条あり、東西方向に 4.5 m ほど確認した。東端には付随する施設は認められないが、西端には北に折曲がり水溜施設に接続する。水溜施設は、断面半円状を呈する素掘りのものである。これらの溝で区画された中に顕著な建築遺構はみられなかったが、東西の柵列、石組井戸や各種の土壙群が散在し、調査区の中央付近にはカマド跡が 1 基認められる。

遺物 出土した遺物は整理箱で 240 箱を数え、古墳時代から江戸時代に至るものがみられるが、平安時代後期から室町時代前期のものが大部分を占める。

土器類には、南北溝 S D 123 から 12 世紀のものがまとめて出土した。主要なものでは多量の土師器と共に、灰釉系山茶椀、白磁椀・皿・四耳壺などもみられる。S K 73 から 13 世紀の土師器や石製硯が出土する。S K 78・87 からは 14 世紀の白色土器を含む土師器の完形品が多量に出土し、S K 78 では瀬戸灰釉灯明皿や白磁、青磁の出土が目立つ。

瓦類は、平安時代後期から鎌倉時代に属するものが大部分で、S G 1・S K 72 から主に出土する。それらは、軒丸瓦・軒平瓦、丸・平瓦の他、三角甃の出土がみられることから、周辺に甃敷建物の存在が予想される。軒丸瓦には 8 種 14 点あり、文様は主に三巴文でその他蓮華文や忍冬文も含まれる。軒平瓦は、大部分が鎌倉時代の唐草文で平安時代後期の三巴文、剣頭文、唐草文はわずかにみられるに過ぎない。

小結 今回の調査により、平安時代後期から江戸時代に至る遺構群を検出したことは、当該地に白河街区が形成された時点からすでに何等かの宅地利用がなされていたことが窺えるものである。しかもその利用の在り方は、連続するものではなく各時期で性格が変容していることも判明した。

まずその中で、平安時代後期の南北溝 S D 123 は真北を示し、他の六勝寺の主要伽藍や区画溝の方位と一致するため、白河街区の区割りが当該地まで及んでいたと考えられる。そして、溝の規模が比較的大規模であることから、宅地内の小規模な区画に関連するものではなく、宅地境界を示すものと考えられる。また鎌倉時代後半の石組施設を伴う方形の池と考えられる遺構の存在や、出土遺物中に三角甃や礎盤などが認められることから、当該地は禅宗伽藍の一部に相当する可能性が高い。この遺構群が、文献にみられる東光寺か元応元年（1319）創建の元応寺であるかは今後の課題であるが、これらの遺構は二時期の造り替えを経た後、室町時代前半に廃絶することが判明した。（堀内明博）

IV 鳥羽離宮跡

30 鳥羽離宮跡第 126 次調査 (図版 2 - 3)

経過 調査地は鳥羽天皇陵の南側、及び北向山不動尊の東側に位置する。周辺の調査例をみると第 58 次、第 112 次、第 117 次調査があり、園池遺構が良好に遺存していることが判明している。よって今回の調査でも関連の園池遺構が予想された。

調査区は道路を挟んではいるが鳥羽天皇陵と北向山不動尊に近接したトレンチを設定した。その結果、南東隅で園池の一部（礫敷遺構）を検出したため、東側へ拡張した。

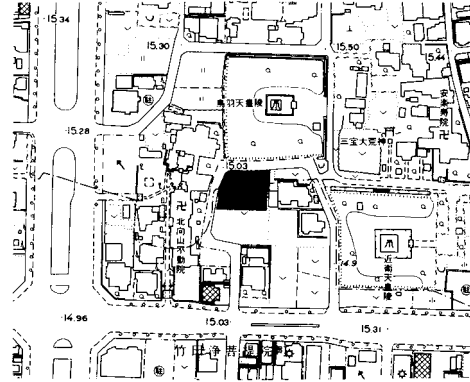


図 71 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 調査区の基本的な層位は地表面より灰オリーブ泥砂層（耕作土、5Y4/2）10cm、暗灰黄色泥砂層（2.5Y4/2）20cm、褐色泥砂層（10YR4/4）20cm、灰黄褐色泥土層（10YR4/2）20cm、暗褐色泥土層（10YR3/3）15cm、褐灰色粘土層（10YR4/1）20cm、を測り、平安時代後期の遺構面のベースとなる黒褐色粘土層（10YR3/1）となる。

今回検出した遺構は、溝、礫敷遺構（落込）、流路である。溝は北東から南西の方向である。幅は 2 m、深さ 0.1 m ほどで非常に浅い。上部が削平され、底部のみ残存していると思われる。礫敷遺構も同様な方向を持つが、規模はつかめない。深さは 0.2 m 程度落ち込み、その底部に礫を敷いた遺構で、園池の一部と考えられる。

流路は調査区の南東部で検出しており、北東から南西方向へ流れる流路の西肩部にあたる。上層からは、11 世紀に属する土師器皿が出土している。鳥羽離宮が造営される以前の流路である。

出土遺物は、整理箱で 1 箱を数えるに過ぎない。古墳時代から江戸時代まで及ぶが、いずれも小破片ばかりで計測できるものはない。古墳時代後期の須恵器杯・甕、平安時代後期の土師器皿や瓦器椀、輸入陶磁器などがみられる。

小結 今調査では鳥羽天皇陵に関係する遺構や園池などが期待されたが、調査区の南東

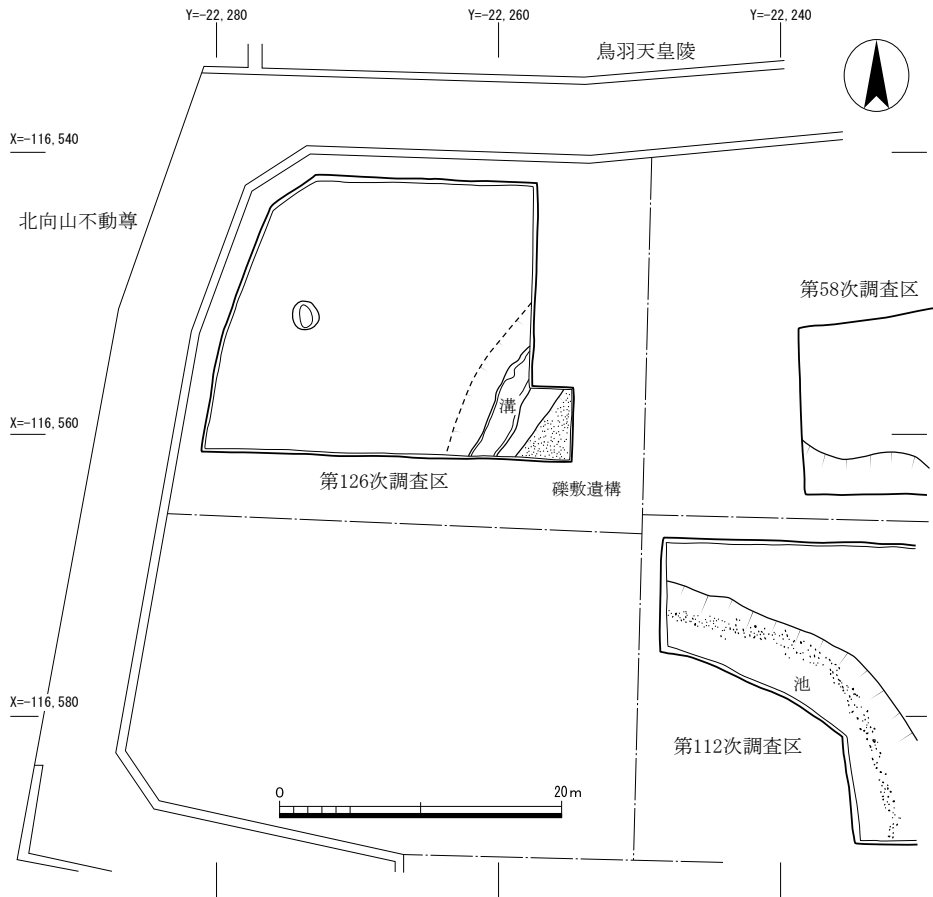


図72 調査区配置図 (1:500)

隅で園池の一部と思われる磔敷遺構と溝1条を検出したに留まった。それ以外の部分では、わずかに土師器皿片や瓦が出土し、鳥羽離宮期の整地層と考えられる。また近辺の調査例に比べ極端に遺物の出土量が少ないことから、磔敷遺構以西は築山などの庭園遺構があり、それが削平されてしまった可能性がある。砂磔遺構は一部検出したに過ぎず、南側へ展開することは明らかで、隣接する畑地では園池が良好に遺存しているであろう。

(前田義明)

31 鳥羽離宮跡第127次調査 (図版2-3・27)

経過 当調査は事務所建築に伴う発掘調査である。当初、試掘調査を実施して、建物跡の礎石あるいは根石と土器を検出したため、発掘調査に移行した。調査地はこれまで農地として利用されてきた。まず耕作地を機械によって排除したところ、真下に遺物包含層が認められ遺構を検出した。その主要な遺構には、平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物の柱穴が多数あり、また調査区南部では、東西方向の溝2条を検出し、土器類がまとまって出土した。

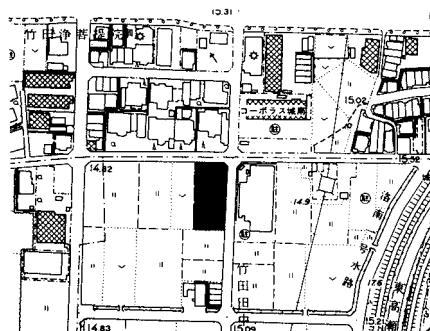


図73 調査位置図 (1:5000)

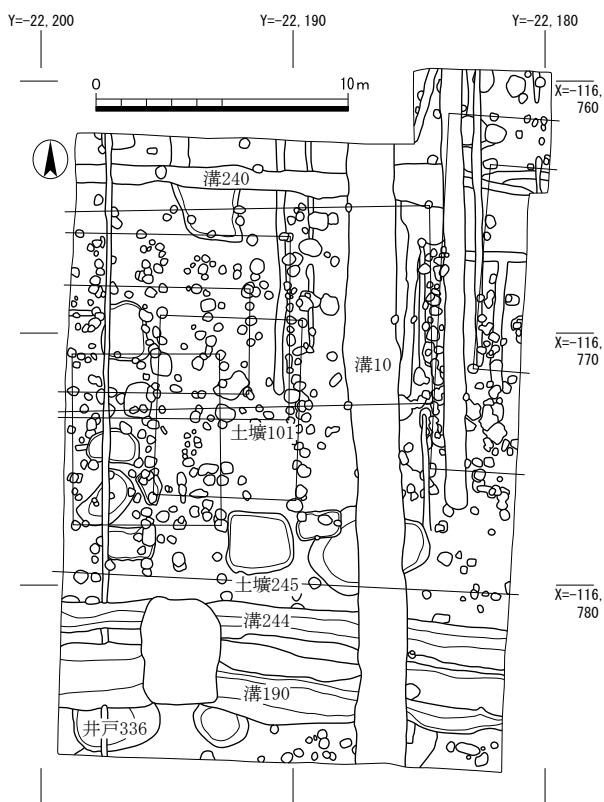


図74 遺構平面図 (1:300)

遺構 調査区の基本層序は、地表面から灰オリブ色砂泥層（耕作土）20cm、にぶい黄色泥砂層10cm、黄褐色砂泥層（第1層）20cmの順で、オリブ褐色砂泥層以下が地山層である。検出した遺構は、平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物に伴う柱穴群・溝・土壙などである。柱穴は460基を数え、重複が激しい。根石を置くものや、素掘りのままの柱穴があり、一部柱根が認められた。建物の平面形は柱穴が重複しているため、まとまりづらいが、建物跡7棟と柵列1条を復原した。しかし、柱間隔は不揃いのところもあり、確定はできない。調査区の南部では、東西方向の溝を

2条（溝190・溝244）検出した。溝190は幅が2.5m、深さは0.6mで、溝244は幅が1.5m、深さは0.5mを測る。両溝からは、完形に近い土器類が多く出土した。土器には時期差が認められ、溝190の方が新しい。この2条の溝より北は柱穴が密集し、溝244の北側に溝と平行して柵列が認められる。また遺構面のベースとなる土層も溝の南側は軟弱であり、溝190・244は屋敷の境界に当たるかも知れない。

遺物 今調査では、平安時代後期から室町時代にかけての遺物が出土した。そのうち、平安時代末期から鎌倉時代にかけての土器類が最も多い。平安時代後期（鳥羽離宮期）の遺物は、瓦類、土師器、銭貨（宋銭）などがみられる。銭貨は、「淳化元寶」、「咸平元寶」、「景德元寶」、「皇宋通寶」、「治平元寶」、「元豊通寶」がある。また注目される輸入陶磁器として、破片ではあるが北宋の滋州窯白地黒かき落としの壺がある。体部と底部の破片で、花紋（牡丹）を描く。

溝244と溝190から土器類がまとまって出土しているため、ここでは完形に近い土師器皿、瓦器碗・皿・羽釜、灰釉系山茶碗を図示する。（図75）。溝244の遺物には土師器皿、瓦器碗・皿、灰釉系山茶碗がある。土師器皿は法量によって大と小に分けられ、大は口径12.8～15.9cm、器高2.1～3.5cm、小は口径8.5～10.2cm、器高1～1.8cmを測る。瓦器碗は平たい底部に断面三角形の高台を貼り付け、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部の内側には沈線を施す。体部内面はヘラミガキし、底部の見込みにらせん状の暗文を施す。体部外面はまばらにミガキを入れるもの（15～19）やミガキをはぶいたもの（20・21）がある。口径は13.6～15.4cm、器高4.6～5.9cmを測る。瓦器皿は土師器皿と近い法量で口縁部の内外面をヨコナデ後体部内面をミガキ、底部内面の暗文は中心を通る放射状の直線文とその周囲に円を描く。口縁部に煤が付着しているため灯明皿として用いられていた。瓦器碗（19）は底部外面に「十」字を墨書している。山茶碗は糸切り痕を残す平たい底部に断面台形の高台を貼り付け、体部は斜め上方へ真っ直ぐ延びる。口縁部はやや肥厚させて上方へつまみ上げるようにヨコナデ。高台には糊の圧痕が認められたため、糊を敷いた上で乾燥させていたようである。

溝190の出土遺物には、土師器皿、瓦器碗・皿・三足羽釜がある。土師器皿は、大が口径12.2～13.3cm、器高2～2.4cm、小が口径7.6～9.4cm、器高1.4～2.0cmを測る。瓦器碗は体部外面のミガキがはぶかれ、内面のミガキも粗い。高台も貧弱である。瓦器皿は器高が低くなる。三足羽釜は丸い体部で端部に凹線を設ける口縁が付き、口縁からやや下位に鏝を貼り付ける。鏝から下の体部には縦方向に3本の足を付ける。足の断面は円形を呈し、先端が外側へ少し開く。体部内面は横方向のハケ目、外面はオサエとナデ調整を施

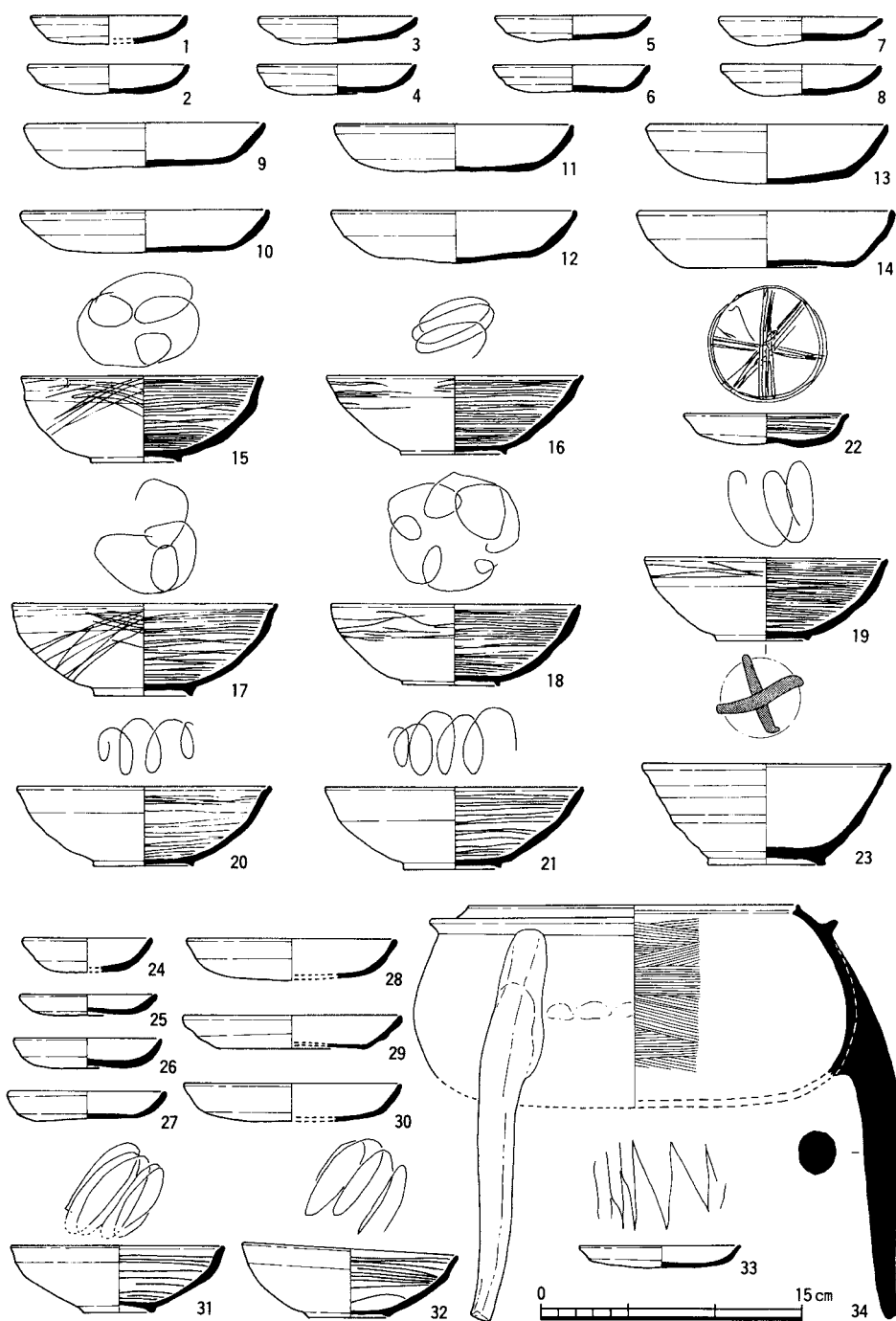


图 75 沟 190·244 出土土器实测图 沟 244:1~23 沟 190:24~34 (1:4)

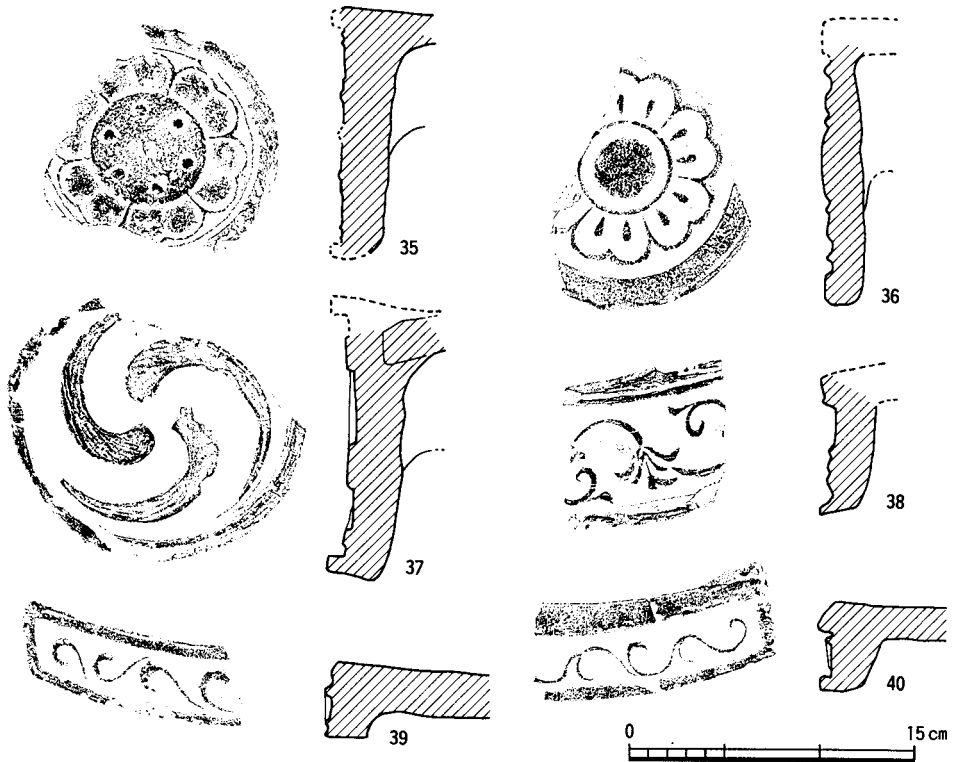


図76 軒瓦実測図(1:4)

す。輸入陶磁器は青磁の壺・椀・皿、白磁の椀がある。いずれも小破片である。瓦は平安時代後期に相当するものがわずかに出土した。軒平瓦 35～37は播磨系で、それぞれ井戸 336・溝 190・第1層から出土した。軒平瓦 38・40は尾張系で、溝 10・土壙 245から、軒平瓦 39は河内系で、土壙 101から出土した。

小結 当該地はこれまでの調査の結果、河川あるいは湿潤な地域と推定されてきた。しかし予測に反して耕作土層直下に、安定した黄褐色砂泥層が広がり、掘立柱建物や溝などの遺構を検出することができた。調査区は現在、城南宮道と呼ばれる東西方向の道路の南側に接している。城南宮道は、鳥羽離宮造営時まで遡ることが推定されているため、今調査で検出した掘立柱建物は、道路に面して建てられた建物群とも考えられる。また調査区の南半で検出した2条の東西溝は、これらの屋敷の区画に関するものではなかろうか。当該区の建物は、出土遺物からみると平安時代末期から鎌倉時代にかけて営まれており、その後廃絶しているが、時期的に鳥羽離宮が荒廃していく段階に当たり、鳥羽離宮とこの中世集落がどういう関係にあるか、また集落の範囲など今後の課題である。(前田義明)

32 鳥羽離宮跡第 128 次調査（図版 2 - 3）

経過 調査区は北殿跡の推定地内に位置し、これまでに第 83 次調査や第 95 次調査を行い、北殿に営まれた庭園遺構などを発見している。今回の調査地は、第 95 調査地のすぐ北側である。工事に先だって実施した試掘調査で、庭園遺構の一部を検出したため発掘調査を行うことになった。

遺構・遺物 調査区は、調査地の北端と南端との 2 箇所に設けた。その結果、北側の第

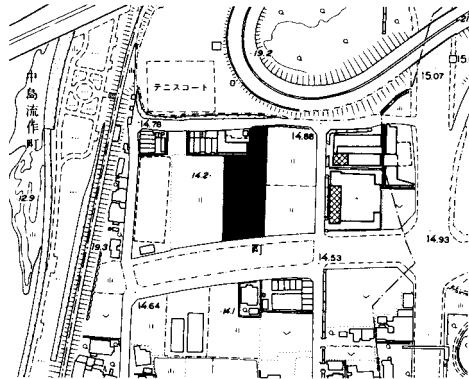


図 77 調査位置図 (1:5000)

1 調査区では、河原石を並べた溝を、南側の第 2 調査区では鳥をそれぞれ検出している。

第 1 調査区で発見した溝は、20cm から 50cm の河原石を並べたもので、内法 50cm、深さ 20cm である。底部には瓦片を敷いていた。

第 2 調査区で検出した庭園遺構は、第 95 次調査で明らかにした鳥の北半部である。今回の調査によって、この鳥は南北約 20 m、東西約 15 m、高さ 1 m の規模であることが明らかとなった。また、鳥の構築土を掘り下げたところ、地業のための溝を発見した。その溝は幅 3 m、深さ 0.5 m で、溝内は粗い版築によって地固めしている。

遺物は、第 1 調査区の溝や第 2 調査区の鳥の構築土から主に出土した。遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦などである。平安時代後期に属するものは、土師器の一部と瓦片で、そのほとんどは平安時代前・中期と古墳時代の遺物である。今回、第 1 調査区の溝内から、この付近の調査では初めて尾張国産の軒平瓦が出土した。

小結 今回の調査によって、苑池北側に造営された遺構の一部を確認することができた。苑池の北側で、北殿に関連するような遺構は今までに発見例はなく本例が初めてである。建物遺構は残念ながら確認できなかったが、この付近に作られていた可能性が極めて高い。一方、第 95 次調査で発見した遺構が、鳥であることが判明し、その規模についてもほぼ確定することができた。また、構築工法も復原できるようになった。 （鈴木久男）

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 63 年度 1989 年報告

33 鳥羽離宮跡第129次調査(図版2-3)

経過 調査地は、近衛天皇陵(安楽寿院南陵)の南東部に接する。当地の西側は、1978年度に第44次調査を実施しており、東西方向に並べられた石列や堤の一部などを確認している。今回の調査は、民家の建設が計画されたため工事に先だって実施した。

遺構・遺物 検出した遺構は、東西方向及び南北方向の溝である。幅や深さ、時代は異なっている。この中には、近衛天皇陵の南を限る堀の一部も含まれている。また、室町時代の東西方向の素掘溝も見受けられた。ここでは、近衛天皇陵に関わる東西方向の溝についてみてみよう。

この遺構の南岸には、自然石を東西方向に並べ、肩口から底にかけての土留めとしている。今回の調査では、この石列を東西15mにわたって検出した。使用していた石の大半は、角が丸くなったもので、角張ったものは少ない。石の種類には、砂岩、玲岩、珪岩、黒雲母花崗岩、頁岩ないしは粘板岩、チャート、泥質砂岩などが見受けられた。これらの石は、長い方を水平にしていたが、中には立てたものもある。石はただ単に、溝の肩口に置いたのではなく、据え付ける位置に溝を掘り、その中に20～30cmの石を入れ根元を固めた後に据えている。調査区の東側において、この溝が北側へ折れ曲がることを確認したが、東限の溝にも同様な石列があるかどうかについては確かめることができなかった。

遺物の量は全体に少なく、土師器、瓦、木製品がわずかに出土しただけである。

小結 今回の調査によって、第44次調査で明らかにした石列の東半部の様子や、近衛天皇陵の南を限る溝の東端を確定することができた。これにより、第112次調査で発見した堤(南東隅)の内法と今回検出した南東隅との距離は約69mであることが判明した。この寸法は、白河天皇陵(成善堤院陵)を取り囲む堀の外法間の距離とほぼ同じである。この時代の陵墓を知る上での貴重な資料になった。(鈴木久男)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和63年度 1989年報告

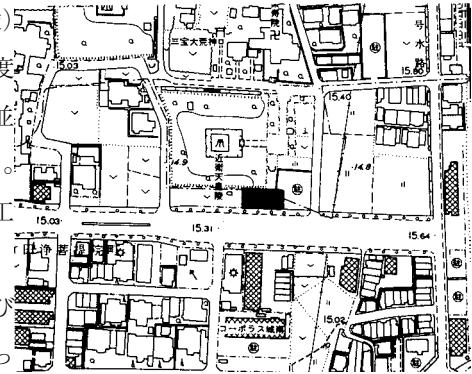


図78 調査位置図(1:5000)

34 鳥羽離宮後第130次調査（図版2-3）

経過 当調査地は、鳥羽離宮東殿の推定地の西北部にあたる。東殿北辺の調査は、過去に小規模な試掘程度の調査しか行われておらず、その実体は不明であった。この地にマンション建設が計画されたため、工事に先立って試掘調査を実施した。その結果、平安時代後期から室町時代末期に至る遺構が良好に遺存していることが判明したため、発掘調査を行うこととなった。

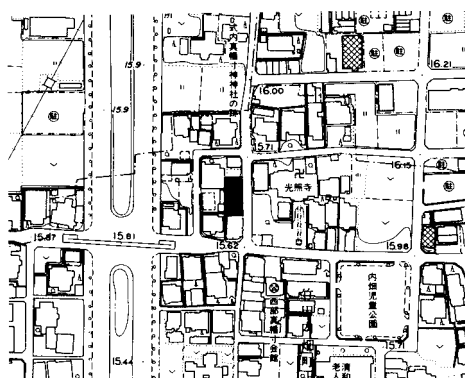


図79 調査位置図（1:5000）

遺構 調査区の基本層序は、現地表下0.8mが盛土及び旧耕作土で、その下が第1遺構面となる。遺構面は合計3面確認した。第1遺構面では、調査区北東部で池状の落込を検出し、南西から池に流れ込む溝も検出している。第2遺構面では、新旧二時期に分れる南北堀と東西堀を検出し、これらの堀で区画された宅地の南東隅に竪穴状の貯蔵施設を確認している。この貯蔵施設は、版築状の貼床を持ち、壁の四周には板を貼り付けて杭を打ち込み固定していた。これらの杭や板は一部炭化しており、火災にあったことを示している。第3遺構面では、平安時代後期の東西溝や土壌を検出している。

遺物 今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして45箱分である。平安時代後期の遺物としては、第3遺構面で検出した調査区南端の東西溝から、多量の土師器がまとめて出土している。これらの中には、底部に回転糸切りや回転ヘラキリ痕跡を残す轆轤成形の土師器皿が出土しており、西国地方から搬入された土器群と考えられる。また、第2遺構面の堀からは、平安時代末期から室町時代の土師器や輸入陶磁器片と共に、漆器、下駄、曲物、草履芯などの木製品が出土している。瓦類は全体に少ない。

小結 今回の調査で検出した堀は、敷地を区画する堀の一部である。このあたりは、中世において在地豪族が居を構えた地域であり、内側に貯蔵施設を伴っていることから屋敷の東南隅を検出したと考えられる。さらに、この屋敷の東限は、現在の油小路の西端にほぼ沿っていることから、京域から鳥羽離宮へ繋がる油小路の成立時期を考える上で重要な資料となるであろう。（網 伸也）

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

35 鳥羽離宮後第 131 次調査 (図版 2 - 3)

経過 調査地付近は北殿推定地内にあたり、ここ数年の間に数次にわたる発掘調査で、庭園遺構や基壇状の高まりを明らかにしている。今回の調査は、倉庫建設に先だって行った試掘調査で庭園遺構の一部を発見したために実施した。昭和 60 年度に調査地の東側で行った第 115 次調査では、東西方向に細長く作られた島を発見している。

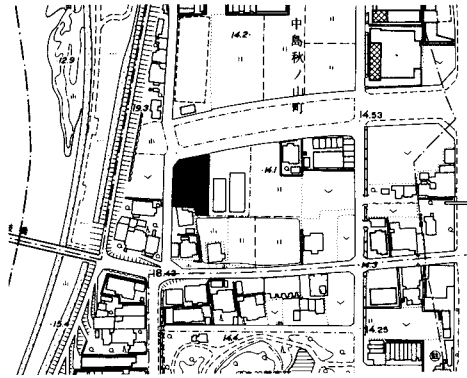


図 80 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 調査の結果、池、島、景石、張出状の遺構などを明らかにした。池は、北殿内に設けられた苑池の一部で、島近くの池底には播鉢状の窪みが認められる。池内の堆積土は、暗緑灰色粘土層であり、腐植土層などは一切みられない。水位は、標高 12.5 m 前後と考えている。

島は、調査区の南半分で検出し、北及び西側は池跡である。島の東半部は、第 115 次調査で明らかにしている。今回調査した部分での島の高さは、0.8～1.1 m である。島の北西部、標高 12.5 m 前後の位置に 3 個の景石が据え付けられていた。第 115 次調査や第 118 次調査でも、ほぼ同じ高さで景石を検出している。なお、島の構築工法を調べるために断割り調査を行ったが、第 115 次調査とは全く違った状況であった。すなわち、第 115 次調査では、古墳時代や平安時代の前・中期の遺物を含む土を粗く版築していたが、今回の調査では玉石を盛り上げて、その上を土で覆って島の形を造り上げていた。

遺物は、平安時代や古墳時代の土器が島の構築土内から出土した。しかしながら、いずれも小片で図示できる遺物は少なかった。

小結 現在までに確認した島の規模は、東西約 42 m、南北約 15 m である。構築された年代は、版築土から出土した土師器などから 12 世紀の前半と考えている。断ち割り調査の結果、島の基底部から池や湿地を示す堆積土がみられることから、池を埋め立てて構築したことが明らかとなった。北殿の苑池内で確認した島は 2 例ある。第 95 次や第 128 次調査で明らかにした島は、本例よりも先に構築されているが、最終的には双方とも勝光明院に関係したものと考えている。

(鈴木久男)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成元年度 1990 年報告

V 中臣遺跡

36 中臣遺跡第70 - 1次調査 (図版2 - 2・28)

経過 本調査は、都市計画街路西野山・大宅線の道路改良工事に伴う事前調査である。調査対象地は、「栗栖野丘陵」と呼称される。下位洪積段丘上のほぼ中央から旧安祥寺川に至る西向き緩傾斜地に位置し、中臣遺跡を横断する形で幅20m、東西約400mにわたる。調査区は、東からⅠ～Ⅵ区までを設定し、本年度はⅠ・Ⅱ・Ⅳ～Ⅵ区の調査を実施した。調査地周辺では、昭和59年度に公共下水道工



図81 調査位置図 (1:5000)

事に伴う立会調査が行われ、本調査地の南方では古墳時代の遺構などが、またⅣ～Ⅵ区を含む北方で平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物包含層が確認されている註。

遺構・遺物 Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区では表土・旧耕作土・床土を除去した地表下40cm前後で、Ⅴ・Ⅵ区では地表下約10cm前後で地山に達する。各調査区とも遺構面が削平され、また現代に掘削された大形の廃棄坑も多く、遺構の遺存状況は良好ではなかった。Ⅰ・Ⅱ区は、全面的に遺構面が削平を受けており、遺構は遺存していなかった。Ⅳ区では、溝や柱穴などを検出しているが、遺物がほとんど出土せず、遺構の時期は決めがたい。Ⅴ区は、調査区の東半と西半との遺構の遺存状況が異なる。東半は、削平を受けたものと考えられ、遺構密度は疎である。これに対して、西半は遺構密度が密で、鎌倉時代から室町時代の溝、土坑、柱穴など多数の遺構を検出した。Ⅵ区は、東半部と西半部に調査区が分かれる。西半部は、全体に大規模な攪乱を受けているため、遺構は皆無であった。東半部では、遺存状況は良くないが、平安時代中期の東西2間×南北2間の掘立柱建物を1棟検出している。

遺物は、各調査区から出土しており、整理箱に7箱である。各調査区の攪乱坑から出土した近世以降の遺物が最も多い。平安時代・鎌倉時代・室町時代の遺物は、ほとんどが小片であるが、主にⅤ・Ⅵ区から出土している。

小結 本年度調査では、各調査区とも少なからず削平・攪乱を受け、遺構の遺存状況があまり良好ではなかった。しかし、Ⅴ区では鎌倉時代から室町時代を中心とする多くの遺

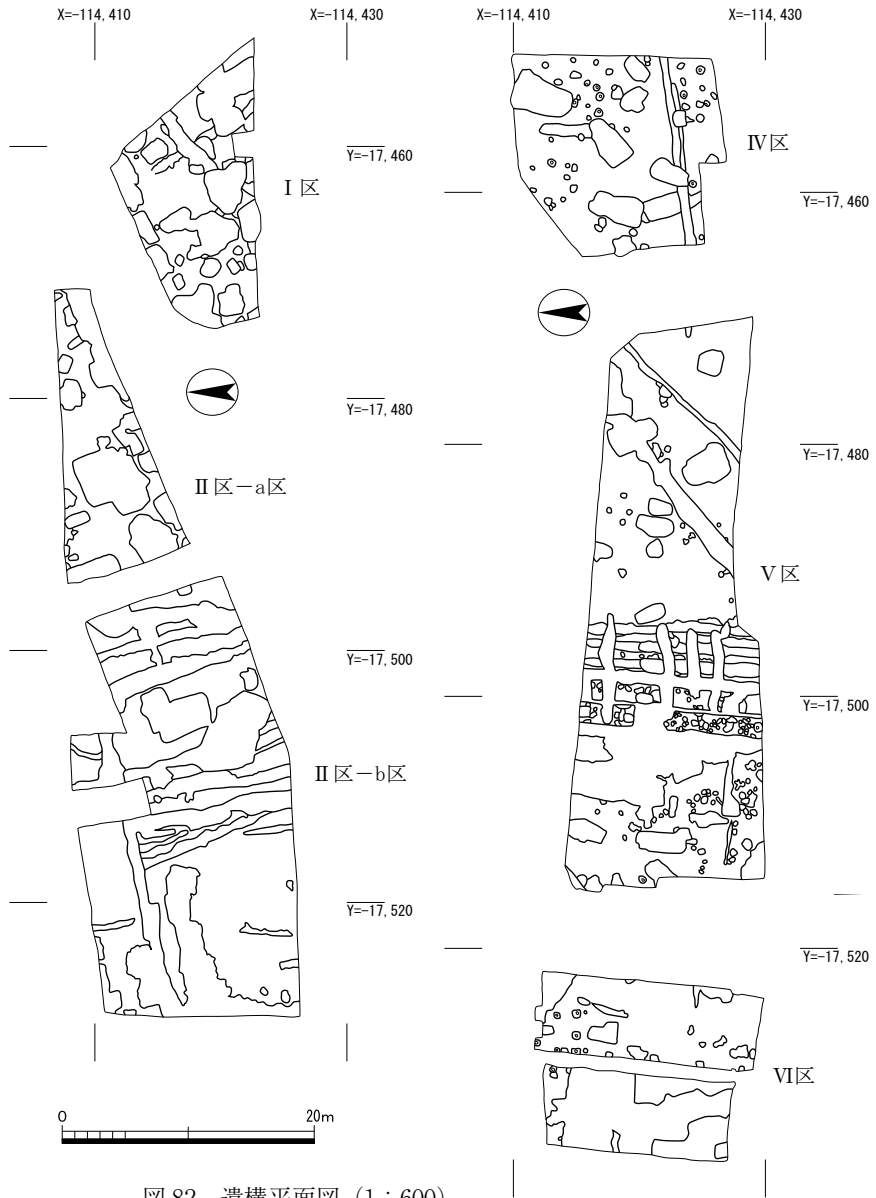


図82 遺構平面図 (1 : 600)

構を西半で検出しており、VI区ではわずかな1棟ではあるが平安時代中期の掘立柱建物を検出した。この成果は、昭和59年度の立会調査の成果と符合し、平安時代及び鎌倉時代から室町時代の集落が本調査地付近に想定できる。(高橋 潔・平方幸雄)

註 平方幸雄「中臣遺跡、中臣十三塚、宮道古墳」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987

VI 長岡京跡

37 長岡左京一条三坊・戌亥遺跡 (図版2-3・29～33)

経過 京都市下水道局は南区久世東土川町に雨水の地下貯水場と河川に放流するためのポンプ場を計画した。当該地は長岡京の左京一条三坊六町・十一町に推定され、中世の戌亥遺跡にあたり、また、東土川遺跡に隣接している。

調査開始時には、シートパイル（防水壁）が工事範囲に打たれており、その内側を1989年8月23・24日に試掘調査し、流路などを検出した。本調査は9月1日から翌年2月7日まで、2992㎡を対象に行ったが、東壁はシートパイルの保護のため土壁を残すなどし、結局約2600㎡を調査した。発掘はシートパイルにより、地下水の流入に悩まされず快適に実施でき、流路、溝、建物など弥生時代から近世までの各時代の遺構を検出した。なお、長岡京の地区名は7ANVMKで、左京第203次調査にあたる。

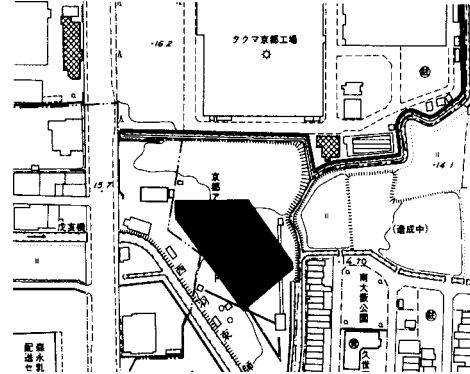


図83 調査位置図 (1:5000)

遺構 調査地の西部で陸部、東部では長期間継続して流れる流路（河川）を検出した。以下、各時代別に遺構の概略を述べるが、長岡京に関係した遺構を中心にする。

弥生時代中期～奈良時代 南部に遺構が集中し、竪穴住居2棟、溝多数、柱穴を検出した。S B 326は一辺6mの隅丸方形の竪穴住居で、南辺中央部に貯蔵穴があり、完形の小型壺と砥石が出土した。S B 420は、部分的な検出で、東辺は一辺5mを測る。

S D 450は、幅が1m前後で延長35m検出した。埋土から多量の弥生時代後期の土器が出土した。S D 500は、調査地の北西部で検出した流路で、幅13～14m以上、深さ1～1.5mで延長24m検出した。二時期に分かれ、弥生時代後期の流路は北東から南西に、古墳時代の流路はほぼ南北に流れる。溝の最上層部の窪みは、長岡京期に整地されていた。S D 430は、調査地の南東部で西肩を検出した。規模は幅8m、深さは最深部で2mあり南東部が深い。堆積土層は大きく4層に分かれ、第1層は古墳時代後期、第2層は古墳時代前期の布留式、第3層は同じく庄内式、第4層は弥生時代中期から後期の遺物を含み、第2・3層からは多量の土器・木製品が出土した。S D 430はS D 50に切られている。

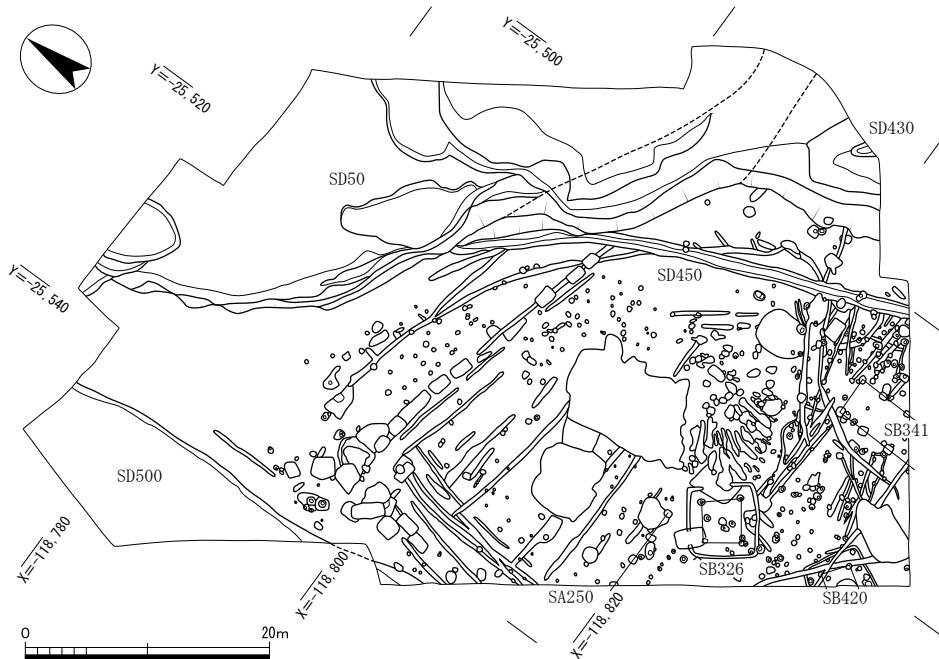


図 84 遺構平面図

S D 50 は、幅が 15 m 以上、深さは 3 m を越える流路で、延長 55 m 検出した。堆積土は大きく 4 層に分かれ、第 1 層は灰色泥砂層で、平安時代の堆積層、第 2 層は暗灰色泥砂層で、長岡京期の木簡・土器などの遺物を含む。第 3 層は暗灰色泥砂層と灰色砂層が互層に堆積する土層で、350 以上の斎串と飛鳥時代から奈良時代前半の土器を少量含む。第 4 層は灰色砂礫層で、古墳時代前期から後期の土器を含み、径 1 m 前後の広葉樹の流木が出土した。

長岡京期 東部には S D 50 があり、その西部には南北棟の建物 (S B 341)、東西方向の柵列 (S A 250) がある。S B 341 は南北棟で桁行 3 間以上、梁間は 1 間、柱間は、桁行 2.5 m、梁間 3.3 m に復原できる。S A 250 は 2.2 m 等間の柱間で柱穴を 4 基検出した。

この時期の S D 50 は南流し、敷地内で南東に向きを変える。深さは 1 ~ 1.6 m、堆積土は泥砂層であった。西肩の 3 箇所の地点から、木簡が多量に出土した。特に南部の第 1 地点の流路底は、他の地点に比べ深く、底から墨書人面土器・和同開珎など祭祀に関係した遺物が出土した。当該部だけに、底を掘削した痕跡が認められ、祭祀遺物は供えたものである。

平安時代から近世 平安時代から中世にかけて、S D 50 は沼状を呈していた。陸部か

らは柱穴、井戸、土壙、溝などを検出したが遺構の数は少ない。S E 428 は径 1.2 m、深さ 1.8 m の素掘り井戸で、鎌倉時代の羽釜が出土した。北西部では長辺 1～3 m 前後の土壙を多数検出し、一部は近世の肥料の貯蔵施設である。また、水田耕作土の下層で小溝を検出した。西部は中世で古いが、流路検出部の小溝は近世後期で、水田の成立時期に差がある。

遺構面下層の断ち割り調査 調査の最終段階に、トレンチの中央部で、S D 50 に直交する断ち割りを重機で行い、断面の観察をした。観察では西部に大規模な切り合いのある流路（東→西）があり、多量の流木が出土したが、遺物は確認できなかった。西部の流路の土層の上部には径 10cm 前後の褐色礫層が厚さ 1 m 前後堆積し、自然堤防をなしている。弥生時代と古墳時代の遺構の密集部分はこの自然堤防と重なる。

遺物 調査で、土器が 307 箱、木器が 498 箱出土した。遺物の出土量は、弥生時代後期から古墳時代前期のものが中心で、これに古墳時代後期が続き、飛鳥時代・奈良時代・長岡京期・平安時代・鎌倉時代の遺物は少ない。

長岡京期以前では、S D 500、S D 450、S D 430 から、多量の弥生時代後期から古墳時代の土器・木製品が出土した。土器類では壺、甕、鉢、器台など、木製品には、高杯 (46)・鋏 (47)・茄形鋏 (48)・鋏 (49)・梯子・朱塗りで閉じ糸が残る楯、鳥形木製品 (50) などがある。S D 50 では古墳時代堆積土から、須恵器、土師器、滑石製の有孔円盤など、飛鳥時代から奈良時代前期の西肩部堆積土から、多量の斎串 (51～53) が出土した。斎串は、長岡京期のものに比べ厚くて長く、調整も粗い。

長岡京期の遺物は、S D 50 に限られる。この溝からは、350 点の木簡と 3500 点以上の削屑を中心とした多量の木製品と、土師器、瓦類が出土した。木簡を中心とする遺物は、流路西肩口の 3 地点に集中し、流路の中央部からは少なかった。第 1 地点からは削屑を中心に木簡が多量に出土したが、土器類は極めて少ない。第 2 地点からは、少量の木簡と箸を中心とする木製品と種子が出土し、第 3 地点からは少量の土器類と、木製品に混じり、木簡が出土した。

木簡には、文書木簡 (1～4・6・7・11・12・14・17～19)、荷札木簡 (24・25)、習書木簡 (41～43) などがあり、荷札木簡は少ない。内容では「太政官」・「近衛府」・「兵衛府」・「□務省」・「督曹司」などの官衙名、



図 85 S D 図 50 出土墨書土器

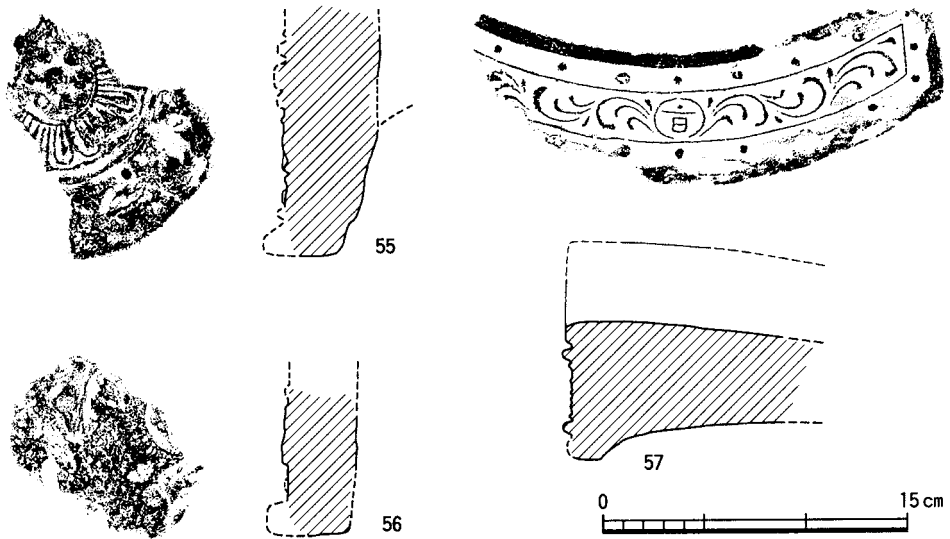


図 86 S D 図 50 出土軒瓦実測図

「酒入内親王」・「神王」・「板茂千依」・「石川家守」・「乙成女」などの人名、「樽」・「長押」・「御薪」などの物品名がある。また「穿」・「菊刈」など作業用語もある。墨書土器には「西曹乙麻呂」(54)・「食一」などがあり、「西曹」銘は複数あるが、針書きの上に墨書をし、計画的に記載している。

その他、人面墨書土器(壺・皿)、人形(40)・斎申・檜扇(墨書、絵)・櫛・箸・篋・挽物皿・挽物蓋・漆器蓋などの木製品、また、板材の厚さを計る三寸の物差(44・45)が数点出土した。金属製品は鉄鎌・刀子、銭貨は和同開珎が2枚出土した。瓦はS D 50から平城宮式の軒丸瓦(55・56)、「旨」銘の軒平瓦(57)が出土している。他に、川蟹・蛇の殻、栗などの自然遺物も少量ある。

小結 調査の結果、対象地は流路(河川)と居住空間に分かれ、東部で検出した流路の成立は弥生時代中期で、位置を変えながら中世まで流路ないし低湿地の景観を保っていた。

関連する周辺の調査は、第36次^{註1}・173次^{註2}調査を向日市教育委員会が、京都市埋蔵文化財研究所が第50次^{註3}・179次^{註4}・274次^{註5}調査を実施している。第36次調査では長岡京期の東西棟の建物、第50次調査では長岡京期の流路を検出した。

調査地の約700m北北東の久世中学校内やその南部で、大規模な流路^{註6}が検出されている。この流路は、久世中学校内では北西から南東方向に流れ、杭を多量に使用して東岸を護岸し、南部では流路を南北方向に変えている。S D 50は、この流路の延長線上にあり、

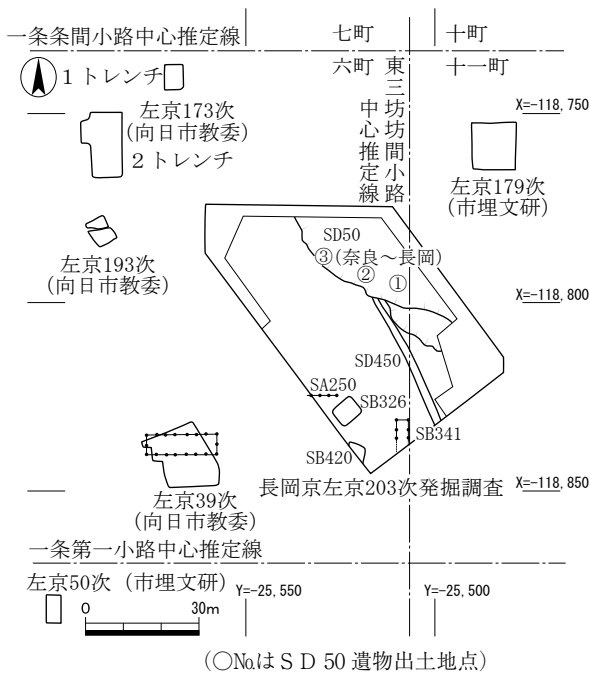


図87 調査地周辺遺構配置図 (1:2000)

同一の流路と推定され、西岸を確認したことになる。流路の年代は、古墳時代から平安時代で時期的にも重なる。その規模は公共下水道に関連した立会調査の成果^{註7}で、約70～130mと推定されている。

周辺部の調査成果を加味して長岡京期の遺構配置をみると、左京一条三坊五・六・十一町内では六町の東部に大規模な流路SD50があり、五町の西部にも浅い流路がある。六町の北寄り西部に東庇の南北棟の建物、南部の東に南北棟の小規模な建物、中央に東西棟の建物がある

配置となる。六町内は、建物配置は空閑地が多く閑散とし、その傾向は東部の中央部に顕著である。SD50の遺物の出土状況は、木簡主体の第1地点と、生活上の廃棄物を含む第2・3地点に分かれ、後者は西部の東西棟の建物と関連したものであろう。

『延喜式』木工寮では「樽一六材」は車載の項にあり、一六材(材)単位が一車分の輸送量であり、筏は五十材が単位であった。したがって「進上樽一六材」は車載分で現場から宮までの陸運に関連した木簡である。樽木簡には「樽」の墨書に「請」、日付に「小志」の朱書きがあり、樽と木簡の移動を復原できる可能性がある。朱書きと墨書きの上下関係は明確でないので、樽木簡の経路は次の2つが考えられる。第1案は、津の材木の管理者の板茂千依は樽を川原万呂・的乙公などに車載させ宮内に輸送させる。宮では「小志」が朱でチェックを行い、木簡は元の出発地に帰る。第2案は、宮内の造営工事に関係した「小志」は新しい木簡に朱で「請」と書き、津の材木管理者の板茂千依に樽を請求する。津から川原万呂・的乙公などは車載した樽を宮内に輸送し、「小志」に届ける。「小志」は到着した樽の木簡に「小志」と確認のサインを行う。木簡は出発地に帰り、廃棄される。

また、樽木簡には日時の違うもの、同一日付で時刻の違うものがあり、煩雑に車載されている。更に、人名と「鑿」・「穿」など加工の道具、ないし作業内容を併記する木簡があ

り、現場または、柚で丸太から「樽」に加工し、更に現場で「長押」などの製品に加工するために動員した工人の作業を記録している。

長岡京の造営に伴う物資は大和・近江・丹波など近隣の国を通過して運ばれたが、位置から流路上流の丹波国が柚として有力になる。前出木工寮の条には丹波国瀧額津から大井津へ漕運したことが記載され、上流に注目される遺跡が発見されている。S D 50の流路は大井川（現桂川）の支流と考えられ、桂川上流の船井郡日吉町に天若遺跡註9がある。現大堰川の河川屈曲部の微高地に形成された遺跡は、6世紀後半に成立するが、奈良時代から平安時代には掘立柱建物跡が6棟ある。大堰川を利用した木材の中断地ないし、加工・搬出地に関係した柚の遺跡と考えられ、今回検出した遺構と直接関係する可能性がある。

今回調査した遺構とその配置、樽など材木とその加工を示す木簡、板材を測る物差の出土などから、長岡京の造営にともない桂川とその支流を木材の漕運に利用して、調査地点やその周辺で陸揚げし、材木などの加工を行い、宮内に向けた物資の集積や運搬をした津に関係する遺跡と考えられる。遺跡の年代は紀年銘の木簡はないが、「授田使大和長官神王」と記された習書木簡があり、神王が大和の班田長官になった延暦五年（786）を上限とでき、長岡京の前半期の造営に関係する遺跡である。

なお、釈文の作成は主に、職員と中山修一・井上満郎・橋本義則・館野和巳・西山良平・吉川真司・中山章・清水みき・土橋誠の各氏による研究会で行った。また、福山敏男・村井康彦・鬼頭清明・木村捷三郎・杉山信三の各氏には多くの教示を受けた。（百瀬正恒）

註1 竹原一彦「長岡京跡左京第36次（7 AND II）発掘調査略報」『長岡京』第18号
長岡京跡発掘調査研究所 1980

註2 国下多美樹「長岡京跡左京第173・193次（7 AND II・5・6区）～左京一条三坊六町・戌亥遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集
（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1989

註3 木下保明『京都府桂川右岸流域下水道管渠敷設工事に伴う発掘・立会調査報告』
昭和54・55年度 京都市埋蔵文化財研究所 1989

註4 179次調査

註5 203次調査の西に隣接し、1991年に調査した。東庇が付く南北棟の建物を検出した。
未報告

註6 梅川光隆「大藪遺跡」六勝寺研究会 1973
上村和直・久世康博「大藪遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
京都市埋蔵文化財研究所 1988

註7 吉崎伸「大藪遺跡・中久世遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
京都市埋蔵文化財研究所 1991

註8 註5参照

註9 三好博喜・鍋田勇「天若遺跡」『京都府遺跡調査概報 第42冊』
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991

38 長岡京左京南一条四坊 (図版2-3)

経過 当該地は、長岡京跡の北東隅、左京南一条四坊十六町に位置している。敷地内の東辺には東京極大路が、また南辺には南一条第一小路が推定される。敷地はかなりの厚さで盛土されているため、調査トレンチは調査可能な場所で、南一条第一小路と宅地部分が検出できるように設定した。

遺構 検出した主な遺構は、中・近世の暗渠排水溝 19 条、杭列 1 列、長岡京期の

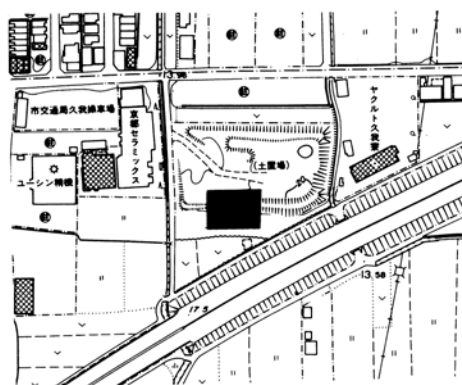


図 88 調査位置図 (1:5000)

建物 1 棟、柵列 2 列、溝 2 条、古墳時代の溝 1 条、弥生時代の方形周溝墓 1 基などである。

長岡京期の建物跡は梁間 2 間、桁行 3 間以上の南北棟の掘立柱建物で、柱間は 1.72 ~ 1.98 m と不揃いである。柵列は、建物の西側に位置し、柱間は 1.8 m で 3 間分を検出している。溝は建物と柵列の間に位置する S D 1 と、一町の東西のほぼ中央に位置する S D 2 の 2 条で、共に南北溝である。S D 1 は、幅 30cm、深さ 5 ~ 10cm と浅い。S D 2 は、断面逆台形状で南に行くに従い徐々に広がり、底面の傾斜も緩やかな南下がりである。

古墳時代の溝は、北西から南西に流れる浅い溝で、幅は 0.6 ~ 1.1 m を測るが形の崩れた状態で、部分的に溝幅が広がる。方形周溝墓は、南北軸がほぼ 45 度東に傾く。周溝は「コ」の字形を呈し、南西の辺は溝を検出していない。規模は溝の心々間で一辺 6.2 m を測る。

遺物 遺物の出土量は少なく、整理箱に 1 箱である。長岡京以前の遺物としては、方形周溝墓から弥生時代の無頸壺が完形で出土し、溝 S D 3 からは古墳時代中期の須恵器杯・蓋・土師器片が、ピットから古墳時代後期の須恵器蓋などが出土している。長岡京期の遺物は、建物跡や溝 S D 2 などから土師器杯・高杯、須恵器蓋、平瓦などが出土している。

小結 弥生時代を始め、古墳時代、長岡京期、中近世の遺構、遺物を検出している。長岡京期の遺構は、南一条第一小路推定範囲に位置しているが、同小路跡は検出できなかった。昭和 55 年度の調査においても同様の結果であり、今後の検討課題を言える。

(京都市埋蔵文化財センター 北田栄造)

『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』昭和 63 年度 1989 年報告

39 長岡京左京四条三・四坊、羽束師志水町遺跡 (図版2-3・34・35)

経過 昭和63年度の外環状線関係の調査は、長岡京域ではW-1・2区、X-5・6区、長岡京外の羽束師志水町遺跡ではY-2・3・5区の調査を実施した。このうちY-2区は、中世から近世の墓域を検出したが、次年度調査のY-4区と綿密な関連にあるため、平成元年度に併せて報告する。W区は左京四条三坊六町と十一町及び東三坊坊間小路の推定地、X区は四条四坊十四町及び東京極大路の推定地にあたる。外環状線関係の長岡京域の調査は、今回報告分で終了した。

遺構 W区 今回の調査では、古墳時代から平安時代の遺構を5時期にわたって検出している。古墳時代から奈良時代の遺構としては、水田遺構を検出している。古墳時代の水田は、いわゆる小区画水田で、全容は不明であるが、その1区画は70㎡前後の面積を持つ長方形と推測できる、畦は、幅約40cm、高さ10cmで、方向は大きく西へ振れている。これに対して、奈良時代の水田の畦は、ほぼ東西方向である。畦は、幅50cm、高さ20cm程度で、二度の造り替えが認められる。その状況から、条里制水田の坪境と考えられる。

長岡京期の遺構は、掘立柱建物の一部の他、柱穴、土壇、溝などを検出している。なお、当初予想した東三坊坊間小路に関する遺構は、調査区東部に広がる平安時代の河川によって浸食されたものか、確認することができなかった。平安時代の遺構は、この河川の他に柱穴、土壇、溝などを検出している。

X区 X-5区は、長岡京の東端に位置し、東京極大路の推定地には現在西羽束師川が流れている。対岸にあたる前年度調査のY-1区で、旧流域がかなり広いことを確認したことから、今回はトレンチを設けて西羽束師川の影響を受けていない部分を確認し、そ

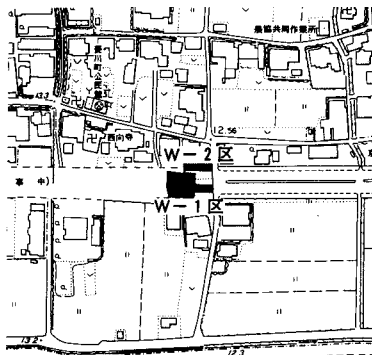


図89 W区調査位置図 (1:5000)

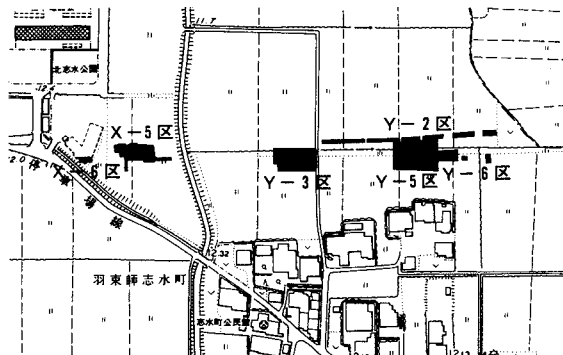


図90 X・Y区調査位置図 (1:5000)

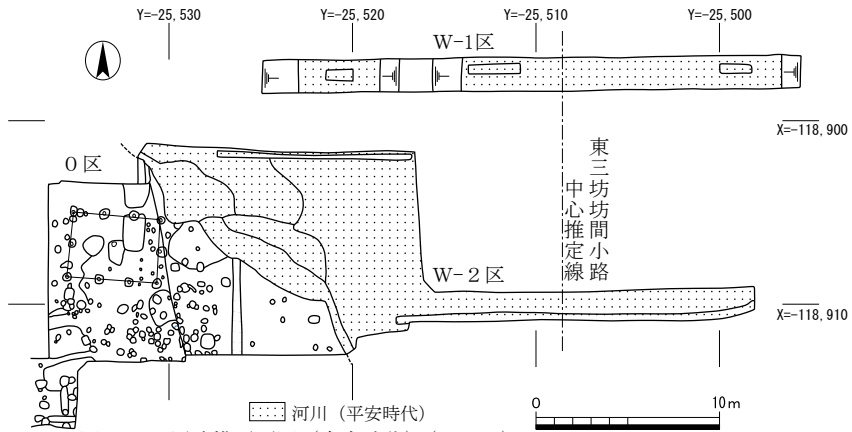


图 91 W区遺構平面図 (奈良時代) (1:400)

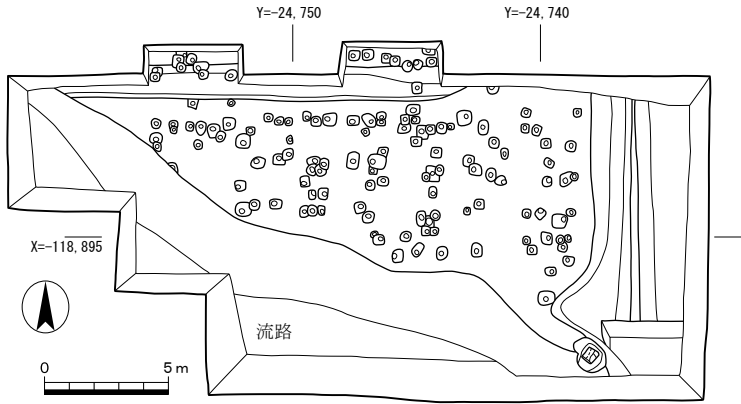


图 92 X-図5
区遺構平面図 (奈良時代) (1:300)

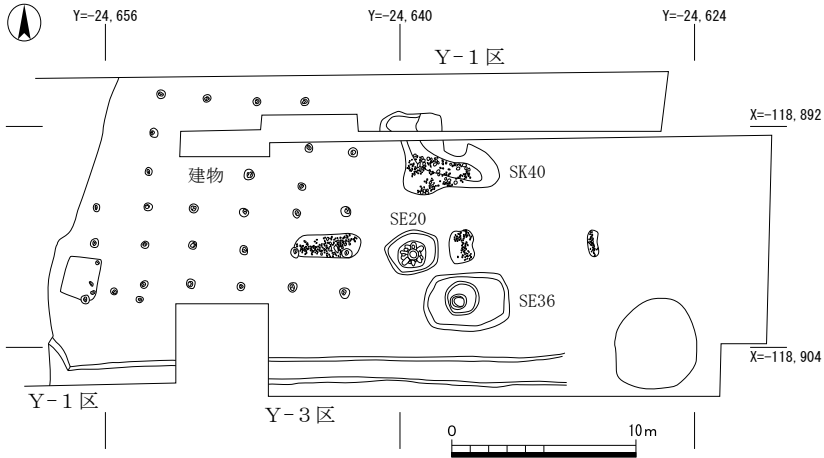


图 93 Y-図3 区遺構平面図 (桃山時代) (1:400)

ここに調査区を設定した。その結果、前年度調査のX-4区で検出した、中世の流路の北肩部と奈良時代および長岡京期の遺構群を確認した。遺構面は、標高10.0mを測り、X-4区東半の奈良時代遺構面と大差はない。検出した遺構には流路、溝、柱穴などがある。柱穴は、数多く認められたものの面積的な制約もあり、建物としてまとめられていない。

X-6区は、X-4・5区の間位置し、上述した中世の流路内の堆積状況を確認するに留まった。出土遺物もごく少ない。

Y区 Y-3区は前年度調査のY-1区に接し、Y-1区に連続する遺構が多い。遺構面は、平安時代後期から江戸時代中期に至る間を、4面に大別できる。ここでは桃山時代と室町時代の遺構を取り上げる。

室町時代の遺構は、溝、火葬墓、柱穴が挙げられる。溝は、乙訓郡条里阿刀里十七坪と二十坪の坪境と考えられる南北溝及びその西方の南北溝とそれに取り付く2条の東西溝がある。いずれも幅2~3m、深さ0.9m~1.4mを測り、数回改修されている。

桃山時代の遺構は、建

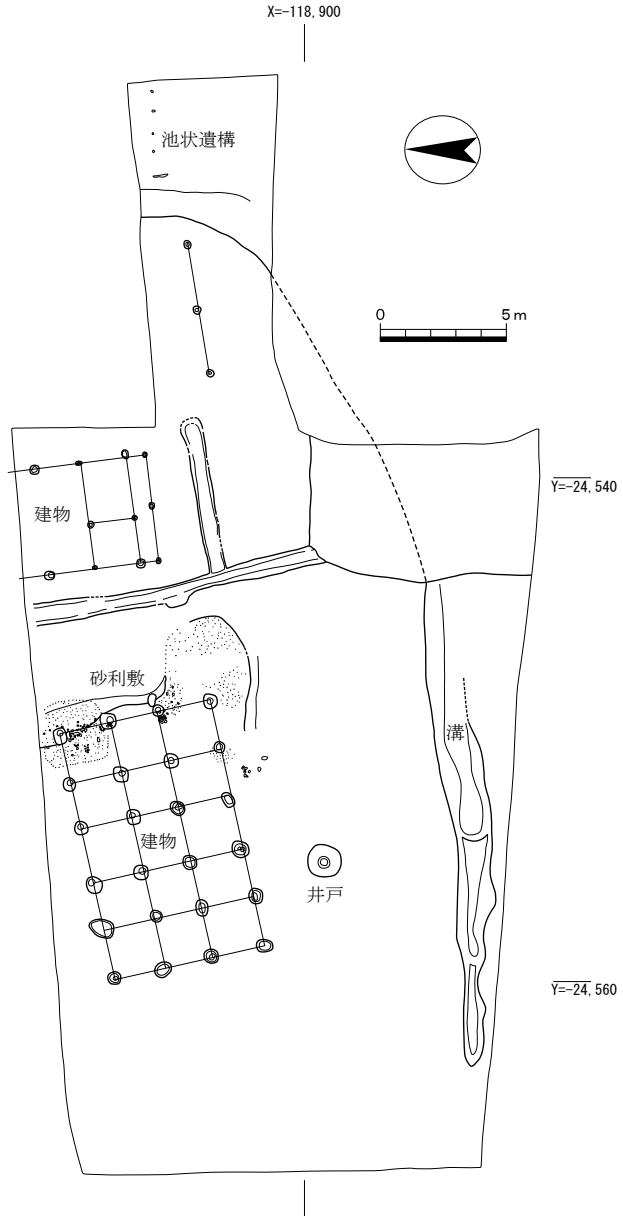


図94 Y-図5区遺構平面図(平安時代)(1:300)

物、井戸、土器溜状の土壌（S K 40）がある。建物は、4 × 5間の南北棟で南西部に張出し部があり、柱穴内に礎石を持つ。Y - 1区の調査で西半分を検出しており、今回で全貌を知ることができた。井戸は2基あり、S E 20には石仏が11体転用されている。

Y - 5区では、平安時代後期から鎌倉時代に続く遺構面と、室町時代の遺構面の2面を検出した。平安時代から鎌倉時代の遺構は、調査区のほぼ全域に広がり、特に西半部分では密集重複して柱穴を検出した。室町時代の遺構は、調査区西端に広がる柱穴や土壌を検出した。いずれも建物を中心にした集落跡であるが、最も古い平安時代後期の遺構には、一部ではあるが礫の散布や砂利敷が認められ、更に調査区東端には池状の遺構を検出している。この時期に近い建物は、東西5間、南北3間の東西棟と、小礎石を地上に据えた特異な建物があり、井戸や溝、池状の遺構と一連に造られた小規模な邸宅跡であろう。

遺物 W区の出土遺物には、古墳時代から平安時代のものがある。古墳時代から奈良時代の遺物は少なく、わずかに土師器、須恵器などの土器類が出土している。これに対して長岡京期から平安時代の遺物は、土器・瓦類を中心にかなり多く出土している。特に平安時代の遺物は土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器など器種も豊富である。

X - 5区の出土遺物は、整理箱にして30箱を数える。奈良時代から平安時代前期の各種の土器・陶器類、瓦類などがある。また、近辺の調査地に比べて瓦類の出土量が多いことは注目される。

Y - 3区の出土遺物は、整理箱にして107箱を数える。桃山時代の土壌S K 40から5212片の土器類が出土しているが、この内99.08%が土師器皿である。

Y - 5の出土遺物は、整理箱にして67箱を数える。平安時代後期及び室町時代前期の遺物が主で、これ以西のY区では近世の遺物はごく少ない。総出土破片数は42232片で、その内土師器が55%、瓦器が39%を占める。機能面では食器が89%を占めることなど、比較的多様性に乏しい。

小結 W区の調査は近辺の調査と同様に長岡京期をはじめ、数時期の遺構を確認できた。中でも、古墳時代と奈良時代の水田の土地利用の違いが明確に判り、興味深い資料となった。X区の調査では、東京極大路の検出に期待したが、推定部分は中世以降の湿地状堆積が広がり明らかにできなかった。ただ、X - 5区は安定した微高地を呈し、東端の東への落込が長岡京期に遡る可能性は捨てきれず、今後の成果を待ちたい。

（吉崎 伸・鈴木廣司・長宗繁一）

Ⅶ その他の遺跡

40 仁和寺院家跡 (図版1・36～38)

経過 右京区常盤御池町3-1・5、4、9所在の2200㎡の宅地にマンション建築が計画された。当該地は仁和寺院家跡に比定されているため、1988年12月21日に試掘調査を実施した。この結果多量の瓦類と遺構が検出され、本格的な発掘調査の必要が生じた。

発掘調査は1989年1月25日から3月31日にかけて実施した。調査では、古墳時代後期の横穴式石室を伴う円墳と平安時代後期の

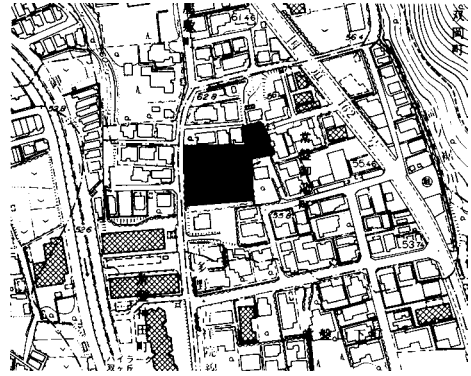


図95 調査位置図 (1:5000)

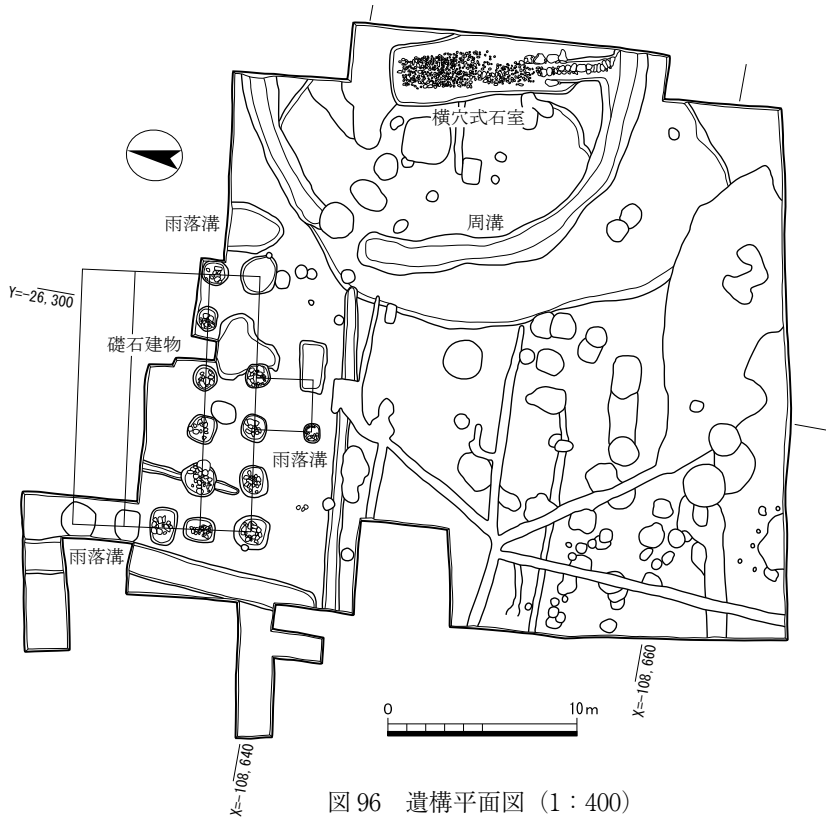


図96 遺構平面図 (1:400)

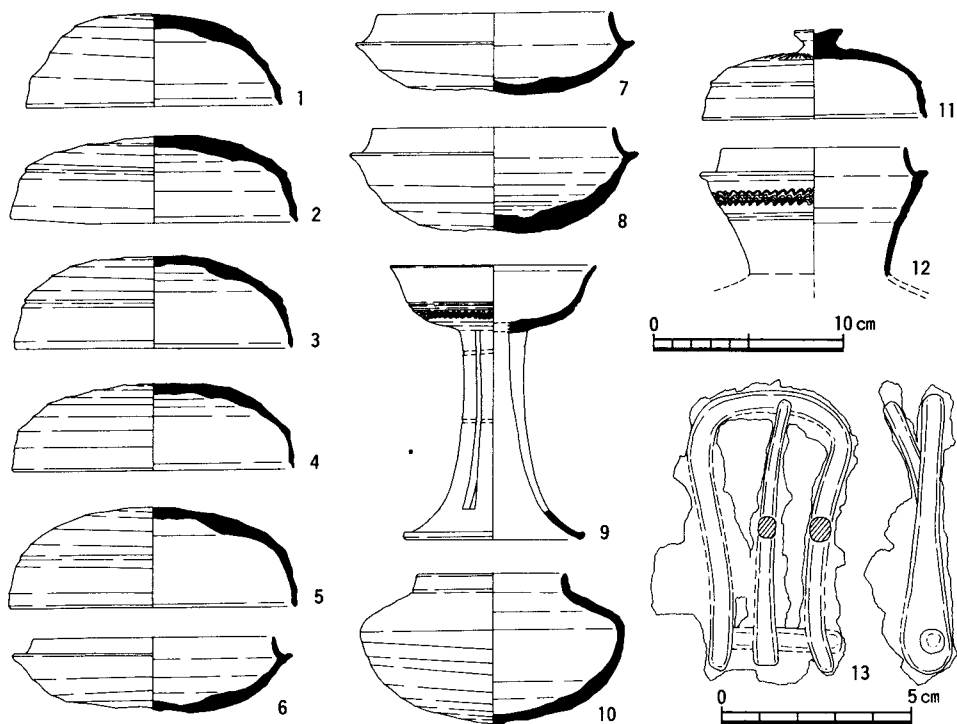


図 97 古墳出土土器実測図 (1:4)

礎石据付跡 13 箇所を検出した。調査面積は、拡張地区を含めて 850㎡である。

遺構 古墳時代後期の円墳は、南北周溝心々間 20 m を測る。主体部は方向を南北に向ける。玄室長 4.7 m、幅 1.8 m、羨道長 3.8 m、幅 0.9 m を測る。玄室は、東側に袖を持つ片袖式で、奥壁から玄室中央、羨道部を貫き南側の周溝に至る排水溝を持つ。床面は 5～10cm 大の敷石によって覆われている、側壁や天井石は、羨道部の一部の石材を除いてすべて抜き取られていた。遺物は、玄室南側床面から完形に近い須恵器 10 数点が出土した。

平安時代前期に属する遺構でまとまったものはない。調査区東北及び東南地区に遺物包含層が認められるに留まる。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、礎石据付跡と考えられる根固め石を 13 箇所で見出した。これは東西 5 間、南北 4 間の建物と考えられる。桁行は約 2.65 m (9 尺) 等間であるが、梁間は南北庇部分が約 2.65 m (9 尺)、中央 2 間分が約 2 m (7 尺) を計測できる。また建物の西、南にそれぞれ幅 1.5 m、深さ 50cm、幅 50cm、深さ 20cm の溝を検出している。建物東南コーナーにも西側溝と同規模の溝状遺構を検出しており、雨落溝の痕跡と考えられる。一方、調査区東側一帯に瓦片を多量に含む遺物包含層が検出されている。

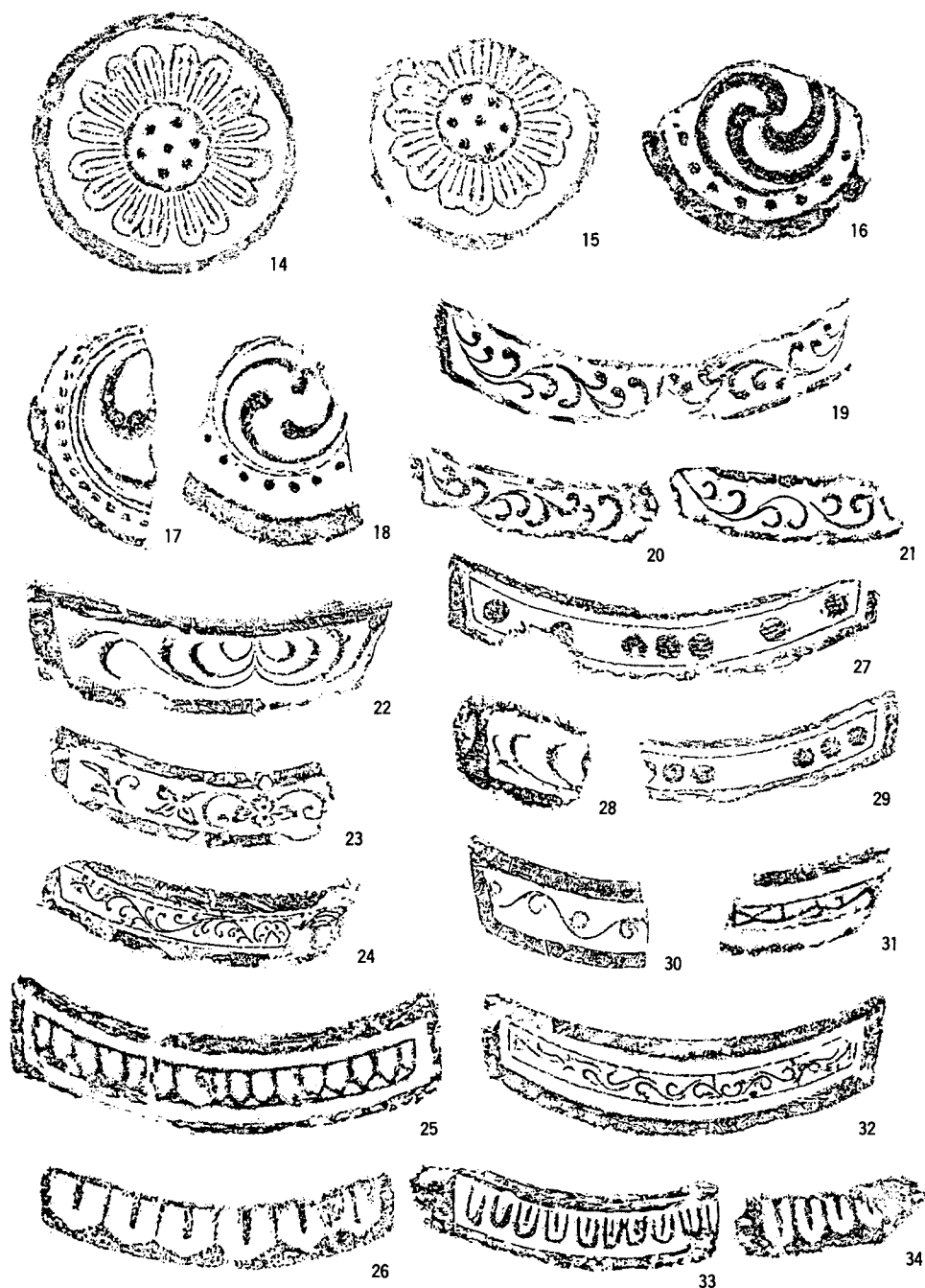


図98 軒瓦拓影 (1:4)

る。

これは、浅い窪地となって建物跡の東南方に広がる。人為的な土壌が各所にみられ、景石を配した園池の存在した可能性を指摘できよう。

遺物 古墳時代後期の遺物は、古墳周溝から6世紀末に属する須恵器杯(6)・蓋(1)各一個体、土師器甕が出土した。石室床面からは6世紀中葉の須恵器杯2個体(7・8)・蓋4個体(2～5)・高杯(9)・有蓋壺(10)・有蓋脚付壺蓋(11)・有蓋脚付壺(12)と帯金具(13)が出土している。

平安時代前期の遺物は、主として調査区東側の遺物包含層から出土したもので、時期的には9世紀後半代にまとまる。土師器皿、緑釉陶器皿・椀、灰釉陶器皿・椀、須恵器杯・甕・蓋、黒色土器椀などがある。緑釉陶器椀は、五方からヘラで押さえた輪花椀である。須恵器蓋は天井部外面に糸切り痕が薄く残る。小皿になる可能性もある。

平安時代後期から鎌倉時代の遺物には、多量の瓦類が出土している。軒瓦150点、鬼瓦、道具瓦、完形の丸瓦、平瓦などがある。土器類は土師器、瓦器、輸入陶磁器などがあるが量が少ない。注目すべき遺物に、磁州窯系白地黒掻き落とし壺片が出土している。

小結 調査区東辺に検出した円墳は、周溝の東半部を既存の住宅によって削平されているものの、主体部は遺存しており調査が可能であった。石室床面から出土した土器類は、型式差がほとんど認められない。ただ周溝内出土の土器類は、床面出土土器類に比べてやや後出的な要素が見受けられる。周溝内出土の遺物は、羨道部入口付近の周溝内に集中しており、後に羨道部入口付近に供献されたものと考えられる。また、石室内出土土器に型式差を認め難いことから、追葬の行なわれた可能性は少ないと言えよう。この他、小破片であるが6世紀前半代に遡る須恵器杯身片が出土しており、当丘陵の東および西斜面にも別の古墳の存在が予想され、群としてまとまりを持つ古墳群も検出される可能性がある。^{註1}

調査区北端に検出した東西5間、南北4間の南北庇付きと推定される建物跡は、南面する東西棟で「寝殿」と考えられる規模を持つと言える。ただ、周辺から多量の瓦類が出土すること、礎石を有したと考えられることから、瓦葺きの可能性も残される。いずれにしても、調査区一帯は「大聖院^{註2}」の故地と推定されており、これを構成していた中心的な建物と捉えることができる。

(平田 泰・小檜山一良)

註1 御室川左岸に築造された6世紀中葉の古墳検出事例は、現時点で1例であり、仮に本古墳を「常盤御池古墳」と称するが、検出事例の増加を待つて適時、群・号数を付与すべきであろう。

註2 杉山信三「院の御所と御堂—院家建築の研究—」『奈良国立文化財研究所学報』第11冊 奈良国立文化財研究所 1962

41 上ノ段町遺跡 (図版1・39・40)

経過 京都市右京区嵯峨野開町所在の京都市立蜂ヶ岡中学校で、屋内体育館改築工事が計画された。当該地は上ノ段町遺跡に比定されており、昭和55年度の校舎新築工事に伴う調査で、竪穴住居など古墳時代後期の遺構を検出している。このため、1988年7月27・28日に試掘調査を実施した。この結果、古墳時代後期の溝状遺構と遺物、平安時代に属する溝状遺構を検出したため、本格的な調査が必要とされた。以上の経過を踏まえて、1988年9月5日から11月4日にかけて発掘調査を実施した。調査では、古墳時代後期の竪穴住居、溝、土壇、掘立柱建物、柱穴多数と平安時代中期の溝を検出した。調査区は、体育館建設予定地を対象に東西26m、南北35mの910㎡を設定した。

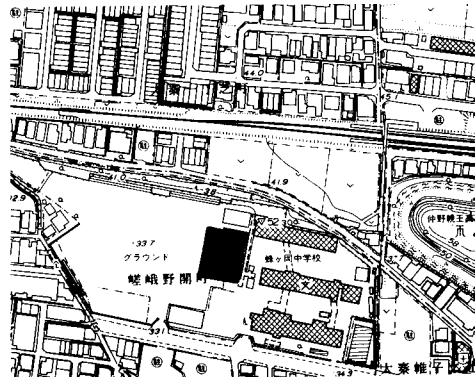


図99 調査位置図 (1:5000)

調査では、古墳時代後期の竪穴住居、溝、土壇、掘立柱建物、柱穴多数と平安時代中期の溝を検出した。調査区は、体育館建設予定地を対象に東西26m、南北35mの910㎡を設定した。

遺構 古墳時代後期の遺構は、竪穴住居3戸 (S X 33・120・123)、掘立柱建物4棟 (S B 136・137・138・139)、土壇3基 (S K 58・101・103) 溝4条 (S D 2・3・50・70) が検出された。竪穴住居のうちS X 33は、西北辺に造り付けの竈を備えている。またS X 120はきわめて大型で、西北辺の中央床面の2箇所に楕円形の焼けた痕跡が認められ、移動式竈を設置した痕跡と考えられよう。

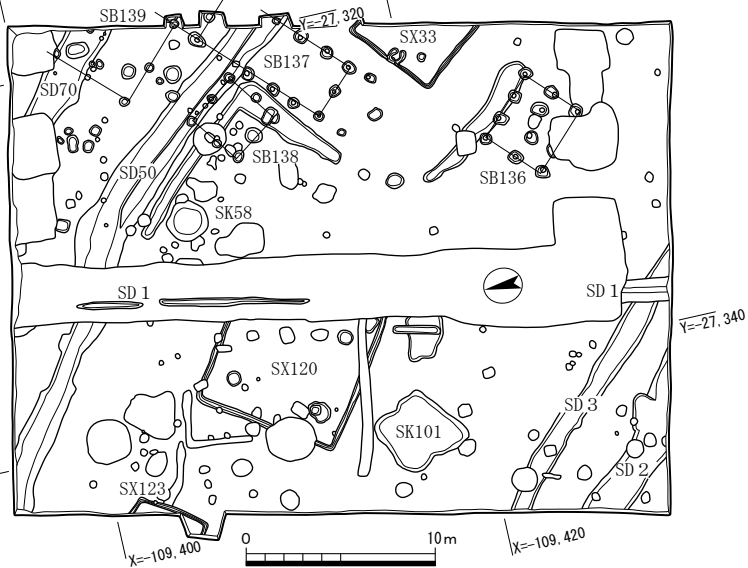


図100 遺構平面図

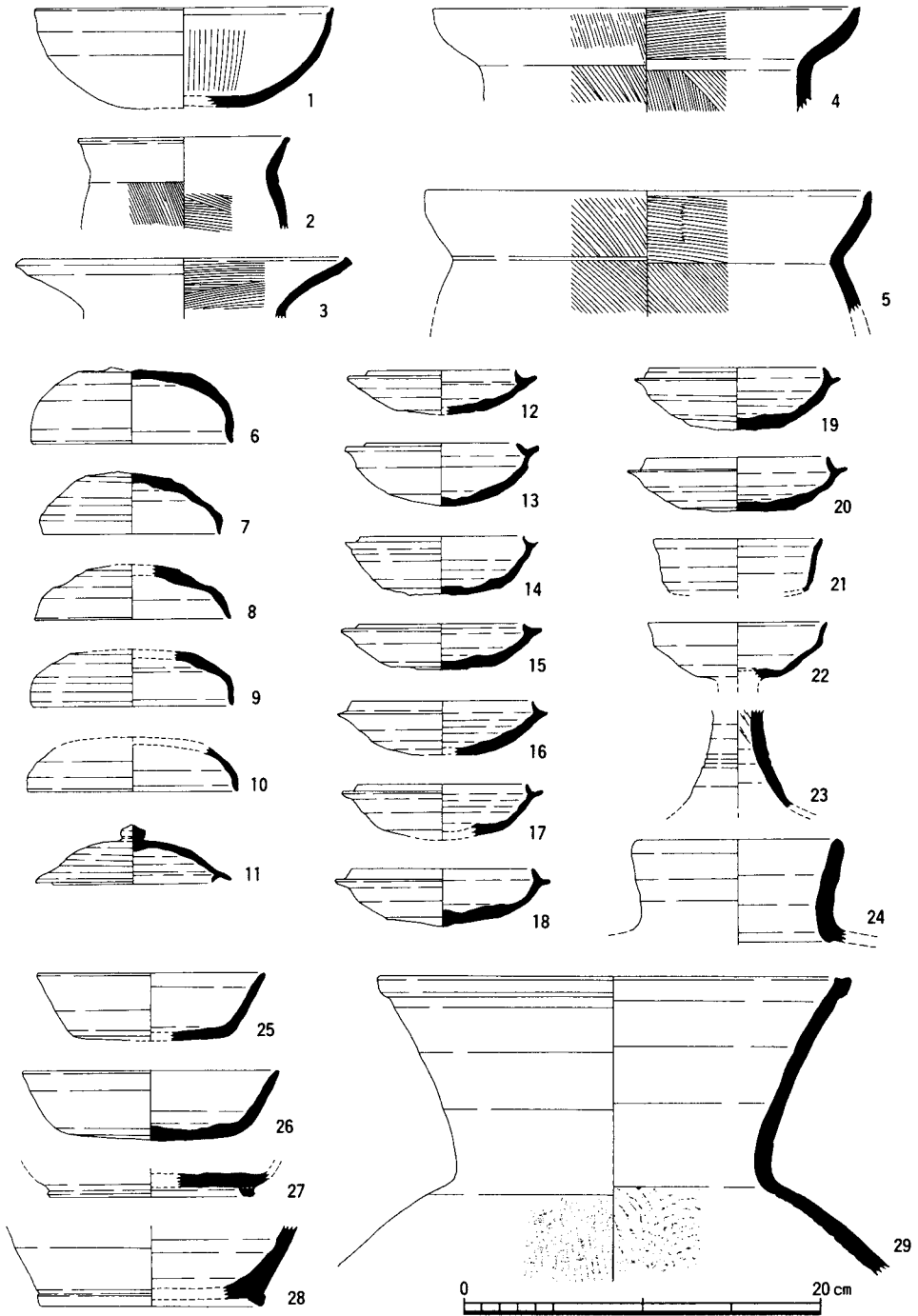


图101 出土土器实测图

S X 120 : 4 · 5 · 8 · 19 · S K 58 : 14 ~ 16 · 21

S D 2 : 6 · 7 · 13 S D 50 : 25 ~ 29

遺物包含層 : 1 ~ 3 · 9 · 10 ~ 12 · 15 · 17 ~ 19 · 22 ~ 24 (1 : 4)

掘立柱建物のうち、S B 136 は2×3間の総柱建物で、倉庫として使用したものと考えられる。溝は調査区東北辺に2条（S D 50・70）、西南辺に2条（S D 2・3）がそれぞれ並行して検出された。S D 70 と S D 2 は溝底部に粘土が貼られている。他に平安時代中期に属する南北方向の溝（S D 1）があり、断面形状はV字形を呈している。

遺物 古墳時代の遺物は堅穴住居、溝、土壙から主として出土した。掘立柱建物、柱穴からの出土はきわめて少量である。堅穴住居からの出土遺物は、土師器・須恵器に限られるが、溝からは土師器、須恵器の他に瓦片も若干の出土があった。

古墳時代の土器には、土師器杯・高杯・甕、須恵器蓋・杯・高杯・壺・甕がある。土師器杯は内側に放射状暗文を施す。須恵器蓋は、7～10が天井部と口縁部の境が不明瞭で、全体に丸みを持つ。11は、擬宝珠様の摘みを付ける。杯12～20は、底部外面がヘラオコシのまま未調整であり、全体に小口径で、偏平化している。

小結 検出された遺構やその配置には、いくつかの特記すべき点が指摘できる。堅穴住居（S X 120）は、一辺8mを測り、同時期の堅穴住居と比較して極めて大型である。また移動式竈2基を据えていたと考えられる。堅穴住居（S X 33）は、上記住居と異なり規模も中型で、造り付けの竈を持ち、住居の傾きも北向きの度合いが強い。

調査区の東北と西南に、溝が4条並行して検出されている。南側溝（S D 2・3）は、堆積土と規模が相似し、同時に存在した可能性がある。堅穴住居3戸は、内側溝（S D 3・50）の内に展開する。

掘立柱建物には、倉庫と考えられる2×3間総柱のもの（S B 136）、2×5間のやや細長い建物（S B 137）、2×2間の小規模なもの（S B 138）など多種類にのぼる。また掘立柱建物は、徐々に北方に拡大した形跡が認められる。S B 137、S B 138はS D 50によって切られ、S B 139はS D 70を切るという関係が成立する。以上の注目すべき点と出土遺物から、以下の各遺構の成立順位が想定できる。

I 期 堅穴住居3戸（S X 33・120・123）、南側溝2条（S D 2・3）

II 期 掘立柱建物3棟（S B 136・137・138）、北側溝1条（S D 70）

III 期 掘立柱建物1棟（S B 139）、北側溝1条（S D 50）

各時期については相対的である。出土遺物は、III期がより後出的であるが、I・II期には型式幅を大きく越える差は認めがたい。このため、I期からIII期の時間幅は、7世紀前半から7世紀後半の年代を付与することができよう。（平田 泰・小檜山一良）

42 史跡名勝嵐山（図版1・41）

経過 調査地は、右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町33に位置する。当地は、周知の遺跡としては認知されていなかったが、史跡名勝嵐山内にあり、また天龍寺の南側隣接地にあたるため試掘調査を実施することになった。その結果、時代は不明だが火葬墓とみられる焼土壙と平安時代の遺物を検出したので、発掘調査を実施することになった。

遺構 検出した遺構は平安時代の庭園遺

構（園池、洲浜、景石の抜取穴）、焼土壙、ピット、室町時代の溝、土壙、江戸時代のピットなどである。園池は、南北幅が平均8m、東西長は37mであり、中央部で南に屈曲する雲形を呈する。東方から徐々に深くなり、中央部やや西よりの地点が最も深く約2.2mを測る。園池は、旧河道と思われる地山の砂礫層が大きく窪んだ上に、縄文土器を含む10YR4/4褐色砂泥層が堆積しているところに造られている。底部は、砂礫層まで達し、粘土に拳大の石を混ぜた土層を貼り付けている。また、西辺を除く肩部には、黄褐色の泥土で造成地業を施しているようである。南肩部では凹凸を是正する程度の仕事だが、旧河道の下流にあたる東肩部と建物が建てられている可能性の高い北肩部では、比較的大規模な造成がおこなわれている。景石の据付穴と洲浜は、この地業の上に造られている。遺水や滝口は、検出することはできなかった。しかし、現状では園池部の保水性が悪く、多量の雨が降っても短時間で水が引いてしまうことから、造成当時の地下水位が、現在よりも高く一定の水位を保つ湧水が確保されたのではないかと考えられる。旧河道上を選んで造られたのも、その点を考慮したものであろう。園池から出土する遺物は、層の上下に関わらずほとんど時期差は認められず、一気に埋め立てられたと思われる。

洲浜は、園池の東肩部に設けられている。平均幅は約3.5mで、全長16mを測る。山石と川原石を乱雑に敷き詰めたもので、外縁には比較的大きな石を点々と配してある。また、一部では石の間隔が短く、直線もしくは円弧を描いて並べられている。近くからは乱

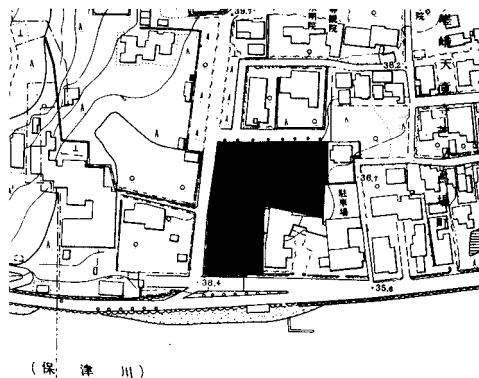


図102 調査位置図(1:5000)

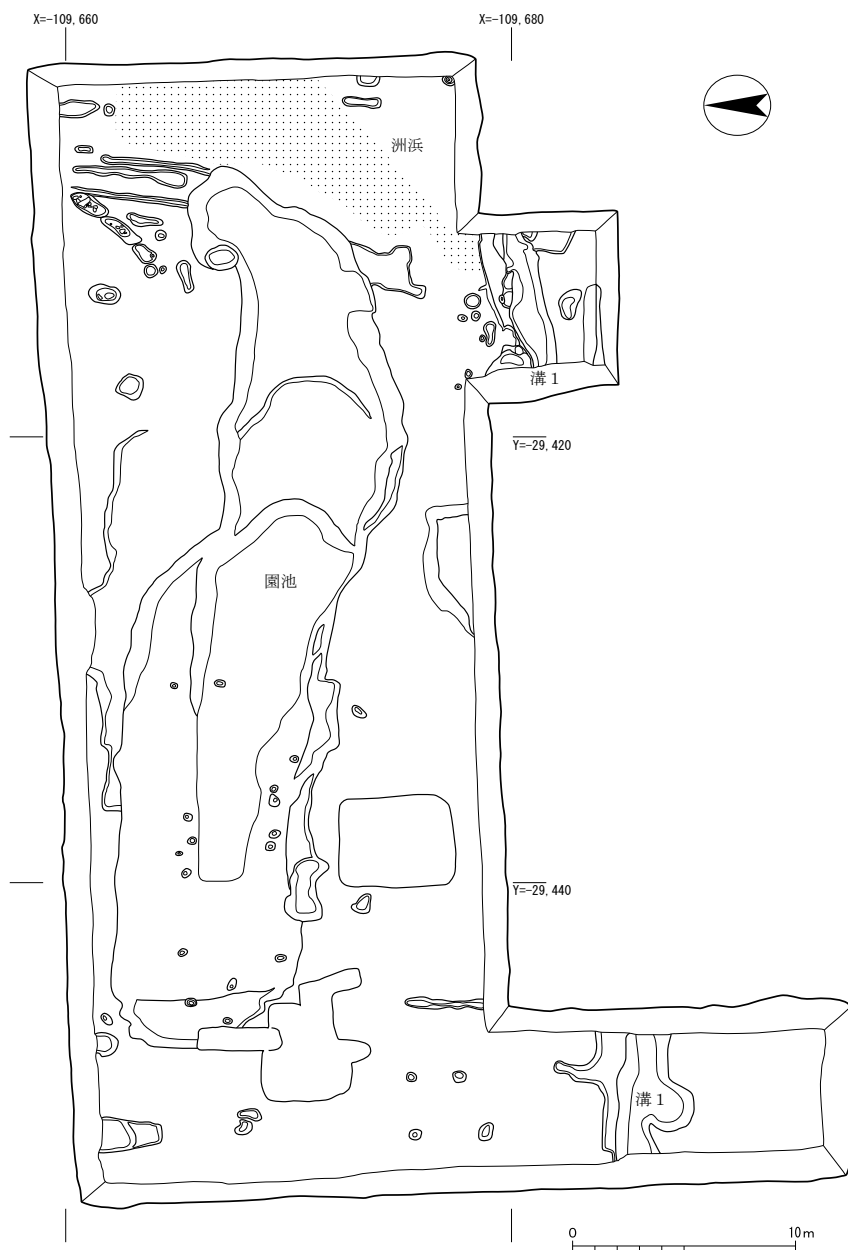


図 103 遺構平面図 (1 : 300)

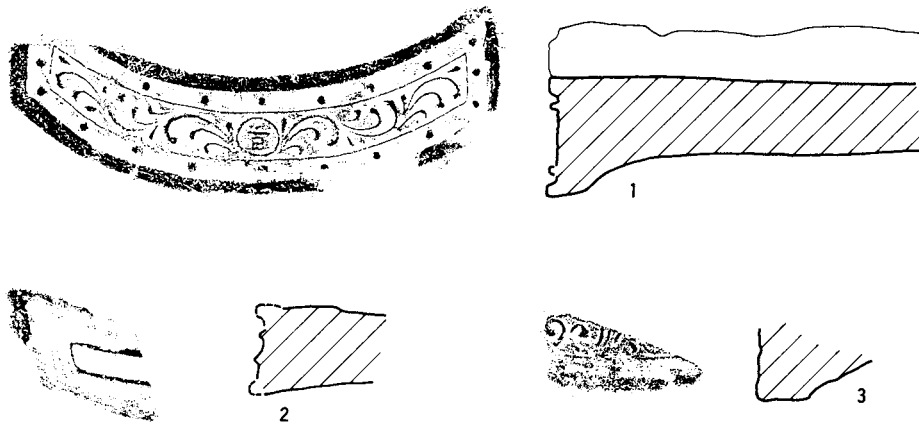


図104 軒瓦実測図 (1:4)

雑さが目立つが、距離をおいて遠望すると変化と趣が認められる。また、景石の抜取り穴とみられる、底部に支えの石を残した土壌を、園池の東北隅で数基検出している。

発掘調査の契機となった焼土壌は、園池と同じ平安時代前期のものであるが、その性格ははっきりしない。ただ、園池の埋土から埴塼、銅滓、鋳型とみられるものや銅製品が出土しているので、銅製品の鋳造に関連する遺構の可能性が考えられる。また、溝1は東西方向の溝で、室町時代のものである。

遺物 出土した遺物は整理箱に104箱分で、大半は園池から出土した土器類である。園池から出土した土器は、9世紀前半の遺物で、器種・器形とも豊富である。特記すべき遺物として二彩の壺、蓋、緑釉陶器の水注、鉄鉢、壺、盤、周囲に陰刻花紋を施した黒色土器の小型の風字硯、長岡京市の鞆岡廃寺と同苑の中心飾りに「旨」銘を施した軒平瓦などがある。

小結 調査地は、嵯峨野の条里で言うと葛野郡の一条櫟原西里二十三坪にあたり、保津川が保津峡から抜けて嵯峨野に流れ出る地点である。小倉山の東麓で、南方に保津川の流れと嵐山が眺められ、北方には嵯峨野がひかえ、東方は遠く視野が開けて比叡山から稲荷山までが遠望でき、平安京をも望む風光明媚なところでもある。今回の調査で平安時代前期の庭園遺構を検出したことにより、当時からその景色が尊ばれており、この地に山荘、別業が営まれていたことが判った。また、須恵器の小壺(瓶子)が多量に出土していること、二彩の壺、灰釉の葉壺、緑釉の鉄鉢など仏教色の強い遺物が多いことなどから、寺院に付属する施設の可能性も考えられる。(木下保明)

43 西野町遺跡 (図版1・42・43)

経過 当該地は、右京区嵯峨野千代ノ道町に所在する西野町遺跡に比定されており、既往の調査でも遺構・遺物の検出が報告されている。1988年4月15日に試掘調査を実施し、行基式丸瓦、焼け瓦片などが出土したため、本格的な調査の必要が生じた。発掘調査は、同年5月9日から6月8日にかけて実施した。なお、開発対象地に千代ノ道古墳が完存するが、破壊されないため調査対象から外した。

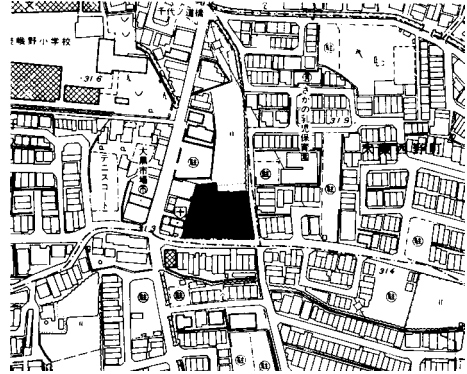


図105 調査位置図 (1:5000)

遺構 遺構には古墳時代前期の土壇1基、古墳時代後期の竪穴住居3棟、平安時代前期の建物2棟、土壇7基、井戸1基、溝3条、柵列1条、近代以降の溝、土壇などがある。

古墳時代前期の土壇 (S K 61) は東西70cm、南北50cm、深さ30cmを測る。庄内式併行期の土器が出土している。

古墳時代後期に属する竪穴住居 (S X 64・81・82) は、一辺4.5mを測る隅丸方形を呈し、軸線を西北方向に傾ける。西北辺中央壁溝寄りの床面には、径70cm前後の円形に赤色化した焼痕が認められた。移動式竈 (韓竈) の据付け跡と考えられよう。壁溝はS X 64を除いて明瞭に巡る。

平安時代前期の建物跡は、東西5間、南北2間、南北庇付きのS B 83と、規模不明のS B 84がある。S B 83の梁行は北庇1.1m、南庇1.9mを測る。桁行は1.7m等間となっている。S B 84は、柱間寸法2.2mを測り、柱穴掘形も方形を呈する。成立時期は、S B 83に比べて遡るものと考えられる。溝は3条 (S D 17・62・63) を検出した。S D 62は南北溝で幅1.8m、深さ30cmを測る。S D 63は幅1.2m、深さ20cmを測り、東西方向に延びる溝でS D 62と合流する。S D 17は南北溝で、幅1.1m、深さ50cmを測る。柵列は柱間約1.2mを測り、4間分を検出した。土壇は、土器を多量に包含するもの (S K 55・80 A・B) と、焼土塊・火熱を受けた壁土片を含むもの (S K 22～24・37・40) がある。S K 55は、南北4.5m、東西1.5m、深さ50cmを測る。S K 80 A・Bはそれぞれ東西2m、南北1.5mを測る。焼土塊・壁土片を含む土壇は、上記以外にも径80cm、

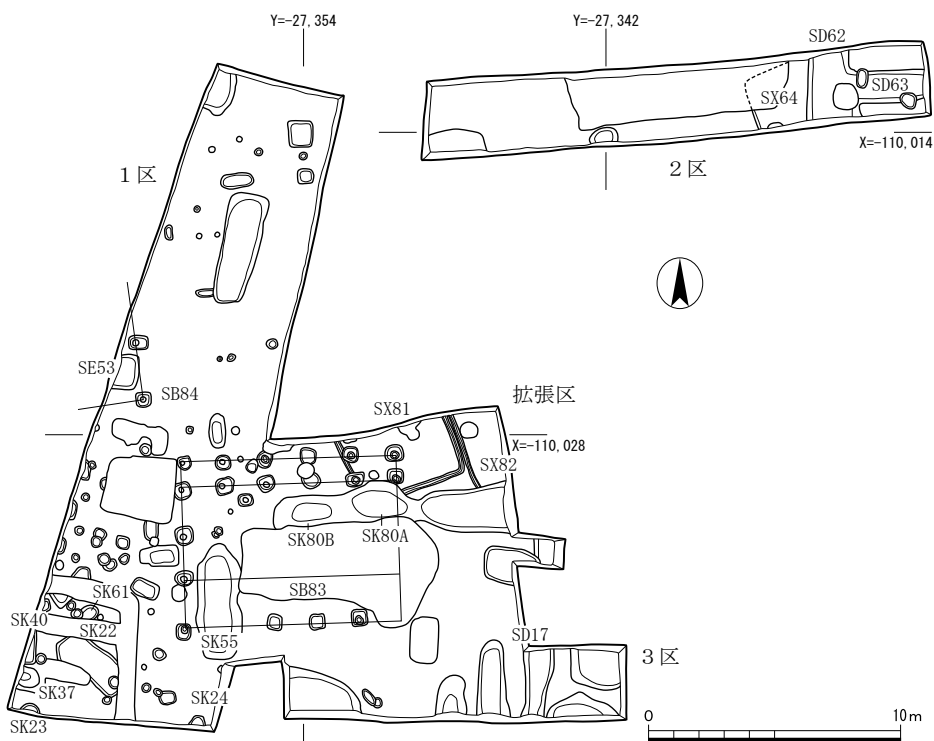


図 106 遺構平面図 (1 : 300)

深さ 40cm 前後のものが複数基検出された。井戸 (S E 53) は、南北 1.5 m、深さ 1.2 m 以上を測る。

遺物 出土した遺物の時期は、古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代前期、近代以降に属するものがある。

古墳時代前期の遺物は、庄内式併行期に属するものが土壙 (S K 61) から少量出土した (図版 43 - 1)。古墳時代後期の遺物は、竪穴住居 (S X 64・81・82) から出土したもので、須恵器杯、土師器高杯・甕などがある。時期は 7 世紀前半に属する。

奈良時代の遺物は、S D 62 から軒平瓦が出土した。(図版 107 - 11)。

平安時代前期の遺物は、須恵器杯・壺、土師器皿・甕、黒色土器椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器皿、瓦類が出土した。主として土壙 (S K 55・80 A・80 B)、溝 (S D 17・62・63)、建物 (S B 83) などからで、9 世紀後半代に属する。特に S K 80 A・B から出土した遺物は、良好な一括性を有している。

小結 西野町遺跡の古墳時代後期に属する竪穴住居の検出例は、嵯峨野小学校内の調査、

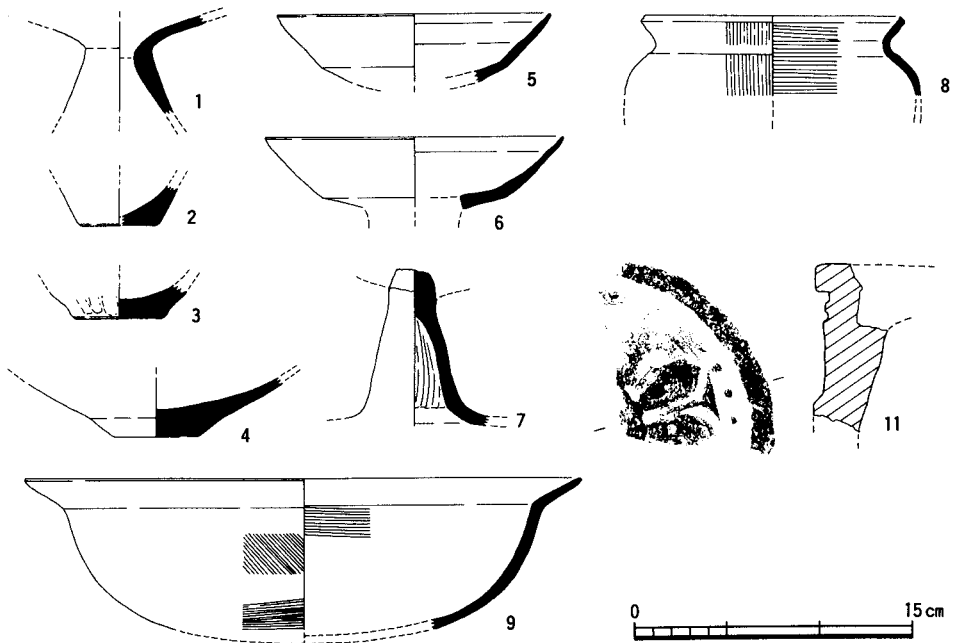


図 107 出土遺物実測図 (1:4)

昭和 63 年度の下水道工事立会調査に次いで 3 例目を数える。各地点はそれぞれ 100 m 前後の距離を隔てている。このことから、西野町遺跡の範囲とされる半径 150 ~ 200 m の地区内に、数多くの竪穴住居が展開しているものと考えられ、当該期の大規模な集落跡としての認識は不可欠であろう。

平安時代前期の建物は、2 × 5 間南北庇付き東西棟で、建物の方位をほぼ真北に揃えている。また、3 箇所の大型土壇からは、平安京内に通有な器種・器形の土器群が一括出土している。

『三代実録』貞観 3 年 (859) 正月条に、正三位中納言平朝臣高棟が葛野群高田郷の別業を道場とし、「平等寺」の額を賜るとある。平高棟は桓武天皇の孫にあたり、貞観 9 年 (867) に 64 歳で死去している。調査で検出した大型土壇や溝の遺物は、9 世紀後半代に属するが、土壇・溝に切られた建物はやや古く 9 世紀中葉とみられる。平高棟の別業平等寺存続年代に合致し、これに関連した遺構とみることができる。周辺一帯に散布する瓦類は、飛鳥時代、奈良時代に遡るものも認められる。今回の調査では寺院建築に直接関係した遺構の検出はなかったが、広範に分布する瓦類や焼土塊、壁土を含んだ土壇の存在は、直近か下層に寺院遺跡を比定し得る有力な根拠となろう。(平田 泰・小檜山一良)

44 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 (図版1・44・45)

経過 鹿苑寺では現状の防災設備が老朽化しつつあり、また金閣改修によってより充実した防災体制および設備が必要となった。そこで「鹿苑寺防災防犯設備整備計画」が立案され、それに伴って事前に発掘調査をする運びとなった。調査区は金閣北側の園路 (A区) と貯水槽とポンプ室予定地 (B区) に設定した。後に寺域東部の畑地 (C区)、番所北側 (D区)、放水銃予定地の3箇所を追加し調査を実施した。それぞれの調査区では、遺構の状況に応じて部分的に拡張を行った。

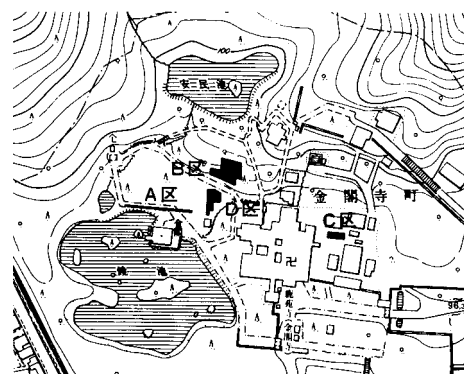


図108 調査位置図 (1:5000)

遺構 今調査によって検出した主要な遺構は、建物・溝・土壌などがある。調査区ごとに遺構の概略を述べる。

A区 金閣北側の園路の調査で、幅0.15 m、長さ42 mの細長い調査区である。東半部では、地山層と思われる黄褐色砂礫層が地表面より0.15～0.2 mほどの深さで認められ、中央部から西へ向かって傾斜している。西端部では、地表面より0.9 mの深さである。地山面が西へ傾斜している箇所、南北方向の溝状遺構を検出した。幅1.9 m、深さ0.4 mを測る。また調査区東部では、幅が1.2 m、高さ0.4 mを測る南北方向の土盛りを検出した。黄褐色粘質土を盛り上げているが、調査面積が狭いため遺構の性格は明らかにできなかった。

B区 当初貯水槽の規模である8×15 mの調査区を設定したが、建物を検出し、貯水槽の位置が変更になったため、調査区の拡張を実施した。当調査区では現代盛土層が厚く堆積しており、遺構の検出面は地表面からの深さが0.4～0.8 mである。建物1は調査区の南半で検出し、礎石は北東隅1箇所残存していたが、他はすべて抜き取られていた。礎石には径0.5 mの自然石を用いている。東側梁行の柱跡では礎石の下に、チャートや花崗岩を据え、根石の替わりとしていた。その東側には柱穴と対応して縁束石がある。調査区の北東隅でも、建物1と方向の一致する建物2を検出した。礎石は小さく柱間隔も狭いため小規模な建物と思われる。この他にも根石やピットを検出しており、この2棟以外に重複して建物を想定できるが、北西部では削平を受け遺存状態が悪い。南北方向の溝を数本検出した。調査区の北側は現在でも相当の湧水がみられるが、その排水用の溝と思われる。

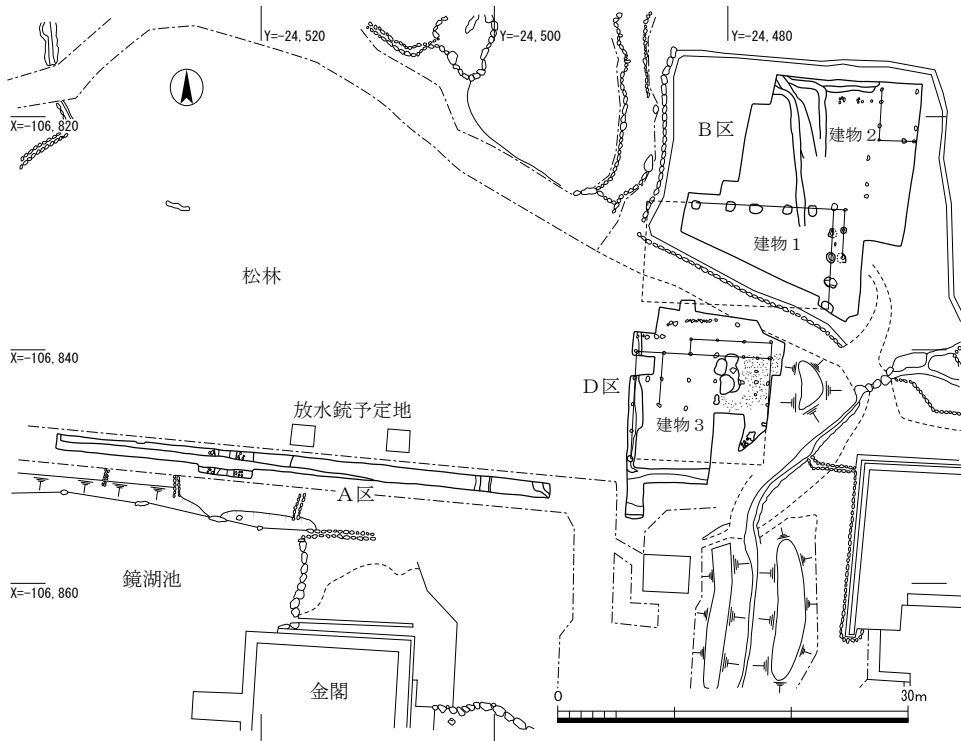


図109 A・B・C区遺構配置図(1:5000)

C区 当調査区は、庫裏東側の畑地に設定した。現耕土層を除去すると、直下が黄褐色混礫砂泥層の地山層となる。西側ほど地山面が高い。この地山面を掘り込んでいるピットを検出した。ピットには底部に石や瓦を敷いたものがあり、柱が沈むのを防いだと思われる。建物は2棟を復原したが、どちらも調査区外へ延びているため確定はできず、建物の平面形や規模を知るには至らなかった。

D区 番所の北側にあたり、A区とB区の間である。地表面より0.15～0.2mほどの深さで、建物と溝を検出した。建物3は、梁行と桁行が共に柱間2.3mの等間隔で、4×5間となる。建物3の西側柱筋の礎石は花崗岩の切石を用い、一段下がったところに据えている。溝は建物3の南側で東西方向に検出した。幅3.6m、深さ0.7mを測る。西へ延長したA区では、その溝の肩部のみ検出し、先へ延びないため、ここで終わるか、北から南へ折れ曲がるのであろう。

調査区南半は、庭木の穴によってかなり攪乱されており、不明な点が多い。東半部では庭石6個を検出し、周辺には礫敷きもみられる。礫は丸みのある石を選び、撒いているようである。中には白色を呈する石英の玉石がある。

放水銃予定地は、A区と同様な状況を示し、明確な遺構は検出していない。

遺物 出土した遺物は、整理箱で43箱を数える。その大部分は瓦類が占め、その他に土師器や陶磁器が少量ある。瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。

軒丸瓦には三巴文、軒平瓦には菊花唐草文を配しており、いずれも小振りである。時代は室町時代と推定できる。土器類は小片ばかりである。室町時代の土器には土師器皿、輸入陶磁器青磁碗・染付（明代）碗・皿がみられる。染付は、ほとんどが2次焼成を受けて文様の不鮮明なものが多く、火災を受けたものと思われる。アラベスク文様を描いたものが多い。

小結 今回4箇所を調査を実施したが、いずれの調査区でも室町期に相当する遺構を検出することができた。鹿苑寺境内では、後世の攪乱は少なく、足利義満の造営した北山殿の遺構が、遺存していることが明らかとなった。遺構の検出面は浅く、現況の地形は当時の状況を比較的受け継いでいると思われる。しかし、更に遡る西園寺公経による北山第の遺構は、今回は検出することはできなかった。

B区の建物1と建物2、D区の建物3は、現在の金閣と方向が一致するため、同一計画で建てられていることがわかるが、文献にあらわれるいろいろな建物のどれにあたるか、現段階では比定することは困難である。建物3の礎石や縁束石をみると、小振りで根石を持たない簡略な据え方をしている。また、出土する瓦も瓦葺きとは考えられず、柿葺きか檜皮葺きの華奢な建物を想定すべきであろう。

D区では庭石を6個検出し、また抜取り穴と思われる土壌を4基検出した。庭石は小振りなチャートを用い、点々と配しているが、建物の礎石と重複するため、建物と景石に時差があるものなのか、建物と景石が同時に存在したものなのかが、明確にはできない。

しかし、1箇所礎石と景石が接していることがあるため、建物の中に庭園を取り込んだものなのかも知れない。

このように北山殿の遺構が良好に遺存していることが判明し、室町期の建物と庭園を明らかにすることができ、貴重な調査成果を得ることができた。

（前田義明）

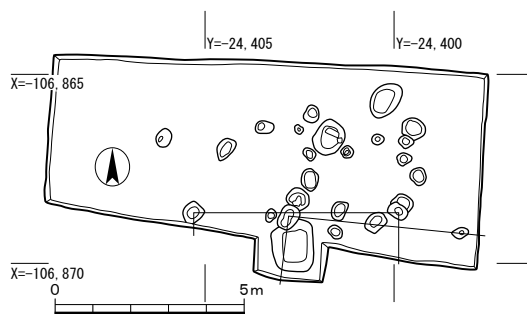


図110 C区平面図面図 (1:200)

45 北野廃寺 (図版1・46)

経過 調査地は北野白梅町の交差点北東で、第1・12次の各調査地に挟まれた地点に位置する。当調査は、第12次調査で検出した東西溝(2条)の西への延長と、他の遺構の残存状況を確認することを主目的としている。

調査にあたって事前に立会、試掘調査を実施しており、調査地の南西部は既存建物によって攪乱を受けていることが判明したため、それを避けてL字状に調査区を設定した。

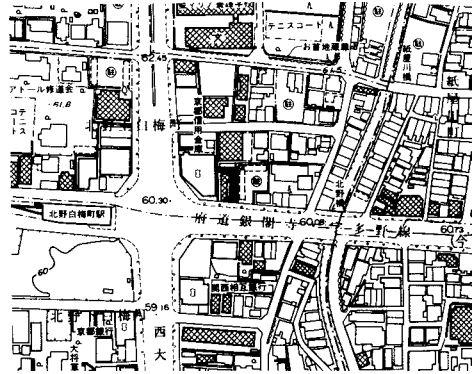


図111 調査位置図(1:5000)

遺構・遺物 調査の結果、当初の予想通り第12次調査で検出した東西溝の延長部を確認した。これらの遺構の下層にも土壌、溝、柱穴を検出し、多量の遺物が出土した。

第1面で検出した主な遺構は、SD 62とそれに平行するSD 38である。SD 62は、幅約7m、深さ1mを測る東西溝である。検出した溝の大半は攪乱されており、北肩部のみを確認した。埋土は大きく3層に分層することができ、上層は礫混じりの粗砂層、中層は砂泥・粗砂層、下層は泥土層である。SD 38は、幅2.3m、深さ0.5mを測り、その埋土は砂泥層である。これらの溝は、東隣の第12次調査で検出したSD 2・20の延長であろう。SD 3が第12次調査SD 2にSD62が第12次調査SD 20にあたるものと考えている。

SX 39以南は、大部分が礫層で厚さ0.5～0.6mを測り、下層は泥土を主体とする土層が堆積する落込遺構を検出している。この堆積状況や遺物が散見することから、河川の氾濫による結果ではないかと考えているが、今後の調査の蓄積を待たなければならないであろう。第2面で検出した遺構は、SD 62の下層で土取り穴とみられる遺構SX 59～61がある。特にSX 60からは多量の土器類が出土しており、当調査区出土遺物の半数を占める。SX 59・61も同様の性格の遺構と思われるが、遺構の一部を検出したに留まった。

壇状遺構SX 65は、南と北側に東西溝SD 40・63を伴い、SX 65の中央ではP it58を検出した。東西溝はそれぞれ幅0.9～1m、深さ0.1～0.3mを測る。これらの遺構群

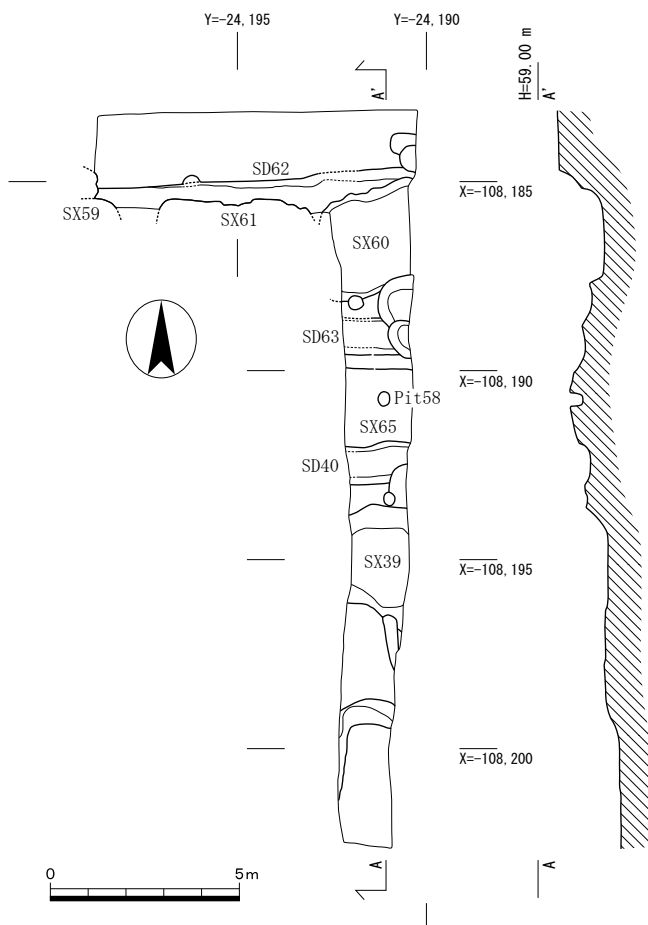


図 112 遺構実測図 (1 : 200)

は築地の可能性も指摘できるが、第12次調査での検出がないために保留しておく。

出土した遺物は整理箱で45箱ある。当遺跡での既往の調査例と異なって、瓦の出土量は比較的少なく、土器類が多くの割合を占めているのが特徴といえる。特にSX59からの出土量が最も多く、出土遺物の大半を占めている。

出土した遺物は、土師器皿・杯・高杯・甕・碗、須恵器皿・杯・小壺などの他に、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器、瓦、金属製品などがある。瓦は、出土数は少ないが、奈良時代から平安時代の

軒丸瓦・軒平瓦がある。また本調査地では鉄塊、鉄滓が比較的多く出土している。第6・12次調査でも鉄滓や埴塼の出土の報告があるところから、近隣で製鉄あるいは鉄製品の生産が行われていた可能性も示唆される。

小結 今回の調査結果によって得られた成果は、第12次調査で検出された溝が、約20m以上続いていることが明らかとなったことである。更に、この溝が示す振れは、北野廃寺と同程度の数値(N3°強W)を示していることが明らかとなった。このことから、この溝は北野廃寺に関連するものと推定され、その復原に有力な手掛かりとなり得るだろう。
(久世康博)

46 幡枝古墳群・南ノ庄田瓦窯跡（図版2-1・47）

経過 市道岩倉上賀茂線の道路拡幅工事に伴い、幡枝2号墳の発掘調査と南ノ庄田瓦窯跡の分布調査を実施した。幡枝2号墳では墳丘・主体部の残りが良好なため現地説明会を開催し、その後墳丘封土をすべて排除し断面の剥ぎ取りを行って終了した。南ノ庄田瓦窯跡の分布調査では、窯跡1基と、その周辺で瓦の散布を確認した。

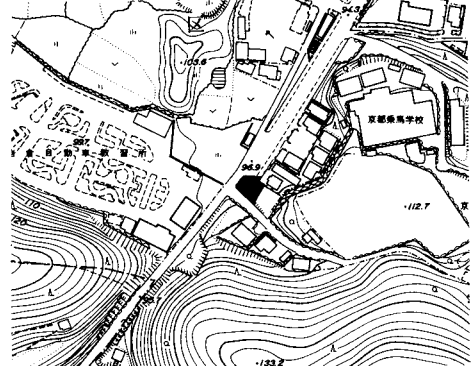


図113 調査位置図(1:5000)

遺構・遺物 墳形は円墳で、直径は裾で11.5 m、周溝心で15.5 mある。高さは周溝底より2.4 m、実際の盛土部分は2 mある。墳丘裾には葺石が3～4段遺存する。基底の葺石は規模が大きい。葺石の礫種はすべてチャートである。墳丘の封土は、地山の明褐色泥土と炭を含む暗褐色泥土からなり、繰り返し水平に盛る工法が確認できた。

主体部は、木棺直葬が2基並列するが、前後関係は明らかでない。東棺は、墓壙の長さ4.2 m、幅1.55 mで、この中に長さ3.2 m、幅0.65 m、深さ0.6 mの木棺痕跡がある。棺床は南側が高く、両端には赤色顔料がみられた。西棺は、墓壙の長さ4 m、幅1.2 mで、長さ3.35 m、幅0.6 m、深さ0.3 mの木棺痕跡がある。東棺より浅い点に特色がある。

東棺内では鉄剣1振、鉄刀1振、飾金具11枚が、また西棺内では鉄剣1振、鉄刀1振、土師器壺1点が出土した。更に墳頂部から須恵器杯・蓋・高杯・壺・甕・匣と鉄鏃・刀子・鎌が破片となって多数出土した。この他、平安時代以降の土師器皿・高杯、焼締陶器甕・鉢、瓦器鍋、輸入等陶磁器青磁皿・椀、白磁、染付や軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などの瓦類、窯壁、鴟尾、甗も出土している。

小結 本調査は、京都市内では初の木棺直葬墳の調査となった。特に墳丘、主体部、出土遺物の内容を明らかにできた点は、当該時期の古墳として基準資料となるものと言える。更に、墳頂部から出土した須恵器は、大阪陶邑古窯址のON 46段階^註（5世紀後半）に属し、当地域の初期須恵器の実相を理解する上で貴重な資料となろう。（丸川義広）

註 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

47 史跡天皇の杜古墳(図版1)

経過 西京区御陵塚ノ越町に所在する天皇の杜古墳は、大正11年に墳丘が史跡指定され、1981・1982年には周囲の水田も買い上げられて公有化が完了した、京都市を代表する前方後円墳である。京都市ではこの古墳の保存と活用をはかるために、史跡公園として設備する計画を進めており、このたび、国の補助を受けて発掘調査を実施することとなった。

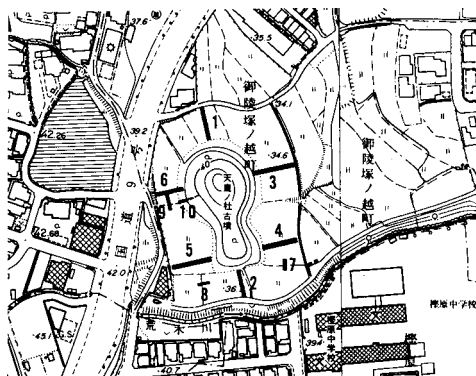


図114 調査位置図(1:5000)

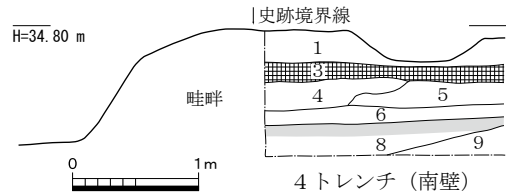
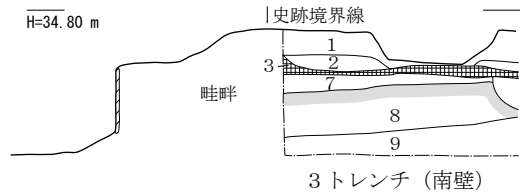
調査は周濠の存在が予想される水田部分を対象に、トレンチを設けて調査する方法をとり、1988年暮れから翌89年3月にかけて実施した。トレンチは幅3mを基本とし、墳丘裾から敷地境界に達するように配置した。まず、古墳の主軸を南北に貫くかたちで1・2トレンチ、前方部でこれに直交する4・5トレンチ、後円部で3・6トレンチを設定し、手掘り調査を開始した。ところが、各調査区の西側では水田の耕土・床土直下がすぐ地山となること判明し、この古墳には周濠が巡っていないことが明らかとなった。次いで、1月末に文化庁の指導を受け、水田各段の層序関係を知る目的で7～9トレンチ、墳丘裾を確認する目的で10トレンチを新たに設けて調査した。そして10トレンチで葦石と埴輪を検出し、墳丘裾を確認する目的を達して調査を終了した。調査面積は422㎡である。

遺構 水田に設定した各調査区では、いずれも古墳に伴う周濠は検出できなかった。各調査区は東下りの堆積状態がみられ、水田化される以前の地形に沿った堆積層序を呈していた。このため調査区の西側では耕土直下がすぐ地山となるが、東に行くほど灰色泥砂などの各層が堆積する。

各調査区で検出した遺構は、墳丘裾で葦石、調査区内では土壌、自然流路、暗渠とみられる小溝などである。葦石は小面積のため、原位置を保つものか、転落したものかの確認は果たせなかった。ただし、10トレンチでは後円部下段裾の葦石とその上のテラスに巡る円筒埴輪列の関係を明らかにした。また、3・4トレンチでは東端において水田畦畔を断ち割り、その盛り方を調べたが(図115)、両トレンチとも平安時代の遺物を包含する

3 灰色砂泥層の上に現在の畦畔が造られている状態が確認できた。これは古墳周濠の外堤とみられていた畦畔が、実は水田区画に伴う畦畔に過ぎないことを明らかにした点で重要である。

遺物 整理箱に4箱出土した。古墳に伴う遺物には埴輪がある。埴輪は主に10トレンチで出土した円筒埴輪と朝顔形埴輪があり、これらは川西宏幸氏の埴輪編年^{註1}の第Ⅱ期に該当するものである。出土埴輪は摩滅が著しい。色調は橙色から明黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。有黒斑で、外面調整



- | | |
|--------------|--------------|
| 1 耕作土層 | 6 にぶい黄褐色粘土層 |
| 2 床土 | 7 黄褐色泥砂層 |
| 3 灰色砂泥層 | 8 褐灰色砂泥層(地山) |
| 4 にぶい黄褐色砂質土層 | 9 黄褐色砂礫層 |
| 5 明褐色粘土層 | |

図115 3・4トレンチ東端付近の土層断面図(1:60)

はタテハケの上にヨコハケを施す。内面調整はタテハケとヨコハケがあり、タガは台形のしっかりとしたものと細いものがある。透かしは、円形と長方形がある。

この他、灰色砂泥層を中心に古墳時代後期の土師器甕、須恵器杯・蓋・高杯、平安時代前期の土師器高杯、須恵器杯・蓋・甕、灰釉陶器壺、平安時代後期から鎌倉時代の土師器羽釜、焼締陶器鉢・甕・摺鉢、輸入陶器青磁碗・白磁碗などが出土している。これらは、付近一帯の開発時期を知る資料として重要である。

小結 周濠の状態を調べる目的で、水田部分にトレンチを設けて調査を行った。結果は、上記した通り周濠の形跡は認められず、本古墳には当初から周濠が巡っていないことを明らかにした。また、周濠の外堤とみられていた東側の畦畔も、平安時代以降に盛られたことを明らかにした。これは、付近一帯が水田化される際に古墳の存在が意識されたため、このような周濠状の地割りが生じたと考えられる。

天皇の杜古墳は、平地に立地することや周濠を持つ点で古墳時代中期に位置付けられてきたが^{註2}、今回の調査で周濠がないことや埴輪の年代観から、前期末葉に位置付けるのが妥当となった。古墳の位置付けに関するこうした資料が得られた点は、今回の大きな調査成果といえるだろう。

(丸川義広)

註1 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978

註2 田辺昭三「首長墓の成立」『京都の歴史』1 学芸書林 1970

48 南春日町遺跡 (図版1・48)

15次調査

経過 調査は土地基盤整備事業に伴う15次発掘調査である。調査地は、明治6年大原野村地籍地図によると、小字名は「大戸」と称されている。1984年調査地を含む広域にわたる試掘調査^{註1}では、当地で平安時代の柱穴、溝を確認している。

調査は試掘調査の成果に基づいて、トレンチを設定し、当該期の遺構の拡がりおよび性格を把握することに主眼をおいて実施した。

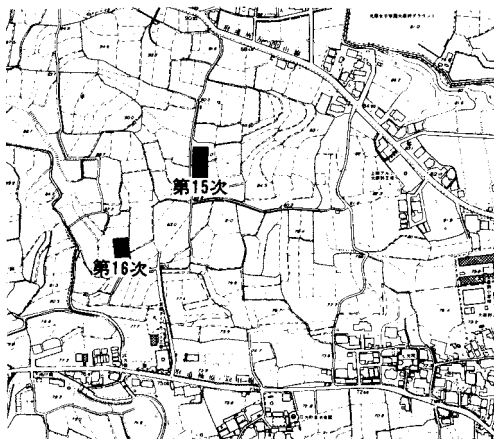


図116 調査位置図 (1:10000)

遺構 調査地を含む周辺の地形は、北西から南東にかけて緩やかに傾斜する。遺構面も同様の状況を呈する。

基本層位は現耕作土、床土、第1層明黄褐色砂泥層（近世盛土）、第2層マンガンを多量に含む灰褐色砂泥層（中世盛土）、第3層黄褐色砂泥層（地山）である。遺構は、すべて第3層の地山面で検出した。検出した遺構の総数は、1090基である。ほとんどがピット、柱穴で、その他に土壇、溝がある。遺構の時期は、平安時代から室町時代のものがある。遺構の検出状況をみると、調査区北東部と南半部にピット、柱穴が集中して認められ、柱穴は重複するものが多い。建物としてまとめることができたものは、調査区南半部に位置する建物1・2で、いずれも東西棟の掘立柱建物である。両建物の時期は、出土遺物から鎌倉時代に比定できる。規模は建物1が東西4間、南北2間（10.4×3.5m）で、南に庇が付く。建物2は東西3間、南北3間（8.3×5.4m）である。また、建物1に北接する東西溝2、西接する南北溝3は、同建物に伴うものであると考えられる。その他、明確な遺構としては、北東部で検出した平安時代中期の南北溝（溝1）が挙げられる。規模は幅0.5～1.5m、深さ0.3～0.6mで、南北20mにわたり検出した。

遺物 出土遺物は整理箱7箱で、そのほとんどは土器類である。土器類には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器がある。土器類以



図117 15次調査遺構配置図(1:400)

外には瓦、鉄製品、銭貨がある。

出土遺物の時期は、平安時代中期から室町時代である。遺物の出土状況を見ると、平安時代中期の遺物は、調査区東半部で南北方向の流れを持つ溝1から出土している。平安時代後期から鎌倉時代の遺物は、東半部および南半部に集中するピットや柱穴、溝から出土している。鎌倉時代の溝2からは、輸入品とみられる緑釉陶器皿の破片が出土している。

小結 調査の結果、平安時代から室町時代の遺構を多数検出した。遺構は柱穴が多く重複した状態で認められたことから、建物が幾度も建て替えられた状況を示すものであった。ただ、建物としてまとめることができたのは、鎌倉時代の建物2棟であった。これらの、建物2棟を含む平安時代から室町時代の遺構群については、当調査区北接地にあたる14次調査地^{註2}で検出した同時期の遺構群と一連のものと考えられる。

西接する南北農道が、曲折しながらも大原野神社に到達していることから、神社への古道と考えられ、今回検出した遺構群は、古道沿いに設置された神社関連の施設である可能性が高い。

16次調査

経過 調査は土地基盤整備事業に伴う16次発掘調査である。調査地は前述地籍図によると、小字名は「下西代」と称されている。また当地に西接して、北西から南東に杜家川

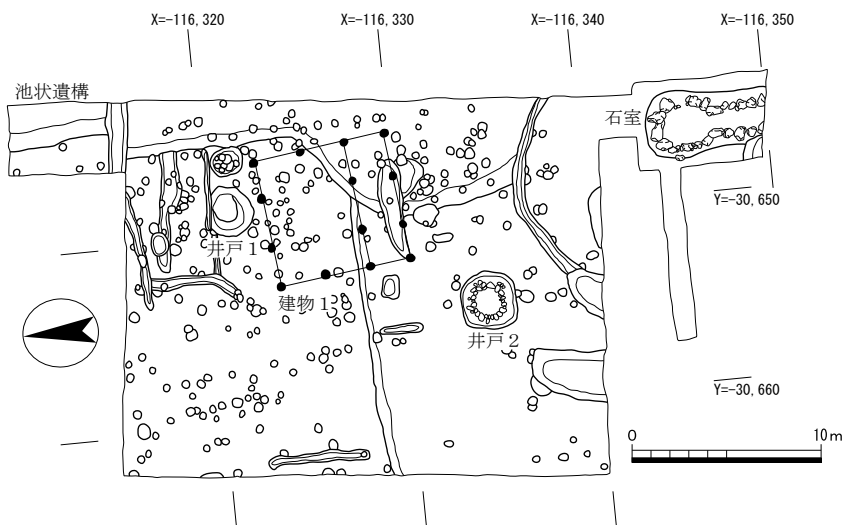


図 118 16次調査遺構配置図面図 (1:400)

が流れている。地元では下西代を下社家と呼称し、北に西接する小字名「西代」地区を上社家と呼称している。1984年の試掘調査^{註3}では、平安時代から中世の遺物包含層、平安時代の柱穴を確認している。

遺構 15次調査地から南西140mのところ、北西から南東に緩やかに傾斜する丘陵の西端にあたるが、調査区は平坦地に設定した。

基本層位は現耕作土、床土、第1層茶灰色砂泥層（近世盛土）、第2層茶褐色砂泥層（中世盛土）、第3層黄褐色砂泥層（地山）である。遺構はすべて第3層である地山面で検出した。

検出遺構の総数は331基で、その内訳はピット、柱穴が312基、土壇9基、溝8条、井戸2基である。遺構の時期は平安時代後期から室町時代で、以下、主要な遺構について概述しておく。

平安時代後期の遺構には建物1、井戸1、池状遺構がある。建物1は東西棟の掘立柱建物である。規模は東西3間、南北2間(6.8×4.9m)で、南に庇が付く。建物1に北接して、井戸1がある。素掘りの円形井戸で、規模は直径2.7m、深さ4.5m、底部に曲物桶を据えていた。池状遺構は、北東拡張区で肩口の一部を検出したが、検出部は南東角にあたり、遺構は調査区外へ延びていた。

その他、主要な遺構に室町時代の石組井戸（井戸2）があげられる。規模は、掘形の直径3.1m、石組内径1.4m、深さ3.7mで、底部に曲げ物を据えていた。

また、南への遺構の拡がりを確認するため南東隅を拡張したところ、古墳の主体部である石室を確認したが、予想外であり日程の制約もあったため、本格的な調査は行わず、次回の調査に委ねることとなった。

遺物 出土遺物は整理箱 27 箱である。その内、土器類が 23 箱、木製品が 4 箱ある。その他、土器類に伴い瓦、鉄製品、銅製品が出土している。土器類は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、国産陶磁器である。木製品には削りかけ、建築部材、板状木製品などがみられる。

出土遺物の時期は、古墳時代後期から室町時代である。出土状況をみると、古墳時代後期の遺物が南東部拡張区の石室埋土から、平安時代後期から末期の遺物は北西から南東にかけてのピット、柱穴、溝、井戸 1、池状遺構から出土している。また、井戸 1 の中から鉄鎌が、池状遺構からは木製品が多く出土していることが特筆される。

小結 調査の結果、平安時代から室町時代の建物と、従来大原野地域では未検出であった井戸を 2 基検出することができた。これらの、井戸と建物の検出から、下西代地区は平安時代末期から室町時代にかけて続く住居地であると考えられる。

ただ、当地は同地区の南端部に位置していることから、住居地の一端を示すものであり、その主体部については同地区内での当地以北に、主要な遺構の存在が想定できる。

平安時代から室町時代にかけて続く住居地の性格については、15 次調査で得られた大原野神社への行幸道に近接していること、また下西代地区が下社家と呼称されていることから、大原野神社を管理運営する神職集団の居住地である、社家跡の一部であると言っても過言ではないだろう。

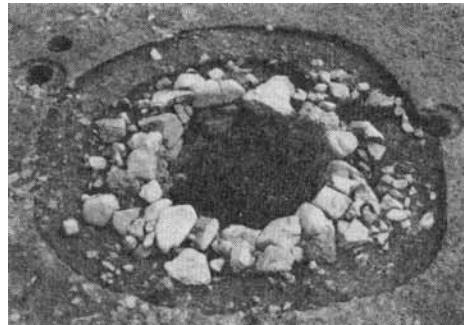


図 119 井戸 2

(加納敬二)

- 註 1 加納敬二・辻裕司「大原野南春日町遺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 60 年度 京都市文化観光局 1986
- 註 2 加納敬二「南春日町遺跡」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991
- 註 3 註 1 参照

49 中久世遺跡 (図版2-3・49)

経過 調査地は中久世遺跡の範囲内で、6次調査註地の東隣に当たる。本調査は6次調査^註検出の流路(弥生時代・長岡京期から平安時代)に関連する遺構の確認を目的とした。

遺構 調査地の層序は7層に分かれ、5層(青灰色粘土層)上面(標高14.8m)で流路、土塋、柱穴などを検出した。

調査区中央部では6次調査に続く、北西から南東へ流れる流路(幅9m、深さ0.6m)を検出した。北肩部に丸杭を打ち、これに横

木を組み、護岸とする。埋土は暗灰色泥土と砂の互層で3層に分かれる。弥生土器は主として下層から、長岡京期の遺物は主として中・上層から出土し、溝内に散在する。

遺物 遺物は整理箱14箱で、弥生土器・須恵器・土師器・灰釉陶器・木製品・石製品・土製品などがあり、大半が流路から出土した。流路出土の長岡京期の遺物は、土師器杯・椀・皿・壺C、須恵器杯・壺・甕、墨書土器、土製品ミニチュア竈・甌、土馬、木製品人形、斎串・皿、石製砥石、馬歯、獣骨がある。

小結 流路は、弥生時代遺構の自然流路で、長岡京期には護岸を施すが、埋没する。人面土器などの祭祀具を用いた祭祀は、流路の層序からみて何度か行われたと推定できる。既往の調査では当該期の流路を数条検出し、2・3・17・21・29次調査で祭祀具が出土している。長岡京近郊の祭祀を考える上で重要な遺跡と言えよう。(西大條哲・上村和直)

註 調査次数は『中久世遺跡発掘調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局1987による。

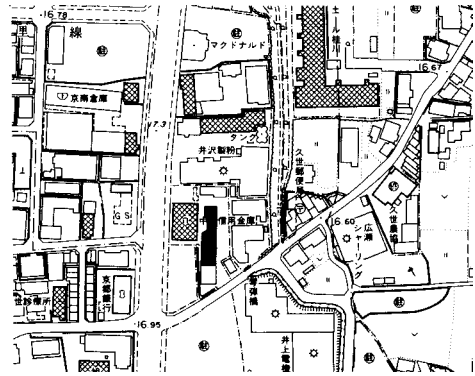


図120 調査位置図(1:5000)

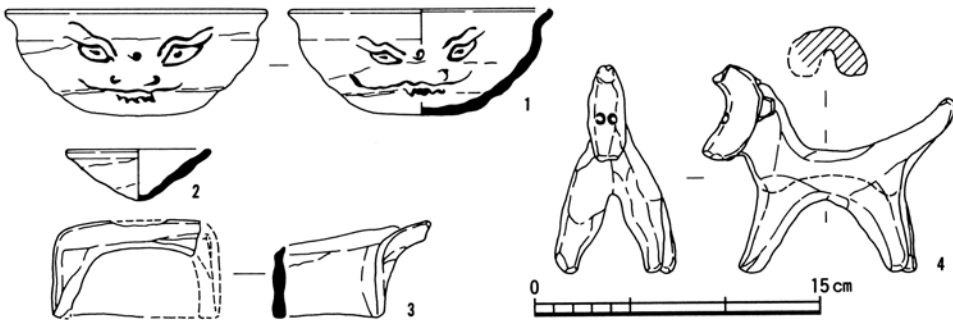


図121 流路出土遺物実測図(1:4)

50 大藪遺跡 (図版2-3)

経過 調査地は大藪遺跡に該当し、周辺での調査成果によって弥生時代から古墳時代の集落跡が存在すると予想された。さらに、当地は中世荘園「久世荘」に比定され、「城屋敷」という小字名を残していることから、中世集落の重要遺構が存在している可能性も高いところであった。本調査は試掘調査の結果を受けて、遺構の保存状態の良い、対象地の南部に調査区を設置して実施した。

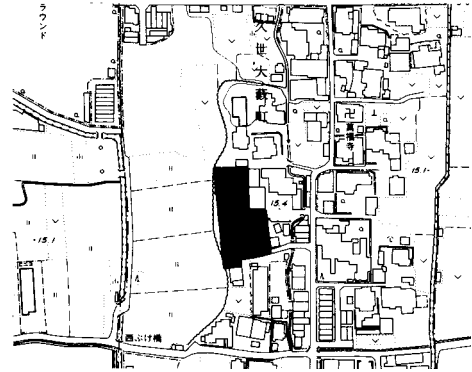


図122 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 鎌倉時代後期から江戸時代前期と江戸時代中期の遺構面2面を検出した。下層の鎌倉時代後期から江戸時代前期の遺構としては掘立柱建物、柱穴、井戸、土壇、溝などを検出した。遺構は主に調査区の東部から南部にかけて多く分布し、重複するものも多い。遺物は井戸、土壇などから土器類が出土しているが、いずれも小片で量も少ない。江戸時代中期の遺構は、建物の礎石、根石のほか、土壇、溝をわずかに検出したにすぎない。礎石、根石などの柱跡は、調査区中央付近で東西方向に一列に並んでおり、他の柱跡をも含めて一棟の建物が想定できるが詳細は不明である。遺物のうち土器類は、土師器に加えて唐津、伊万里などの国産陶磁器が多く出土しており、その他に産地不明の焼物も多く、多彩な様相を呈している。土器類以外には金属器（キセル）が出土している。

小結 今回の調査では、当初弥生時代から古墳時代の集落跡の確認が期待された。しかし、黄褐色の安定した土層の堆積を認めたものの、集落跡の存在を示す痕跡は認めることができなかつた。ただ、調査区がきわめて限定されていたこともあり、今後の調査結果に期待したい。

一方、中世集落の確認という点では大きな成果があつた。ただ、当地に残る「城屋敷」という小字名から想像されるような大規模な建物跡は認め得なかつた。しかし、検出遺構は小規模ではあるが建物、井戸、溝などによって構成された、中世集落の様子をよく伝えている。これらの遺構は、近世に入っても整地を繰り返しながら何回かの造り替えが認められており、当地区が中世以来連続と居住空間であつたことを物語っている。(吉崎 伸) 『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』昭和63年度 1989年報告

51 法性寺跡 (図版1・50)

経過 調査地は京都第一赤十字病院に南接する海蔵院(洛東園)境内で、特別養護老人ホーム新築工事に伴う発掘調査である。調査地は法性寺の推定地にあたる。試掘調査により、平安時代前期の東西溝、室町時代の土塋などが確認され、本調査を実施することになった。調査区は当初南北25m、東西10mの長方形に設定し、その後、平安時代前期の東西溝の範囲を確認するために、調査区の南側で東と西に拡張区を設定した。

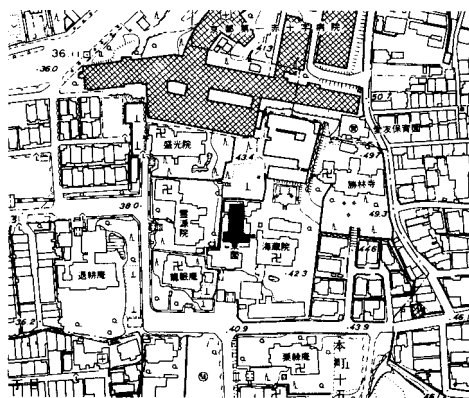


図123 調査位置図(1:5000)

遺構・遺物 検出した主要な遺構は、平安時代前期の溝、同中期の建物、室町時代の建物・柱穴・土塋などである。

平安時代前期の東西溝SD120は、検出長16.4m、幅1.9～2.4m、深さ0.1～0.4mの規模をもち、東側で南に曲がる。溝の東西軸方向は、西で北へ5～6度振る。ここからは多量の土器が廃棄された状態で出土しており、整理箱11箱分に及ぶ。出土土器は土師器が多くを占め、杯・碗・皿・蓋・甕などの器種がある。その他、須恵器の甕・瓶子・壺・杯などや灰釉陶器、黒色土器、瓦が出土しているが、緑釉陶器、輸入陶磁器は全くみられない。9世紀前半代の土器と考えられる。

平安時代中期の建物は、SD120の南側に位置するもので、東西1間分(Pit127・136)を確認した。Pit127は残存状況が悪く、両者の柱間の計測は難しいが、13～14尺(約3.9～4.2m)と推定される。SD120と同じ方向に、約5度振っている。Pit136からはまとまった量の土師器皿が出土しており、10世紀後半代のものと考えられる。ところで、この遺構から瓦当中央に「山本」と陰刻された軒平瓦が出土している。この瓦は、東寺などから出土する「左寺」銘軒平瓦と同じタイプで、瓦範で文様を付けた後に文字部分を削り取り、新たに「山本」とヘラ描きしたものである。

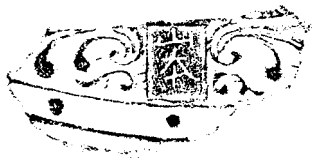


図124 Pit136出土軒平瓦拓影
(1:2)

室町時代の遺構は、多数の柱穴が群として検出されたが、建物としてのまとまりを把握できたのはごく一部である。

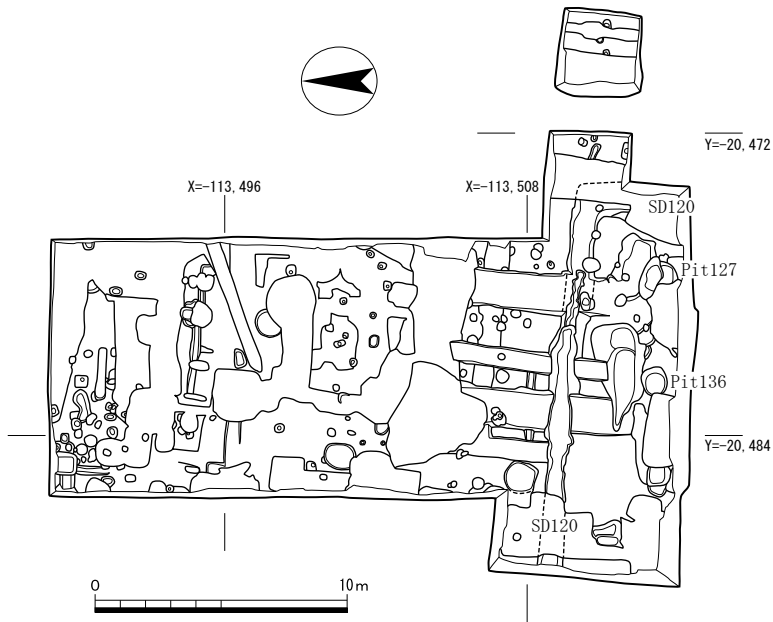


図 125 遺構平面図 (1 : 300)

小結 法性寺は、延長年間(923～931)を前後する時期に、藤原忠平によって建立されたとされる寺院である。今回検出した平安時代の東西溝からは、9世紀前半代の土器が出土しており、法性寺の前身を考える資料となる。この溝がL字形に曲がること、溝に多量の土器が廃棄されている状況などから、付近に同時期の建物の存在が想定される。この溝の振れは、検出した室町時代の建物などや現在の龍眠庵—靈源院—勝林寺一帯でも確認することができ、長い間この地割を踏襲していたことがわかる。

ところで、狭い範囲での調査ではあるが、SD 120より北側では平安時代の遺構は検出していない。また、東福寺付近の紀伊郡条里の復原図^註と照合すると、この溝の位置は、ほぼ紀伊郡条里の北端と一致する。もちろん、これは直接的な条里の溝ではないが、上記の理由から条里の規制をうけている可能性が考えられる。ただし、付近の復原条里はこの溝と同方向の振れをもつが、これほど大きな振れではなく、今後の課題として残る。

本調査で明らかにできたことは少ないが、法性寺推定地ではじめての本格的な平安時代の遺構の発見であり、法性寺の伽藍を考える上での糸口となるだろう。(高 正龍)

註 福山敏男「法性寺の位置について」『佛教藝術』100号 毎日新聞社 1975

52 伏見城跡 1 (図版 2-3)

経過 調査地は、伏見城下町の一角に当る。当地で宅地分譲の計画があり、それに伴う事前調査である。調査に当たっては2本のトレンチをT字形に設定した。第1トレンチ(南北、6×16m)は旧伊達街道およびそれに伴う施設の検出を主眼とし、第2トレンチ(東西、6×23m)は宅地部の遺構の在り方を目的として設定したものである。

遺構・遺物 調査地の基本層位は、現代盛土一遺物包含層一整地層1(遺物、炭を多く含む)一整地層2(本報告の遺構面)一地山となっており、東から西へ向かって傾斜している。ただし、整地層2上面は第2トレンチの西側4分の3はほぼ水平である。

第1トレンチでは現地表下約1.0mで築地遺構を検出し、その西側に犬行、石組溝、路面なども検出した。築地は西端部の石組を検出しているが、築地の構造に伴う遺構の検出はなかった。犬行は幅1.0mを測り、石組溝は幅50cm前後、深さ40～50cmを測る。路面は砂・小礫で固められ、3面以上を認める。また、築地遺構の石組は当初は3段で、高さ約1mを測るものであった。犬行・石組溝・路面は、後に修造されたものであることが判明した。

第2トレンチでは、現地表下0.4～1mで桃山時代の整地面を確認した。検出した遺構は東西7間以上、南北2間以上の建物と、それに取付く廊状の柱列である。建物の柱当りには礎石を据えており、柱があった部分は炭が付着していた。廊状の柱列のうち、1基には焼けた柱が残存していた。建物の周囲には焼土、炭が認められ火災に遭ったと思われる。

出土した遺物は、整理箱で50箱ある。整地層1からの出土が大半を占めており、他に石組溝、柱穴、土壙などからの出土がある。遺物の内容は瓦が大半を占めており、金箔瓦も数点ある。他に土師器、陶器、焼米(おにぎり)、鉄製品、弾丸などがある。

小結 今回の調査では、旧伊達街道の構造と変遷、そして伏見城下の大規模な屋敷の一端が明らかとなった。また、遺構の検出状況や焼米、弾丸などの出土から、戦乱によって焼失した可能性も十分に考えられる。(久世康博)

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 1989年報告



図126 調査位置図(1:5000)

53 伏見城跡2 (図版2-3・51・52)

経過 調査地は京阪電車・近鉄電車の丹波橋駅の京町通を挟んだ南西隣に位置する。敷地は東半が伏見区京町南7丁目に、西半が両替町9丁目に属する。両町の境目に段差があり、西半が東半に対して2m程度低くなっている。この段差は敷地外の南北に延びており、現在は石垣が積み重ねられている部分が多い。両町とも、桃山時代から江戸時代初頭の伏見城下時代に町屋地として設定されて地域で、詳細

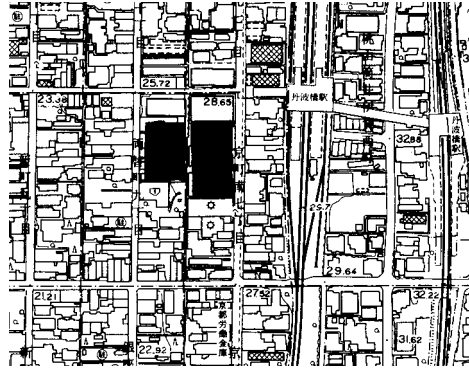


図127 調査位置図 (1:5000)

は明らかではないが、商工業者が店を構え居住していたことが知られる。また、敷地東側を南北に走る京町通は、城下町時代から南北のメインストリートと理解できる通りであり、北は京都へ至り、南は城下町南辺付近で東へまわりこみながら観月橋へとつながり、奈良へと至るいわゆる奈良街道の一部として設定された街路とみる意見もある。

今回の調査開始以前、昭和62年度に試掘調査を実施し東半、西半とも桃山時代から江戸時代の遺構遺物が遺存していることが明らかとなった。この結果に基づき、敷地全域を対象とする発掘調査を実施するはこびとなった。本調査においては、遺跡の把握を主目的に東半、西半にそれぞれ1000㎡前後の調査区を2箇所設けた。また、段差の形成期と造成方法を解明するため、段差部を含めた東西トレンチを2箇所設定し、更に、東辺部においては京町通の構造をより明らかにするために、東グリッドの一辺の2箇所を東へ部分的に拡張して調査を実施した。

遺構 東西グリッドにおいて、桃山時代以降から江戸時代各時期の町屋跡を検出した。各町屋は礎石、柱穴などの建物跡、塀又は柵、溝、井戸、土壙、ゴミすて穴などの遺構によって構成されている。桃山時代から江戸時代初頭の町屋の単位はあまり明確ではないが、江戸時代前期以降の町屋地より敷地規模が大きいうだ。江戸時代の町屋は、柱穴列(塀か)や溝などの境界の痕跡を手掛かりにすると、東グリッドで北から三間、二間半、三間、三間半の間口を持つ町屋が想定できる。南半は境界が不明瞭で、大きな間口の町屋とみるか否かは今後に期す。又、西グリッドでは北から間口がそれぞれ三間半、三間、二間半、二

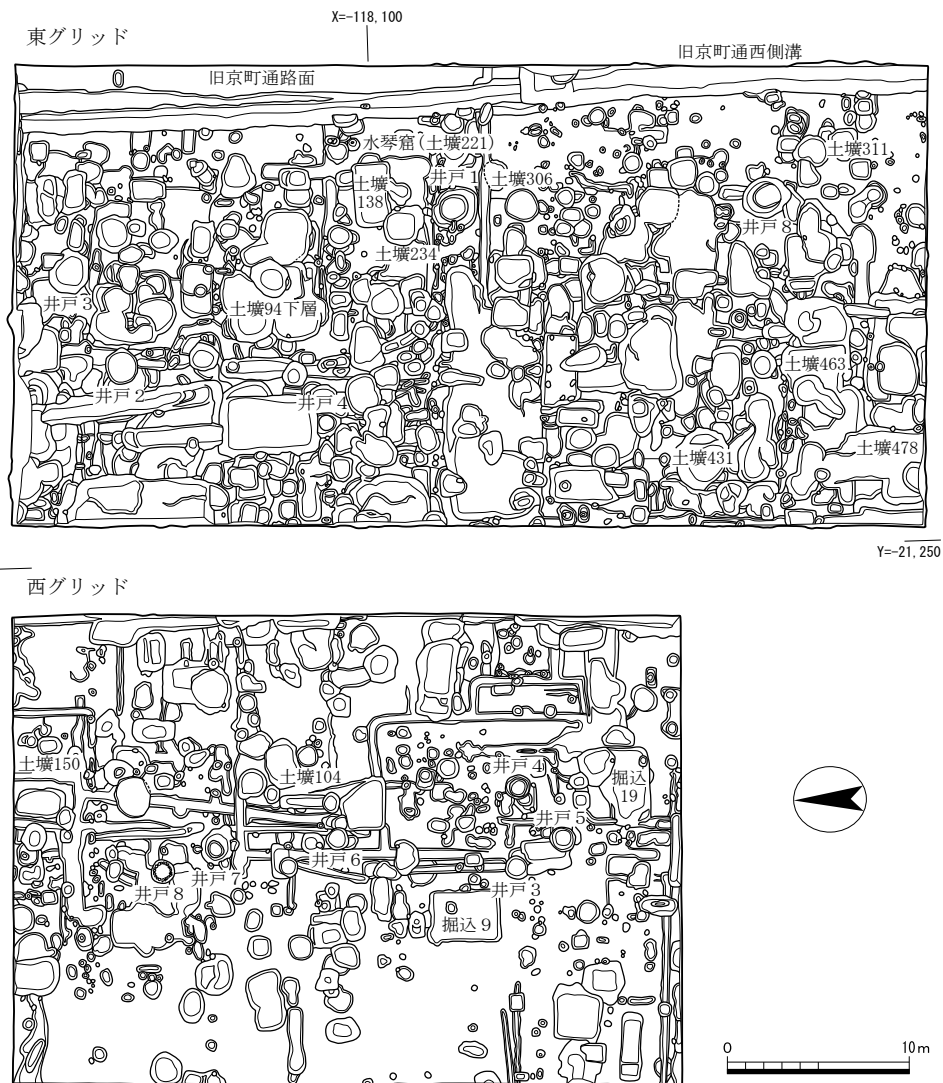


図 128 遺構平面図

間、五間の町屋が建ち並んでいたとみられる。奥行きは東西とも段差部までそれぞれの敷地とすればほぼ十五間である。地割りは時期により変化しているようで、その変遷の詳細は整理後にゆずる。

なお、城下町であった時期と推定する礎石建物を東グリッドの中央部よりやや北側で検出しているが、この建物の柱間は約 1.98 m を測る。この一間が 1.98 m という数値はいわ

ゆる京間の寸法であり、京間を示す比較的早い時期の資料といえる。また東グリッド中央部よりやや北側では、江戸時代中期頃に造られたと見られる水琴窟を1基検出した。水琴窟は茶室の蹲踞のわきなどに、水滴の落下音を楽しむことを目的に設置されるものである。当地に居住した町衆の風雅が偲ばれる遺構である。

東グリッド東辺沿いで発見した旧京町通は、路面と西側溝を検出している。溝幅1.4 m、深さは西肩から0.6 mを測る。側壁には保護施設が見られず、素掘り状態で機能していたと見られる。路面は地山上面に粘質土を薄くひき、その上に小礫を主とする土層をひき、丁寧に造られている。検出状況は上面がきわめて堅く良く締まっており、小礫による舗装道路という印象であった。利用頻度を反映した状態でもあろう。最も古い路面は西側宅地よりも0.2～0.3 m低く造られているが、京町通を始めとする伏見の南北道路は、西方へ下がりつつ延びる丘陵の尾根線に直交する位置関係となるため、尾根線頂部付近では相対的に掘り窪めた形の道路設定となるのであろうか。側溝の規模も大きく、傾斜地に造成された宅地への流水侵入防止を配慮した構造を示しているといえるだろう。

地山直上に造られた路面がここでは最古の路面で、桃山時代の比較的早い段階にはすでに形成されており、桃山時代の内に埋没して機能を喪失している。その後、少なくとも3回以上路面を積み上げて道路を造り直しており、側溝との関係で、宅地が道路側に少しずつ拡張されてゆく様子が明確にわかる。

桃山時代の宅地側の遺構面は、東西で約2 mの比高差があるが、段差部を境にそれぞれは広くほぼ平坦な面を成している。西グリッドでは削平によって遺構面が形成されており、東グリッドでは西辺部に積み土を行うことによって平坦面を造り出している。東西の宅地面の段差部（崖面）では、西側の下断面に崖面に沿うように溝状の遺構が配されていた。調査区外に南北に延びる崖面の状況や、調査区外で広く見られる東から西への宅地の雛壇状態などからみると、伏見城下町の宅地造成は個々の宅地を対象にしたような小規模なものではなく、個々の建物の築造以前に城下町全体の道路と宅地の造成を計画的に実施したものと考えるのが妥当であろう。なお、現崖面に見られる石垣は、江戸時代以降に積まれたと理解している。この桃山時代に形成された雛壇状の宅地面が、若干の整地土層の積み上げは行なわれるが、基本的には現在までほぼそのままの状態を残している。

遺物 古墳時代の円筒埴輪片や、波状文のある須恵器甕片、奈良時代から平安時代に比定できる須恵器杯（B）が旧京町通西側溝の埋土から出土しているが、出土量は少ない。これら以外の出土遺物は、室町時代末期から桃山時代の土師器、施釉陶器類が中心である。

中世以前の古い出土遺物は混入遺物であるが、当地を含む近辺に同時期の遺跡が存在していた証である。残念ながら、当調査地内では関連する遺構は検出していない。

出土遺物の中心は桃山時代後半以降から江戸時代の土器、陶磁器、瓦類である。土器、陶磁器類では各期を通じて碗、皿、鉢などの食器類、壺、甕、播鉢などの貯蔵・台所関係などの容器類である。町屋で使用されていた、いわゆる日常雑器類が出土土器の主力である。しかし桃山時代から江戸時代前期に比定できる遺構からは美濃、瀬戸系の製品である志野水指・向付・皿、黄瀬戸皿・大皿・向付・香炉、織部の向付、鉄絵茶碗、天目茶碗、灰釉香炉、唐津系の茶碗・水指・向付・鉢・酒杯、京焼系の軟質施釉陶器茶碗、輸入陶磁器明の染付碗・皿・鉢などの、伏見町衆の経済力をうかがわせる、高級食器や茶陶類を多数含む遺物群が出土している。瓦類は、棧瓦を含め町屋の屋根に葺かれていたものが主力であり、火災で瓦礫と化し埋設されたと見られるものも多い。桃山時代後半から江戸時代後期の遺物と共伴出土したものに若干金箔瓦が見られるが、当地の町屋に関連するものではなく他の大名屋敷地から混入したものであろう。

江戸時代中期に比定しうる土師器壺の底外面に「二月 津国や お亀」また、底部内面に「亀」の墨書を施したものが出土している。「津国屋」は、桃山時代から江戸時代の伏見で何軒かが常に活動している。当地で検出した町屋の一軒が「津国屋」であると断定できないが、伏見の歴史を考えてゆくうえで興味深い資料の一つである。

小結 今回の調査によって城下町の造成工事は、大名屋敷地域のみに限られて行なわれたのではなく、町屋地域を含め先行的に大規模な都市造成が行なわれたことを明らかにできた。これは城下町となる全域を対象とした都市計画と、全域で先行的に工事が実施されたことを証明する一歩となろう。確かに伏見古地図や現在の地図などを見ても城下町の計画性はみてとれるが、工事の実施を含めて計画がどのように実体化されたのかは不明な点がほとんどである。今回の調査によって得ら

れたような考古資料が蓄積されれば近世初期の城下町伏見の都市造成の実体が解明できるだろう。

江戸時代の町屋跡の資料は、江戸時代に入って、城が破却されて一地方都市となりながらも地の利を生かした小都市として生き残る伏見の様相が、町屋の変遷という点からアプローチできる可能性を示している。

桃山時代から江戸時代前期の茶陶を含む遺物類も、当時の伏見の文化、経済を解明していく大きな手掛かりとなる資料である。(小森俊寛・上村憲章)

54 伏見城跡3 (図版2-3・53)

経過 当地は、伏見城城下町として周知の遺跡範囲内に位置しているが、調査に先だって実施した試掘調査によって、桃山時代から江戸時代初頭の遺構に加えて溝状の遺構から円筒埴輪片が一定量出土し、未発見の古墳時代中期の遺跡の大きな手掛かりを得ることができた。このため本調査の実施にあたっては、調査対象範囲のほぼ全域に調査区を設定することとした。

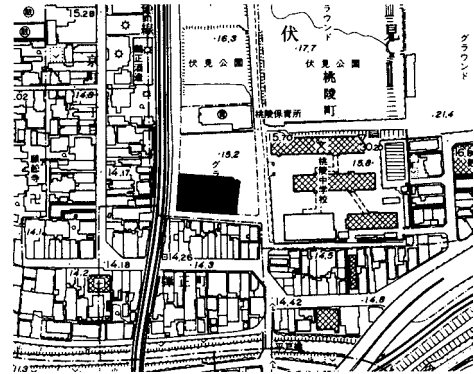


図129 調査位置図 (1:5000)

遺構 弥生時代以降の各時代の建物、溝、墓、井戸、土壇、掘込、ピット、落込など各種の遺構を検出した。

弥生時代の方形周溝墓は、溝を共有していると見られる隣接したものも含めて7基確認している。主体部は、ほとんどが削平されており溝も残存状況が悪い。しかし、溝の全景が推測可能なものもある。検出したものでは、方形周溝墓2としたものが最も大きく一辺11～12m、同3は一辺ほぼ8mを測る。同4は同2より大型のもの残欠と見られるが、他のものも含めて小規模な周溝墓という印象である。方形周溝墓4の周溝から、弥生時代中期前葉に比定できる壺片が1個体分出土しており、他の周溝墓も含めて、ほぼ同時期の周溝墓群と考えている。

古墳時代については、明確な遺構と断定できるようなものは検出できなかった。試掘調査や本調査で検出した埴輪は、弥生時代の周溝最上部の窪みに炭とともに廃棄されたものと考えている。

奈良時代の柱穴群3とした遺構群には、柱当りを検出したものや等間隔での並びの確認できるものがあり、建物などの構築物の一部と見られる。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、一定数検出しているが、性格のわかるものは少ない。しかし全体としては、近辺に集落などの人々の住地が存在していたことを示しており、同時代の遺跡の一角を占めていることは明らかである。

鎌倉時代初頭に比定している土壇220は、単独で検出したものであるが、南北1.3m、東西0.7mの長方形を呈する掘形や、鳥帽子かと思われる漆を塗った布片を敷いた上に、青磁椀、土師器皿の完形品が、セット埋納された状況などからみて、墓と考えている。室

X=-119.231.84
Y=-21.130.87

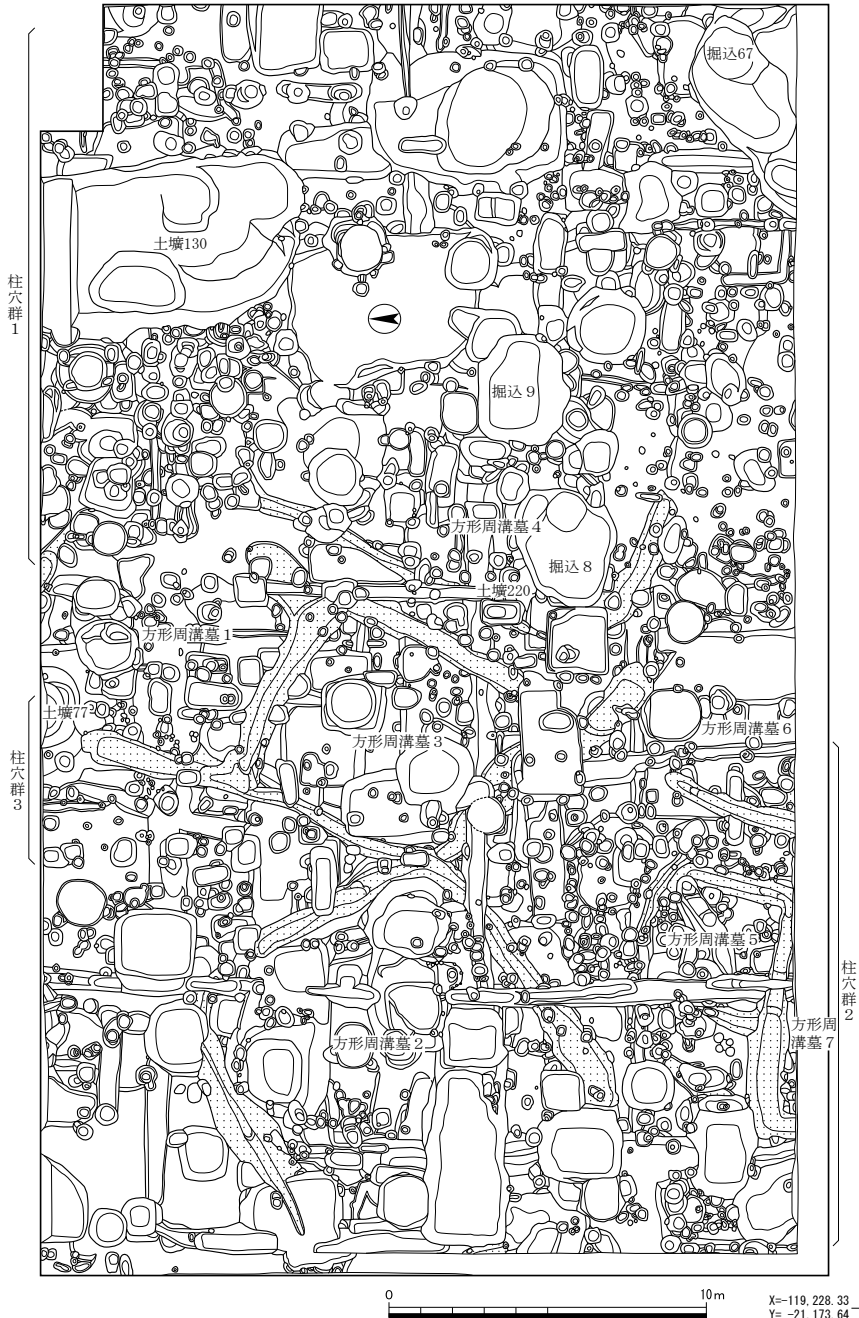


图 130 遺構平面図 (1 : 200)

町時代前半の遺構は、確認していないが、室町時代後半になると、溝や柱穴と見られるピットなどの遺構数が徐々に増加する。

しかし、遺構数が急激に増加するのは、やはり桃山時代に入って以降である。桃山時代から江戸時代初頭には、建物跡を中心に各種の遺構が展開している。柱穴1、2とした遺構群は、全体としては武家屋敷もしくは大名屋敷を形成する建物跡と見ている。柱穴群1の柱穴は径・深さともに1m前後を測る大型のものが多く、八寸角の方形の柱根や礎石が底部付近に残っているものが多い。柱穴の柱規模や並びの状態から、防護機能を備えた屋敷の外部施設の一角など、強固な構築物の一部と想定される。柱穴群2は、小規模な掘形に小礎石が据えられたものが中心である。柱間は、1.98mを基本とすると見られ、屋敷に付属する長屋風の建物と考えている。これらの他、土壙、掘込、ピット、落込、溝状の遺構など各種の遺構を多く検出しているが、それぞれ屋敷に関連する生活痕跡と考えている。

これらの内には、土取り穴として穿たれたと考えられる遺構も多い。規模と形状には各種あるが、土壙130はその内で最も大きな遺構である。調査区外へも追跡した結果、長辺が南北10m、短辺は東西5m、深さ2mほど測ることが判明した。南側から遺構の西壁沿いにスロープが付いて、底部に下りようになっている。規模は小さくなるが、掘込8・9・67、土壙77なども同じ性格の遺構であろう。堆積土下層は還元色を呈するシルト、砂礫などを中心とし多量の遺物が堆積するが、上層は、周辺の地山と同質の土で生活面にあわせてきっちり埋め戻されている。

これらの遺構は、近年の伏見城関係の発掘調査で類似例の発見が増加している。屋敷などの築造時に建築・土木用材として、所定の場所からの土砂の採土を行った結果であろう。後に、放棄に近い状態でごみすて穴として転用され比較的短期間に埋め戻される。

江戸時代および以降の各時期の遺構も多数検出している。江戸時代以降では明確に建物跡と言える遺構は確認できなかった。江戸時代でも半ば頃までは宅地際的な状態が続いているが、後期以降になると宅地域に近接した耕作地に転化していくようである。

遺物 弥生時代以降の土器、陶磁器、木製品、金属製品など多種多様な遺物が出土している。方形周溝墓からの出土遺物は全体には小片で少なかったが、方形周溝墓4からは転倒して原位置近くに散乱した、1個体分の壺片がまとまって出土している。軟質で残存状態は悪いが、形態、施文などから畿内第Ⅱ様式に属するものと判断している。

埴輪は、弥生時代の方形周溝墓2の周溝の最上部にあたる凹みから、炭などと共に一定量が出土している。円筒埴輪、朝顔型埴輪の破片があるが、個体が完全に復原できるものはない。川西宏幸^註氏の編年のⅣ期に属し、5世紀後半代に比定できる資料と見ている。奈

良時代から室町時代の遺物では、奈良時代、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代後期のものが一定量出土しているが、その間の平安時代前期、中期、室町時代前半に比定できるものの多くは混入品として少量出土しているにとどまる。

桃山時代から江戸時代の遺物は、室町時代以前に比べると質量ともに豊富になる。なかでも桃山時代から江戸時代初頭の遺物は、土壙 130 を始め各遺構から大量に出土している。土壙 130 からは、多数の金箔瓦を始め、瓦、木製品、金属製品、土器・陶磁器類など各種の遺物が出土している。金箔瓦には軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、棟飾り瓦などがある。軒丸瓦には無文、巴文、菊文、軒平瓦には無文、唐草文、「上」銘のある唐草文などがある。金箔の遺存状況の良好なものが多く、金箔の貼付方法がわかるものが含まれている。また無文の軒瓦は、瓦当面全体に金箔を貼ることで文様を省略した可能性が大きい。

木製品および木質遺物には、木簡、下駄、折敷、篋、五輪塔婆、建築用材の端材、多量のおがくず、漆器椀・折敷、楔などがある。木簡の中には「 \ominus 浦井宗普 此内に壺老川 (つ) □□」裏にも「 \ominus 浦井宗普」と記された付札などがある。他に墨書のある剥板などもあり貴重な文字資料を提供している。

土器・陶磁器類には、土師器皿・甕、瓦器鉢、信楽の播鉢、備前の鉢・播鉢、美濃瀬戸系の天目茶碗・灰釉皿類、中国産の白磁皿などがある。金属製品には、篋、釘などが出土している。

江戸時代中期までの遺物は、一定量まとまったものが多いが、江戸時代後期以降出土遺物が少なくなっていく。これは当地が耕作地へと転用されていくことによるものであろう。

小結 桃山丘陵上において、桃山時代以前で遺跡として知られている地点は比較的少なく、またそれらの各遺跡はまだまだ実体が不鮮明なものがほとんどである。その意味でも今回発見した、弥生時代中期の方形周溝墓群を始めとする、古代から中世の各時代の遺構・遺物は、丘陵上の歴史的展開を解明する上で非常に貴重な資料となるだろう。

桃山時代に入り豊臣秀吉が伏見城を造営するとともに当地もその城下町域に組み込まれる。文献によれば、城下町の時代には徳川家康の家臣である山口駿河守の屋敷地南辺部にあたる。江戸時代には、北側近接地域に伏見奉行所ができ、これに関連して調査地を含む奉行所の南側隣接地は、与力などの役宅地とされる。

(小森俊寛・原山充志)

註 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号 1978

第2章 試掘・立会調査

I 昭和63年度の試掘・立会調査概要

本年度の試掘・立会調査は、37件を実施している。このうち、試掘調査は11件、立会調査26件で、試掘調査のうち、本年度中に発掘調査に移行したものが3件、次年度以降に発掘調査を実施しているものが1件である。付表7-38は文化庁国庫補助事業として継続しているもので、本年度も747件を実施している。これに関しては、『京都市内遺跡試掘調査概報 昭和63年度』および『京都市内遺跡試掘調査概報 平成元年度』として報告しており、本書では省略している。以下、本年度の原因者負担による試掘・立会調査に関する概略を記述しておく。

平安京跡 右京一条二坊十三町(1)では安定したベース上に平安時代前期から中期の遺構をはじめ、各時代の遺構遺物を検出しており、周辺調査の成果をあとづける結果となっている。右京三条四坊(2)では、無差小路西沿いに二条大路・押小路に関連する直接の遺構は検出しえなかったが遺構痕跡を確認している。下層では古墳時代の流路などを検出しており、周辺に6世紀代の竪穴住居などの遺構の存在がうかがわれる。右京七条二坊(3)は、九町から十二町にかけての立会調査によって、西市推定範囲を中心に遺構の遺存状態がよく北小路南側溝に推定できる東西溝も確認している。

その他の遺跡 白河街区では、尊勝寺と最勝寺推定地の2箇所を試掘調査を実施している。尊勝寺跡・岡崎遺跡(4)では、造営時の整地層が良好に遺存しているものの、東西で遺構面に段差のあることが明らかとなり、東辺施設との関連が課題となった。最勝寺跡・岡崎遺跡(5)では、弥生時代から古墳時代の溝などと共に、平安時代の整地層が周辺と同様に認められ、東西溝なども検出しており、六勝寺関連の遺構の存在を確認している。

鳥羽離宮跡(6)・下鳥羽遺跡(7)に関しては、公共下水道工事に伴う広域の立会調査として行ない、従来調査例の少なかった鳥羽離宮南西部域に平安時代後期から鎌倉時代の遺物包含層や苑池の一部の可能性のある湿地状の堆積を確認し、鳥羽離宮に関連する施設の存在する可能性が明らかになった。下鳥羽遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層を広範囲に確認している。

長岡京関係の調査は2箇所を実施した。左京一条四坊(8)は、原地形を含めて弥生時代から古墳時代の東土川遺跡の立地する微高地の広がり明らかとなり、周辺調査で検出

した遺構を関連付ける調査になっている。

二条三坊・三条三坊・四条二坊（9）は、南半部（現、菱川町集落周辺）に小畑川旧流路群の乱流を確認している。その消長は、古墳時代から平安時代にわたり、平安時代中期には流路が大きく変更されている。この流路群の北側では、粘土層上面で弥生時代以降の遺構・遺物を検出している。

太秦地区では広域の立会調査（10～14）を継続しており、仁和寺院家跡では平安時代の遺構・包含層の分布状態などから南院に関連する資料を加えている。また、太秦村ノ内町で弥生時代中期、常盤西町で古墳時代前期の遺構遺物を検出し、同時期の遺跡の広がり示している。平安時代の遺構・遺物は、京福電鉄常盤駅周辺や常盤村ノ内町、広隆寺旧境内などで確認している。この他にも上ノ段町遺跡、常盤仲之町遺跡、西野町遺跡などで古墳時代の遺跡範囲の広がりに新しい知見を加え、歴史時代の遺構・遺物の分布についても新たな資料を加えている。

六波羅政庁跡・法住寺殿跡（15）では、七条通本町から東大路の間に包含層や遺構が良好な状態で遺存していることを確認している。特に三十三間堂付近では六波羅政庁・法住寺殿関連の遺構群とみられる鎌倉時代の遺構が集中しており、周辺での調査結果を裏付けている。

法性寺跡・正覚寺跡・月輪古墳・願成古墳（16）は昭和61年度からの継続調査で、本年度は平安時代以降の遺構・遺物の分布範囲を軸にまとめている。（原山充志）

II 平安京跡

1 平安京右京一条二坊（図版1・54）

経過 調査地は中京区西ノ京円町55-1のNTT京都円町倉庫跡で、平安京右京一条二坊十三町にあたる。当地に新たに建物の建築が計画されたため、事前に試掘調査を実施した。実際の調査は建物計画地の四隅と中央部の計5箇所を試掘坑を設けておこなった。

遺構 基本層序は、盛土（60～90cm）、旧耕作土（15～40cm）のすぐ下が遺構面となる。ただ、敷地の中央部では室町時代のものと思われる湿地状の堆積がみられる。

遺構面は、敷地の西端附近では黄褐色の泥土層で、北東隅の2トレと中央の3トレでは淡緑灰色の若干砂質気味の粘土層、南東隅の1トレでは茶褐色の砂礫層である。

検出した主な遺構は、平安時代前期から中期の柱穴、鎌倉時代の柱穴、室町時代の湿地、小溝、小穴などである。

遺物 出土した遺物は整理箱に10箱分で、ほとんどが土器・瓦類である。各時代の遺物には、平安時代前期から中期の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、平瓦、銭貨（承和昌寶）、鎌倉時代の土師器、瓦器、輸入陶磁器、室町時代の土師器、輸入陶磁器などがある。

平安時代の遺物は、ほとんど室町時代の湿地から出土している。緑釉陶器の大半は、近江産のものである。他に、須恵器の円面硯が出土している。

小結 周辺の諸調査で、平安時代前期から中期の建物を含む多くの遺構が検出されているので、当地でも同時期の遺構の検出が期待されたが、西辺で柱穴を数箇所検出したのみで、他に明確な遺構は検出できなかった。

しかし、各層・遺構から平安時代の遺物が比較的多く出土していること、湿地の底部の標高と平安時代の柱穴を検出した標高がほぼ同じことから、当地でもさらに平安時代の遺構が検出される可能性は高いと考えられる。

（木下保明）

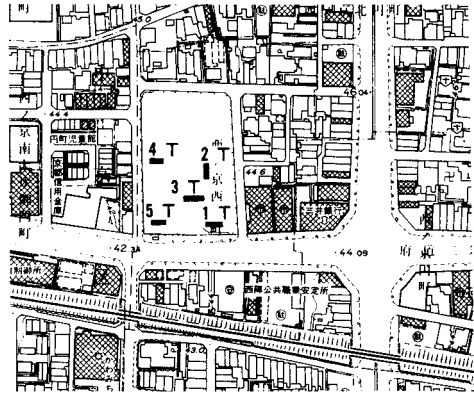


図131 調査位置図(1:5000)

2 平安京右京三条四坊 (図版1・54)

経過 右京区御池通の山ノ内浄水場東側から太子道に至るまでの間に、葛野大路道路改良工事が計画された。そこで、遺跡の有無を確認するため試掘調査を実施した。この地域は平安京でも西端に位置し、発掘調査例の少ない地域である。調査対象地は上記計画道路の南半部で、御池通北から天神川を挟んで南北長 270 m の間で、東西幅は 27 m ある。平安京の条坊で言えば、無差小路の西側に沿って、二条大路の中央から三条坊門小路北辺に至る南北二町余りの範囲となる。設定した調査区は、二条大路南側溝、同路面、無差小路西築地、押小路の各推定地 4 箇所と、他に 2 箇所の計 6 箇所である。

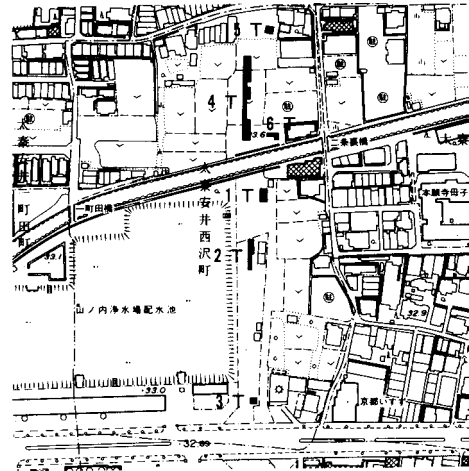


図 132 調査位置図 (1:5000)

遺構 古墳時代の遺構には流路が 3 条ある。流路を検出したのは 1・4・5・6 トレンチで、いずれも北北東から南南西方向に流れる。4 トレンチ北部で検出した S D 14 は、検出長 24 m、幅 4 m 以上、深さ 0.6 m で、埋土は砂礫層である。4～6 トレンチにかけて検出した S D 1 は、推定幅 17 m、深さ 0.9 m で、埋土の砂礫層には流木が多く認められた。平安時代の条坊遺構には、第 2 トレンチの東西溝 S D 7、S D 13 がある。S D 7 は幅 1.1 m、深さ 0.4 m、S D 13 は幅 0.9 m、深さ 0.2 m である。両溝間の心々距離は 11.5 m である。この両溝の位置は、ほぼ押小路の推定位置であるが、条坊復原モデルより全体に北へ 5～7 m 偏っている。4 トレンチに予測された二条大路南側溝は、検出できなかった。ただし、路面推定位置には小石や摩滅した瓦が、他地区より多いことが確認された。

遺物 出土遺物は、整理箱にして 3 箱で、古墳時代から江戸時代のものがある。古墳時代の遺物は、流路から出土している。平安時代の遺物は少ないが、二条大路、押小路の推定位置からの出土量は他地区より多く、特に二条大路部分からは瓦の出土が多い。時期的には 11 世紀代の遺物が主で、なかに 9 世紀代の土師器も若干出土している。

小結 当地域では遺構密度が低いことが判明した。平安時代には調査地の四坊一町は左衛門府に比定されるが、建物遺構などは検出できなかった。2 トレンチの 2 条の東西溝は、推定押小路の南・北側溝より北に位置しており、検討を要する。また、二条大路南側溝は検出

できなかったが、路面についてはその痕跡をうかがわせる礫、瓦の出土を確認した。古墳時代の流路からは6世紀代の須恵器、土師器が出土し、付近に堅穴住居などの遺構が存在する可能性がある。また流路内の砂礫層は、氾濫などにより一挙に埋まったものであろう。

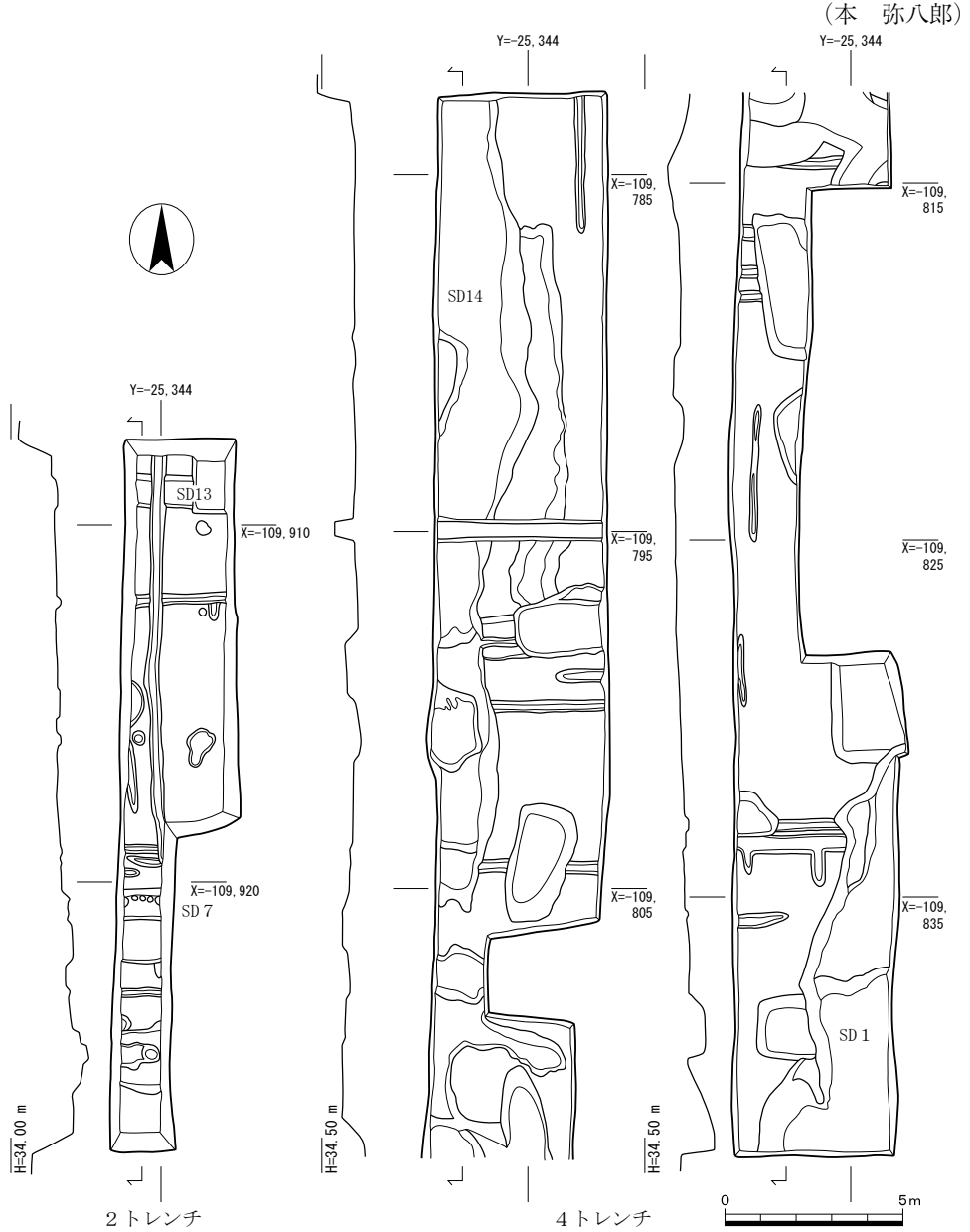


図 133 遺構実測図 (1 : 200)

3 平安京右京七条二坊 (図版1)

経過 本調査は、配水管敷設工事に伴う立会調査である。調査地は、西大路通の五条通から七条通の間で、平安京右京七条二坊九町から十二町にあたり、西市にも該当する。

遺構・遺物 調査地の基本土層は、現代盛土・旧耕作土・遺物包含層であり、その下層が黄褐色砂泥層(地山)となっている。西市と推定される地点では、遺構の残存状況は比較的良好である。

P3では検出幅3.4m以上を測る流路状の遺構がある。しかし東側の壁面が攪乱を受けていたため、流れの方向は決定しがたい。

P4も検出幅2.4m以上の流路状遺構である。遺構の底部で腐植土を確認しており、あるいは池状の遺構となるかも知れない。

P7の東西溝は北半が攪乱を受けており、確認できた規模は幅0.4m、深さ0.3mを測る。遺物が出土せず時期の決定はできないが、位置関係から見て北小路南側溝と推定できる。

P8の井戸は検出幅1.3m、深さ1.1mを測る木枠組みの井戸である。土の崩壊が予想され、埋土からの遺物採取は行なわなかった。

出土した遺物は、遺物整理箱で1箱分である。遺物の種類には土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦、木製品がある。遺物が出土した主な遺構は、P3・4地点である。P3地点の流路状落込から土馬が出土している。P4地点の底部は腐植土層で、この層から木製品、土師器、須恵器、黒色土器が出土した。

小結 今回の調査では、西市と推定される花屋町通から七条通間は、遺構の残存状況が良好であることが判明した。花屋町通以北では地山までの深度は浅いが、遺構はほとんど検出できなかった。(久世康博)

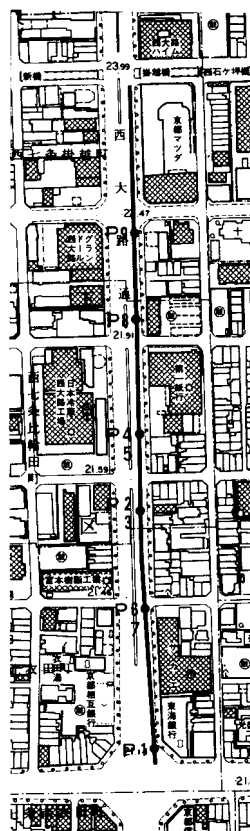


図134 調査位置図 (1:5000)

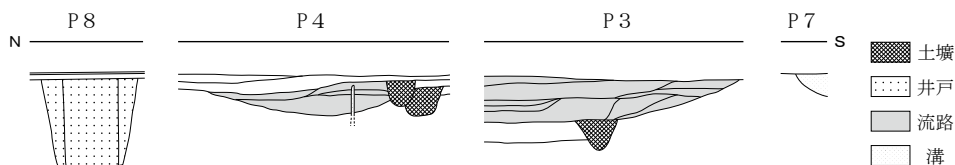


図135 土層断面図 (1:100)

Ⅲ その他の遺跡

4 尊勝寺跡・岡崎遺跡 (図版1・55)

経過 調査地は尊勝寺推定寺域の東辺中央部にあたり、岡崎遺跡に含まれる。調査は、対象地内に調査区3箇所を設定し、尊勝寺東辺関連遺構の確認を目的とした。

遺構・遺物 調査地の地表面は中央で約30cmの段差があり、両側は平坦地である。調査区の地層は大きく5層に分かれ、第4層は厚さ40cmの平安時代の整地層（黒色土と黄色砂の互層）で、上面が遺構面である。標高

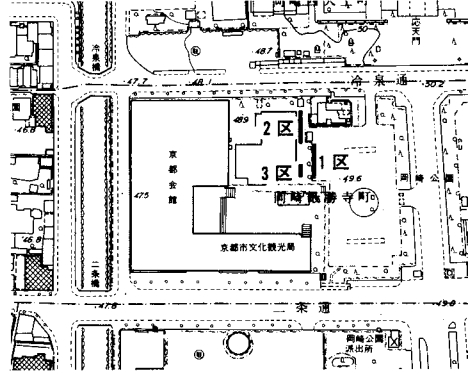


図136 調査位置図 (1:5000)

は1区が48.5 m、2区は47.4 mである。1区には現代の攪乱層が多いが、全域に第4層が残存し、上面で平安時代の柱穴、中世の瓦溜、近世の柱穴・溝などを検出した。2区も同様で、中世の瓦溜、近世の柱穴・溝などを検出した。3区は中世から近世の落込を検出した。

遺物は整理箱5箱である。古墳時代以前の土器は、第5層から少量出土した。平安時代の遺物は大半が瓦類で、土器類は少ない。瓦類は瓦溜、第2・3層から出土し、軒平瓦3種3点と丸瓦、平瓦がある。中世から近世の遺物は、第2・3層から出土した。

小結 調査地は狭小であるため、東辺築地・東門並びに寺域東側道路等に関連する遺構は未検出である。しかし、調査地全域で尊勝寺造営時の整地層が良好に残存し、大規模な瓦溜を検出したことから、近接して建物等が存在した可能性が高い。

整地層は既往の調査のものと同様で、寺域だけでなく広範囲に施工している。ただ、遺構面は東西に段差があり、寺域東辺施設との関連は、今後の課題である。 (上村和直)

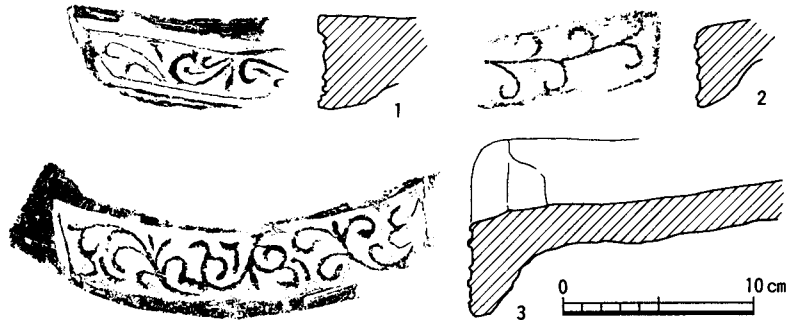


図137 軒平瓦実測図 (1:4)

5 最勝寺跡・岡崎遺跡 (図版1・55)

経過 調査地は、最勝寺推定寺域に当たり岡崎遺跡に含まれる。既往の発掘調査や周辺の立会調査から、旧地形が著しく削平されていると予測された。調査は、対象地に4×10mの調査区を9箇所設定し、実施した。調査目的は、最勝寺関連遺構および古墳時代の遺構の確認である。

遺構・遺物 調査地の現地形は平坦であるが、周辺地形と比較すると北東側では約1m低く、南西側では逆に0.3m高くなる。

北西部の1～3・8・9区は、近・現代の整地層直下で灰白色砂層（無遺物層）を確認したが、遺構は未検出である。

南東部の6・7区は、近・現代の整地層直下で灰白色砂層（無遺物層）を確認し、同層上面で落込・溝を検出した。埋土は黒色土で、弥生時代から古墳時代の土器を多量に含む。

南西部の4・5区は、近・現代の整地層直下で、平安時代の整地層（黒色土と黄灰色砂泥の互層、厚さ0.2m）を調査区北側で確認した。南側は中世から近世の落込（深さ0.5m）を検出した。落込の底部で平安時代の東西溝（幅0.2m）と、古墳時代の溝を検出した。

各調査区から整理箱3箱分の遺物が出土した。弥生土器、古墳時代の土師器は、5～7・9区から出土し、6区の落込が最も多い。平安時代の遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、白磁、瓦等があり、4～6区落込、整地層などから出土した。いずれも小片である。中世から近世の遺物には、土師器、陶器、磁器などがあり、4・5区で出土した。

小結 本来の調査地は、東から西、北から南に傾斜した地形を呈していた。これを明治時代の博覧会・グラウンド造成時に北半分・東半分を削平し、南西部には盛土して平坦に造成したことが明らかとなった。このため、北半部では遺構が無く、南東部では弥生時代から古墳時代の溝などが残存し、南西部では平安時代の整地層、溝が残存している。平安時代の整地層は、周辺の整地層と同様であり、当該期の遺構の存在が推定できる。4区で検出した東西溝は、推定復原図から考え、六勝寺域地割に関連する遺構である可能性が高い。

(上村和直)

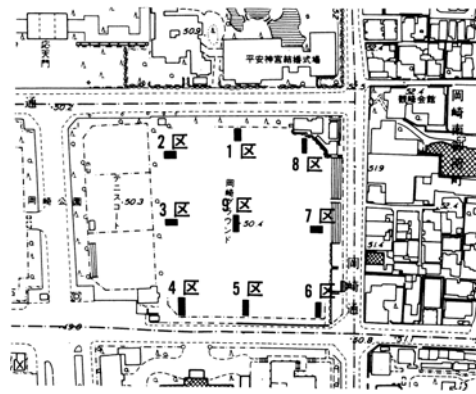


図138 調査位置図 (1:5000)

6 鳥羽離宮跡 (図版2-3)

経過 この立会調査は、公共下水道工事（伏見排水区竹田系統竹田その7）に伴い実施したものである。調査地は京都市伏見区中島宮ノ前町、中島中道町、中島御所ノ内町、中島前山町、中島外山町、中島堀端町、竹田泓ノ川町の各道路上である。この地域は城南宮の南側で、鳥羽離宮跡の中島地区の西側に位置する。調査の結果、平安時代後期から鎌倉時代前半の遺物包含層、湿地状遺構（池か）、時期不明の流路と考える砂礫層、腐植土層などを確認した。なお、工事掘削延長は約2000mであったが、工事区の一部で夜間工事や掘削前に土留のための鋼矢板が打たれたりしており、詳細な土層観察ができなかった工事区もあった。

遺構・遺物 調査では鳥羽離宮跡に関係する建物などの明確な遺構は検出できなかったが、鳥羽離宮期には陸部であったと考える遺物包含層を人孔No.15～16・20～22の区間のほか数箇所確認することができた。また流路と考える砂礫の堆積層や、自然木を含む

腐植土層も人孔No.27～28、No.51～59の工事区のほか数箇所確認しているが、土器類が出土せず流路、腐植土層の時期は不明である。しかし、遺物包含層との層位関係などから鳥羽離宮期と、それより古い時代との2時期の堆積層があると考えられる。

遺物包含層が確認できた地区の基本層序は、現代盛土層・旧耕土層が約80cm堆積し以下灰色泥土層（約30cm）、茶褐色泥土層（約50cm）、灰色砂泥層（約80cm）、褐色砂礫層（100cm以上）である。灰色泥土層、茶褐色泥土層が遺物包含層で灰色砂泥層、褐色砂礫層から遺物は出土しなかった。

遺物は土師器の皿、瓦器碗、平瓦、丸瓦など整理箱に1箱分出土した。これらは遺物包含層から出土したもので平安時代後期から鎌倉時代前期に属するものである。

小結 調査地周辺では発掘、立会調査などの調査例は少なく、遺跡は空白に近い地域である。このため、今回の立会調査では遺構の遺存状態および、旧地形の復原を主目的に実施した。その結果、時期の詳細は不明であるが平安時代以前と考える湿地、流路、平安時代後期から鎌倉時代前半の遺物包含層や遺物包含層と同時期と推定できる湿地状堆積層が確認できた。この湿地状堆積層は、鳥羽離宮跡内で実施している一連の発掘、立会調査の成果などから考えると、園池の堆積層の可能性もある。園池であれば遺物包含層の広がる陸部において、鳥羽離宮に関係する建物などの遺構が存在する可能性もあり、今後この地域での発掘調査などによる面的な調査に期待したい。

(磯部 勝)

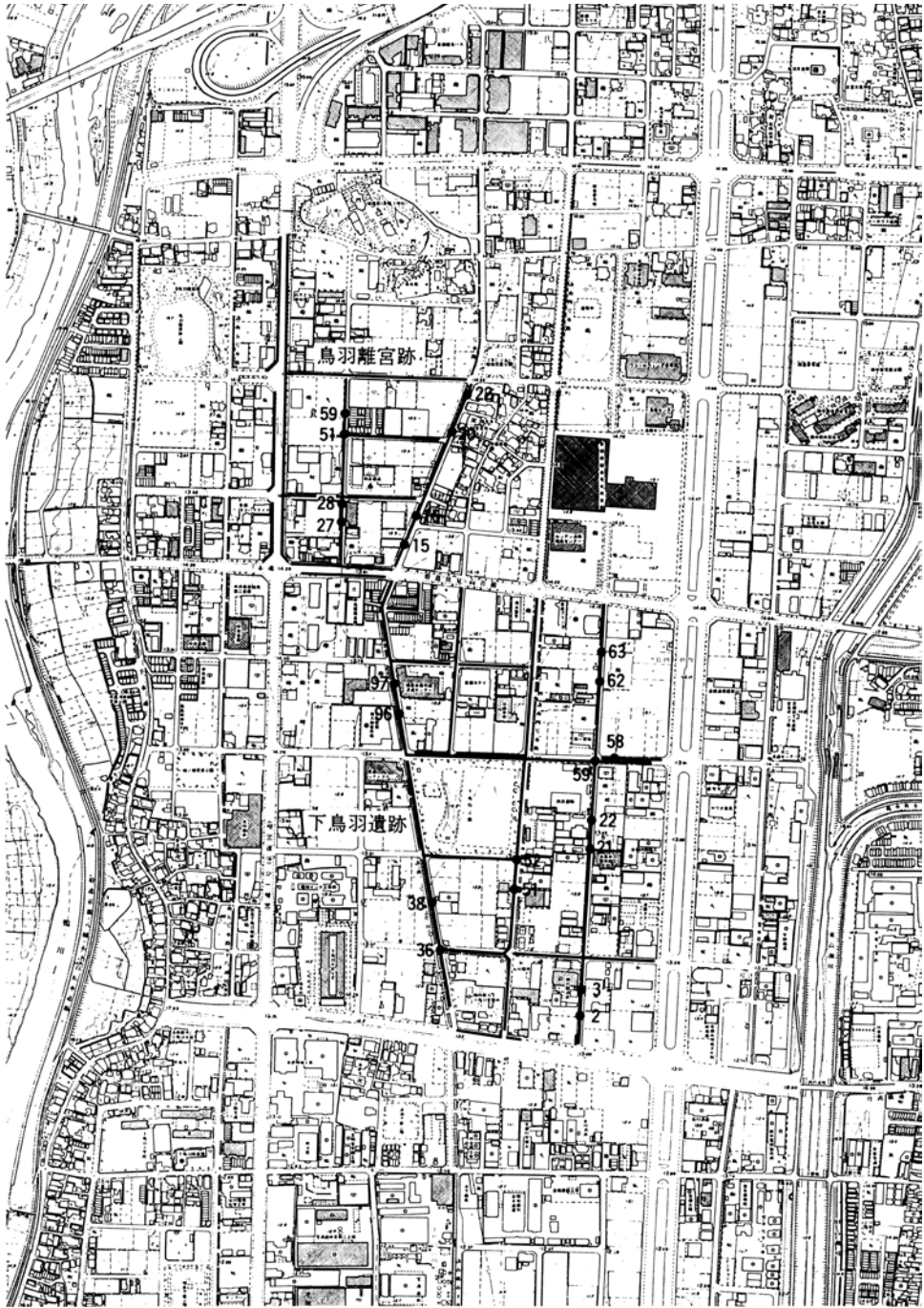


图 139 鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡調査位置図 (1:10000 数字は人孔No.)

7 下鳥羽遺跡（図版2-3）

経過 本年度下鳥羽遺跡内では立会調査を3件実施している。本調査は公共下水道工事（伏見排水区横大路系統下鳥羽その7）として行ったもので、ガス低圧管施設工事に伴う立会調査と調査対象地が同一遺跡内に位置し、工事区も下水道工事の人孔No.2～63間の南北道路がガス工事区と重複しているため、2件分まとめて報告する事にした。

調査地は、京都市伏見区竹田泓川町、竹田松林町、下鳥羽城越町、下鳥羽芹川町、下鳥羽北ノ口町、下鳥羽渡瀬町、北端町、毛利町の各道路上で、下鳥羽遺跡の西半部に位置する。調査を実施した総延長は、下水道工事が約3000m、ガス低圧管工事は約650mである。調査の結果、弥生時代から古墳時代の遺物包含層、時期不明の流路、湿地などが確認できた。

遺構・遺物 2件の調査では竪穴住居などの明確な遺構は見つけられなかったが、下水道工事の人孔No.2～3・36～38・51～52・58～59・62～63（ガス工事と重複）の地区で、弥生時代から古墳時代の良好な遺物包含が確認できた。この他、数箇所の地点でも、遺物は確認できなかったが、包含層と考える土層の堆積を見つけている。遺物包含層が確認できた地区の基本層序は、地表下50cm～70cmまでが現代盛土層および旧耕土層である。次に遺物包含層である黄灰色砂泥層（約15cm）、黄褐色砂泥層（約25cm）、茶褐色砂泥層（約35cm）が堆積し、以下は砂礫層（120cm以上）であった。砂礫層からは、遺物は出土しなかった。なお、湿地と考える腐植土層をNo.21～22で、流路をNo.96～97で確認したほか、同様の遺構を数箇所で見出したが、時期は不明である。

遺物はすべて遺物包含層から出土したもので、整理箱で1箱分である。古墳時代の遺物には土師器の甕、須恵器の杯身などがある。弥生時代の遺物には、畿内第Ⅰ様式とⅢ～Ⅳ様式に比定できる2時期の壺、甕がある。

小結 下鳥羽公園周辺地の他、数箇所で見出した弥生時代から古墳時代の良好な遺物包含層を確認することができた。遺物の遺存状態などを考えると、竪穴住居などの遺構の存在を示すものである。さらに鳥羽離宮跡の下層遺構の調査成果、下鳥羽遺跡内の発掘調査の成果を考え合わせると鳥羽、下鳥羽にわたる広範囲に、微高地状の高まりが遺存していると考えられる。今後この地域で発掘調査などの事例が増加するなかで、弥生時代から古墳時代の大集落が発見される可能性がある。（磯部 勝）

8 長岡京左京南一条四坊、東土川遺跡 (図版2-3)

経過 広域下水道建設工事に伴う立会調査である。今年度の立会調査区域は長岡京跡、東土川遺跡の範囲に位置している。立会区域の南西の長岡京左京第63次発掘調査では、弥生時代や飛鳥時代の流路、南東の左京第197次調査^註では弥生時代の方形周溝墓や長岡京期の建物跡などを検出しており、今年度は東土川遺跡や長岡京関係の遺構・遺物の確認などの目的で調査を行った。

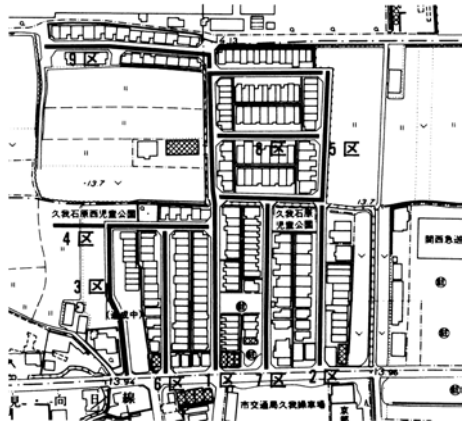


図140 調査位置図 (1:7500)

遺構 対象地は、便宜上9区にわけている。

遺跡のベース層は黄褐色泥土層で、ほぼ全域に堆積する。遺構は、この層を切込む形で確認した。8区の東端部では、北東方向に落ちる肩口を検出した。遺構内には暗灰色砂泥層が堆積し、土師器、須恵器が出土した。7区の南端では、土師器片を含む包含層を確認した。3区の中央部では暗灰色泥土層が堆積する落込を検出したが、土師器・炭化物を含み、竪穴住居跡の可能性もある。1区の中央では、西へ落ちる川状の遺構を検出した。

遺物 出土した遺物には、古墳時代から長岡京期にかけてのものがある。1区の落込から出土した土師器は、庄内式併行期のもと思われる、壺、甕の破片が出土している。8区から出土した土師器、須恵器は、6世紀頃のものと思われるが、小片で明確でない。その他には長岡京期の土器片、平瓦などがある。

小結 立会調査の結果、対象地のほぼ全域が弥生時代以来の微高地であることが確認できた。この微高地は、立会区域の北西および南西で徐々に下がることがわかり、約150mの幅を有することがわかった。左京第197次調査で検出した方形周溝墓は、この微高地の南端部に位置しているものと考えられる。一条大路に關係する溝は、明確に検出できなかった。3区で東西方向に走る幅1.5mの溝を1条確認したが、遺物の出土がなく確証に欠ける。来年度も引き続き南方に工事区域が延びることから、近辺の地形がより明確になるものと思われる。

(長宗繁一)

註 北田栄三「長岡京左京南一条四坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』

昭和63年度 京都市文化観光局 1989

9 長岡京左京二条三坊・三条三坊・四条二坊（図版2-3）

経過 向日市鶏冠井町から伏見区羽東師菱川町にかけて、国道171号線内の上水道布設に伴う立会調査を実施した。調査区間は、長岡京跡左京二条から四条の東二・三坊にあたる。掘削深度は2～3mで、全区間にわたって長岡京期および弥生時代相当面に及ぶ深さであった。幅は1m、区間距離は約800mである。

遺構 検出した遺構には、古墳時代から平安時代にいたる間の各時期の旧小畑川流路群、長岡京期の柱穴、弥生時代の焼土層・遺物包含層などがある。

旧小畑川の流路は、各時代のものが複雑に錯綜している。中心は、現在の菱川町の集落あたりにあり、川の氾濫による流入砂礫層が厚く堆積している。川の規模は、大小様々で深いものでは3mを越えるものもある。

長岡京期の柱穴は、区間の北端部で1基検出したのみである。他の区間では、長岡京期の遺構面を明確にはとらえることができなかった。

弥生時代の遺物包含層と焼土層を区間の北半部、久我西出町の区域で検出した。標高11m前後に堆積する緑灰色粘土層の上面で確認した。

遺物 弥生・古墳・奈良時代の遺物が出土した。弥生時代のものには焼土層より出土した甕・壺（畿内第Ⅲ様式）や包含層出土の土器片がある。古墳時代のものには、流路の砂礫層から出土した土師器片、長岡京期のものには、柱穴から出土した土師器の杯片がある。

小結 立会区間の南半は、旧小畑川の流入による大小の川が入り乱れ複雑な層序を呈し、各時代の遺構面を認識するのは困難であった。これに対し、北半は層の乱れもなく弥生時代のベース層である緑灰色粘土層を確認できた。今回の立会調査で、旧小畑川の氾濫や流路の度重なる変更により、菱川町の一帯に多量の砂礫が流入し、この区域が周辺の区域より高くなっていることがわかった。この小畑川の流入は古墳時代に始まり、平安時代中期には当地域への影響はなくなる。大きく流路が動いたことがわかる。

（百瀬正恒・長宗繁一）

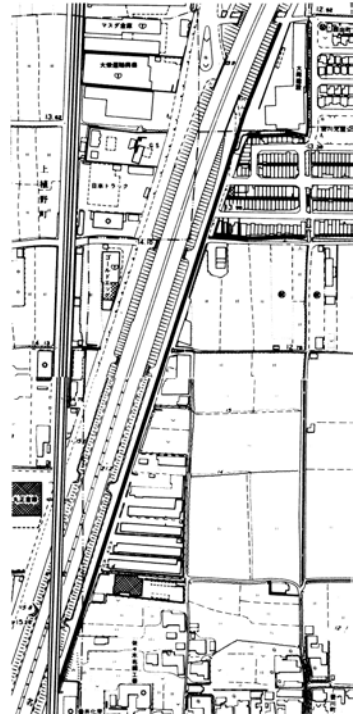


図141 調査位置図(1:7500)

10 仁和寺院家跡 (図版1)

経過 西部第二排水区西部第2系統、宇多野(その1)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は宇多野法安寺町、長尾町、御池町、御屋敷町で、仁和寺院家跡に比定されている。

調査方法については、工事掘削前に、立会調査を実施する道路脇に10 m間隔を基本に地層



図 142 調査位置図 (1:5000)

断面実測点を設定し、その各測点の水準測量を行った。それを基に、掘削時には土層および遺構断面図の作成、写真撮影などの記録作業を順次行った。

遺構・遺物 平安時代中期から江戸時代の遺構を検出した。遺構の検出数は25基であった。検出地点については、位置図にNo.で示している。主要な遺構について概述する。

No. 6・8では平安時代中期の南北石列を検出した。No. 6の石列は、幅0.9 m、深さ1.3 m、石材径0.9 m前後で、調査区西壁に並列する。No. 8の石列は、深さ0.7 m、石材径0.4 m前後で、7石以上の石材を確認した。No. 9では平安時代中期の東西溝を検出した。溝の規模は幅1.8 m、深さ0.7 mであった。No. 21では平安時代後期の南北溝を検出した。溝の規模は幅3.4 m、深さ1.8 m以上を測る大規模なものであった。その他、室町時代の土壙をNo. 19で、江戸時代の土壙をNo. 17・18・20で検出している。

出土遺物は、整理箱に4箱で、ほとんどが土器類である。土器類には土師器、須恵器、無釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器があり、土師器皿が多くを占める。土器類以外には瓦、石製品、木製品がある。遺物の時期は平安時代から江戸時代で、平安時代中期から後期のものが主体である。

小結 調査の結果、仁和寺院家跡に直接かかわる平安時代の遺構を確認することができ

た。平安時代の遺構および遺物包含層の分布状況を見ると、調査地東半部に集中している。当調査地東半部にあたる宇多野御池町で1976年に発掘調査が実施され、平安時代の仁和寺院家の一つである南院跡と推定される建物が検出されている^{註1}。さらに、南接する宇多野御屋敷町では、1982年に試掘調査が実施され、平安時代の池および池内から多量の土器、木製品が検出されている^{註2}。その2例の調査結果と、今回の結果から、調査地東半部で検出した南北の石列の間に、既調査で検出された建物とは別の、南院に属する建物が存在し、南接地には池が広がっていたと考えられる。(加納敬二)

註1 杉山信三 「院の御所と御堂—院家建築の研究—」『奈良国立文化財研究所学報』
第11冊奈良国立文化財研究所 1962

註2 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983 付表に記載

11 常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内 (図版1)

経過 西部第二排水区西部(第二)系統(その3・4・5)、太秦(その12-2)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は、常盤東ノ町・出口町・村ノ内町・柏ノ木町・下田町・馬塚町・窪町・西町、太秦蜂岡町地内である。調査期間は1988年5月26日から1989年5月12日までであった。

調査の結果、常盤(その3)常盤馬塚町地区に平安時代前期から中期の遺構群を、東方地区常盤西町では古墳時代前期、平安時代後期の遺構・遺物を検出した。常盤(その4)常盤村ノ内町では、弥生時代中期、古墳時代前期、平安時代中期の遺構・遺物を検出した。

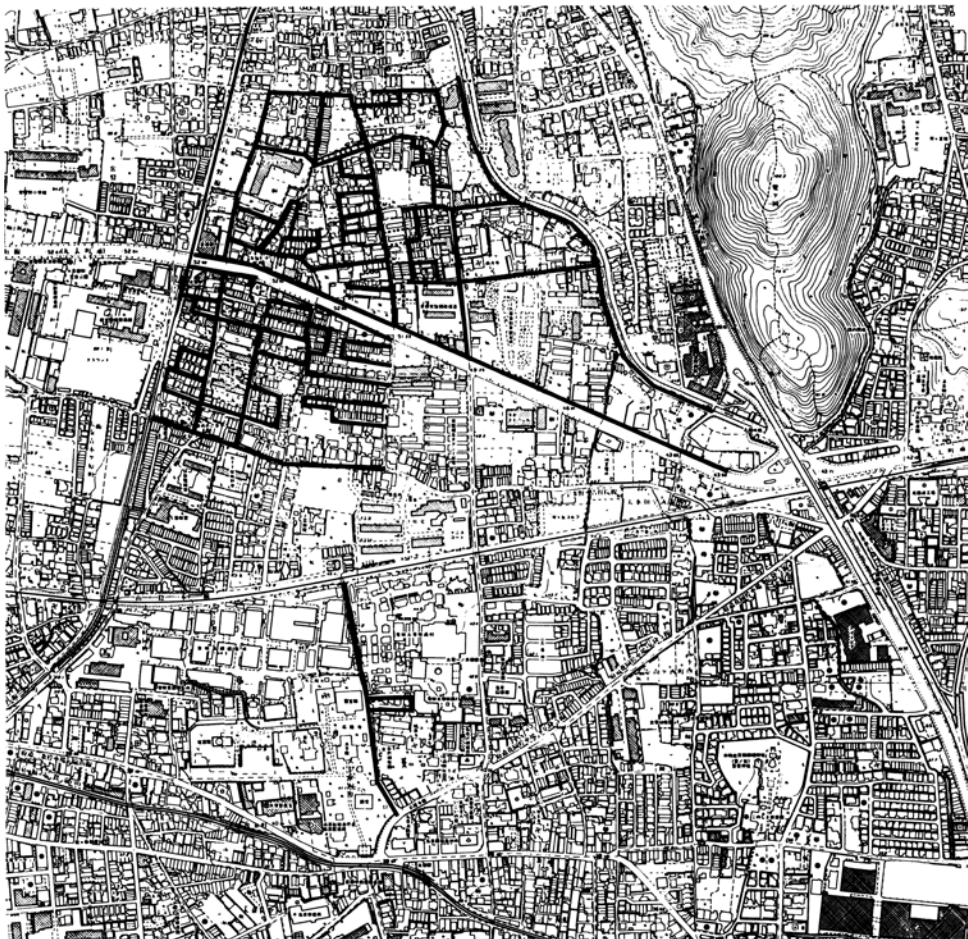


図143 調査位置図(1:10000)

常盤（その5）常盤下田町西側一帯では、平安時代前期を中心にした遺構・遺物を広範囲に検出した。太秦（その12-2）太秦蜂岡町では、調査区全域で平安時代前期から後期、室町時代、江戸時代の遺構・遺物を検出した。

遺構 弥生時代中期の遺構は、常盤村ノ内町一帯、東ノ町北部で遺物包含層を検出した。遺物量は少ない。古墳時代の前期の遺構は、常盤西町一帯で土壌、遺物包含層が検出された。検出範囲は和泉式部町遺跡に比較してやや小規模である。

平安時代前期の遺構は、太秦（その12-2）太秦蜂岡町で検出した。後期の遺構は、常盤西町、下田町、蜂岡町で溝、柱穴等が検出された。室町時代の遺構は太秦（その12-2）太秦蜂岡町東部地区で遺物包含層を検出している。江戸時代の遺構は、太秦（その3）常盤窪町で検出した。

遺物 弥生時代中期の遺物は、畿内第IV様式に属する土器片が出土した。古墳時代前期の遺物は、庄内式併行期に比定できる土師器壺片が出土したが、きわめて小片である。

平安時代前期の遺物は、土師器皿、須恵器杯、暗文を持つ黒色土器碗が出土しているが、少量である。中期では、10世紀中葉と考えられる土師器皿、黒色土器碗、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、須恵器甕等がある。主として太秦（その12-2）太秦蜂岡町地区から出土した。後期の遺物には、土師器皿、瓦器碗、青磁碗が出土している。

室町時代と江戸時代に属する遺物は、太秦（その12-2）蜂岡町、常盤（その3）常盤窪町を中心に出土した。

また太秦青木ヶ原町で検出された土壌墓から、埋納されたと考えられる土師器皿4枚、白磁皿・碗がセットで出土した（図144）。土師器皿はその形態からA（1・2）、B（3・4）に分けられる。皿Aは、口径9.4～9.6cm、器高1.6～1.8cmを測り、口縁端部を内側にゆるく丸め込む。皿Bは大小あり、（3）は口径10.2cm、器高2.0cm、（4）は口径14.2cm、器高3.5cmを測る。口縁部を2段にナデ、端部を軽く外反させる。白磁皿（5）は、いわゆる輪花皿と称されるもので5輪に分ける。碗は口径18.1cm、器高5.9cmを測り、口縁部に小さな玉縁を持つ。土師器皿に関しては、11世紀後半の時期に収まる。該期の京都西北地域

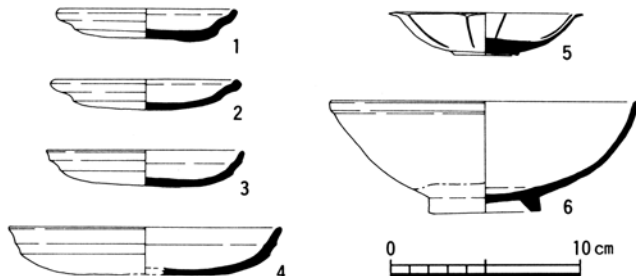


図144 土壌墓出土土器実測図（1：4）

における葬送形式の一形態を示すものとして貴重な資料といえよう。

小結 常盤（その4）常盤村ノ内町で検出した弥生時代の遺物は、畿内第Ⅳ様式と考えられる土器片である。該地区は御室川右岸に位置し、半径100 m前後の自然堤防による小丘陵地が延びる。弥生時代集落としての立地には恰好の地形を呈しており、土器の分布域から判断して中規模の集落跡の存在がみてとれる。

古墳時代前期の遺物は庄内式併行期に属するが、上記弥生時代集落の中心地区よりやや南側の常盤西町で検出した。出土した土器は多量ではないが、小集落跡とみて間違いなからう。東南方500 mに位置する、和泉式部町遺跡^{註1}の分村的な規模を想定できる。

古墳時代後期の遺構・遺物は、宇多野吉祥院線と丸太町通の交差点北側で検出した。この遺構は、堆積土層と遺物の出土状況から周辺に散在する古墳の周構の一部であろう。^{註2}

平安時代の遺構・遺物は、丸太町通京福電鉄線の常盤駅付近を中心にした半径100 m一帯に中期・後期の土器が検出できた。また常盤（その4）常盤村ノ内町、東ノ町、出口町地区には、前期から後期の遺構・遺物が分布する。この周辺が双ヶ岡西麓にあったとされる源常の山荘跡に比定できる。太秦（その12-2）太秦蜂岡町地区の平安時代前期から後期の遺物は、広隆寺旧境内地を南北に縦断した形の調査であり、該寺院に直接関係した遺構群と捉えられる。この地区では室町時代から江戸時代に至る遺構・遺物も伴っている。

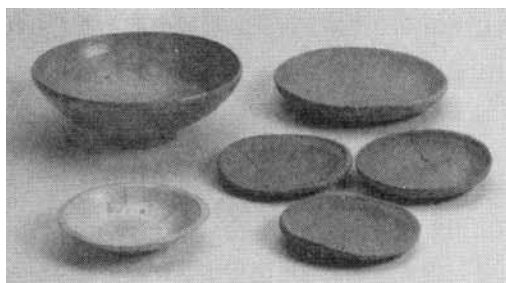


図145 土壙墓出土土器実測図

（平田 泰・加納敬二）

- 註1 平田 泰「森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988 辻裕司・菅田薫・前田義明「和泉式部町跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991
- 註2 鈴木廣司『常盤東ノ町古墳群発掘調査概報 グリーンハイツ河合新築にともなう調査』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977
鈴木廣司『常盤東ノ町古墳群 京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977
鈴木廣司「常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978
百瀬正恒「仁和寺子院跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978

12 上ノ段町遺跡（図版1）

経過 右京区太秦帷子ヶ辻町、太秦堀ヶ内町、嵯峨野開町で、西部第二排水区（第二）系統太秦（その18）公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地一帯は、上ノ段町遺跡に比定されている。調査期間は、1987年2月22日から9月19日である。



図146 調査位置図 (1:10000)

調査の結果、太秦堀ヶ内町一帯で古墳時代後期から中世の遺構・遺物を検出した他、嵯峨野開町でも古墳時代後期の遺物を検出した。

遺構 検出した遺構は、古墳時代後期、平安時代前期から後期、室町時代に属する遺物包含層、江戸時代に属する土壌、時期不明の溝、土壌がある。

古墳時代後期の遺物包含層は、広範な地域で検出しており、調査地区中央北側にある遺跡中心地区の縁辺部を確認した。平安時代、室町時代および江戸時代の遺物包含層は、調査地区一帯から重複して検出され、長期間営まれた集落跡の一部を検出したものと考えられる。

遺物 古墳時代後期の遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕が出土した。7世紀中葉に属するものである。

平安時代の遺物では、土師器皿、瓦片が出土した。ただ瓦片のなかに、奈良時代に遡るやや古い製作技法によると思われるものが少量出土している。その他室町時代、江戸時代と考えられる土師器皿が出土しているが、全体的には少量である。

小結 太秦堀ヶ内町北部検出の古墳時代後期から平安時代、室町時代、江戸時代の遺構・遺物包含層は、太秦（その9・その11）太秦多藪町・石垣町・桂ヶ原町の調査で検出した、古墳時代から江戸時代に至る複合集落跡（多藪町遺跡）の西北地区に位置している。当遺跡の西北辺の様相を明らかにしたものとして重要であろう。

また、嵯峨野開町に検出した古墳時代の遺物包含層は、この北方域に展開する上ノ段町遺跡の南辺にあたっており、遺跡範囲の南側への広がりを示したものとみられる。

（平田 泰・加納敬二）

13 広隆寺旧境内・常盤仲之町遺跡・西野町遺跡（図版1）

経過 西部第二排水区西部（第二）系統太秦（その19）、嵯峨野（その3）公共下水道工事に伴う立会調査である。調査地は嵯峨野（その3）地区が嵯峨野千代道町・芝野町で西野町遺跡に比定され、太秦（その19）地区が太秦蜂岡町、青木ヶ原町、西蜂岡町で、広隆寺旧境内、常盤仲之町遺跡に比定される。

調査の結果、古墳時代前期・後期、平安時代前期・後期、室町時代などの遺物包含層と、その範囲が明らかになった。調査期間は1987年3月28日から1988年3月6日である。

遺構 各時期の遺構は少なく、大多数が遺物包含層であった。古墳時代前期の遺物包含層は、嵯峨野（その3）嵯峨野千代ノ道町中央部で検出した。

ほぼ嵯峨野小学校南側^{註1}にあたる。古墳時代後期の遺物包含層も、嵯峨野千代ノ道町中央東部地区に集中する。平安時代前期の遺物包含層は太秦（その19）太秦蜂岡町北部一帯に濃密に分布する。平安時代後期の遺物包含層は、太秦（その19）太秦青木ヶ原町東部、太秦蜂岡町西北部に検出している。

室町時代の包含層も主として太秦青木ヶ原町東部で検出した。その他、時期不明の土壌、溝を太秦蜂岡町西北部で検出したが、平安時代後期の遺物包含層検出地区に重なっており、同時期に属するものと考えられる。

遺物 古墳時代前期の土器は庄内式併行期と考えられる時期のもので、前年度の調査^{註2}に比べて出土分布域がやや広がり、遺物出土量も増加する。古墳時代後期の土器は、土師器甕、須恵器杯・壺等がある。壺は長頸壺で口径7.6cm、体部12.6cm、器高18.5cmを測る。



図147 調査位置図(1:10000)

(図-148)。ほぼ完形で、嵯峨野（その3）西方嵯峨梅ノ木町から出土した。

平安時代前期の遺物は、土師器皿、須恵器甕、瓦などが出土した。平安時代後期および室町時代の遺物は、主として太秦（その19）太秦蜂岡町北部から出土したもので土師器皿、瓦器椀、瓦等が出土した。

出土遺物は全体的に少ないが、調査区は狭小な立会調査という制約があるためであり、分布域から判断すれば相当量の遺物が散布していると考えられる。

小結 嵯峨野（その3）嵯峨野千代ノ道町地区は、前年度調査区太秦（その16）太秦西野町地内の西方一帯にあ^{註3}たっている。調査の結果、前年度調査で確認した古墳時代前期・後期、平安時代前期の遺構・遺物の分布域の西方への広がりを明らかにすることができた。

西野町遺跡は、その立地する自然堤防上に古墳時代前期（庄内式併行期）、同後期（7世紀前半）、平安時代前期（9世紀後半）の遺跡が展開する複合集落遺跡と捉える事ができよう。

太秦（その19）太秦青木ヶ原町東部、太秦蜂岡西北部には、平安時代後期、室町時代の遺構・遺物が分布することを明らかにした。ただ調査区中央部には、上層に江戸時代の遺物を包含する比較的新しい時代に属する砂礫の厚い堆積が認められる。これは、かつて西北方の御室川の旧流路が、調査区を南北に貫いていた痕跡と考えられる。太秦青木ヶ原町東部の遺構・遺物群は、調査地西北方に存在する平安時代以降の集落跡の一部を検出したものであり、太秦蜂岡町の遺構・遺物群は広隆寺旧境内に関連すると考えることができよう。

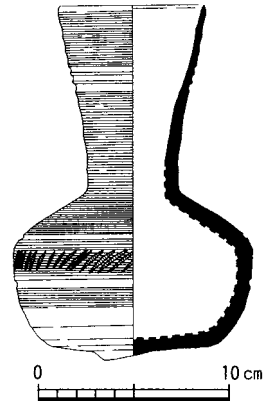


図148 出土須恵器遺構実測図
(1:4)

(平田 泰・加納敬二)

註1 鈴木廣司「嵯峨野小学校内遺跡」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編）（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983

註2 「西野町遺跡 千代ノ道古墳」『昭和63年度京都市埋蔵文化財試掘立会調査概報』京都市文化観光局 1989 付表に記載

註3 註2参照

14 西野町遺跡・千代ノ道古墳（図版1）

経過 西部第二排水区西部（第二）系統太秦（その16）公共下水道工事に伴う立会調査で、右京区太秦西野町、嵯峨野千代ノ道町地内を中心に実施した。調査地は、桂川東岸の平坦地で東北部に蛇塚古墳^{註1}が、中央部に千代ノ道古墳^{註2}が存在する。また、調査地および西接地は、奈良時代から平安時代の遺物散布地で、

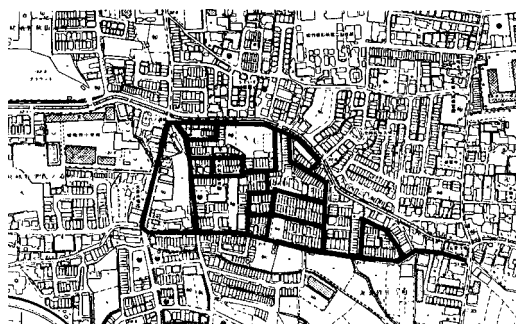


図149 調査位置図(1:10000)

西野町遺跡^{註3}として知られている。調査地西北方の嵯峨野小学校内で昭和56年度に実施した調査^{註4}では、古墳時代前期・後期の竪穴住居4棟を検出し、集落跡としても周知された。調査期間は、1987年10月14日から1988年6月17日までであった。

遺構 古墳時代の遺構は土壌と流路、遺物包含層が検出された。流路は調査地東北部と西南部に検出され、その間の地区に古墳時代の土壌、遺物包含層の分布が認められる。奈良時代以前の遺構には、土壌、焼土壌、溝がある。検出地点は、調査地東端部を除き全面に認められる。平安時代の遺構に関しては遺物包含層を調査区西半に確認している。

遺物 古墳時代の遺物は土師器壺・甕・高杯など、庄内式併行期から布留式併行期に属する時期とみられる。

奈良時代以前に属する遺物は瓦類が大半で、平瓦片が多数を占める。瓦片は軟質で、格子目の叩き文様を持つものが多い。軒瓦は、重弧文軒平瓦が1点出土した（図150）。土器類は、土師器皿・高杯・甕、須恵器杯・高杯・甕が出土した。その他、焼土壌から鋳滓が出土している。平安時代の遺物は、少量であるが土師器皿・高杯・甕があり、9世紀後半に属している。

小結 古墳時代の遺構・遺物は調査区南半に分布するが、嵯峨野小学校内の調査^{註5}で古墳時代前期および後期の竪穴住居を検出したこと、昭和63年度の調査^{註6}で同じく前期の土壌、後期の竪穴住居を検出したことなどから、遺跡範囲は今回の調査区から更に西北方向に大きく広がるのが想定できる。

奈良時代以前の遺構・遺物の分布範囲については、ほぼ調査区全域に広がるのが確認された。また調査区外への広がりも、古墳時代の遺構と同様に西北ないしは西へ拡大する

様相を示している。当該期に属する遺物は、瓦類の量がきわめて多い。玉縁部の無い行基式の丸瓦や、重弧文軒平瓦の出土は、遺跡の成立時期が飛鳥時代に遡る可能性を示しており、遺跡の性格についても、広範に瓦類が散布する状況や精錬・冶金に係る遺構と考えられる焼土壙を検出していることから、寺院跡に比定することも可能である。

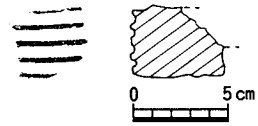


図 150 軒平瓦実測図
(1:4)

平安時代の遺構は、遺物包含層の分布範囲を確認することにとどまった。しかし既述の調査区西南部の発掘調査で9世紀後半に属する建物、土壙、井戸等を検出しており、この付近一帯を文献資料にある平高棟建立の「平等寺^{註7}」の寺地として推定できる。この範囲は、調査区が接する東西道路を南限とし、西高瀬川南50m付近を北限とできよう。西方への広がりについては、現時点では確定できない。

以上が今回の調査から得られた新知見である。西野町遺跡の西半については、下水道布設工事に伴う立会調査が進展しており、その様相は旬日のうちに明らかになる^{註8}。

(平田 泰・加納敬二)

註1 平田泰「蛇塚古墳」『京都市域試掘立会調査概報』

昭和63年度 京都市文化観光局 1989

註2 「西野町遺跡 千代ノ道古墳」『京都市域試掘立会調査概報』

昭和62年度 京都市文化観光局 1988 付表に記載

註3 「西野町遺跡」『京都市域試掘立会調査概報』

昭和63年度 京都市文化観光局 1989 付表に記載

註4 鈴木廣司「嵯峨野小学校内遺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』

(発掘調査編)(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983

註5 註4参照

註6 註3参照

註7 『三代実録』貞観元年一月十日条

註8 平田泰・加納敬二「広隆寺旧境内・常盤中ノ町遺跡・西野町遺跡」本調査概要掲載

15 六波羅政庁跡・法住寺殿跡（図版1）

経過 調査地は、東山区七条通の川端通から東大路通の間である。当該地は、後白河法皇が造営した法住寺殿跡と鎌倉幕府が京都の守護にあてた六波羅政庁跡に推定される。調査対象地は、車道部と歩道部に分れるが、歩道部は既設管などで攪乱されていた。調査は、1988年11月24日から1989年4月19日までの期間の内13日間行なった。

遺構・遺物 調査区の西側、川端通付近のA地点からB地点の間では、地表下1.2～1.4mで河川の氾濫層が確認された。C地点ではこの層はなく、アスファルト直下0.6mにおいて黄白色泥砂層の地山で陸部となる。D地点では、地表下1.2mで室町時代の包含層と溝状遺構を検出した。七条通と大和大路通の交差点部F地点では、地表下1.5～1.8mの間に時期不明であるが4面の路面状の遺構面を確認する。H地点で鎌倉時代の土壌を検出する。J地点では、地表下1.2mで平安時代後期の土壌と室町時代の小穴2基を検出する。K地点では室町時代の南北溝の一部（幅1.7m以上、深さ0.8m以上）を検出する。L地点からN地点までは、包含層は認められたが遺構は確認されなかった。O地点からQ地点で鎌倉時代の土壌2基、室町時代の土壌を検出した。この東大路通付近では、地表下0.4～0.8mで赤褐色砂泥層の地山となる。

出土遺物は整理箱に2箱である。平安時代後期から室町時代の各遺構、包含層から土師器皿、瓦器椀、焼締陶器甕、瓦などが出土している。その中で、Q地点で検出した鎌倉時代後期の土壌からは、完形品のものを含め土師器皿が多量に出土した。

小結 遺構、包含層の残存状態はB地点の本町通から以東は良好で、特にF地点からQ地点の三十三間堂・パークホテル北側では鎌倉時代の遺構が集中しており、法住寺殿跡・六波羅政庁跡内の遺構群と思われる。 （小松武彦・本弥八郎）



図 151 調査位置図 (1:5000)

16 法性寺跡・正覚寺跡・月輪古墳・願成古墳（図版1）

経過 昭和61年・62年度報告で、弥生時代の遺物の分布を示した。昭和63年度は、寺院関係の重要部分が関係したので、その成果をまとめることにする。

下水道工事は、4工区に分かれていたが、細い街路が多く、埋設物も多かった。さらに法性寺跡に関連する主要地区は調査が及ばず、必然的に周辺地区での寺域確認に主眼を置いた。

遺構・遺物 寺院関係の遺構・遺物を検出した主要な地点の位置は図152に、遺構、遺物の概要は表4 調査地点一覧に示した。

小結 正覚寺跡には、北には谷川、西は池、東は丘陵、南には遺構はなく、極めて限定

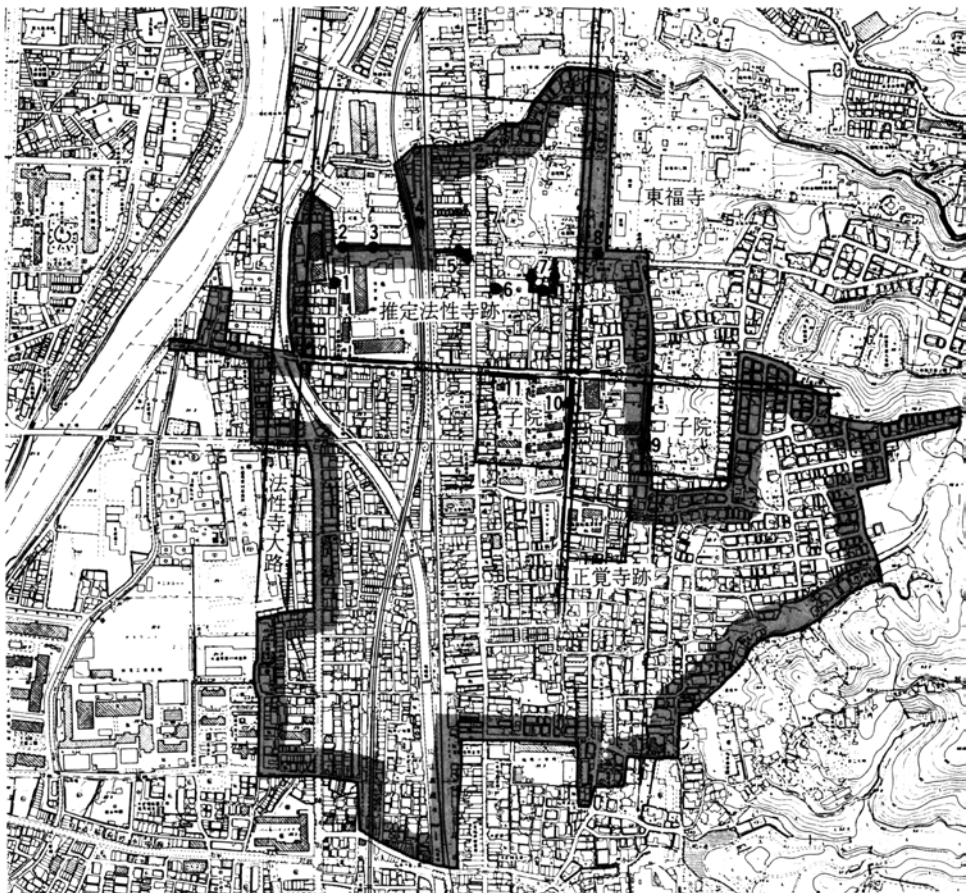


図152 調査位置図 (1:10000)

表4 調査地点一覧表

No.	住所・位置	遺構・遺物	備考
1	東山区福稲荷上高松町	径 1.1 m の土塙。20cm 大の石、瓦を確認。	平安後期
2	〃	表土下 0.5 m で瓦片多数出土。	
3	〃	表土下 0.2 ～ 0.3 m で方形のピットを 4 基確認	遺物は出土せず
4・5	東山区本町十八丁目	平安後期の瓦が散布。表土下 0.5 m でも多数出土。	図 162-16
6	東山区本町十五丁目	1.5 m 程度の崖面に瓦が散布。	
7	〃	表土下 0.5 ～ 0.8 m に包含層を確認。瓦、土師器片が出土。	3 地点で確認
8	〃	近代の瓦溜り。出土瓦の大半は平安時代中期。	図 162-13・14
9	伏見区深草正覚町 東山区本町十五丁目	南北方向に溝状の堆積を確認。溝内より、平安時代後期の軒平瓦出土。	図 162-15
10	伏見区深草正覚町	幅 3 m の南北溝を 50 m 確認し、瓦など多量に出土。最も新しい遺物は、13 世紀後半から末期。	図 162-1 ～ 12・17・18
11	伏見区深草正覚町 鳥羽街道団地西半部	包含層が広く分布、深さ 1 ～ 1.5 m の東西溝を確認。溝内堆積土は、暗灰色泥土で、13 世紀代の瓦器、土師器片を包含。平安時代後期の軒平瓦出土。	

された地区に建物跡のあったことが判明した。法性寺跡は、遺構の分布に従って推定寺域の復原を試みると図 152 のように考えられる。西辺は法性寺大路に接していたことになり、南辺は No.11 の東西溝が里境として長く存続しており、これを寺域の南端と考えた。東辺は No.10 の南北溝を延長することによってもとめられる。このことから寺域は方三町とみられ、周囲に子院を持ったと推定できる。今回は、北辺部確認の調査はしていないので、今後の調査を待ちたい。

(吉村正親)

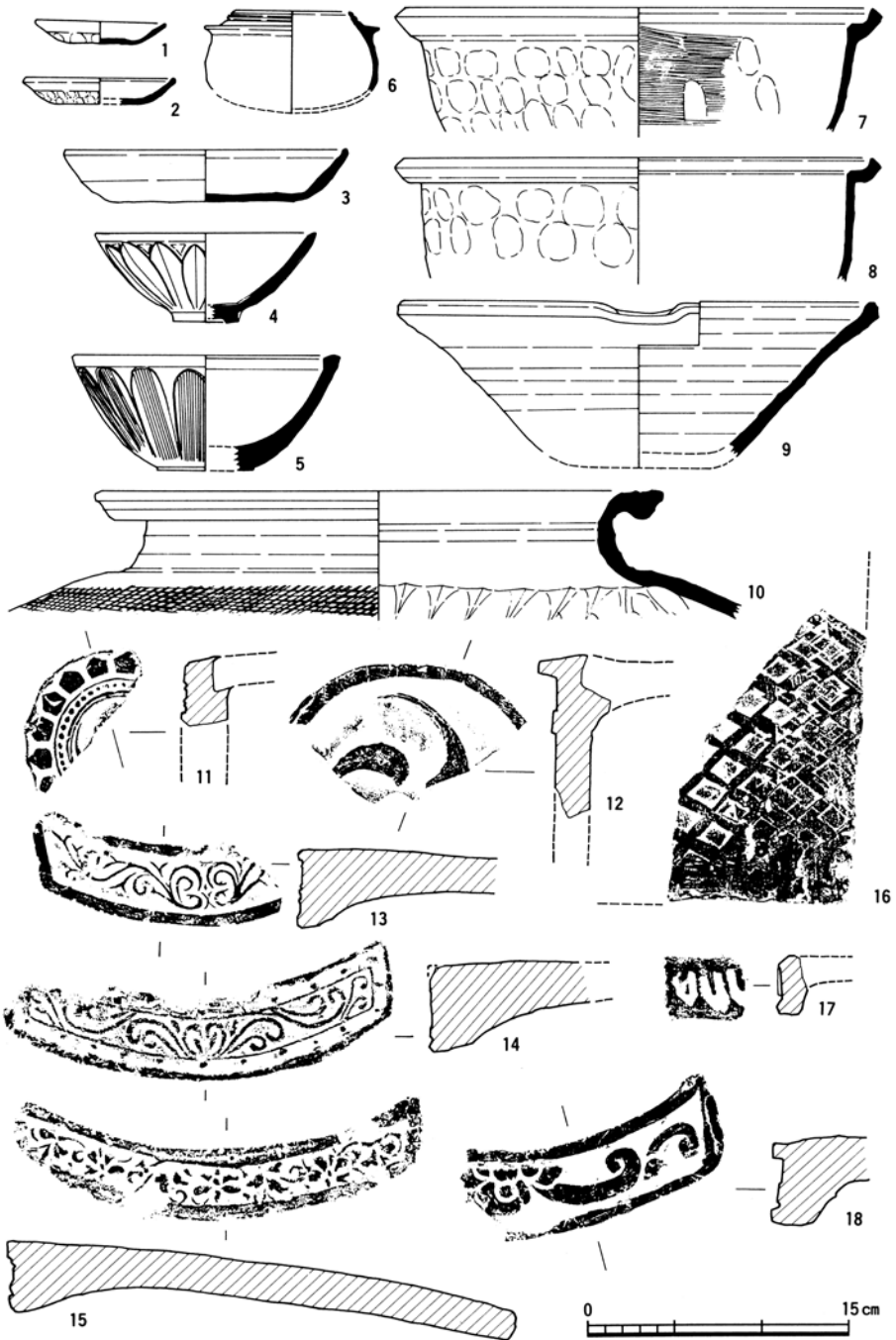


图 153 出土遺物実測図(1:4)

第3章 資料整理

1 遺跡測量

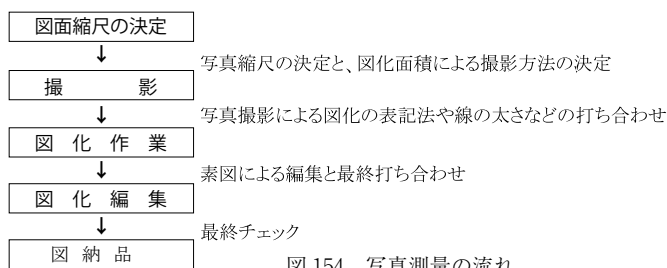
本年度における遺跡測量は、66箇所90件の基準点測量および10件の写真測量用標定点測量、撮影作業を行った。内訳は発掘調査85件、試掘・立会調査5件である。

写真測量は実測作業者の人手不足や調査面積の広大により年々増加する傾向にある。昨年度にも指摘したように市街地では規制が多いため1000㎡以下の調査面積では小型計測カメラでのクレーンによる撮影作業が適しているが、それ以上の面積ではこの方法では作業量が多く困難である。最近では、航測用のカメラをクレーンに吊るしての撮影を開始している。この方法であれば、写真縮尺1/200で1モデルに約1200㎡の図化面積をカバーできるため比較的効率的である。

次に写真測量では普通のカメラの利用も可能であるが、精度面は普通のカメラで取る場合フィルム面の平面性を保つ機能がないために、写真測量本来の長所である一定した精度をあげることができない。実験では写真縮尺1/200で平面位置は最大10cm、標高では最大20cmほどの誤差が生じた。計測用のカメラでは、誤差が最大1cmほどで収まる。誤差を考慮すれば、やはり計測用のカメラを用いることが望ましい。

写真測量では図化業務がほとんど航測会社でおこなわれるために、その会社の事情により撮影から図化までに日数がかかってしまうという短所がある。また調査担当者は遺構中心に遺構実測図をとらえ、図化担当者は位置精度や地図の感覚で図面をとらえることから、遺構実測図に対する理解の違いが生じ、調査担当者にとり満足のいくものになりにくい傾向がある。これらは後の編集作業の多さとして現われ、作業の長期間化となる。調査担当者と図化担当者の緻密な事前の対話が必要であり、そのことが両者の信頼関係を生むことにもなるであろう。

(辻 純一)



2 コンピュータ

昨年度に決定した郵政省のお年玉付き補助金によるシステムの導入をおこなった。今回のシステムはワークステーションをホストに構成している。今回のシステムから前回のものの反省としてコード化をなくし、すべて文字による検索を可能にし、誰もが使えるように作り換えた。またネットワークを利用した電話線による所外とのデータ通信やコンピュータ室の統合をはかり、複数人の同時利用をも可能にした。その他、前年度の概要で報告した方向性に従って、システム構築をおこない、運営している。なお、基本的には従来の作業を継続している。調査データは840件を入力し合計9691件のデータ化が終了した。システムの概要図は下記の通りである。

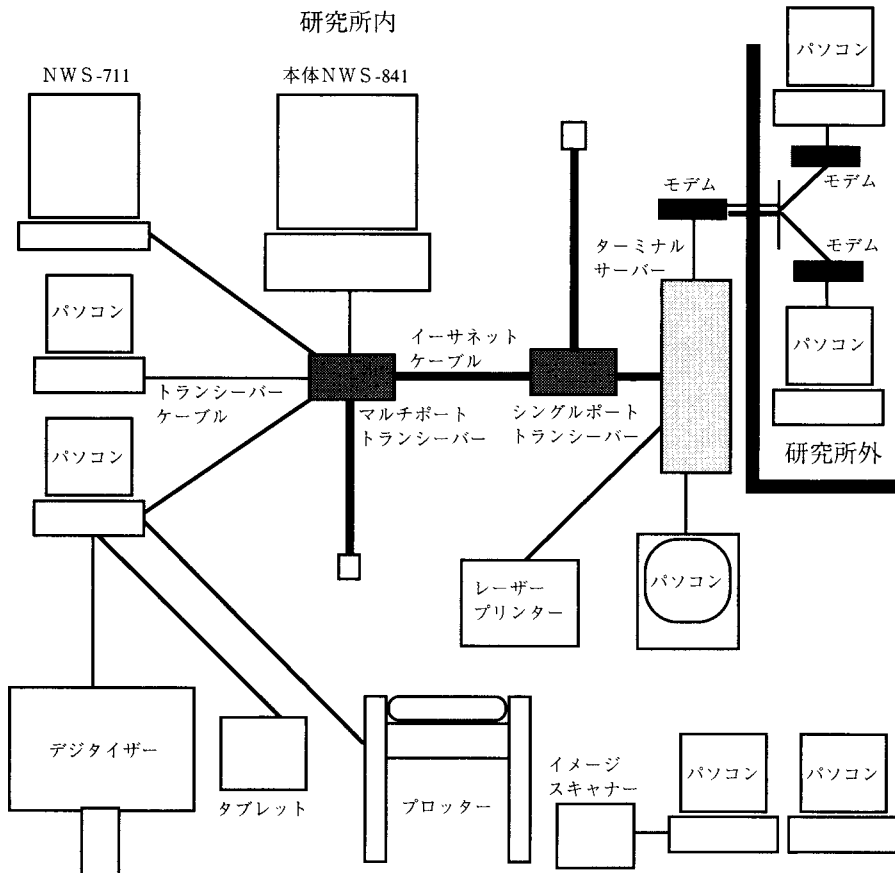


図 155 コンピューターシステムの概要図

3 保存科学

1 穴あきフィルムを利用した木製品の保存処理の開発

昨年開発した仮パックによる木製品の保管に利用したポリエチレンフィルムのもう一つの利用法として、ポリエチレンフィルムに穴をあけ、その中に整理済みの木製品をいれてシールし、整理時の単位のまま遺物を出し入れすることなく保存処理（PEG 含浸法）、およびその後の収納・保管も可能なシステムを開発した。

2 京都市域出土の木製品の特徴

京都市域から出土する木製品は総出土量の9割以上を中・近世のものがしめ、全体として完形品ないしはそれに近いものが多く、保存状態も比較的良好で均質であることが特長である。一現場で一万点以上もの木製品が出土することも希でなく、資料としてまとまっていることも特徴のひとつといえる。これらの整理方法としてすべてを実測することは物理的に不可能であり、大部分を略測で済ます整理方法を採用しているが、略測した木製品には調査現場ごとに通し番号を与え、台帳を作成している。整理から保存処理・収納・保管までをいかに効率的に行うかが大量の木製品を取り扱う場合の最大の眼目であり、ここに紹介する方法は、整理時の単位に従って木製品を穴あきフィルムにいれ、そのまま PEG 含浸槽で保存処理し、処理後も穴あきフィルムのまま収納・保管することができる。



図 156 穴あきフィルムの作製

3 穴あきフィルムを利用した保存処理法

(1) 穴あけフィルムの作成

市販のポリエチレンチューブ（厚さ 0.1mm、幅 300mm、長さ 200 m 巻）の梱包を解かずにロールのまま電動ドリル（ドリル径 6mm）で等隔に穴をあける。電動ドリルでの穿孔は、力を加えすぎるとポリエチレンチューブが溶着してロールから取

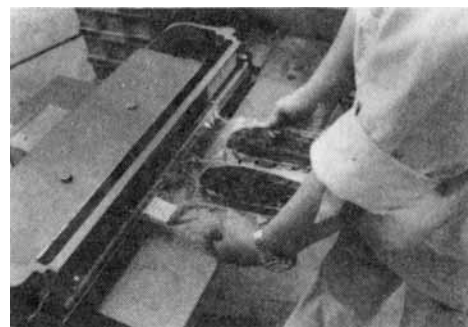


図 157 穴あきフィルムに木製品を入れる

りはずすことができなくなるので熟練が必要である。

(2) 木製品の樹脂含浸準備

整理済み木製品を1点ずつ穴あきフィルムにいれ、1点毎にポリシーラーでシールする。箸などの細長い製品は1シートのフィルムに10本を単位として入れ、すだれ状にする。

(3) 含浸槽に浸漬

穴あきフィルムのまま整理カゴに収納し、カゴを単位として含浸槽に浸漬して含浸開始。

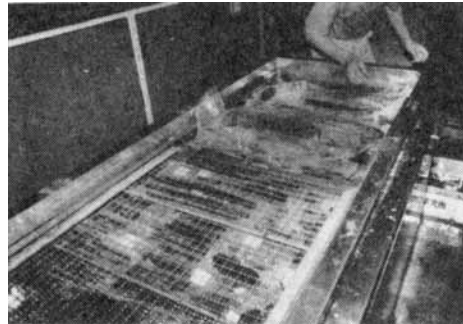


図158 含浸層に浸漬

(4) 含浸槽から取り出し

含浸槽からの木製品の取り出しはシールされたフィルムを単位とする。特別な必要がない限りフィルムごと熱い湯洗いをフィルムの上から行なうだけです（貴重品は個々をフィルムから取り出し、乾いた布で表面のPEG溶液を拭い取る。）



図159 取り出し

(5) 乾燥

含浸槽から取り出し、湯洗いした木製品は水切り後、完全乾燥のため、フィルムごと約2ヶ月間乾燥させる。

(6) 収納

調査現場単位で遺物を整理し、通し番号にそってコンテナに収納する。

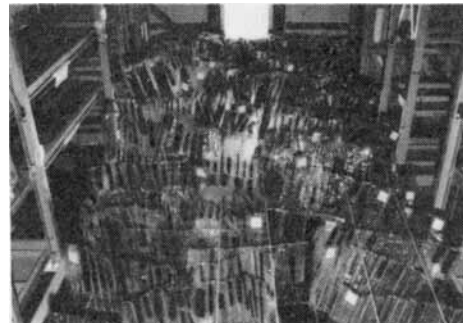


図160 乾燥風景

4 結果

多量に出土した木製品を整理時の単位を崩さずに収納・保管する方法で効果が得られている。

さらに、厚地 (0.1mm) のポリエチレンフィルムを使用することで遺物の損傷も減っている。

(岡田 文男)

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

(1) 文化財講演会の開催

日時 昭和63年11月27日(日) 午後2時～5時

会場 京都会館会議場(参加者 約400名)

講演 「平安時代の平安京 一特に右京について」

京都市埋蔵文化財研究所 所長 杉山 信三

「平安京の史跡」

古代学研究所 所長兼教授 角田 文衛

(2) 写真展「'88発掘調査成果写真展」の開催

期間 昭和63年12月6～18日

会場 京都市考古資料館(入場者799名)

(3) 現地説明会の開催

ア 昭和63年10月2日「幡枝古墳群」(参加者約250名)

イ 昭和63年11月13日「平安京右京九条一坊(西寺跡)」(参加者約250名)

ウ 昭和63年12月11日「平安京左京一条三坊六・十一町」(参加者約200名)

(4) 研究会等への派遣

ア 昭和63年4月～平成元年3月 於・京都府埋蔵文化財調査研究センター

「長岡京連絡協議会」(毎月開催) 調査部 調査課長 永田 信一

調査部調査課 主任 長宗 繁一

〃 鈴木 廣司

〃 百瀬 正恒

〃 吉崎 伸

調査部資料課 岡田 文男

イ 昭和63年6月4・5日 於・熊本市立熊本博物館

「肥後考古学会第195回例会」 調査部調査課 梅川 光隆

ウ 昭和63年7月2・3日 於・宮津市中央公民館

「第46回研修会(府埋文センター)」 調査部調査課 平田 泰

エ	昭和63年8月25日	於・奈良国立文化財研究所		
	「日本と中国都市に関する日中研究者の意見交換会」			
		調査部 調査課長	永田 信一	
		調査部調査課	辻 裕司	
オ	昭和63年9月16～18日	於・青山学院大学		
	「第19回日本貿易陶磁研究会」			
		調査部 調査課長	永田 信一	
カ	昭和63年9月20～23日	於・ニュー・アカシヤ		
	「全国埋蔵文化財法人連絡協議会昭和63年度研修会調査研究部会」			
		調査部調査課 主任	平方 幸雄	
キ	昭和63年10月1・2日	於・大阪科学技術センター		
	「第6回近畿地方埋蔵文化財研究会」			
		調査部調査課 主任	長 宗 繁 一	
ク	昭和63年11月26日	於・山科文化財研究所		
	「土隅とその情報研究会」			
		調査部資料課	中 村 敦	
ケ	昭和63年12月3・4日	於・奈良国立文化財研究所		
	「第10回木簡学会」			
		調査部調査課	久 世 康 博	

2 京都市考古資料館状況

(1) 展示替えの実施

「桃山時代の京都・考古展」金箔瓦、陶磁器、漆器、木・金属製品、魚骨・鳥骨など、桃山時代の生活・遊技・芸能・工芸に関する出土品166点を展示。

(2) 「第9回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期間 昭和63年8月9～12日（小・中学生とも各2日間）

ア 「小学生親子教室」

第1日目 京都市社会教育総合センターでスライドを交えた学習映画「大昔の暮らし」鑑賞後、土器づくり。

第2日目 資料館見学、映画「大枝山古墳群」鑑賞後、感想文作成。

参加者 116名(54組)

イ 「中学生サマースクール」

第1日目 移築復原した御堂ヶ池1号墳見学後、資料館見学、学習。

第2日目 伏見城跡現場で発掘調査および遺物水洗いの実習。

参加者 1日目56名 2日目50名

(3)「土器づくり作品展」の開催

期間 昭和63年8月20～31日

会場 京都市考古資料館（夏期教室で作った土器を展示）

(4)京都市考古資料館文化財講座の開催

会場 京都市考古資料館 3階会議室

ア 第18回 昭和63年4月23日

「昭和62年度の発掘調査を振り返って」	調査部調査課	主任	長 宗 繁 一
「平安宮豊楽院正殿跡の調査成果」	〃	〃	鈴 木 久 男
（受講者46名）			

イ 第19回 昭和63年5月28日

「最近の長岡京跡の調査から」	調査部	調査課長	永 田 信 一
「大枝山古墳群の保存と整備について」	調査部	調査課	上 村 和 直
（受講者62名）			

ウ 第20回 昭和63年6月25日

「平安京左京四条三坊九町の発掘調査で発見された庭園遺構について」			
	平安京調査会		上 村 憲 章
「京都の史跡一埋蔵文化財を中心として一」	市文化財保護課		玉 村 登 志 夫
（受講者64名）			

エ 第21回 昭和63年7月23日

「平安京内裏跡」	調査部調査課		梅 川 光 隆
「平安京井戸内発見の種子」	調査部資料課		岡 田 文 男
（受講者51名）			

オ 第22回 昭和63年9月24日

「岩倉木野町で発見された灰釉陶器の窯跡」	平安京調査会		小 森 俊 寛
「井戸榘部材研究によって新たに判明したこと」	〃		原 山 充 志
（受講者66名）			

カ 第23回 昭和63年10月22日

「平安京右京六条一坊五町の調査」	調査部調査課		梅 川 光 隆
------------------	--------	--	---------

「桃山時代の発掘茶陶 一弁慶石町遺跡の調査成果より一」

調査部調査課

堀内 明 博

(受講者 40 名)

キ 第 24 回 平成元年 1 月 28 日

「嵯峨野における最近の調査成果」

調査部調査課

平 田 泰

「平安京右京八条二坊（西市跡）の調査」

〃

菅 田 薫

(受講者 57 名)

ク 第 25 回 平成元年 2 月 25 日

「下鳥羽遺跡の調査」

調査部調査課

前 田 義 明

「平安京右京三条三坊跡の調査」

〃

平 尾 政 幸

(受講者 60 名)

ケ 第 26 回 平成元年 3 月 25 日

現地講座「発掘調査現場（仁和寺子院跡）を訪ねて」

考古資料館

学芸員

峰

巍

(受講者 95 名)

(5) 印刷物の発行

ア 京都市考古資料館文化財講座資料No.18～No.26

イ 小・中高生のための見学のしおり

ウ 夏期教室用テキスト

(6) 普及啓発、資料収集等

ア 「情報コーナー」を設置し、考古学・日本歴史等の図書。発掘調査現地説明会資料および市内発掘調査関連新聞記事スクラップなどの収集、情報提供の実施。

イ 京都府下の博物館、美術館等のパンフレット、リーフレットの収集、情報提供の実施。

ウ 入館案内用ビデオ「考古資料館への誘い」公開の継続と市内小中学校、高校、大学への貸出しの実施。

エ 「考古資料館文化財講座」レジュメの配布先拡大。(関係機関からの送付希望の増大による)

(7) 博物館実習生の受入

京都芸術短期大学 20 名 京都橘女子大学 10 名 立命館大学 10 名

(8) 入館状況

表5 昭和63年度月別観覧者一覧表

(平成元年3月31日現在)

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	日 26	人 1,023	人 207	人 124	人 95	人 1,449	人 55.7
5	26	977	286	163	265	1,691	65.0
6	26	908	212	227	0	1,347	51.8
7	27	1,080	323	228	0	1,631	60.4
8	26	1,190	556	375	181	2,302	88.5
9	26	943	306	126	0	1,375	52.9
10	26	944	303	55	0	1,302	50.1
11	26	1,489	308	152	165	2,114	81.3
12	23	1,108	294	106	61	1,569	68.2
1	24	1,181	242	181	0	1,604	66.8
2	24	1,552	227	60	0	1,839	76.6
3	27	1,839	261	115	32	2,247	83.2
合 計	307	14,234	3,525	1,912	799	20,470	66.7

(参考昭和62年度観覧者数 20,814人/一日平均 66.7人)

3 役職員名簿

(1) 役員名簿

役員名	氏 名	職 名
理 事 長	増 田 駿	京都市文化観光局長
専 務 理 事	阪 本 雅 人	京都市文化観光局文化部参事
理 事	上 田 正 昭	京都大学教授
	木 村 捷 三 郎	財団法人京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	斉 藤 武 夫	京都市文化観光局文化部文化財保護課長
	杉 山 信 三	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	田 辺 昭 三	京都芸術短期大学教授
	田 中 琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
	角 田 文 衛	古代学研究所所長
	西 川 幸 治	京都大学教授
	福 山 敏 男	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
	榊 本 治	京都市文化観光局文化部長
	井 上 嘉 久	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事
監 事	松 山 充 允	京都市会計室長

(2) 職員名簿

	氏名	職名	担当
	阪本 雅人	専務理事（京都市より 出向）	
	杉山 信三 木村捷三郎 田辺 昭三	研究所長（理事） 嘱託（理事） 嘱託（理事）	
総務部 総務課	杉原 和彦	総務部長（京都市出向）	業務
	片山 巖	主任（3.31退職）	〃
	菅田 悦子	事務職員	庶務
	上村 京子	〃	業務
	村木 節也	〃	〃
	本田 憲三	〃	庶務
	金島 恵一	〃	〃
	小松 佳子	〃	
	夏原 美智代	〃	
		永田 信一	調査課長
調査部 調査課	本 弥八郎	主任	〃
	長宗 繁一	〃	〃
	鈴木 久男	〃	〃
	家崎 孝治	〃	〃
	平方 幸雄	〃	〃
	吉村 正親	研究職員	
	平田 泰	〃	
	木下 保明	〃	
	鈴木 廣司	〃	
	菅田 薫	〃	
	堀内 明博	〃	

	氏名	職名	担当
調査部 調査課	百瀬 正恒	研究職員	〃
	加納 敬二	〃	〃
	平尾 政幸	〃	〃
	磯部 勝	〃	〃
	梅川 光隆	〃	〃
	辻 裕司	〃	〃
	前田 義明	〃	〃
	久世 康博	〃	〃
	上村 和直	〃	〃
	丸川 義広	〃	〃
	吉崎 伸	〃	〃
	網 伸也	〃（4.1採用）	〃
	内田 好昭	〃（4.1採用）	〃
	高 正龍	〃（4.1採用）	〃
高橋 潔	〃（4.1採用）	〃	
調査部 資料	牛嶋 茂	主任	
	中村 敦	研究職員	資料
	辻 純一	〃	測量 電算
考古資料館	岡田 文男	〃	保存 処理
	小川 武	館長	
	浪貝 毅	副館長（京都市埋蔵文化財センター所長兼任）	
	東藤 昭	主任（3.31退職）	
峰 巍	学芸員	学芸	

(村木 節也)

表6 昭和63年度発掘調査一覧表

No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考
平安宮	63-007 内裏跡 88 H K D B	上京区千本出水通東入西神明町 338	88.05.12 ～ 88.06.02	80㎡	京都市長 今川正彦	鈴木久網	国庫補助
	63-005-08 豊楽院跡 88 B B H Q 065	中京区聚楽廻中町 53-11	88.11.01 ～ 88.11.18	54㎡	竹中和男	家崎	国庫補助
	63-005-02 清暑堂跡 88 H K L Z	中京区聚楽廻西町 74-4.74-6	88.04.07 ～ 88.04.18	45㎡	幸田聡	鈴木久網	国庫補助
	63-006 太政官跡1 88 H K L Y	上京区竹屋町通千本東入南主税町 1101	88.04.06 ～ 88.05.07	102㎡	京都市長 今川正彦	本	国庫補助
	63-005-03 太政官跡2 88 H K D C	上京区千本二条下る東入主税町 998.998-1	88.05.11 ～ 88.05.23	47㎡	玉利公正	本	国庫補助
	63-016 内匠寮跡 88 H K D D	中京区西ノ京左馬寮町 28	88.10.27 ～ 88.12.23	168㎡	京都市長 今川正彦	堀内	国庫補助
平安京	63-040 左京北辺三坊 88 H K Y H 002	上京区一条通室町西入東日野殿町 395.396 京都市立上京中学校	88.07.26 ～ 88.10.24	674㎡	京都市長 今川正彦	本	
	63-033 左京二条二坊・高陽院跡1 88 H K F O	中京区丸太町通油小路西入丸太町 18	88.07.01 ～ 88.08.08	387㎡	(株)晃商	網内田高	
	63-005-06 左京二条二坊・高陽院跡2 88 H K M U	中京区丸太町通小川西入横鍛冶町 100	88.09.07 ～ 88.09.21	296㎡	(株)石田大成社	内田鈴木久高網	国庫補助
	63-003 左京三条三坊 88 H K F N	中京区烏丸通二条下る秋野々町 515	88.04.12 ～ 88.07.20	196㎡	第一生命保険相互会社	小森長戸	平安京調査会
	63-066 左京三条四坊 88 H K F R 001	中京区御池通(東洞院通～御幸町通)	89.02.01 ～ 89.04.12	528㎡	京都市公営事業 管理者交通局長 中坊仁壽治	小森長戸原山	平安京調査会
	63-059 左京四条三坊 88 H K F P	中京区蛸薬師通室町西入姥柳町 208	88.11.07 ～ 89.01.14	147㎡	今江彌太郎	木下	
	63-054 左京四条三坊 88 H K F Q	中京区三条通烏丸西入御倉町 64、室町通三条下る烏帽子屋町 476-2	88.12.26 ～ 89.01.28	73.5㎡	(株)千吉不動産	小森上村	平安京調査会
	63-002 左京五条一坊 88 H K V E	中京区壬生賀陽御所町 29-5、下京区綾小路通大宮西入坊門町 782-8	88.04.18 ～ 88.08.18	1002㎡	(株)ユニチカ興発	小森原山	平安京調査会
	63-046 左京七条三坊 88 H K W F	下京区烏丸六条下る北町 185	88.10.11 ～ 89.01.13	294㎡	(株)和光	辻裕	
	63-057 左京九条一坊・東寺旧境内1 88 H K T G 002	南区九条町 1	88.10.24 ～ 88.12.27	168㎡	宗教法人 教王護国寺	上村	
	63-035 左京九条一坊・東寺旧境内2 88 H K Z E	南区九条町 1	88.07.11 ～ 88.08.02	185㎡	宗教法人 教王護国寺	上村	
	63-075 左京二条三坊・西ノ京遺跡 88 H K I S	中京区西ノ京北壺井町 67	89.02.06	385㎡	(財)京都工場保健会	辻裕	
	63-047 右京三条三坊 88 H K C F 006	中京区西ノ京桑原町 1	88.08.22 ～ 88.11.18	1650㎡	(株)鳥津製作所	平尾	

No	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考	
平安京	20	63-004 右京四条二坊 88HKRM	右京区西院西今田町10	88.05.06 ～88.08.16	703㎡	(株)コスモ建設	辻裕	
	21	63-026 右京五条三坊 88HKQG	右京区西院松井町32.33.34	88.06.14 ～88.07.09	110㎡	(株)室谷興業	家崎	
	22	63-060 右京六条二坊 88HKQH002	中京区壬生東高田町1-2 京都市立病院	88.10.07 ～89.01.10	522㎡	京都市長 今川正彦	網	
	23	63-023 右京六条二坊 88HKQF	右京区西院寿町	88.05.23 ～88.06.14	205㎡	(株)京都マツダ	吉崎	
	24	63-008 右京七条二坊 88HKOE	下京区西七条名倉町 14・15、比輪田町16	88.05.10 ～88.07.27	930㎡	(株)山下組	菅田	
	25	63-013 右京八条三坊 88HKYG	下京区七条御所ノ内西町 68-1他	88.05.17 ～88.08.20	960㎡	医療法人健康会	堀内	
	26	63-045 右京九条一坊 88HKA E 002	南区唐橋門脇町35 京都市立八条中学校	88.09.08 ～88.12.28	865㎡	京都市長 今川正彦	菅田	
	27	63-055 右京九条一坊 88HKZG	南区唐橋門脇町6・7	89.01.17 ～89.03.15	258㎡	梶本正二	菅田	
白河街区	28	63-056 白河街区・岡崎遺跡1 88KSS S	左京区岡崎円勝寺町149- 2.154	88.11.07 ～89.01.30	394㎡	日本セルフサービス厚 生年金基金	内田	
	29	63-069 白河街区・岡崎遺跡2 88KSKM	左京区岡崎天王町49-1	89.01.19 ～89.04.09	405㎡	小林源衛	堀内	
鳥羽離宮	30	63-022 第126次調査 88TBTB126	伏見区竹田浄菩提院町60- 2	88.05.31 ～88.06.22	431㎡	(株)京成不動産管理	前田	
	31	63-034 第127次調査 88TBTB127	伏見区竹田中宮町4	88.07.13 ～88.09.16	433㎡	(株)武本住建	前田	
	32	63-005-07 第128次調査 88TBTB128	伏見区中島秋ノ山町26	88.10.31 ～88.11.12	118㎡	福沢健一	鈴木久	国庫補助
	33	63-067 第129次調査 88TBTB129	伏見区竹田浄菩提院町 128-9	88.12.05 ～88.12.23	86㎡	京都市長 今川正彦	鈴木久	国庫補助
	34	63-068 第130次調査 88TBTB130	伏見区竹田内畑町86-2	89.01.17 ～89.03.09	140㎡	京都市長 今川正彦	網	国庫補助
中臣遺跡	35	63-005-11 第131次調査 88TBTB131	伏見区中島御所ノ内町 9-1	89.01.30 ～89.03.03	250㎡	巽 次郎	鈴木久	国庫補助
	36	63-030 第70-1次調査 88RTNK070	山科区栗栖野華ノ木町地内	88.07.18 ～88.09.09	1723㎡	京都市長 今川正彦	高橋 平方	
長岡京跡	-	62-002 勸修寺旧境内 87RTKN004	山科区勸修寺仁王堂町地内	87.04.01 ～88.06.14	800㎡	京都市長 今川正彦	平方 菅田	昭和62年度 概報で報告
	37	63-050 左京一条三坊・戌亥遺跡 88NGAO	南区久世東土川町 (久世ポンプ場)	88.08.23 ～89.02.07	2600㎡	京都市上下水道事業管 理者 山西彌市	百瀬 長宗	
38	63-005-04 左京一条四坊 88NGHT	伏見区久我本町12-12他	88.05.11 ～88.06.17	700㎡	(株)大成ハウジング	北田	国庫補助	

	No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考
長岡京跡	39	63 - 010 左京四条三・四坊、 羽東師志水町遺跡 88 N G P V 008	伏見区羽東師菱川町、志水 町外環状線道路建設	88.03.23 ～ 89.09.08	2702㎡	京都市長 今川正彦	長宗 鈴木久 吉崎 高	
	40	63 - 073 仁和寺院家跡 88 U Z B N	右京区常盤御池町 3 - 1. 3 - 5.4.9	89.01.25 ～ 89.03.31	850㎡	(株) 京神倉庫	平田	
その他の遺跡	41	63 - 043 上ノ段町遺跡 88 U Z P B 002	右京区嵯峨野開町 1 - 1	88.09.05 ～ 88.11.04	910㎡	京都市長 今川正彦	平田	
	42	63 - 070 史跡名勝嵐山 88 U Z Y A	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場 町 33 京都市立蜂ヶ岡中学校	89.02.01 ～ 89.05.13	1010㎡	厚生年金連合会	木下	
	43	63 - 012 西野町遺跡 88 U Z S C	右京区嵯峨野千代ノ道町	88.05.09 ～ 88.06.08	390㎡	太田伊右衛門	平田	
	44	63 - 058 特別史跡特別名勝 鹿苑寺庭園 88 R H K K	北区金閣寺町 1	88.10.25 ～ 89.04.03	600㎡	宗教法人鹿苑寺	前田	
	45	63 - 039 北野廢寺 88 R H K G 013	北区北野上白梅町 61.65	88.07.21 ～ 88.08.05	56㎡	坂上寛	久世	
	46	63 - 037 幡枝古墳群、南ノ庄田瓦窯 跡 88 R H I K	左京区岩倉幡枝町 1057 - 1 他	88.07.19 ～ 88.11.16	200㎡	京都市長 今川正彦	丸川	
	47	63 - 021 史跡天皇の杜古墳 88 M K T N	西京区御陵塚ノ越町	88.11.30 ～ 89.03.13	422㎡	京都市長 今川正彦	丸川	国庫補助
	48	63 - 063 南春日町遺跡 88 M K H O 015・016	西京区大原野南春日町	88.11.07 ～ 89.03.20	1408㎡	京都府知事 荒巻禎一	加納	
	49	63 - 001 中久世遺跡 88 M K U H	南区久世殿城町 430	88.04.06 ～ 88.05.20	471㎡	(株) 西宝土地開発	上村	
	50	63 - 005 - 10 大藪遺跡 88 M K A C	南区久世大藪町 291	88.10.29 ～ 88.12.01	172㎡	(株) 大成ハウジン グ	吉崎	国庫補助
	51	63 - 072 法性寺跡 88 R T R T	東山区本町 15 丁目 794	89.01.17 ～ 89.03.23	319㎡	社会福祉法人洛東園	高	
	52	63 - 005 - 09 伏見城跡 1 88 B B F D 032	伏見区桃山永井久太郎 59 - 2	88.11.21 ～ 88.12.10	250㎡	(株) 巽住宅	久世	国庫補助
	53	63 - 029 伏見城跡 2 88 F D A G 2	伏見区京町南七丁目 35 他	88.06.16 ～ 88.12.15	2229㎡	京都市長 今川正彦	小森 上村	平安京調 査会
	54	63 - 044 伏見城跡 3 88 F D A H 2	伏見区桃陵町 1 - 1 京都市立桃陵中学校	88.09.07 ～ 89.01.10	992㎡	京都市長 今川正彦	小森 原山 長戸	平安京調 査会

表7 昭和63年度試掘・立会調査一覧表

	No.	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考
平安宮	1	63-028-3 大蔵省、正親司省跡 88HKUW4	上京区仁和寺街道、御池通～千本通他	88.07.19 ～88.08.19	立 会 884 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	家崎	
	2	63-028-4 内教坊、左近衛府、左京北辺二坊道 88HKUW5	上京区中立売通～下長者町通、 日暮通～堀川通他	88.06.06 ～88.07.11	立 会 987 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	家崎	
平安京	3	63-028-2 左京三・四条一坊 88HKUW3	中京区三条通、千本通～大宮通他	88.05.09	立 会 1488 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	家崎	
	4	63-053-2 左京六・七条三坊 88HKUW013	下京区五条通～花屋町通、新町通～烏丸通間	89.01.13 ～89.02.27	立 会 1246 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	家崎	
	5	63-028-1 左京六条三・四坊、七条三・四坊 88HKUW1・2	下京区五条通～七条通、烏丸通～東洞院通他	88.05.23 ～88.06.28	立 会 2378 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	家崎	
	6	63-053-1 左京九条一坊 88HKUW010	南区八条寺ノ内町他地内	89.01.18 ～89.02.27	立 会 737 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	家崎	
	7	63-064 左京九条一坊・東寺旧境内 88HKZF	南区壬生通八条下る東寺町554-1、554-3	88.11.30 ～88.11.30	試 掘 32㎡	真言宗京都学園	家崎	
	8	63-038 右京一条二坊 88HKIQ	中京区西ノ京円町55-1	88.08.01 ～88.08.10	試 掘 129㎡	(株)日本電信電話	木下	2章Ⅱ-1
	9	63-062 右京三条四坊 88HKIR001	右京区太秦安井西沢町2ヶ町	89.01.23 ～89.03.05	試 掘 497㎡	京都市長 今川正彦	本	2章Ⅱ-2
	10	63-009 右京六条二坊 88HKQE	右京区西院西高田町6	88.04.19 ～88.04.19	試 掘 24㎡	京都市長 今川正彦	菅田	
	11	63-024 右京六条二坊 88HKQH001	中京区壬生東高田町1-2 京都市立病院	88.05.20	試 掘 12㎡	京都市長 今川正彦	吉崎	発掘調査に移行 1章Ⅱ-2
	12	63-071 右京七条二坊 88HKUW071	右京区西院南高田町～下京区西七条北农田町	89.02.03 ～89.02.13	立 会 約 460㎡	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	久世	2章Ⅱ-3
白河街区	13	63-051 尊勝寺跡・岡崎遺跡 88KSS Y	左京区岡崎最勝寺町	88.08.29 ～88.09.10	試 掘 101㎡	京都市長 今川正彦	上村	2章Ⅲ-4
	14	63-065 最勝寺跡・岡崎遺跡 88KSO G 002	左京区岡崎最勝寺町(岡崎グランド内)	89.01.17 ～89.01.31	試 掘 340㎡	京都市長 今川正彦	上村	2章Ⅲ-5 平成3年度に発掘
鳥羽離宮跡	15	63-076 鳥羽離宮跡 88TBSW076	伏見区中島中道町他	89.01.23	立 会 約 2000 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	磯部	2章Ⅲ-6
	16	63-019 下鳥羽遺跡 88TBSW019	伏見区下鳥羽芹川町他	88.05.16 ～89.03.10	立 会 3100 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	磯部	2章Ⅲ-7
	17	63-048 下鳥羽遺跡 88TBO G 048	伏見区下鳥羽渡瀬町～竹田松林町	88.08.17 ～88.12.13	立 会 650 m	(株)大阪ガス	磯部	〃
	18	62-066 下鳥羽遺跡 87TBSW066	伏見区毛利町他	88.02.15 ～88.11.04	立 会 約 2800 m	京都市上下水道事業管理者 山西彌市	磯部	

	No	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考
長岡京	19	63 - 032 左京一条四坊・東土川遺跡 88 N G S W 032	南区久世大藪町他	88.07.13 ～ 88.09.12	立 会 965 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	長宗	2章 Ⅲ - 8
	20	62 - 067 左京二条三坊・三条三坊・ 四条二坊 87 N G W 067	伏見区羽東師菱川町	88.05.14 ～ 88.09.19	立 会 640 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	百瀬 長宗	2章 Ⅲ - 9
その他の遺跡	21	63 - 018 仁和寺院家跡 87 U Z S W 057	右京区宇多野長尾町他	88.01.09 ～ 88.12.09	立 会 約 3000 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	加納	2章 Ⅲ - 10
	22	63 - 025 常盤東ノ町古墳群、仁和寺 院家跡、広隆寺旧境内 88 U Z S W 025	右京区常盤西町・東ノ町・ 下田町・北裏町、太秦蜂岡 町	88.05.26 ～ 89.05.12	立 会 約 7200 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	平田 加納	2章 Ⅲ - 11
	23	63 - 041 上ノ段町遺跡 88 U Z A H 001	右京区嵯峨野開町1 - 1 京都市立蜂ヶ岡中学校	88.07.27 ～ 88.07.28	試 掘 80㎡	京都市長 今川正彦	平田	発掘調査 に移行 1章 Ⅶ - 41
	24	62 - 054 上ノ段町遺跡 87 U Z - S W 054	右京区太秦帷子ヶ辻町・ 堀ヶ内町他	88.02.22 ～ 88.09.19	立 会 約 1700 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	平田 加納	2章Ⅲ - 12
	25	62 - 061 広隆寺旧境内・常盤仲之町 遺跡・西野町遺跡 87 U Z - S W 061	右京区太秦蜂岡町・上ノ段 町・西蜂岡町、嵯峨野千代 ノ道町	88.03.28 ～ 89.03.06	立 会 約 3400 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	平田 加納	2章 Ⅲ - 13
	26	62 - 043 西野町遺跡、千代ノ道古墳 87 U Z - S W 043	右京区太秦西野町、嵯峨野 千代ノ道町	88.10.14 ～ 89.06.17	立 会 1940 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	平田 加納	2章 Ⅲ - 14
	27	63 - 011 六波羅政庁跡 88 R T O G 001	東山区五条通問屋町下る朱 雀町地先～東大路	88.04.14 ～ 88.06.23	立 会 1301 m	(株) 大阪ガス	家崎	
	28	63 - 053 - 3 六波羅政庁跡、法住寺殿跡 88 R T U W 014	東山区七条通(川端通～東 大路通) 地内	88.11.24 ～ 89.04.19	立 会 1562 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	家崎	2章 Ⅲ - 15
	29	63 - 028 - 5 烏辺野 88 R T U W 6	東山区清水1丁目	88.06.20 ～ 88.07.19	立 会 270 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	家崎	
	30	63 - 028 - 7 法性寺跡 88 R T U W 9	東山区今熊野南日吉町他	88.08.02 ～ 88.08.08	立 会 318 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	家崎	
	31	62 - 012 法性寺跡、正覚寺跡、月輪 古墳、願成古墳 86 R T S W 020	東山区本町15丁目他、伏 見区深草願成町他	86.06.19 ～ 89.09.08	立 会 8000 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	吉村	2章 Ⅲ - 16
	32	63 - 031 大藪遺跡 88 M K O D 006	南区久世殿城町481 - 1 京都市立久世中学校	88.06.13 ～ 88.06.20	試 掘 128㎡	京都市長 今川正彦	高 長宗	
	33	63 - 049 史跡醍醐寺境内 88 F D S B 001	伏見区醍醐東大路町1	88.08.01 ～ 88.08.06	試 掘 44㎡	京都市長 今川正彦	菅田	
	34	63 - 077 伏見城跡 88 F D S W 077	伏見区深草大亀谷安信町	89.02.09 ～ 89.05.29	立 会 1700 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	吉村	
35	63 - 028 - 6 伏見城跡 88 F D U W 7	伏見区桃山町板倉周防他	88.07.27 ～ 88.10.03	立 会 1428 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	家崎		
36	63 - 017 伏見城跡 88 F D S W 017	伏見区桃山町丹後、和泉、 新町	88.06.06 ～ 89.04.25	立 会 約 700 m	京都市上下水道事業管理 者 山西瀨市	吉村		

	No	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考
その他の遺跡	37	63 - 042 伏見城跡 88 F D A H 001	伏見区桃陵町1 - 1 京都市立桃陵中学校	88.07.28 ～ 88.07.28	試掘 54㎡	京都市長 今川正彦	家崎	発掘調査 に移行 1章Ⅶ - 5
	38	63 - 005 - 01 京都市内遺跡 88 B B	京都市内一円	88.04.07 ～ 89.03.31	試掘 立会	京都市長 今川正彦	家崎	国庫補助